

# 奇譚クラブ

1958年 12月号

本誌百号突破  
記念懸賞募集  
原稿入選作品

継白

い玩具

母

近藤 一  
真木不二夫



12月号

昭和三十三年十二月三十日印刷  
昭和三十三年十二月一日発行  
(第十五号 通巻第百十六号)  
(毎月一回一日発行)  
昭和三十一年四月二十日第三種郵便物認可

奇譚クラブ

昭和三十三年十二月号

奇譚クラブ

昭和三十三年十二月三十日印刷  
昭和三十三年十二月一日発行  
(毎月一回一日発行)  
昭和三十一年四月二十日第三種郵便物認可

定価二百円

THE KITAN CLUB

Published Monthly By Tenseisya

Osaka Japan



IBM. 2805

# 奇譚クラス 臨時増刊号

長篇サデイズム小説二大傑作集

## 青い廃院

弓沢 俊二郎

## 与那国奇談

永山 久美雄

限定版

下し大作、堂々ここに登場

読書の秋を迎えて、ここに満天下のサドファンに御贈りする快心作二篇。いずれも書下しの未発表作品。普通号にては一年以上に亘って連載すべき分量の二大作を一挙に収録して、貴小説の醍醐味を心ゆくまで賞味して貰うに足る特別臨時増刊号。

口絵には、四馬孝画伯が、「青い廃院」の中から、その貴の名場面ばかりを抜き出して精緻流麗なタッチで誌面装飾とばかり縦横無尽に画筆を揮い、挿画には同じく四馬孝氏の外、新進鋭鋭の杉原虹児氏がリアルなペン画を以てクライマックス・シーンの絵面化を計って絢爛誌上を覆う。

### 巻頭華麗口絵

四馬孝・画

「青い廃院」画廊

- 美貌の人
- 美女誘拐
- 苦悶する美貌
- 屈辱の責め
- 踊り責め
- 廃院の中
- モデル責め
- 救出
- 変ったレッスン（表紙裏）
- 縄（目次裏）



### 本誌百号突破記念

#### 懸賞原稿募集

本誌の通刊第百号を突破したのを機会に左記の通り懸賞原稿を募集いたします。何卒奮って御応募下さるようお願いいたします。尚、募集規定には、従来と違つて大いに幅を持たせましたので、御自由な気持ちで御執筆下さい。誌上の匿名及び無名の投稿も結構です。（この際は誌上で連絡いたします。）

#### ○賞金

優作 壹万円 若干篇  
秀作 五千元 若干篇  
佳作 三千元 若干篇

種目 小説、創作、告白、手記、体験、等

枚数 三十枚乃至五十枚程度（四百字詰）

締切 当分の間特別に定めません。先に到着の分より漸次銓衡の上、入選作は最近号より掲載いたします。

投稿 「読者原稿」と区別するため、応募原稿の第一頁に「懸賞原稿」と書いて下さい。

発表 入選決定の分は、それぞれ賞金の送付を以て報告します。誌上では入選作の掲載を以て発表にかえます。

用紙 二百字詰又は四百字詰原稿用紙を用い第五種開封便（百瓦につき八円）にて御送付願います。

### 読者原稿募集

〔創作〕異色ある題材を提げて立つ野心ある読者の投稿をお待ちします。枚数は三十枚迄、未発表の作品に限りします。採用篇は本誌五カ月以上贈呈します。

〔体験告白手記〕読者皆様の偽りなき真実の叫びを募ります。枚数は三十枚程度採用篇には本誌三カ月以上贈呈します。

〔映画、雑誌〕通信 映画や雑誌の中で特に興味をお持ちになった事項についての通信をお待ちします。出題は必ず明記して下さい。掲載の分には本誌二カ月乃至三カ月分贈呈します。

〔私のイメージ〕熱烈奔放なイメージをどしどしぶつ放して下さい。どんな荒唐無稽なものでも奇抜なものでも結構です。採用分には、本誌三カ月分贈呈します。

〔アイディア〕将来本誌にて企画すべき事項について詳細に。採用の分には本誌四カ月分以上贈呈します。

〔レポート〕新聞記事（週刊誌を含む）の切り抜き或は見聞等、皆様の特に興味をお持ちの事項につきお知らせ下さい。掲載篇には本誌二カ月分贈呈します。

〔読者通信〕編集者、執筆者、投稿者等への通信、前号の批評、希望、感想、愚い出語、読者相互の呼び掛け、応答或は編集者雑誌のあり方等について忌憚なきお便りをどしどしお寄せ下さい。つとめて誌上に発表いたします。但し、読者交歓室は都合により当分の間中止いたします。

### ○本誌月極購読料○

一月分一冊（送料共）二百円  
三月分三冊（送料共）六百円  
半年分六冊（送料共）千二百円  
一年分十二冊（送料共）二千四百円

本誌は一切書店売りは致しませんので、購読御希望の方は、直接発行所へお申込み下さい。荷造送料は全部こちらで負担いたします。故、誌代のみお送り下さい。半年分御申込の方は景品として手札型写真三枚、一年分お申込の方は景品としてキヤビネ型写真三枚を贈呈いたします。

### 奇譚クラブ

第十二巻第十五号  
毎月一回一日発行  
定価二百円

十二月号

昭和三十三年十一月三十日印刷  
昭和三十三年十二月一日発行

編集印刷兼発行人 吉田 豊

大阪市阿倍野郵便局私書箱第十四号

発行所 天星

電話 天下茶屋三六、

振替口座大阪五〇、

御送金は振替、為替、現金書、（八円切手にて一割増）等どんなです。送り先は必ず格書で、います。尚、原稿用紙御入封入の上お申込下さい。お

◎サトの世界に新風を吹き込む異色長篇書

弓沢俊二郎 青い廃院

美貌の踊子に執拗につきまとう無気味な男。婦女誘拐団の魔手に陥ったレビュースター。蒼白き灯影に照り映えて痺れるような甘美な悦虐の妖気が全巻を蔽い、淫虐な責めは頁を追う毎に愈々酸鼻をきわめ、息もつかせず一気に最後まで読了させずにはおかない弓沢俊二郎氏の才筆は、ここにサト文学の金字塔を打ち建てた。

永山久美雄 与那国奇談

南支那海に浮かぶ与那国は世に云う女護ヶ島。女ばかり住むこの孤島に展開される男性共有の風習、漁船が難破して、この孤島に漂着した一日本人漁師の経験した世にも不可思議な体験記。巻頭から結末に至るまで緊縛と処刑シーンの連続。諸君を夢の国女護ヶ島パラダイスへ案内して暫くの粹夢に浮世を忘れさせる一大ドラマ。



内 容 紹 介

青い廃院

弓沢俊二郎・作 四馬孝・画

- |          |             |
|----------|-------------|
| 一、三人の男   | 二、地の底にあるもの  |
| 三、美貌の人   | 四、劇場に居た二人の男 |
| 五、忠告     | 六、美女誘拐      |
| 七、苦悶する美貌 | 八、屈辱の責め     |
| 九、踊り責め   | 十、探索行       |
| 十一、廃院の中  | 十二、モデル責め    |
| 十三、手繰りの網 | 十四、救出       |
| 十五、勝者の心  |             |

与那国奇談

永山久美雄・作 杉原虹児・画

- |         |         |
|---------|---------|
| 女護ヶ島与那国 | 女百人に男一人 |
| 股裂きになる女 | 孤島の殺人   |
| 股裂きと火焙り | 人肉の炙り焼  |
| 筏流しの刑罰  |         |

臨時増刊号『青い廃院』

只今発売中！

定価 二百円 (送共)

お申込は 大阪市阿倍野郵便局私書函第十四号

天 星 社 振替口座大阪第五〇〇四二番





奇譚クラゲ 復刊第三十六号 十二月号 目次

四馬孝傑作集 (8) 責への期待	四馬孝・画
ニューガールの緊縛模様	絹川文代・嫁
嫁ぐ日	滝れい子・画
南村俊平戯画二題	南村俊平・画
奴隷商人と猿猴大臣	
大王様御巡幸	
映画に現われた緊縛シーン	提供 梶田 辺 孫 啓 一 三
日活「裸身の聖女」	筑波久子・南風夕子
東映「変幻胡蝶の雨」第一部	花園ひろみ
日活「裸身の聖女」	南風夕子・筑波久子・青山恭二
特写真真 益田房子嬢の艶姿	
鞭打台 (目次裏)	浜 毅・画
「鞭打台の道」	「台上にもたえる女」

「草雙紙に於ける賣場の研究」続稿	沖 竜彦 18
読本に於ける賣場の研究	辻 村 隆 28
創作 蠟 涙	南 時 夫 34
体験記 バー「ナナ」の人々 (第五回)	
本誌百号突破記念懸賞募集原稿入選作品	
白い玩具	真木不二夫 40
マゾヒズムへのいざない	黒田史朗 49
M・レポート「異色美人局」	鬼山 詢 策 52

異常推理小説 禪の男を探せ	榎 村 奏 54
告白 悩ましの乗馬スポン	藤 山 秀 緒 63
本誌百号突破記念懸賞募集原稿入選作品	
「継母」	近 藤 一 66
愛好家の記録 (コプロ者のひとりごと)	とやま・かづひこ 81
映画通信 秋の縛り時代劇から	嵯峨美也子 84
女体散華異聞 機上切腹	法 谷 四 郎 86
切腹 フォト 談義	南 方 純 90
前銀十郎懐手帖	
妖異人肌人形	緑 猛 比 古 92
緊縛テレビ観賞日記	海 野 築 朗 103
通信「私の不満」	姫 馬 痴 人 106
マゾヒズム百景	馬 場 好 男 108
新聞切抜通信「日課の下着泥棒」	藤 木 仙 治 112
創作 竹 夫 人 (下)	三 条 卓 史 114
話 の 肩 籠	辻 村 隆 123
映画通信 最近の縛られ女優達	大 河 原 珠 樹 128
真説 水野十郎左衛門	海 野 築 朗 132
本誌最近号の読後感	近 藤 一 141
魔教圈 No. 8 (その十)	土 路 草 一 142
緊縛映画スナッフシリーズ	
寒牡丹の巻「危し伊達六十二万石」牧	高 志 156
読 者 通 信	165



〈鞭打台〉

浜 毅・画



(1) 鞭打台への道



(2) 台上にもだえる女

## 責への期待

四馬孝傑作集 (8)

目の前に脱ぎ捨てられたオーバーコート、床に突き立てられた短刀  
尾錠のついた柱の前では、胡坐をかいた男が盛んに肉切庖丁を研い  
でいる。乳房と舌と連繫された窄衣の女はどうなるだろう。







△本誌写真部特写▽

# ニユーガールの緊縛模様

— 絹川文代嬢の巻 —





# 嫁ぐ日

今宵晴れての嫁ぐ宵、かつての男が現れて嫉妬の余り、このように花嫁を縛り上げてしまった。



滝  
れい子・画



奴隸商人と猿猴大人



大王様御巡幸



映画に現われた緊縛シーン

日活映画

「裸身の聖女」

筑波  
南風  
久子  
夕子



東映映画

「変幻胡蝶の雨」

第一部

花園ひろみ

△田辺啓二・提供▽

日 活 映 画

「裸 身 の 聖 女」

南 風 夕 子  
筑 波 久 子  
青 山 恭 二



裸身の聖女

< 握 孫 一 ・ 提 供 >



# 益田房子嬢の艶姿

〈本誌写真部撮影〉



新しい文献研究誌

奇譚クラブ

1958年 12月号

(第十二巻 第十五号 通刊第百十六号)



『草雙紙に於ける責場の研究』続稿

# 読本よみほんに於ける責場の研究

沖 竜 彦 作



テーマで読本よみほんと云われるものゝ中から、ピックアップしてみようと思う。

「読本よみほん」と云われるものは前稿でも草雙紙と区別するために一寸触れておいたが、前書きとして、もう少し詳しく述べさせて頂こう。

時は大体、江戸時代中頃からあと、最盛期は此の前に取上げた草雙紙のうち合巻と呼ばれるものの敵討物語全盛時代と殆んど同じ頃である。

大体が眺める絵を主とし、漢字を殆んど使っていない草雙紙に対して、あくまで読む文章を目的としたものであるから、読者層は或程度「学」がなければ読めなかった。

前に「草雙紙に於ける責場の研究」(本誌九月号)と云うのを書いて見た。  
幸いにして続稿を求められたので似たようなものになるが、同じ

本の体裁も、小型でポケット版的な草雙紙に対して、読本は大きく週刊雑誌前後の大きさである(本の発行所や、版によって多少の大小はある様だ)。

内容も扉の挿絵から、こつていて、何かの形に於て支那の小説の影響を受けていた。

此の種の祖と云われる有名な「雨月物語」や「英草紙」は何れも上方の出で、此の頃、江戸では黄表紙の全盛時代だった。それが次第に上方では衰え、文化、文政年間に江戸で行われた数々の長篇傑作にお株を奪われることになった。

だから人によっては読本も前期読本、後期読本に分ける。ここでこれから取上げる資料は、大体その後期読本である。

そんな訳だから作者の執筆態度と云うものも、ひどくきまじめで和漢の学のあるところを示し、考証を練り少しうるさいぐらいに学術的などころがある。

また儒学の影響も受けていて、勧善懲悪と武士道の精神を強調しながら、読者に刺激を与えるためか、或は演出効果を狙ってか、残忍趣味も多い。

従って極めて非現実的な、とりすました文章で、むろん読んでそんなに面白いと思わないし、蒐集するにも黄表紙や草雙紙のような庶民的な雰囲気もないので、あまり愛着を感じない。小説のネタにするにはいいかも知れないが……。

長々と前置きを書いて言訳を云うようだが、第一場所をとって仕方ないので、家に昔からあったり或は私自身が集めかけたものも相前に整理してしまった。今、短篇のものが少しあるだけで、資料としては前稿の草雙紙よりも更に悪い条件で、書くことを御了解頂きたいと思う。そのかわり文章の引用を多くして見よう。原則としては挿絵のあるところを取上げる。作者、挿絵画家は大体草雙紙をやった人達と同じであるが、中には全く草雙紙に関係しなかった人もいるようだ。

例えば、有名な葛飾北斎などは若い無名の時に、ほんの少し黄表紙の挿絵を画いただけで殆んど読本ばかりである。

○復讐奇説田村物語五巻、文化六年刊、作者川上鯉翁、挿絵蹄齋北馬。

此の本の作者については全くわからない。巻尾には天風坊魚匠老人とある。有名な仮名か或は全くの無名の人か。おわかりの方があつたらお教え頂きたい。

第一新群書類従の書目、読本の年表の文化六年のところには出ていることは出ているが、同じ名前の作者によるものは此の前後全く見当たらない。

画の北馬の方は「浮世絵類考」によれば、北斎門下で読本や軍書の挿絵枚挙にいとまあらずとある。なお「画風」一派の筆意ありて、後に土佐絵を慕ひて多く其趣を画き、師の画風とは大に異なり」とある。

読本挿絵画家としてはベテランだったわけである。そのあと代表作の本の名が十四ほど並べてある中に、この田村物語があるところを見ると北馬好調の挿絵であろう。

主役は坂上田村麿と云うことになっているが、フィクションであると断つてある。

此の中に出てくる郷士関正右衛門の一子で正市正秀と云う十六歳の若者、先祖は名門であるが、故あって民間にある。これが山荘に世を捨てている白鶴翁なる異人のもとに通い教えをうける。或る日のこと――。

『或夜いつもの如く鶴翁の山荘より吾屋へ戻りたるが山路にて松柏の枝を交へていともものすごく、門戸をまもる犬の声も遙に聞へておのづから人里の遠きを知らず谷間にあそぶ蝙蝠の形にて近く見へてさながら月影の傾くをおしむ。看るほどの景物心々に腸をうごかしぬらんとおぼへていと感も起りぬる折から遙に女の声にていと苦しげに助けたまへ、助けたまへと泣叫ぶに正市耳をぬかたててどこやら聞知りたる声なるが何事あれ行き見んと少し道廻りなれど声を



知縁に彼方に急ぎ行けばよいよ近寄るにしたがひ我妹乙女が声と聞ぬれば益々心おどろかれて飛ぶがごとくに走り寄り見てあればこは情なや乙女は赤裸になりて素雪のごとき手足を藤葛をもて痛々しくも高手小手にしめ上げて、山の松の樹の枝に引上げ肩より胸のあたり血しほに染みて紅桜の雪に悩める風情にてたまの緒も絶へるばかりに叫び居たり。

正市涙雨の如く如何せんと驚きけるがかかる時節にこころ弱くは叶はじと声はりたてていかに乙女よ兄正市こそここに來れるぞ、きづも浅しと見ゆるなれば心をたしかにもつべし、只今救い取せんと松の枝にかけのぼり搦めし綱を解かんとせしが此のままに解たりともおろすに便を得ざればとやせんかくやと憂愁煩ふ折、ふと一つの手段を儲け我帯をくるくると引解きて、件の藤葛にしかと繋ぎ合せ松の大枝を便にしづしづと釣おろしけるに、乙女は今年十四歳なるが疵を負たるうへに樹上につるし上られたる苦痛に忍びかねて声さへ出ぬ程に弱り弱りてやうやうと地上におり立ちしが忽ちあつと一声叫びて其のまま息は絶にけり。

正市はとほふにくれ懷抱えてさまざまに介抱なし、そこここと疵を見れば刀劍の疵とも覺へず、有合木竹を以打破りたる様に所々皮肉やぶれ湧出る血は泉の如くなれど詮すべくなく声を限りと呼べど更に答のあらばとてされども、鳩尾のあたりすこしく動きたればさては未だ死せざるかとあたり近き野中の水を掬して我口より伝へて乙女が咽に吹込み背なでさすり、心を尽していたはりたるが忽然と一息はいて眼をひらきたるに力を得てひたすら介抱なしければ其時乙女は苦しげに正市の顔をうち見ていかに兄上かかる災難に逢へるとて今更是非もなし、そも口惜しき次第を語り聞せ参らせん。兄上今宵山莊よりの帰りも常にかはりて遅ければ父上にも案じたまひ迎に行かんとて心易けれど父上自ら迎に出でたまはば御身至孝の御心

よりはいかばかりか、本意なくもおぼすらんと思ひやりたまひ母上には少くし夜を籠て急ぎたまふ手業のあればいかにせんとひそかに憂たまふをわらは余所にみたてまつるも心ならず父母には知らせまいらせず門の辺まで出て待たび御身帰たまはば少しも早く此の事をも告まらせ度、一つには妾も案じまらせ門のほとりに出つ入りつして待暮せしに、おそろしげなる鬼とも人とも見わけ難き大男のわらはが後より來りて氷なす刀を抜きて声を立つれば一刀に泉下の鬼となさんと云ひさまわらはを小脇に抱へて飛ぶが如くに山路をさして走り行けば只あきれあきれて怖しき雲路をたどる心地して此所まで來りしに此の松のもとにわらはをおろして彼男のいへらく。

汝今我手に盗み捕へ來て網の中の魚、ふくろのうちの虫なり、殺すも生すも我此の刀の手の内に任せぬれば死なんと思はば我言葉に従う事なかれ生きとし生ける者命惜からぬ……（現文破損五字不明）……生きんことを願はば我云ふ所に任せなば只今の破れたる衣を脱捨て朝夕身に綿繡をまとひ口に美食を喰つて日夜遊樂の席に至らしめん。

まさに父母兄弟あらば我より能に伝えて常に汝が住める家に往返をなさしめ、少しも疎遠なる事あらじ。今汝をかしこの家に売り与ふれば我も少しく金銀を得、汝も今の様に引かへて大いな仕合なるときに涙ぬぐひて我とともにいたるべしとおどしつすかしつわらはをいて行かんとせしに、余りのかなしさに艶き力の限り双手をあげてうち払ひしが如何なしたり彼が鼻先に当りはなちおびただしく出て胸にしたたりたれば、彼賊たちまち大に怒り虫にも劣れる小女めが、いでさあらば思ひ知らせんと、わらはを赤裸になしありあう藤葛を以ていたく搦め松樹の上に引あげて己も松の枝に登り枝折りてしたたかにうちうちて笑ひ、笑ひては打ち、鬭殺しになさんとせしところ七、八匹の犬來りてしきりにほへかかり跡より獵師の來れ

るさまなれば賊は前後を顧足ばやに樹を下りてくどくどと何やらんいひながらわらはば衣類を取りて何所ともなく逃去りたるくちをしさ、苦しさ悲しみに声の限りに叫べど件の大さへいづこへか行きて見へざりたれば、はからずも兄上の手に救はれあひたてまつる事のうれしさよ。されども先に胸のあたりを強くうたれぬれば命助かる事もあらずよくよく父母につかへたまひ御身もすこやかに渡せたまへ此の世にてまみへたてまつるも、これ限りならんと息の間に間に語るさへ苦しげに次第によりより命数ここに尽ぬるはむざんや夜半の露と消へついにほなくなりけり。」

なお、そこには賊の落して行った小刀があり、これを証拠にお定まりの仇討である。

此の前、草雙紙の稿の時には数が多いので、全文引用はしなかった。全文引用すると大体こんな調子である。

絵は草雙紙の挿絵よりも丁寧で、構図の隅々まで凝っている。

二頁をさいて、上手小高い山、松や杉が山水風に画かれ月が出ていゝ。手前に松の太木、枝から腰のもの一枚の美少女が後手に縛られ吊り下げられ、木の根もとには着物がぬぎ捨てられ、刀を地面に突立てた山賊風の男が寝そべっている。

はるか下の方には遠く百姓家が二、三、蝙蝠がとんでいる。

強悪な山賊の表情と弱い美少女の表情の対照、山水を思わせるような遠景。

構図は実にうまい。

○新編水滸画伝、八十巻、文化四年より文政十二年。高井蘭山訳、葛飾北斎画。

大変な長篇もの、この中の巻之十六の宋公明私かに晁天王を放つ項。

此の方、文章は極めて簡単に済ませているが、絵の方が北斎だけ

あって面白い。七人のなつめ売りと一人の酒売りが、しびれ薬を使って人をしびれさせ、礼物金銀を奪うと云う話があって、そのうちの酒売り、実は博奕うちの白勝が捕えられ夫妻で拷問される。

「則ち八人の軍卒を何清に添へて、安楽村に遣はし、彼の客屋の主を案内者として直ちに白勝が宅に馳せ来たる。此時夜己に三更の左側にて、白勝夫妻は熟く睡り居ける処に、大勢の軍卒等、一度に門を打破って家内に擁入りけり。」

ここに一つ絵があつて夫妻がふみこまれ、寢室を逃れんとしているところ。

『己に夜の五更の時分、済州府に至つてのち白勝夫婦を庁前に引き出す。此の時府尹、賊の棟梁を問ひけれども、白勝夫婦堅く包んで壹人を供さざりしかば、府尹大いに怒つて、汝何ぞ是を抵頼ふや』

たちまち拷問すれば『皮開け、肉綻れ、血滾々と流れ地に溢る』たまらずに白状に及び、『乃ち二十斤の死罪の頸枷を白勝に枷け獄中に遣はし、妻も同じく鎖を以て締め、女牢に入れ置きけり』

牢の前の石だたみか、或は拷問蔵の中か、とにかく格子牢のようなどころで太い梁に太綱で後手に縛られ吊される男女、兵士の一人が綱を持ち、一人が棒を持っている。

下手に取調べの役人、兵を従えて一段と高いところに居る。夫婦とも腰のものだけにむかれている。

北斎の絵、例の剛快なタッチで草雙紙に多く見られる歌川派の絵と大分趣を異にしている。

○桜姫全伝曙草紙、文化二年刊五巻六冊、山東京伝作、歌川豊国画。

例の歌舞伎の清玄桜姫の如くであつて、この場合、一寸書替えて桜姫と清玄を腹ちがいの兄弟にしたてている。

作者、画家については前稿の「草雙紙」と重複するので略すことにする。

この物語の発端、丹波の桑田長者の驚尾義治の妻野分の嫉妬から始まる。

義治は京の白拍子祇福を愛して連れ帰り、妾とし玉琴と呼んだ。

玉琴は琴の名手だったから。

玉琴は身重となったが、嫉妬深い本妻の手前、義治はこれを内証にして家臣篠原八郎に預けておいたが、侍女の告口でこれを知り家来兵藤太に命じて奪い来させ、いろいろ嫌味をならべ立てた上に琴をひかせる。その妙音を聞いて益々立腹し兵藤太に命じて玉琴を斃殺しにし大江山の谷川に捨て去る。

すると死骸から胎児が生れ遇然、元鷲尾の家来だった修行者に拾われる。これが後の清玄である。

一方本妻の野分は悪い奴で、玉琴の家の方は強盗に襲われたように細工し、自分が命じてやらせた兵藤太は殺してしまふ。この野分の生む子が桜姫である。

途中をすつ飛ばすが、後に義治は賊に殺され、野分は賊に捕えられ身をまかせるが、やがてここでも性来の毒婦ぶりを発揮し、賊の妻（盲目である）を追いついて殺し、二人の娘を責めさいなむ。娘達は母の死骸を尋ねて弔い心中をしようとするが、これも通りがかりの僧に助けられ尼となる。

あとは因果と勧善懲悪の話である。

まずは原文を拾ってみよう。

『兵藤太屋敷に上り「首尾よく仕おほせ候」と申して、ひつをおろしければ、野分の方喜び「汝よくでかしぬ、疾くこれへ引出せ」といふにぞ、兵藤太、ひつをひらきて玉琴をひき出し、口にはましたる物をときてつき放しければ、玉琴は絶入りて人ごこちなかりけるが………』

『兵藤太うしろより指を以て背中をつき「疾く疾くよりね」と云ふも、なほ苦しければ、とかく後へのみすさりぬ。野分の方氣をいらち、簾のうちより、雪のごとき腕をさしのべて玉琴が手をとらへ、膝のもとへ引きよせて、顔をつれづれとうちまもり、「さてさて、美麗しき生れかな。聞きしにまさる顔容なり。そちは諸々の遊芸に長じ、わきて琴に妙なるよし、ほのかに聞きぬ。今宵召しよせたるも、実は一曲を望まん為なり。何にまれ、一手しらべて聞かせてんや。いざいざ」とて琴を前にさしつけて望みければ玉琴は水責、火責にあふよりなほ苦しく、胸もとどろく折なるに、いかでか琴を調ぶべき、さりとてこれをいなまば、いかなる憂目にあはんもはかられず。畢意、嫉妬ゆへに我を捕へてつらき目見せ給ふと思へば、何事も彼方のいにそむかず、憐をうけて、この場をのがるにしかじと心をさだめ、涙をおとしつつ云ひけるは「拙き爪音を聞き参らせんは、いとほかしけれど、命おもければいなみ侍らんもおそれあり、手業の幼きはゆるさせ給へかし」と云ひながら琴を引きよせてかきならし、唐の世の多妓翠翹がつくりたる「妾薄命」といふ曲を日本詞に和げて、いともあはれに唱う、手頭もふるへ声も泣声なれど、さすがに妙手のしらべなれば、かへりて常よりもまさり、其声凄風楚雨のごとく、聞くにあはれを催すといへども、野分の方はなほ嫉の心いやましぬ』

「いないな汝はもと白拍子にて、おほくの人をまどはし、いつはりをいいたれば、其舌の剣にて、我を害せんと計りしに疑なし。相公も亦その毒舌にこそまどひ給ひつれ。報のほど思ひ知らせんずるぞとて、緑の黒髪をかいつかみ引倒して、額さを畳にすり付けすり付けしつれば額の皮やぶれて血をながしぬ。扱兵藤太にむかひ「此女なぶり殺しにして、苦痛をうけしめよ」とて突きはなしければ、

兵藤太やがて氷なす刀をぬいて斬りかけたり。玉琴ひらりと身をか  
はし、危き剣の下をくぐりて遁れんとするを、兵藤太警つかみて引  
きもどし「おろかや汝、網の魚籠の鳥、いかでかのがるる道あらん  
我君の恨の刃思いしれ」と、刀を目先にさしつけて追いめぐれば玉  
琴は身をちぢめ「現在妾が胎内には相公の御胤を宿し……云々  
(略)」とくどきたてて、涙を滝のごとく流し「せめて産みおとし  
申すまで、一命をたすけてたべ、慈悲ぞ、情ぞ、やよなふ」と云ひ  
つつ追ひまわされ、身を遁れんとひしめくたびたび、衣にとめたる  
蘭奢のかをり鼻をおそひて、恰も嬋娟たる芙蓉花の風にもまるるに  
似たりけり。かくて情なくも肩尖二、三寸きりこめば、呀と一声さ  
けびてうつぶしに倒れ、しばし絶入りけるが頭をあげ「あな苦し  
や、堪へがたや、此館に慈悲ある人のおはすならば、妾が命をすく  
ひてたべ」と声高くよばはれど、草木も眠る丑三つの頃といひ、い  
く間を隔てし深殿なれば、誰こたふる者もなく、折しもつよき夜嵐  
の、庭木をならすのみなりけり。無慙や玉琴は手を負いて、総身は  
朱に染りながらはひ廻り、一度は野分の方にむかい、一度は兵藤太  
にむかい、掌を合して「しばしの命をのべ給はれ」と願へど、野分  
の方は答もせず、只うち笑ひてころよげに見やりけるが「今しば  
らく苦痛をさせよ」と目を以て知らするにぞ、兵藤太その意をさと  
り、玉琴がえりくび摺みて刀をとりなほし、胸の上にひやひや押し  
あつれば、玉琴は苦しき息をつき……云々」

と云った調子でくどくどと『血しほ、さとほとばしり、手足をも  
がき牙をかむ断末魔の苦しみ』(原文)までを物語る。

無論、実際にこんな事があったら大変であるが、読本の「責」の  
文体は大体こう云った調子で代表される。これは前の草雙紙の稿で  
述べたように、一つの因果話を一層どぎつく刺戟を強くするための  
演出効果であって、この惨虐性のはねっかえりが被害者側の敵討や

幽霊になってかえってくる。従ってこうしてテーマの部分だけを  
抜萃してあげるとその受取方は大分違つて来るので、若し作者がま  
だ生きているならば、この様なやり方はあんまり喜ばれないかも知  
れない。

それでも文の気取った調子を紹介したかったので少し長めに引用  
した。大体が草雙紙に較べて文が長いので全部、此の調子でやって  
いると予定の枚数に入らなくなるので、あとはなるべくはしよるこ  
とにする。

今のところの絵、御殿風の奥方の部屋を庭から眺めたところ、悪  
党面の兵藤太に髪をつかまれ奥方の前に引出されている玉琴、さる  
ぐつわに後手である。同じく殺しの場面と二枚絵がついている。歌  
川豊国好調の筆である。

さて、巻之四の第十三、賊蝦蟇丸と一緒にになった野分の方の二度  
目の惨虐、賊の盲の妻小萩を雪中ひとえにて折檻の上、外に追い出  
し、あとに残された松虫、鈴虫の姉妹をいじめる。小萩は雪中に死  
んでしまう。

一方野分の方「一時命じけるは「今日を始めとして、毎日朝夕の  
煮焼のひまに山にゆき、姉は七把の柴を刈り、妹は五把の柴をかれ  
よ、代なして日々の費にたすべし、一把にても不足せば、くくし  
あげて痛く打つべし。必ず怠るべからず。とくどくゆけ」と追ひ  
やりけり。彼等は山家に生いたつといへども、母の情にて、これま  
でさる業を仕なれば、山路の案内すらさだかに知らず……」

と云うわけで「白くうつくしき足は荆棘のために紅をしぼり、  
黒みどりなる髪は蜘蛛の糸にまとはりて柴を刈るにぞ、身うちしび  
れ手足なへぎ、息もたゆく堪へがたし」

そんなにやってても、どっちみち無理難題が目当だから、決め  
られた数の柴が刈れるわけがない。姉は妹を庇って自分の分を妹に



やる。そのために帰ってからまた野分の方に責められる。このあたり、例の調子で長い文章。

『忽ち眼尾ひきあげ松虫をにらみていひけるは「悪き奴、妹さへさだめの数を刈りつるに、汝年かさにありながら、二把まで不足せしは、畢境物に怠るゆえなり。後日の懲しめに、いでいで憂目を見すべし」とて、われ木をとりて打ちければ、鈴虫泣声になり、

「姉うへの柴のたらざるは、原妾が罪なり。妾を打ちて姉うへを許してよ」といひて……（中略）……野分の方松虫をとらへて赤裸となし、高手小手にくくりて捨置き、鈴虫にむかひ「汝も我が意に背かば、姉のごとはからふべし。よく見ておけ」と、いひてにらみければ、鈴虫は身の毛いよだちておそろしく、只しのび泣きに泣居たり』

かくて夜になり、野分の方はさっさと寝てしまふ。

『小夜もやうやう更けぬれば、巴峽の猿の一叫、情騒しきむささびも、哀を催す種となり、寒月皎々と光りて壁のやぶれをもち、飯篠群竹吹きならす朔風松虫が肌冷えとほり、身うち氷のごとくなりて、今も絶入るべきこちす。かかる折しも鈴虫は、拔足しつつ柴小屋に來り、袂にかくせし一塊の飯をとりて松虫にくはしめ、おのれが着物をぬぎて打ちさせ「姉うへ、さぞな餓ゑ給いつらん。身うちの痛はいかにぞや。妾ゆへに、かく苦しめ申すことの勿体なさよ」と云ひてとりすがり、覚へず声をたてて哭きければ、松虫めくはししてとどめ「若し彼人睡を醒さば、そなたも亦憂目見るべし。とくとくゆきて寝よ。妾にかまふことなかれ」とて万を胸にあきらめて、ことばに出さねども、母に別れて我のみを力に思ふ心には、さぞな悲しく思ふらめと、推量れて胸もさくる思にて、しのび涙にむせびけり』

結局、翌朝ようやく詫びを入れ、更に多くのハルマを命令されて

許される。

絵は雪降る民家、ぬれ縁の柱に縛りつけられて賊と野分の方に棒でたたかれていた姉妹、母親は庭の木戸の外に追い出されていて子供達の声を聞いて半狂乱の状態。

感じを非常によく出している豊國の絵である。

次いで多少角度を替えて、部屋の中、いろりがあり猫が眠っている。一方には鏡やはたおり機具などがおいてある。縁側の端に柴が投げ出され、姉の方が野分に棒でたたくられている。これを止めようとしている妹の図。

姉妹はやがて母の死骸を発見し、自殺しようとするところを僧に助けられ仏門に入る。

○昔話 稲妻表紙 五巻、文化三年刊、作者山東京伝、挿絵歌川豊國。

内容は不破名古屋の狂言を集め、それに歌舞伎浄瑠璃をも参考とし作り上げた小説で、大当たりをとったため、また歌舞伎に還元され大変ヒットした。

一口に云えば、お家騒動の話である。京伝の読本代表作の一つである。

巻之四に琴責めの大変長い名文章がある。絵はないが、例の名文調。

銀杏の前は山三郎に扶られて生駒山のふもとまで逃げるが遂に追手につかまり深殿の奥の一間に押籠られる。

『いてふの前を引いだして兩人かはるがはる昼夜たえまなくうつつぜめにして、月若のゆくへ白状せよと責にけり。むざんやいてふの前は三日三夜のうつつぜめにつかれてはて、おぼへずねぶれば、道犬耳のはたに太鼓をならして、ねぶりをさませ……（中略）……ねぶれば打うてば醒、水責、火責にあふよりもはるかにま

さる責苦なり。傍より蜘蛛方、小膝をすすめてちかくより、いまわづか三日三夜の責なれば、まこと現にはならぬとおぼし、ながき責をうけんより、つい一言白状せよ。此うへいはずば、骨をひしき肉をさきても、いはさでやはあるべき。いでいへいで答へよとて、角なき夜叉のさまなして、くらひつくべき形勢なり。いてふの前顔をあげ、いかほどにのたまふとも、知らぬ事はせんすべなし。只此うへは、片時もはやく、殺し給ふが情ぞとて、さめざめと泣給ふ。紺青の髪すぢも、こぼるるままにとりあげず、顔さしいるる襟もとに、つたふ涙の白玉は、夷の国の胸装を、目前見るゝこゝちして、哀などいふもおろか也。蜘蛛の方声あらゝげ、あなしぶとき女めかな。とても本性にては白状せまじ。いつまでも手もゆるめず、責つからして現のうちにいはすべし。道犬太鼓打々と下知するにぞ、道犬かしくみ候とて、耳のはたにさしつけて、どうどうと打ならせば、いてふの前の身にとりては、修羅の太鼓にことならず。一百三十六地獄、品かはりたる呵責にも、たぐいまれなる責苦なり。』やがて高手小手にいましめられた、いてふの前は首を打たれることになり夜の谷へ拉し去られるが、ここで何者かに助けられる。美文調の一席である。

○稻妻表紙後編本朝醉菩提全伝、文化六年刊、山東京伝作、歌川豊国画。上下十冊にわたる。

一休和尚の物語と明本醉菩提伝、浄瑠璃種のまぜあわせと云う。巻の三、落人の親子を賊が襲って当時三歳の娘乙星を谷に蹴落し、七歳の娘玉虫を奪い去る。母親はこの時、殺されてしまふ。やがて山姥なる人買老婆のところへ姉娘は売られて来て紅児とよばれていた。そこへ命を助かっていた妹娘も売られて来て緑児と呼ばれる

が、二人は姉妹であることは知らなかった。やがてこれがわかった時には、病氣になっていた紅児は山姥に責め殺され、妹は父の形見を持って逃げる。

例によって此の段、美文調で長々と語られているが、さきの桜姫全伝曙草紙の姉妹のいじめられるところによく類似しているし、有名な三莊太夫にヒントを得ているようでもあるので、文の引用は割愛しよう。絵はいろいろ端、女共に腰をもませている山姥と、ふすまをへだてた別室板の間にやせ細り裸で寝かされ、それを泣きながら看護している少女の図。

○三七全伝占夢南柯後記、文化八年刊、曲亭馬琴作、葛飾北斎画、五冊。

これまた文化五年刊の当り作「三七全伝南柯夢」による続篇と称するものである。

前作は三勝半七の心中からヒントを受け、例のあちらの小説にかみあわせた因果話。

後篇ではその半七が半之進となり、三勝は正側の室となり唐の「枕中記」の形をとっている。云い伝えによると元禄十二年八月七日、お花は井筒の抱え女、半七は道修町の刀屋、女は腹切りの上、のどを突いて死に、男の方は同じくのどを突いて三日目に死んだとの事。同じく長町に女の切腹事件があつて、近松はこれらからヒントを得て「長町女腹切」の浄瑠璃を作ったと云われる。プラス、アルファではないが、馬琴はこのようなものからもアイディアト頂戴に及んでいるらしい。

槐姫の身を気づかう半七夫婦と附人お通。このお通の責場が挿絵と共にある。歌舞伎風のきれいごとの絵で、特に責のみを強調したものではない。文章の方も前述の京伝ほど、ここに重点はおいていない。とりたてて云う程でなく、ただこう云うものもあると云う紹

介にとどめておこう。

### ○通俗三国志

手もとに原本なく、刊行は不明、絵は明らかに北斎であるし、「浮世絵類考」の北斎のところを見ても、北斎の読本挿絵目録の中にあるから間違いはないだろう。一方、内容は「三国志」そのものでも、一応日本での著者は誰になっているか「新群書類従」の書目の読本年表を見たところ、発行年代順の目録の方には見当らず、「有疑未詳」の項に絵本通俗三国志自初編至八編、七十四巻、池田東籬著となっていて、この方には挿絵画家の名前がついていない。従って此の記事の原本は、明治四十五年六月刊行の有明堂の本より引用する。

卷之四十八、姜維きやうゐ山布八陣さんぷはつじんの項、文は前述の京伝などとは反対に極めて客観的で、息ばったものでないが、北斎の挿絵が割合といける。蜀しよくの景耀元年、姜維が二十万の兵を興し魏の国をうとうとする。此の時劉禪りゅうぜんは酒色に溺れ、側近は美女をえらんでさし上げたりしていた。劉琰りゅうえんと云うものの女房の胡氏こしは非常に美しかったので宮中に仕えたが、亭主はやきもちをやいて手下の兵隊五百人を広庭に集め、胡氏を縛って顔を兵隊共にくつで踏ませた。

文章はその程度の内容で、興奮の様子にはさらさない。

絵は中国、武家の庭、室内には旦那がいて兵隊を指図している。庭ではひげ面の兵士が円陣になっていて、まんなかで腰のもの一枚の半裸にされた女房が顔を兵士の一人に踏まれている。北斎らしい線のはっきりしたタツチで画かれている。しかも構図の極めてすぐれたいい絵だと思う。

なお、同書卷之八には劉安りゅうあんと云うものが、客人をもてなすのに、自分の女房を斬殺してその肉を出す極めて惨虐なる話があり、文章

の方は話のなかの引用程度の簡単な紹介であるが、北斎が無気味な挿絵をつけている。

現代物、時代物を問わず、今の小説挿絵にはこれ程ひどい挿絵は全く見られない。

大きなまないたに半裸の女をのせ、腹のあたりから血がしたたり床に落ち、今や腕を切ろうとしているところ。こう云うものはあんまりいただけない。

○南総里見八犬伝なんそうりみんはつけんでん、文化十一年より天保十二年刊行。曲亭馬琴作。

馬琴の代表作であると同時に、「読本」中の代表作で実に二十八年にわたる続きものである。最後の頃には作者は失明し、大変な苦勞の末に完成したものの。内容的には「水滸伝」「三国志」の影響を受けていると云う。

挿絵は文化十一年に初篇が出た頃は柳川重信、文政五年の第五篇あたりから溪斎英泉が入りこみ二人で画いているが、天保五年の第九篇からは二代目重信と替って行く。

極めて長いものであるが、今回のテーマになるような話はその割にない。

七輯の卷之二に一寸切腹まがいの絵があるが、文章は乳の下をついたことになっている。

同じく卷之五には出来介できすけと夏引なびきの夫婦が共に襲われて縛りあげられる絵がある。女の胸がはだけて片方の乳が見えている。

第九輯、卷之二十八、山路の荒れ果てた堂に捕われる雪吹姫ゆきふきの挿絵がある。そこへ虎が現れ悪漢を食い殺す。一寸面白い挿絵である。順序が狂ったが、第八輯の卷之二、毒婦虫ふなむし船が山中の荒廃堂あれさうに吊るされ打ちたたかれるところ。通りがかりの莊介さぶけ、毒婦と知らずにこ

れを助ける。

堂の梁に吊され、三人の男に棒で叩かれてゐる絵がある。庚申堂かうしんどうの二階のようである。女は髪を乱し、首にも縄がかかっている。上半身がはだけて肩も乳も見えている。

同じく巻之八にも船虫捕縛の図がある。船虫は結局、牛の角に突さされて死ぬ。

文章はそれぞれ割合に筆単に済ませている。

以上で一応、現在手もとにあるもののなかよりのピック・アップは終えるが、前にあったが整理したものの中から記憶の範囲で二、三補足すると、

○盆石皿山記、文化二年前篇二巻、文化三年後篇篇巻。曲亭馬琴作、歌川豊広画。

例の紅血缺血まがいのもので、井戸端でのものがあつたが、そんなにどぎついものではなかった。

○復讐稚枝鳩、文化元年刊、曲亭馬琴作、歌川豊国画。五巻もの。たしか、蛇責めの挿絵があつたと思うのだが、若しかすると他のものとの思いちがいかも知れない。思いちがいとすると、多分文化三年の同じ馬琴の「敵討裏見葛葉五巻」である。文化四年の馬琴、「雲妙間雨夜月五巻」や「新累解脱物語五巻」もあつたが、責シーンがあつたかどうかよく覚えていない。

○千代蠟燭物語、文化四年刊、振鷺亭作、蹄齋北馬画。

たしか因果応報もので、京伝の曙草紙的なものだったと記憶する相当長々とした文章で悪いシーンがあつたように記憶する。

かつて伊藤晴雨氏が随筆かなにかで、振鷺亭と云う作者のものは極めて激しいものが多いとの事を書かれたのを読んだ事があるが、そんなような感じはあつた。

此の人は、江戸本船町の家主で趣味で書いていて、大体題名内容

奇抜なもので売っていたらしい。作品は少く、晩年は落ぶれて溺死したことになる。現在、此の人の草雙紙を持つてゐるが、こうした傾向とはがらりと変つた江戸前の黄表紙風の作品である。もう一つ振鷺亭のものがあつたが、今書目を見て思い出そうとしているが、文化五年の「俊徳丸謡曲演義、五巻」だったか、文化七年の「隊妹背山六巻」だったかよく思い出せない。不愉快になる位どぎつい陰惨なものだった。

あと京伝や高井蘭山の有名でないものが二、三あつたが「責」はなかったようだった。何れにしろ読本は、草雙紙に較べて部数もはるかに少ないが、草雙紙は雑誌で読んだら捨ててしまふのに対し、読本は一応単行本であるから、とっておいた人も多いと見えて、その気になつて集めれば、同時代の草雙紙よりは、はるかに集めやすい。ただ場所をとるのと、妙にかた苦しいところがあつて、とても現代の感覚では物語の最後までついて行けないところがあるので、何か特定の目的でもなければ買う気にはならないのである。特に長いものほど、その感じは強い。

いわゆる「江戸趣味」で、何となくこうした昔の本に愛着を感じて集めるにしても、やっぱり読本よりは黄表紙、洒落本の系統の方がはるかに楽しめるし、人情本や草雙紙の方がはるかに江戸の香りを味わう事が出来る。云いわけを云うわけではないが、前稿の「草雙紙」より更に限られた資料で書いたもので、若しも読者で今後たんにんに資料を蒐集され（或は此の方の権威者が居られたら）、此の稿極めて底の浅いレポートに過ぎなくなるだろう。もっと、もっと代表的なものが必ずある筈である。それにしても「読本」専門にあさるような奇特な人はいないものだろうか。

#### ○後述

参考書、原典の他

新群書類従第七書目  
浮世絵類考（沖田勝之助編校）  
江戸年代記（磐瀬玄策編）  
日本名著全集江戸文芸部  
第十三巻読本集（日本名著全集刊行会）  
有朋堂文庫収録の原典  
以上



蠟

涙

(ろうるい)

辻村

隆

## 午前二時の決斗

深夜喫茶「サニー」の午前二時。

真紀は仄暗いボックスからスックと立ち上る。それを合図に、あちこちのボックスから一人、又一人と、数人の少年が、真紀に呼応してサインを送る。

バーテンに目顔で挨拶を送って、真紀は数歩離れた向いのボックスへ足早に近づく。

ここにも三人——、真紀と同年輩の十七、八才の少女達が一杯のジンフイズをなめる様に抱え込んで、たむろしている。

「分ってるやろ。黒ばら会の真紀や。一寸、

すまんけど顔貸してんか——」

否応云わせぬ、真紀の鋭い気配だ。

真紀一人と見て、三人の少女はうなずく。揃いのマンボズボンに、真紅の派手なブラウス。

女達の胸のバッジの柳の図柄は、彼女達が柳会のメンバーである事を物語っていた。

流石にネオンも粗方は消えて、川面を渡る風は肌到低たい。

柳会の女達を間に挟んで、先頭に真紀——。

後備に妹分の由べエと花枝が続く。小一丁離れて、見え隠れに彼女達のヒモが尾行して行く。

U倉庫の裏——。トタン塀を引くと、裏庭

へ苦もなく忍び込める。

彼女達のオトシマエのショバであり、裏切り者にヤキを入れる恰好の場でもある。

三対三の対決——。

「うちの京子を引張り出して、お前等の組へ引曳り込んだ奴はどいつや」

真紀はつめよる——。

「ああ、うちや。京子はな、お前が嫌いや云うて、うちの方へ転がり込んで来たんや。それがどうしてん——」

柳会の幹部、女の一人の浪江がやり返す。

「おお、よう引抜いてくれた。たんとお礼したるで——」

真紀に、何時握られたか、棍棒が、いきなり浪江の向う脛を搔つ払った。

毛をむしる。引搔く……。喚く、叫ぶ。

三対三は入り交って、深夜の空気を華やかに掻き乱す――。

後より忍び込んだ少年達は、この乱斗を面白そうに片隅で眺めている。

十数分――。

どちらも傷つき、倒れて――。

やがて、氣力を失くした柳会の少女達を、

男共はめいめいに片付け始める。

ずるずると女の足を引曳って、彼等は壊れて雨洩りする空倉庫の中へと姿を消して行く。

恐ろしいリンチが少女達に訪れようとしているのだ――。

間もなく真紀はヒョとヒョロと立上る。肩を怒らせ、胸を張って、男達の後を追う。

この決斗を演じて、彼女のアネゴ株が一段と上った事を心の片隅で意識しながら……。

## 暁のリンチ

「ヒーツ」と絶叫に変わって、激しい鞭の音。

古びた梁から、ほこりを撒き散らして、ロープはじりじりと男の手によって引き上げられる。

ズタズタに裂けた彼女達の衣類が、リンチの激しさを物語っている。

彼等達が好んで行う、駿河責めの一手。

両手、両足を背で束に縛られて、鞭の打撃と共に引き上げて行くのだ。

二人の女は既に、転向を誓ったのか、半裸の姿で、床に伸びていた。飛出しナイフで引き裂かれた衣類が、ズタズタになって辺りにちらばっている。

柳会の幹部だけに浪江は頑強だった。

既に体は床を離れて二尺以上も高く、宙にブラ下っている。

柔軟な女の發育盛りの体といえども、この駿河責めには流石に抗し切れない。

弓なりの体に容赦なく鞭はとんで、吊られた両手足は蒼白に変じている。

「あかんあかん。まだそんなことでは生ぬるいんや。一寸うちにやらして……」

ポイと啜え煙草を捨てて踏みになると、真紀は男の鞭を奪って、浪江の傍らに近寄る。

「さあ、うちの京子をヤサグレ（家出）させて、どこへトンコ（逃亡）させた。白状せえへんと、命あらへんで……」

「し、しらん……」

絶え絶えに浪江は首を振る。

「よっしゃ、まだしらざる気か。ほんなら思ひ切り痛いめしたらええわ。覚悟し……」

鞭がうなつて肩に飛ぶと、悲鳴が流れて、

浪江の体はクルクルと宙に旋回する。

バイ独楽を廻す様に、息もつかず鞭で浪江

の体を旋回させて行く。ロープがよじれて頂点に達すると、反動をつけて逆転させる。空間に女の体はめまぐるしく、激しくくる、くる、くると回転する。

真紀は掴みかかる様に、

「フン、割合ええ度胸や。一寸いかすやないか。もっと可愛がったげるで――」

そう云いつつ、傍らのローソク立てをとり上げる。

海苔をあぶる様に、ローソクの炎を、浪江の体に近付けて、ジロジロと見究め乍ら、焦熱地獄の効果を楽しんでいる。

「あッ、ウーあつい……死にそうや――ヒエーツ」

駿河責めもローソク責めの相乗作用で、浪江の我慢の限界が来た。苦痛に、押え切れず思わず洩れる呻き声。

「まだ云えへんか――。強情な奴や。よっしゃ、ほんなら顔焼いたる。ええな……」

「……」

炎が一寸一寸と、蒼褪めた苦悶の顔に近附く。

「ウウウ、顔は堪忍して……云う、云う――」

「白状するんやな。よっしゃ、それなら降したる――」

男に合図すると、ドタリと浪江の体はコンクリートの床に落ちる。手首の縄跡は深く、強くくびれ込んで、くつきりと夜目にも鮮や

かな腕輪を彫み込んでいた。

「これからは、うちの仲間や、可愛がったげるさかい、はよ斬り……」

「……」

「どうしたんや。怖いんか」

浪江は覚悟を決めた様に、瘦れた指先に渡されたカミソリの刃を挟んで、思いきって、太腿に当てがいがい、ぐいと引いた。切口は二つに割れ、サッと鮮血がほとばしる。

歯を喰い縛り、頬を歪ませ、涙をためた浪江の腿を、ドクドクと血は噴き上って流れる。

「ええ度胸やったわ。この縄で足をくくってから、赤チンでもつけとき」

真紀は満足そうに、ポンと浪江の肩を叩いてつぶやいた。

女グレン隊、黒ばら会のサカズキ事は終わった。カミソリ当てが、仲間固めのサカズキ代りの行事なのだ。

もう二人の少女も、否応なしにサカズキのカミソリ当てをさせられたのは云う迄もない。

初電のレールの響きが、この陰惨な倉庫にも伝わってくる頃、これらの男女は、それぞれの罫へと、散りに散って行った。

## 黒ばら会

いったい、何が真紀をヤクザに育て上げたのであるのか――。

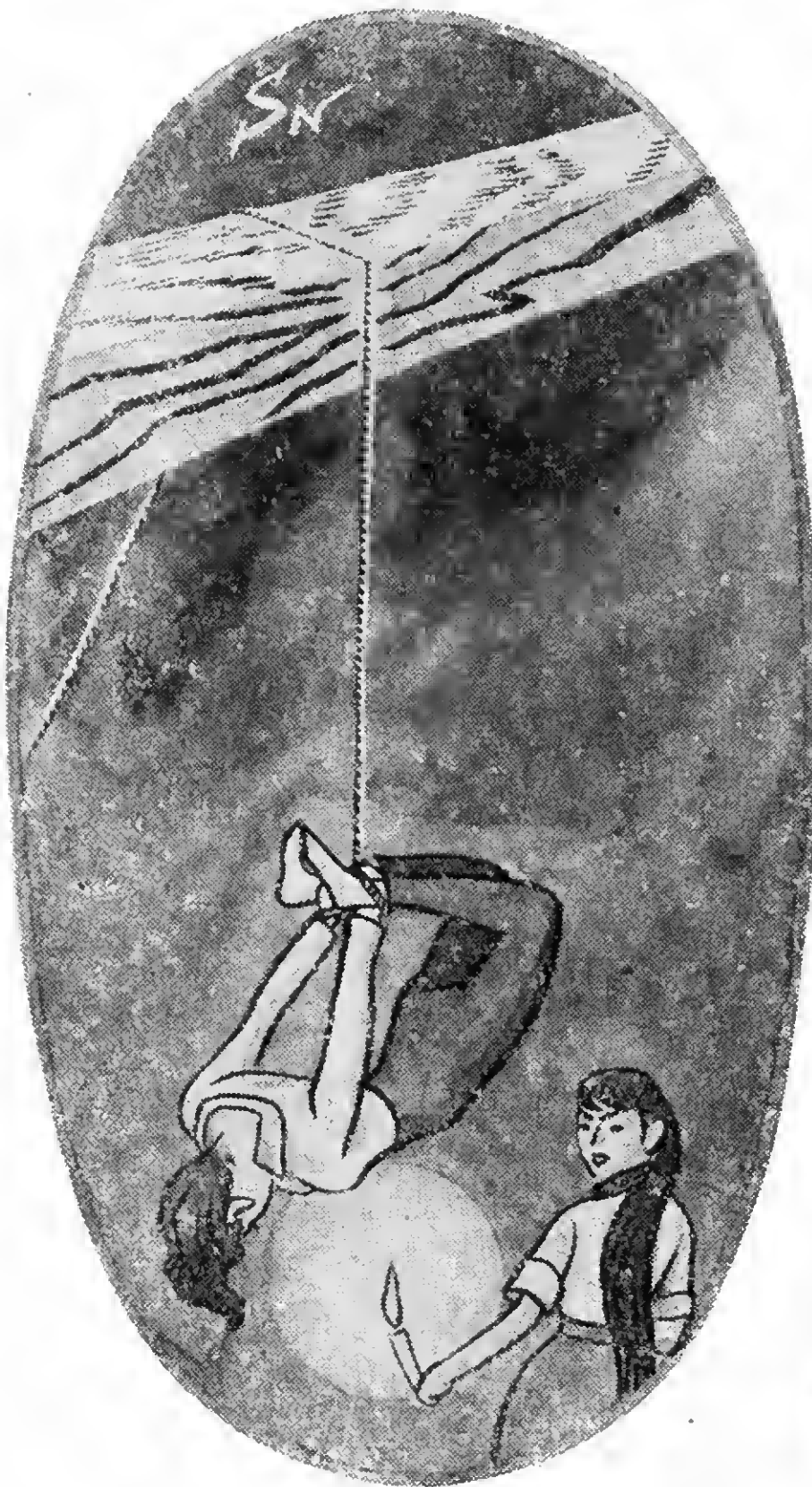
真紀は十七才――。去年までは〇学園の高校生で、父親は一流会社の課長である。

ジャズが好きで、喫茶店に入りびたるうちいつしか、こんな世界の男達から眼をつけられた。それ迄にも非行歴は三回。高校生らしからぬ大柄のいきいきした肉体と美貌が禍い

して、一年生の時、高校三年の上級生の娘から目をつらけれ、女同志の甘い交際を知った。母親の居らぬ家庭の淋しさから、屢々上級生の夏子を訪れ、放課後、庭球部の物置で密会していた現場を教師に見附けられて、最初の黒星をつけて、ブラックリストにのった。

学業は下る――。学校は面白くない。

スケートリンクや純喫茶が、何時しか深夜喫茶へと足踏みし、酒や煙草を口にする様になったその頃、黒ばら会の一かどの幹部だっ





た夏子に誘われてこの途にふみ込んだ。

夏子と共に喫茶で、客の少女に派手な喧嘩を売って、一度サツの厄介になった。

こうした過去は当然、退学である。

喫茶に入りびたり、金に困ると家のものを片っ端から持出す、一とかどの不良になってくると、狼の牙を研いでいた男共が黙っていない。夏子が情婦となっていた男の友達に、夏の夜、空倉庫に誘われ、反って真紀はサツパリした様子で、その男の三人目の情婦になった。

情婦と云う名の少女、真紀は今では反対に四人の男を顎で使いまわしている。

京子と云う高校生が入会した時、真紀の夏子によって教えられた同性愛の性癖がムラムラと起って、この少女を思う存分、自分のモノにしたかったのである。

その京子は、真紀の激しい欲求に恐れをなして、モノにせぬうち、真紀の手許から逃げ出した。

必死に探し出す真紀——。

そして……柳会の浪江等三人との出入りによって、京子の所在をつきとめる事が出来たのであった。

可愛さ余って憎さ百倍。そんな心境の今の真紀だった。

「探し出したら唯ではおかないわ。うちの顔に泥を塗って……」

いまは黒ばら会でも、押しも押されもせぬ大姐御様に真紀はなっていた。

こんな真紀を知ってか、知らでか、父の課長は妻に去られた後の淋しさから、数年前から困った女の家に入り浸って、二週間に一度帰らぬ日もあった。放任され過ぎた少女の行きつくところは所詮は悪の道でしかない。バラの蕾も早や散って、真紀は盛りの大輪の紅バラを体内に咲かせて、甘い蜜にたかる虫ケラグレン隊の出入は絶えなかった。

ドヤの男から男へ渡り歩いて、男と酒と喧嘩に、真紀は若い青春をすりへらして行った。

### 京子の受難

京子は、ぐったりとなって倉庫の床に転がっていた。

真紀は張番させてあった妹分の由ベエと花枝を呼び込む——。

このとらわれの小雀を、これから自分達の手で腹の癒える迄、存分に料理したい激しい嗜虐の感情がモクモクと突き上ってくる。

「ありきたりのリンチでは面白くないわ。こいつどないしたる——」

小悪魔の由ベエがニヤニヤ笑って、真紀に何事か耳許で囁やく。

「そうや、思いきり颯ったんのもええな。こいつ、こんな温馴しい顔して、うちに煮湯の

ませよったんやさかい——」

ぐったりと打伏していた京子が、やっと顔を上げる。恨めしげに真紀を見て、それでも哀願する。

「私いけなかったわ。お姉さん、かんにんして」

「あかん、明日では遅すぎるや。いっぺん、芯からヤキ入れたらんと、性根が据らんさかないな。さあ、ぐずぐずして情が移らん間に、早よやってしまい——」

真紀はうそぶいて、由ベエと花枝を促す。

「あッ、お姉さん、かんにんして……」  
と叫ぶ京子に、矢庭に二人は躍りかかって、ぐいと後手に擦じ上げ、両手を合掌して縛り合してしまふ。

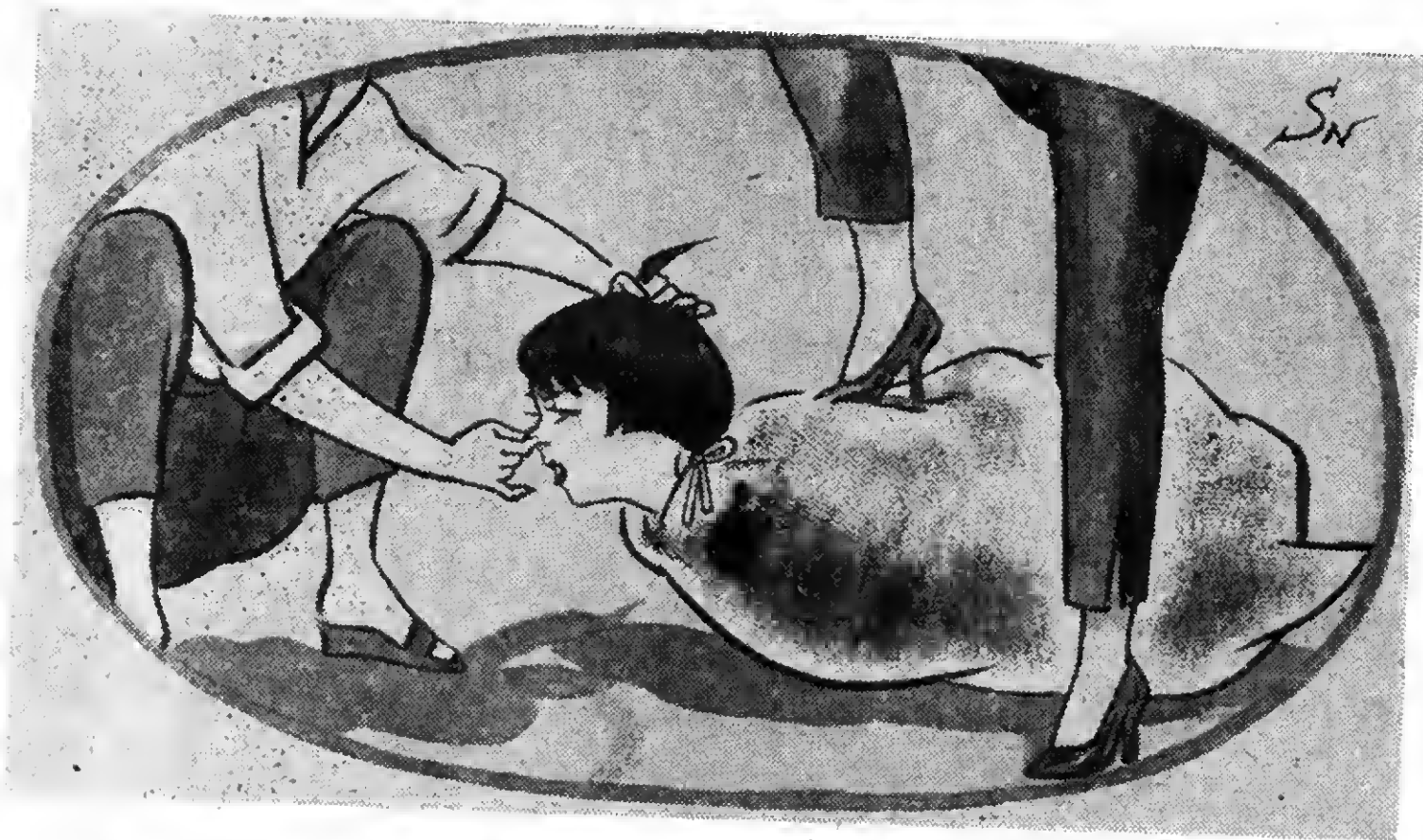
花枝がザラザラしたドンゴロスの袋を持ち出してくると、両足も荒縄で縛って、手取り足とりして無理矢理、袋の中へ京子を押し込める。

首だけを出して、袋の口をしっかりと結び、足蹴にして転がすと、真紀は近寄って、京子の顔をパンプスの土足で踏みこむ。

苦しきまぎれに、京子は真紀の指先を、パンプスの上から噛みつく。

「あいたた、こいつ噛みつきよったで、鼻つまんだれや」

花枝が云われる通り、京子の鼻をぐいと擦じ上げる、息苦しくなると京子は口を開く。



「おもろい真似しよったな、御礼はよ  
うけしたるわ。由ベエおやり——」  
真紀と花枝は棒ぎれで京子の口を一  
杯に開かせる。

袋がしきりに揺れて、京子はもが  
く。しっかり押えつけた真紀の瞳は、  
熱っぽく、キラキラと輝やき、この思  
い付きを愉しんでいる。

突如、真紀は、後頭部に激しい鈍痛  
を感じて気を失なった。

夢中になっていた彼女は、報復に現  
われた浪江を先頭とする柳会の女達に  
忍びよられた事を、その瞬間まで気付  
かなかったのである。

### 明日はわが身のリンチ

ザブリと顔に水をぶっかけられて、  
真紀は正気に還った。

怒り狂った柳会のメンメンが、浪江  
を先頭として、六人許り真紀をとり囲  
んでいた。

「畜生！ 先日のお礼にきたよ。それ  
から、京子が大層な物を戴いたそうじ  
やないか。柳会の鉄則で、御礼は倍に  
して返すよ。フフ」

勝利感に酔って、浪江は、せせら笑  
う。

荷揚げに使う、頑丈な渡し板に、京

紀は首から足首まで、ぎっしりと荒縄で雁字  
搦目にされて、縛りつけられていた。板は斜  
めに壁に立て掛けてあって、真紀の爪先が辛  
うじて床に触れていた。

「さあ、気がついたら、始めるとしよう。」

彼女達は板を床に倒すと、真紀の頭を下に  
よっしよ、よっしよと足を上にして逆さに立  
て掛けた。ズルッと重みで体が二、三寸下に  
ずり落ちて、真紀はグングン血の下るのを覚  
えた。顔面が紅潮して、頭に血が溜ってきた  
のだ。

「フフ、お前にやられた、駿河責めの上を越  
すやつだからね。ちつとはえらいよ……」

浪江はつぶやいてペンチをとり出す。

ズタズタに裂かれた衣服からのぞいてい  
る、スベスベした真紀の肌をペンチで摘むと  
グリグリと振じ上げる。

脳天に突き上げる激痛に、真紀は思わず、  
「ウーム……」と呻き、「ヒーッ」と悲鳴が  
ほとばしる。

浪江の手に力が入る。

「さあ、先刻の手管通り、ローソクを全部つ  
けるんだよ」

女達はめいめい太いローソクに火を点じ  
ると、それを横にして、真紀を囲む。

一齊にボタボタボタボタと蠟涙が、所嫌わ  
ず真紀の肌を狙い打ちに雨となって降りそそ  
ぐ。

焦熱の責めだ。

瞬間の熱さが、次々と続いて、真紀は気が遠くなりかけている。

女達は、めいめいのローソクを真紀を縛った荒縄の隙間へ差し込む。ヒタと体を動かす事も出来ず、真紀は差し込まれた蠟涙を顔に、胸に、腹に甘受しなければならぬ。

柳会の誰かが、パツとフラッシュを焚いてこの真紀の残酷極まる私刑の浅ましい姿をフィルムに納める。

「二本許り引き抜いて、あいつの鼻の穴に立てておやりよ」

真紀の形よい鼻は斯くてローソクで塞がわる。蠟人形さながらに真紀の白い皮膚は蠟で蔽われて行く。

真紀の苦悶は頂点に達する。

「待って——お願い！ 止めて頂戴……止めて——」

突然、京子が真紀に縋りつく。

「バカッ！ お前を死ぬ程の目に合せたこいつやないか——。どうしたと云うんや」

浪江が京子の豹変に、目に角立てる。

「でも——でも、私の為にみんなが非道い目の合わしつとして。——こんなこともう沢山……。止めて、お願いだから——」

「何云ってんの、これがオキテなんだよ。それとも京子、お前も、もう一度こんな目に逢って見たいのかい？」

「……」

「こいつが好きなんかい。返事をおしよ。それなら、それでええんや。どっちや——」

「いいわ。真紀お姉さん好きよ。お姉さんと一緒に、私我慢するわ——」

「よく云ったね、畜生——。やっておしまい」

忽ち真紀と背中合せに京子は荒縄で板に縛りつけられる。

真紀は遠くなる意識の中で、京子の腿から足首にかかる縄が、自分の胸にひしひしと重ねて纏わりつくのをうつつに感じ乍ら、血の

下りきった脳中で、京子京子、うんと可愛がったげる。うちの一番好きな京子、と夢中で叫んでいた。

頭と足を逆に、板一枚で背中合せの真紀と京子は、じかにお互の苦悶を汲みとり乍ら、グレン隊の宿命とも云う、リンチの庭に晒されて、浪江等による、責めを待っていた——「いいんや、これでいいんやね。京子しかり我慢してや」

薄れる意識の中で、真紀は必死に叫んでいた。(了)

## ◎新人モデル嬢新作緊縛姿態集

光沢純黒調印画紙(9センチ×13センチ)焼付

### 愛川悦子嬢の巻

#### ★ベッド変型縛り(略号1)

四枚一組 三〇〇円

ベッド上に繰りひろげられる悦子嬢のアクロバチックな全裸のポーズは輝くライトに映えて豊かなアクションをふりまいてゆく。

#### ★全裸強烈縛り(略号2)

四枚一組 三〇〇円

山里離れた温泉宿の一室、硝子窓から洩れる夕陽に照らし出されて縛られた裸身は妖し

くゆらめく。

### 大塚啓子嬢の巻

#### ★股間縛り(略号3)

六枚一組 四〇〇円

その美を誇る啓子嬢の肌にひしひしと喰い込む縄目、緊縛マニアの方々に捧げる垂涎万丈の作品。

#### ★全裸縛り(略号4)

五枚一組 三五〇円

豊満な柔肌の全身に喰い入る麻縄の醸し出す妖しい美しさ

### 田中芳代嬢の巻

#### ★セーラー服縛り(略号5)

五枚一組 三五〇円

可憐な表情、巧みなポーズ、セーラー服をまとって縄目に悶える田中芳代嬢の清純なまざなし

#### ★股間しばり(略号6)

四枚一組 三〇〇円

ここに又、新しいモデル嬢の股間しばりをアルバムにお加え下さい。

## 体験記

## バー「ナナ」の人々 (第五回)

南 時 夫

## 五 ミスズのこと(その一)

——前回までマダムの話をもそのまま紹介した。マダムの話も一応ここで打ち切り、今回からミスズの方に焦点を向けたいと思う。私がミスズから聞き出したことは、はなはだ断片的であつて、マダムの場合のように、これをそのまま告白記として発表する訳にはいかなかった。それで私は以下、ミスズを主人公とした小説風に書くことにしたのである。

ここ東京、下町の浅草橋は問屋街である。軒並にいろいろな問屋が並んでいる。全く同じ店構えの、全く同じ品物を卸している店が

二軒、三軒と並んでいることも珍しくない。その中で一きわ大きく、この界限では知らぬ者のない老舗の長女としてミスズは生れた。下駄問屋である。使用人が女三人男二人の五人も居たが、家族は両親とミスズと妹の四人暮りであつた。老舗の長女として、ミスズは当然のように我儘一ぱいに育てられ、何一つ不自由することもない。気性も激しく、自分の気に入らない事があると男の子の様に荒々しく振舞つた。両親が娘の教育の仕方について疑いをもった時はもう遅く、学校の先生に宜しく願ひする外なかった。妹の美智子はおとなしく、学校の成績も首席を争うほどであ

り、ミスズとは性格的にがらつと違つていた。でも二人きりの姉妹であるところから、ミスズは妹の美智子を可愛がった。気嫌の悪い時でも妹にだけは優しくし、美智子も「いいねいお姉さんだ」と思いながらも姉が好きであつた。のんびり育てられた為か、ミスズは体も立派で中学生のときにはもう一人前の女として見られる程で、高校の男子から随分と眼をつけられ誘惑も多かった。派手にお金も使うので同級生の間でも姐御的存在になつていた。美貌と云う程ではなかったが、眼鼻だちの大きい派手な男好きのする顔立であり、伸びきった姿態は学校中だれでも知らぬもの



もなく、話題の多くは彼女のことから発していた。中学三年生の時にはもうブラジャアをして身体検査の際、皆を驚ろかしたりした。派手なことが好きであったので放課後、家に帰るとすぐ洋服を着替えて、喫茶店やお好焼屋に友達と行つては一人前の様に食べたり飲んだりした。

高校一年になった。彼女は薄化粧して登校した。どこの学校でも同じ様に不良グループというものがある。ミスズの進んだY学園は女子ばかりの高校であつたが、それはそれなりに大小のグループが幾つかあつた。その中で最も大きな勢力を持っていたのが、三年生のK子をリーダーとする組で、気の弱い下級生はK子の顔をまともに見ることも出来ない程であつた。K子は二年生の時に、もう既に街の顔役の情婦になつていたという噂である。長く垂らし、細いヒップの線がくっきりと現れるマンボズボンを着き、首に真紅の小切れを巻いていた。丸ぼちやの可愛い顔立ちであつたが、眼がきつく言葉遣いは荒っぽかつた。ミスズが入学して間もなく、このK子に呼び出しをかけられた。派手な服装で校庭を闊歩するミスズがK子の勘に触れたのである。五、六人の上級生に囲まれた彼女は憶することもなく、その日、家から本代として貰つて来た二千元を出して、街のトリスバーに皆を連れて行きカクテルをおごつた。こうして

彼女は無事？ 不良グループの一員になつたのである。学校に行くと言つて家を出ては喫茶店で皆と落合、映画やダンスに通つた。ミスズの金遣いは荒かつた。このことが又、彼女のこのグループの中での地位を確固たるものにした。ミスズが高校二年の初めのものである。K子が山の手にある高校の女生徒と喧嘩し三、四人に袋叩きにされたことがあつた。ハイヒールで顔を殴られ腫れ上つた顔を見せてこの模様を語つた時、ミスズは自分一人で話をつけて来ると云つて立上つた。次の日、どうしても一緒に行くと言つて聞かない一年生のS子連れて、女親分気取りで彼女は相手の学校に乘込み、呼び出した四人を相手に立廻りを演じた。結果は兎に角、このことによってミスズはグループのリーダー格に一躍昇進してしまつたのである。その後、彼女はK子を通じて多くの男の友達を持つた。街の不良がミスズの姿態を放つておく訳がなかつた。遊び方が派手になると段々と小遣に困り出し、その上、両親も無闇にお金を渡さなくなつたので、ますます苦しくなつて来た。高校二年の夏休みのときである。彼女はK子に相談した。K子はもう学校を止めてアルサロの女給になつていたが、ミスズから相談されたK子は二、三日経ってからミスズにある提案をした。この事件によって、ミスズは学校を中退してしまつたのである。

ミスズから相談を受けたK子は二、三日後ミスズと逢つた時、こう切り出した。

「あんた、本当にお金欲しいの？ 本当にその気なら良い計画があるんだけどナ……」

「計画って何よ。いくら位、儲かる話サ？ 本当に欲しいんだ……」

「あんたんち、お金随分あるんだろ。それなのにあんたが使えないなんて少し変に思わない？……」

「それはそうだけど……」

「そこで私達の計画なんだけど、あんたがうまくやりさえすれば絶対に大丈夫の話なんだ。あんたんちのお金をあんたが使うんだからそう悪いことではないと思ふんだけどな」

「何よ、その計画って？」

「簡単よ。あんたんち、強盗に入るのよ」

「ええ！ 強盗？」

それからK子が話した計画とは、次の様なものであつた。

K子が付合っている男三人に、この後を頼むことにし、ミスズの家がなるべく手すきになつた日時を狙う。ミスズがなるべく出鱈目な申立をする……。

「強盗に入るって、そう簡単にお金取れるかなあー、私も家にいるんでしょ？」

「可愛想だけど、新聞に出てゐる様に家の人縛られちゃうことになるよ」

「あたしも縛られるの？」



「あんただけ自由だったら、すぐバレちゃうじゃないか。あんたが一番強く縛られるのが一番いいんだ」

「縛られるって痛いんだろうナ。それに妹が可愛想よ」

「そんな情はこれの際、禁物々々」

K子はこの話を聞いた時ミスズは、それが別に大した悪いことではない様に思えた。他人の金を奪ってくるのではなく、自分の家の金を自分を使うんだ。妹の美智子まで怖い思いをさせるようで可愛想な気がしたが、何分お金が欲しかった。お金を沢山持って海や

山に行きたかった。洋服も二、三枚作りたかったし、グループの者に派手におごってやりたかった。

「余りひどいことしないでよ。それに家のこれ（と云って、ミスズは拇指を出してみせた）が居ると、腕自慢だから……」

「だから、あんたに成るべくそういうのが居ない日知らせて貰うんだよ。詳しい打合せは明日、私のお店でやることにするから、あんたも来なくちや駄目よ」

K子とミスズとK子の仲間である三人の男が、その翌日K子の勤めているアルサロに集

った。三人の男はまだ十七、八の少年であつたが身体だけは大きかった。ミスズはK子に男達を紹介されると自分から「宜しく」と挨拶した。それからミスズはK子に云われる前に自分の家の地図を書き、家の内部の各部屋の略図も書いた。

「下の八畳におヤジとおフクロが寝ていてその隣の六畳に使用人、二階の六畳にあんた達姉妹が寝ているって訳ね」

K子がミスズの書いた地図を見ながら、こう云った。

「そうよ。門は錠をかけてしめてあるけど縁側は暑いから、明けっ放しよ」

「何んだ簡単じゃあねえか。でも騒がれるとヤバイな。大丈夫だろうな。直ぐパクられるの厭だぜ」

「何言ってるの！ だらしがないわね。あたいが手口を教えるからすぐ聞きなよ」

K子にこう云われて、三人の男は妙に神妙になった。ミスズは可笑しかった。なんだか他人事のような気さえして来た。

「ねえ、いい？ 門や塀を登ったりすると眼につきやすいから、木戸から入るのよ。木戸は、どおせ閉まっているだろうけど、ミスズにその時刻にこっそり開けて貰う。ミスズは忍ん

だ後、又こっそり閉めてくれれば分らないでしよ。それからすぐ勝手口に廻り庖丁を持ち出してから上るのよ。そうそう、あんた達、顔を見られない様に何かで覆面しておいて頂戴。それから、なるべく一人ずつ脅すんだよ。余り大きな声で脅すと皆一ぺんに起きてマズイからね。それから縛るんだけど、縛る前に必ず眼かくしをすること。これが大切だよ。手や足の括り方はあんた達にまかせるけど、よく新聞にある様に逃げた後、直ぐ解かれる様なことのないように、一寸可愛想でも堅く縛らせて貰うんだ。口も何んでもいいから絶対に声を立てられないようにしてしまおう方がいい。……お金だけ奪ったらすぐ逃げて来ること。ミスズも縛られることになるんだけれど、いいね、ミスズ……」

K子は、ミスズの方に眼をやった。

「しようがないわ——」

うんと、仕方なし頭を下げた。

「あんただけ他の人と違う様に縛ったりすると、変に思われるから、むしろあんたを一番ひどく縛ることにするわよ。ただ眼かくしだけは幾分ゆるくしておくから、あんたはあたい達が逃げたら、畳にでもこすりつけてそれはずの、それからあんたも朝まで動けないと困るから、足の縄の結び目をあんたの手で解ける様にしておいてあげる。だからあんたは足を解いたら頃合を見はからって、隣の人

でもどこでも知らせるのよ。その後が大切なんだからよく聞いて。ポリが来たらあんたはこう云うの。眼かくしがはずれた時みたら男達は何人で、こんな背恰好で、こんな洋服を着て、この位の年の男だった……ってね。勿論、全然反対の出鱈目のことを云うのよ、そうすれば分りつこないわよ。いい考えだロ……」

皆、黙ってうなずいた。K子の案に賛成したのである。

「オレ、縛り方知らないぜ。そんなに素速く出来るかなあ……」

一人の男がこう云ったのが、何かユーモラスに聞えた。

「何んでもいいから動けなくしてしまえばいいのさ。縄を少し余分に持ってゆくか、ミスズに用意して貰うのよ」

「家は下駄屋だから麻紐が沢山あるわ。でもあれで縛られちゃ、痛くってしようがないわ」

「下駄の鼻緒にする縄なら丈夫で切れない様に出来ているんだから丁度いいね。縛り方が分らなければ私がモデルになるから練習しておきな」

K子はこう云うと、男達を完全に圧倒してしまった。ミスズなど現状では及びもつかない毒婦ぶりであった。

それから二、三回打合せの為に五人は会合

した。初めは一緒に行動しないはずだったK子も、自ら陣頭指揮に乗出すことになった。この様なことになる、男よりも女の方が惨酷になる。K子の眼は、ますますするどく冴えていった。その眼を見てみると、さすがのミスズでも恐ろしくなったが、もうすでに遅かった。K子のことだから、自分の身体を実験台にして少年たちに緊縛方法を教えたかも知れない。少年達もK子の両の眼の光りに圧倒されたのか、K子の背後にある何者かに強い力に縛り付けられている様子だった。

やがて、その日が来た。その日はミスズの家は女手ばかりだった。父が使用人の一人をつれて関西方面に取引の関係で出掛け、もう一人の男の使用人は病気で休んでいた。後は母親と妹の美智子と住込みの女中二人だけであつた。その前日、このことをK子に知らせ、押入る時刻や手はずを定めて七時頃、帰宅したミスズは妙に興奮していた。いくら不良じみたことを今日までして来たとは云え、強盗を家に手引きする様な大それたことは初めてだった。真夏の蒸暑い夜であつた。寝苦しさは皆風呂から上ると、表に縁台を出して涼んでいた。妹の美智子だけが二階の部屋で何か本を読んでいるのか、下には降りて来なかった。十時、十一時と経つにつれて、ミスズは焦って来た。K子達との約束は一時である。あと二時間しかない。それまでに皆寝入って



しまわなければ万事旨くゆかなくなる。縁台にはまだ母と女中二人が坐っているのが見えた。母はまだ三十七才だったと思う。色白のふっくらとした、子供のミスズとしても誇らしい程の美貌だった。ゆかたの襟をぐっと後ろに抜いた姿態は、妙に艶めかしい。母に似れば自分ももっと美人であった筈なのに、ミスズは今更ながら思った。ミスズのがっちりとした体軀は父親似であったし、妹の美智子が母親そっくりの身体つきをしていた。女中は二人居たが、一人は二十三才で春江と云い、頭の良い真面目な良く働く娘だった。肉付きの良い顔は十人並であったが眼が大きく、はつきりしていた。物腰も柔らかくどんなお客にも好かれ、ミスズの家でも店員以上に大事に可愛がっていた。もう一人は貴美



子と云ったが、この娘は昨年雇ったばかりで年もまだ十七才だった。仲々元気が良くいつも流行歌を唄ってはふざけていたが、一寸美空ひばりに似ていた。自分でもそれを意識しているのか、ひばりのフアンであり、口ずさむ歌もひばりの歌が大半だった。

十二時が近付いた頃、母と女中二人はやっと縁台を離れ家の中に入っていた。ミスズはそれを見届けると、そっと裏庭へ下り木戸に掛っている錠を開けてから二階の自分の部屋にかえった。さすがのミスズでもいささか興奮してしまっていたが、又そのスリルが何とも云えない快感とな

って胸をゆさぶる様に思えた。あと一時間、一時間後に我が家に強盗が押入る。母も妹も二人の女中もそれを知らない。ただ困ったことに、妹の美智子がまだ机に向って何か本を読んでいることだった。温和しそうでいってなかなか気性の勝った娘なので、起きている中にK子達が入って来た場合、どうなるか不安だった。

「ミッちゃん、もう寝たら？ 明日早いのでしょ。」

真夏のことなので、ブラジャーと短いパンティだけというあられ



もない状態で床の上に転がったミスズは、こう云って美智子を早く寝かそうとしたが、美智子は夢中で読みふけているのか返事をしなかった。

「電気がついていっていると眠れないのよ！いい、消すわよ。」

追いうちをかけるようにこう云った時、はじめて美智子は本から眼を離し

「もう少しなのよ、お姉さん。お願いだからもう少し我慢して頂戴」

夕方、友達のところから帰って来てから、いつもの様にゆかたに着換えることもせず、高校の制服を着たままの美智子は、なおも本を閉じようとしなかった。十二時半にはなっただろう。あと三十分だ。ミスズは焦って来たが、余り強く云うのもかえって変な気がしたので、成る様にしかならないと思い黙っていた。その中に余り神経を使ったためか自分の方が眠くなって、知らず知らずの中にうとうととしてしまった。やがて多少疲れたか美智子が姉の方に眼をやると、もう軽い寝息を立てていたが、姉の枕もとに腰紐や小布れなどが必要以上に散らばっているのに気がついた。相変らずしようなないお姉さん。美智子は残り少なくなった頁を又一枚めくった。

浅い夢路の中でミスズは人の動く気配を感じ薄く眼を開いた。電燈の明るさがまぶしか

った。顔を風呂敷の様な布で覆い眼だけを出した三、四人の人影がミスズの眼に入ってきた。ここで彼女が昼間の約束を忘れていたら思わず声を上げただろう。人影がはつきりしてくるにつれて、それがK子達だということに気がついたミスズは、自分もこの芝居の中の重要な一員であることを思い出した。薄く眼を開けて横眼で見ながら寝ている振りをしていた。三人の男達が妹の美智子の両腕を掴んで蒲団の上に押えつけている。美智子はまだ洋服を着たままだった。本を読んでいる所に襲われたらしい。押えつけられた姿で必死に抵抗しているのが眼に入った。自分から見た種ではあるけれど、余りにも可愛想だった。すぐ終るんだから大人しくしていればいいのに……とミスズは思ったが、美智子にしてみれば必死であった。すぐそばにだらなく寝入っている姉に、早くこの急を告げなければならぬと考えているのであろう。大人しそうで気の強い美智子のことなので、ミスズも多少心配になった。やがて別の一人が無言で短刀の様なものを美智子の胸元につきつけた。ミスズにはそれがK子だということとが分った。K子も男ズボンを通り髪をハシチングでかくし、同じ様な覆面で顔をかくしていたが、ミスズには見慣れた身体つきであることで直ぐ分った。短刀を付きつけられた美智子は、さすがに怖しかったのか少し静

かになったところを、K子は素早く猿轡をはめた。邪慳に口をこじあけ布を突込み、唇の間を通して腰紐で縛った。半開きになった美智子の顔が苦しそうに眼に入った。背後に捻じ曲げられていた腕も組合わされ麻縄が喰い込んだ。ミスズには、その麻縄が店にある下駄の材料であることが分った。鼻緒にする麻紐は非常に丈夫なもので、それが固く捻じっている。良質のものならば一、二年も切れないうだろう。その麻縄で美智子は後手に厳しく縛られ、更に胸をぐるぐる巻きにされている。手に持っただけでも、いがいて痛いのに、手首を固く縛められ二の腕にぐっと喰い込む様に縛り上げられたのでは、耐え難い苦痛であろう。ミスズはなるべくあの麻縄で縛られたくなかった。自分で腰紐類を枕もとに置いたのである。ネッカチーフの様なもので眼隠しをされて、ぐったりと投げ出された美智子から離れたK子達は、ミスズの方に近づいた。

よく知った仲間であるとは云え、さて自分が縛られるのかと思うとミスズの身体は固くなった。男達は遠慮したのかミスズの身体に手を触れようとはしないので、K子が寝たふりをしてミスズを突ついた。覆面の中からは眼がきらきらと光っていた。

◎本誌百号突破記念『懸賞募集』原稿入選作品◎

# 白　い　玩　具

真　木　不　二　夫

## 1

私がケイコに誘われて、新橋にある「ロロン」という、妙な名前のジャズ喫茶へ行ったのは、八月の夏休みも半ばを越して、ヒマにあかせたバカ遊びにも、そろそろ興味を失った頃だった。山にも海にも遊び飽きて、都会育ちの私には、いくら暑くても、やはり都会のほうがよかったのだ。

実際、今年の夏は暑かった。ヒマはたくさんある。お金だって、もう少し位はパパからひきだせそうだ。

「——可愛らしい男がいるのよ、ロロン」に。ほんとね、町子が見つけたの。みどりもみてごらん。ちよっとイカスよ。青い眼が、へんに色っぽいの。みどり好みかも知れないよ」

と、ケイコは唇もとをニヤニヤさせながら云った。

「いやだよ。私、眼の青いのなンか、きらいだよ。キモチ悪いよ」と、私は答えたが、ケイコと町子が熱をあげている、その異国人の唄い手を、見てみたい気も、ないではなかった。

「ロロン」は、新橋の川ほとりの、小さなビルディングの地下にあった。

照明はぐんと暗い深緑色。装飾も、まあまあ凝っている。冷房装置がよくきいていた。まだ夕暮れだというのに、七分どおりの席が若い男女で埋っていた。

「ここへくる女の、まず八十パーセントが、デデをめあてね」と、ケイコが周囲を見まわした。

「そして、その女たちをモノにしようと思ってやってくるのが、殆

んどの男よ」

と、町子が皮肉な笑いをうかべて云った。

「私たちも、そのデデをめあての女の仲間というわけね」と、私がいった。

デデという混血児の歌手は、なるほど、美青年だった。

デデが歌っている間、客席の女たちから、声にならないどよめきが聞えた。

私は、ふんと、鼻でわらった。

こんな安っぽいエキゾチシズムに、私はだまされるものか。歌だって自己流で、時々音階が狂う。ジエスチユアもまずい。

ただ、不思議なアクセントの日本語が、私の心を惹いた。そして、ラストに、ごく短かいシヤンソンをデデが歌ったとき、私は、いいようなない刺戟を感じた。

……ふるさとはないから歌をうたうが

歌のなかにも故郷はない

海と空のあいだだけが

小さなおれのふるさと

風だけが知る

おれのふるさと……

なんともさびしい旋律であった。それは、ただ悲しいとかさびしいとかいう感じではなく、そのメロディと歌詞に、思わずひきこまれてしまうほどの雰囲気をもっていた。

私は、その時、直感的に、これはデデ自身の作詞作曲ではないかしら、と思ったのである。

ほかの客も、この歌に、しんと聞き惚れているようだった。

## 2

一週間ほどたつと、ケイコと町子と私は、もう「ロロン」の常連

になった。

「ロロン」では、町子が一番金を使った。町子のお父さんは、有名メーカーである明光電機の特務さんで、ママが去年死んでから、町子にはあまい。

——演奏が一区切りすると、バンドの人たちが私たちのテーブルに遊びにきた。町子はこのバンド・マスターと顔みしりである。

「ねエ、デデは本当にフラン人と日本人の混血児なの？」

と、町子はマスターにきいた。

「さア、自分じやそう云ってるけど、どうかなア……影のある男だ。用心しなさいよ」

と、マスターは、油光りのした頭をキザにふって、いやらしい眼で私の顔をみた。

私たちは、そのマスターを通して、デデを誘った。

町子の車に乗せて、彼を別のクラブやホールに連れていき、一緒に踊ったり、ビールを飲んだりした。

背がスラリと高く、色の白い美貌の混血児は、誰の眼にも、よく目立った。

私たちは得意だった。周囲の眼に、嫉妬と羨望がある。

私は、空虚な退屈感を、これで忘れられそうだった。

私たちは、デデを連れて夜の都会を遊び呆けた。踊り疲れ、しゃべり疲れ、笑い疲れた私は、真夜中、一時を過ぎてから、町子の車に送られて、家に戻る。

足音を忍ばせて廊下を渡り、そっと自分の部屋に戻る時、遠く母の部屋から苦しそうな咳が聞える。私の胸が、さすがにチクリと痛む。母はこの三、四年、重い結核で寝たきりだ。父は外に愛人が居て、月に一、二度しか家に帰らない。私が母を慰さめねばならないのだ。

だが、私の心は荒涼として、その気になれない。私は、大人でも



ない少女でもない中途の年令に、何故かイライラした日が続き、漠然とした不安が、胸の底にわだかまっているのだ。私のデタラメな遊びは、その反動だ。冒険を期待する。恐怖を体験してみたい。

「――町子、私、考えたの。デデをね、今夜私のアパートに連れてこない？」

と、ケイコが悪戯っぽい眼で、町子にささいた。

「おもしろいね」

と、私がそばからいった。

ナイト・クラブや、バーめぐりは、そろそろ飽きがきていた。デデは、私たちの人形みたいなものだった。誘われれば黙ってついてくるし、お酒を飲ませれば、素直に何杯でも飲んだ。酒は強いらしく、いくら飲んでもくずれなかった。しかも、デデは、私たちに異性としての反応を示さないのである。

その西洋人のボーカルフエイスめいたところが、私にはおもしろかったのだけれど、町子にはモノ足りなかったらしい。

町子は、デデに積極的だった。

「――あいつ、不感性なんだよ、きっと」

と、町子が口惜しがった。彼女はデデと別れる時、いつも幾らかの小遣いを渡しているのだ。それほどデデに入れあげていた。

「デデは私たちを相手にしていないんだ」

町子は唇を噛んだ。

「そこが、いいじゃないの。私たちのグループの一人だけが、彼と関係ついちゃったら、あとの二人はつまらないもの。いまのままでちようどいいのよ」

と、ケイコが云った。

「ニヒルぶってるんだよ、あいつ。生意気なんだよ。混血のくせに」

私が云った。勝気な町子は、口惜しげに爪を噛んだ。



だから、ケイコの提案の、彼をケイコの部屋に連れてくるというのは、私たちのこの遊びに、何か新発展があるような気がした。断っておくが、私たちはズベ公ではない。日本の法律を、きちんと守っている。

私たちは温泉マークや、怪しげな旅館に出入りしたことは一度もない。不潔だからだ。汚らしい。

ケイコは、群馬県の大きな材木問屋の娘で一人でアパート暮らしをして学校にかよっていた。家から生活費と学費が豊かに送られてくるので、山の手の高級アパートに何一つ不足のない生活である。

学校の友人たちは、私たちのことを高級不良少女と呼ぶ。たしかに、私たちは現在の学生たちの中では、おそらくハイクラスに属する特権階級かもしれない。だけど、それが一体なんだというのだ。ただ、アソブ金があるということ、それだけではないか。あとは何もない。他人が羨やむほどのことではないのである。

## 3

午後十一時半。町子の車が、ケイコのアパートに横づけされた。

鉄筋コンクリートの四階建て。その三階の北の端がケイコの部屋。六畳に四畳半の二間続き。ドアをしめてしまえば、あとは部屋の中で、どんな乱痴気騒ぎをしようとも、近所隣りへは聞えない。

深夜の酒宴がはじまる。罐詰にウイスキーに、チーズにソーセージに、果物に……抱えきれないほどの飲食品を買ってきたのだ。

デデは、長い脚をキュウクツそうに折りまげて畳に坐った。

私は、その姿をみた時、ふと、デデが哀れになった。黙って私たちのオモチャになっているのも、やはり彼の生活のためなのである。青い眼が、心なしかウツロだった。

私たちとつきあっていれば、帰りには「ロロン」で歌う三日分位の金は、町子からもらえるのだ。「男を買う女」「女に飼われる

男」——私は吐き気がした。

この混血の歌手には、タレントとしての自分を、積極的に芸能界に売り込む処世術はないらしかった。去勢されたように、氣力のない男だった。

「さあ、デデ。お飲みよ。ここなら、いくら酔いつぶれたって大丈夫だからね。今夜は四人で雑魚寝しよう。ねえ町子、いいだろう？ デデの隣りに町子を寝かせてやるよ」

ケイコはもう大分酔っていた。町子も私も酔っていた。

飲んではいても、いつも変わらないのが、デデだった。それがニヒルにもみえ、ふてぶてしくもみえ、私たちをバカにしているふうにもみえた。

「デデ。キミはおもしろくないのかい。いつもそんなポーカークフェイスでさ」

町子が彼の顔の前に、ウイスキーの入ったグラスをつきつけた。

「ぼくはもう飲めません……」

と、デデは、酔っている町子をなだめるように笑顔で云った。

「飲みなさいよ、飲めたら……」

なおも執拗に町子は、グラスをデデの顔に押しつけた。それを避けたはずみに、グラスが傾いて、ウイスキーが町子の膝に、さっとこぼれた。

「デデ！」

と、叫んだかと思うと、グラスがデデの頬にとんだ。

「あんまりバカにしないでよ、ハーフのくせに、生意気だよ」

いきなり、町子の掌がデデの横頬にピシリと鳴った。デデがそれを避けて町子の手をつかんだ。

「いたい！ 何するのさ！ ひとの手なんか握って！」

町子は大げさに顔をしかめると、立ち上ってその手をふりほどいた。

「生意気だ、やっちやえ！やっちやえ！」

と、ケイコも立ち上った。

「よしなよ。うるさいな」

と私が云った。

「みどり、あんたはそこで見ていな。いま、ケイコと二人で、こいつにヤキをいれてやるんだ」

ヤキ、だなんて、そんなヤクザの言葉を、いつ覚えたのかは知らないが、酔った勢いで町子はデデにむしやぶりついた。

「やめて下さい、町子さん」

デデは逃げた。デデの頬に町子の口紅がついた。

ケイコがデデの長い脚にしがみついた。デデはそれをひきずってドアの方に逃げる。

ドアには鍵がかかっていたあかなかった。

「逃げないように、手と足を縛っちゃえ！」

町子がわめいた。

「よしきた」

と、ケイコは調子づいて、ベビードダンスから、手当り次第に紐を取りだした。

「ゆるして下さい。ぼくはもう帰ります」

デデが頭をペコペコさげた。酔った町子とケイコの耳に、そんな言葉はいらない。

「みどりさん。助けて下さい」

デデは私の膝に手をかけて哀願した。

「知らないよ、デデ。まあ、されるようにされたほうがいいよ。何しろ、相手は酔っぱらいだからね」

私は冷くつっぱなした。私はデデがこのへんで本当に怒って、男らしく町子の頬っぺたでも一ツ、パンとなぐったら、どんなにおもしろいだろうと考えていた。

しかし、デデはやはりおとなしなかった。酔っぱらいの女なんか本気に相手ができない、というふうにもみえた。私はそれがシヤクだった。

「かまわないから縛りあげて、悲鳴をあげさせてやりなよ」

私は二人にけしかけた。

「ようし」

町子は勢いついて、自分の身体ごとデデを押し倒した。スカートがまくれ、シユミーズがはだけ、白いももがあらわになった。

酔い疲れている町子は、恥しいと思う余裕もなく、力まかせにデデを組み伏せた。デデの抵抗は弱かった。するようにするがいい、仕様のないお嬢さんたちだ。そんなあきらめが、デデの青い眼にみえた。苦笑が洩れた。

## 4

デデの背中にまたがった町子は、ケイコから紐を受けると、デデの腕を背中にねじりあげた。両手首を背中で合せて、ギリギリと縛った。余った紐で、男の胸から背中を、グルグル巻きに縛った。

もうデデは動かなかった。白い額に茶色の髪が垂れ下り、あきらめて眼をつぶっている顔は、ぞっとするほど美しかった。

町子は、細い皮のバンドを手を持った。それを思いきりふりかぶると、ピシリ！と男の背中を打った。

「アアッ」

デデがうめいた。私は眼をそむけた。女とはいえ、一六三センチ、五十七キロのポリウムをもつ町子の腕力は相当なものである。ピシリッ、ピシリッと、皮のバンドはデデの肩や背中に鳴った。

「私のいうことをきかなかった罰だよ。お仕置だよ」

町子の片足が、デデの襟首を踏まえた。力を入れてギユウギユウと踏みにじった。混血の美青年は、イモ虫のようにうめき、ころが

った。

白色の肌をもつ青年を鞭うつ、黄褐色の女王——私の胸にこの異様な光景が、倒錯した快感となつてうずいた。

「ケイコ、あんたも打つてごらん。男を打つなんて、案外キモチのいいもんだよ」

「白人奴隷とは、ちよっとハイクラスだね、ケイコは町子から細身の皮バンドを受けとると、気取ったポーズでそれをしごいた。

ピシリ！

バンドは大きく男の肩を打った。

「うおっ！」

と、デデは吠えた。ケイコの姿は、映画でみる外国のサーカスの猛獣使いをホウフツさせた。鞭の下で吠える白い獣、デデ…。ケイコはストッキングをするすると脱ぐと白い足さきを、デデの目の前につきだした。

「デデ、これをおなめ！」

デデは、横をむいた。それがケイコの心を荒立たせた。デデの顔の上に、白い足の裏がムズと踏まえた。高い鼻が、むざんにつぶれた。

「ア、ア、ア……」

デデの悲鳴。哀願の眼でケイコを見あげ、ゆるしてくれと身もたえる。

「私は色が白くて、足の形のいいのが自慢なんだよ。さア、足をお



なめ。指の間をお前の舌で掃除しておくれ」

デデは口をあけて、女の白い指先をくわえた。ピチャピチャと音をたててなめた。ノドが、犬のように鳴った。

「ハハハ……さすがのハンサム・ボーイも、まるで犬ね、犬そっく

りね」

町子は顔を天井にむけて、高笑いした。

「やい、犬。白犬。私の喰べ残したハムをたべな」

町子は、自分の口の中で、クチャクチャに噛んだハムを、デデの鼻さきに手づかみでつきつけた。

「いやです。汚ない」

デデは顔をそむけた。

「なに！汚ない？　犬のくせに汚ないなんて！　犬は喜んでたべるのよ。さもないと、またムチがいくよ！」

町子は、デデの鼻をつまんで無理やりに口をあかせた。唾液でクチャクチャになったハムを、白犬の口の中に押しこんだ。

デデは、眼をつぶって、それをたべ、飲みこんだ。

町子とケイコは、それを見て、キヤアキヤと笑った。

「犬が終ったら、こんどは馬にしようよ」

と、ケイコが新しい提案をした。

「こいつの背中に乗って、部屋の中を走りまわるんだ。おもしろいよ」

「うん、おもしろそうだ」

町子は、すぐに賛成した。

デデを縛った縄が解かれた。その紐が、こんどは男の首に巻きついた。手綱のつもりなのだ。

「ゆるして下さい。もう帰して下さい」

デデが泣きだしそうな顔で訴えた。

「さ、四ツん這いになるのよ」

「馬になるのよ」

強引な命令。仕方なくデデは手と膝を床についた。

まず町子がその上に乗った。酔っているので、頭がぐらぐらして落馬しそうになった。

「町子、しっかり！」

ケイコが叫んだ。

町子はまた皮バンドを振りあげて、デデの尻をピシリ！　とうつた。

「走れ！」

馬は鞭をくらって動きだした。五十七キロの豊満な女体に乗せては走れるものでない。

手と膝で重量を支え、ノロノロと走った。

「もっと早く！」

町子のスカートはまくれ、ふとい腿で馬の背と腹をしめつけ、ムチをふった。

「とまれ！」

デデの首に巻きつけた紐を、ぐいと馬上からひくと、デデは咽喉をしめられ、苦しげに舌をだして、ハアハアと激しい息をついた。

なるほど、その姿は、まったく馬だった。

「待って。私も乗せて！」

ケイコが叫んだ。一人の男の背に、二人の女騎手が乗る。ケイコだって五十三キロほどのグラマーだ。いくら男のデデだって、成熟した二人の女を乗せて動けるほどの馬力はない。合せて百十キロの肉体である。

まして、さっきからの虐待に疲れている。だが、ケイコは遠慮なく町子のうしろから、またがった。

「ううむ……」

デデは、いくじなくヘタヘタとつぶれた。

「どうしたの！　しっかりしなさい！」

ピシリ！　と、また皮の鞭がデデの尻に鳴った。

デデは、最後の力をこめて、二人をじりじりと持ちあげる。だが、二、三歩いっただけで、すぐにまた、がくりと腕を折ってつぶ



れた。はずみに、二人の女騎手は、馬上から転げ落ちた。

「まあ！　いくじなし！」

町子が歯ざしりした。

デデは横になったまま、ハアハアと荒い息をついていた。額からはびっしりと汗が流れている。

「いいことがある。——競馬の馬は、元気をつけるためにビールを飲ませるんだってさ」

と、ふいに町子が眼を輝やかせた。

「この部屋にビールなんかないよ」

ケイコが云った。

「私のビールを飲ませるんだよ」

町子が、得意げに片眼をつぶった。

「ビール？　なんのことだい？」

ケイコは不審げな顔だ。私にもその意味はわからなかった。

「ま、私にまかせてよ」

町子は、パインナップルの空罐を手に持って、またウインクした。

そして、ドアをあけて出ていった。

「アッハッハッハッハ……」

ビールの意味をさとして、カン高い声で、ケイコが笑った。

町子が帰ってきた。

パインナップルの空罐は底が深い。それになみなみと液体が注がれてあった。

「さア、飲め」

倒れてあえいでいる馬の鼻さきへ、その空罐を持っていた。ちよっと匂いをかき、馬は顔をそむけた。

「口をつけるんだよ」

町子は、ぐいといつきつけた。

デデは顔をしかめて、首をふった。

町子が、カッと怒った。

「ケイコ、みどり。こいつをおさえて、口をあかせておくれ」

私もこの見世物は、おもしろいと思った。

ケイコと私は、デデの頭をおさえ、鼻をつまみ、無理に口をあかせた。

デデの口の中に、ザブザブと液体が注がれた。かすかに色のついたビールは、たちまちデデの口に満ちて溢れた。

こぼれて、私の手にも液体がかかった。

デデの口も鼻も、顔じゅうがビールで濡れた。

「さア、飲め、飲め、飲むんだよ！」

デデはむせんだ。しかし、デデの咽喉仏がゴクゴクとうごいて、ビールが飲み下されていくのを、私はみた。

私の胸に、不思議な快感がうずいた。一人の男を完全にジュウリョンした喜びだった。この思いは、町子やケイコのほうが、二倍も三倍も強烈だったに違いない。

それから、私たちは、デデをオモチャにして、一晩中をタチのよくない悪戯で苛めてすごした。

デデは私たちにとって、大きな白い玩具だった。

私たちが疲れて眠ったのは、もうあけがたで、窓が白々と明るくなっていく頃だった。

朝の十時頃、一度眼がさめたが、もうデデの姿はみえなかった。ドアの鍵をどこからか探だし、逃げだしていったのだ。

町子とケイコは、胸をはだけ、シユミーズのまくれあがった太い腿をさらけだして、泥のように眠りこけていた。飲み散らかし、食べ散らかした瓶や罐が、汚らしく転がっている。

私は二日酔いで、頭がガンガン痛かった。

それから十日程たった或る朝のことだ。

私はベッドの中で配達されたばかりの新聞を読んでいた。

三面をひらいて、上から下へ眼を流した時、思わずハッとした。

左下の隅に、デデの顔写真が、小さくでているのだ。まぎれもな

く、あの美青年デデの写真である。

私は、あわてて見出しを読んだ。——三人組強盗、首謀はジャ

ズ喫茶の歌手で、混血の青年……

胸をおののかせて、私は記事を読んだ。

——デデは強盗の常習犯、過去十数件の犯行を自供……

——うわべは歌手になりすまし、一皮むけば、したたかな強盗常習

犯……

私は、ゾッとした。

あのデデが、あの、去勢されたような気弱な混血の青年が……

私の胸の中に、大きな疑惑が、くろくろと湧いた。

——そんな兇悪な人間が、なぜ、あんなにおとなしく、私たちの玩

具になっていたのだろうか……私たちが執拗に彼をいじめた、あの

アパートの夜だって、この記事内容からいけば、兇悪残忍な彼に、

私たちは簡単に殺されていたかも知れぬ。

デデは、私たちにあんなひどい目にあわされて、何故怒らなかつ

たのであろうか。

私には、わからなかった。

この新聞記事が、ウソのように思えた。

私は、ベッドの中で考え続けた。

——デデは、何故、黙って、私たちの玩具になっていたのだろうか……？

いつもデデが歌っていた「おれのふるさと」という歌を、私は思  
いだしていた……。

# 臨時増刊号「責小説特集号」大好評！

（表紙色刷、本文中質紙使用）

定価一部二百円

☆ニセ物まで出現した傑作集です

☆昭和二十七年年度発行の本誌好評作品の中より選り出した力作集

残部僅少に付早くお申込下さい。

## 巻頭口絵

### 拷問

滝れい子画

吸血女流画家

岡田 咲子

### ある奇術師の恋

北原純子画

ある奇術師の恋

吉丘 垣根

### 鬼兵衛刺青異譚

滝れい子画

遊女葦水の最期

片矢 薫

### 遊女葦水の最期

北原純子画

囚衣

古川 裕子

### 縛られた妻

滝れい子画

悪魔と口紅

桂 牧次郎

### 読切傑作責小説

滝れい子画

悪女

岡田 咲子

### 拷問

片矢 薫

廊の灯影

片矢 薫

### 賭博

二俣志津子

MとS

岡田 咲子

### 巫女屋敷の責絵巻

岡田 咲子

責苦

竹谷 十三

### 老いらくの恋異聞

榛ノ木参一

記録係

岡田 咲子

### 復讐のドラマ

片矢 薫

赤に憑かれた男

上村秀久雄

### 鬼兵衛刺青異譚

二俣志津子

昇華すべし、という言葉がある。例えば、一人の変質者が女のスカートや尻を斬り、捕まったとする。変態性慾者の名のもとに彼はそのまま獄につながれる。彼には一言の弁解をする権利もなく、ただ指弾される義務を負うのみで葬りさられる。至極当然な話である。ところが彼に同情者があらわれた。女の尻を斬りたいという慾望は分らぬでもない。しかし、それをそのまま実行することがよくない。気持は分るが、それを生のまま発散させるんでなくって例えば本を読むとか、その気持を文章に書きつづるとか、作品化するところによって昇華すべし、というのである。これも又至極もつともな忠告である。

私はこの忠告にしたがって我が身のことを省りみてみた。たしかに私の場合にもそれがあてはまって考えられる節があるからである。私が最も果敢で実行的马ゾヒストであった時から比べれば現在は大分穩健なるマゾヒストに変化している、という風に言うことが出来よう。いつの頃からかそれは私が私のマゾヒズムを文章にそのままうつし始めた頃からだ。これを外部から判断するとき、私は自分の気持を文章化することによってマゾヒズムを昇華したのだ、という工合に思われ、又そう説明出来るのである。ところが事實はどうであろうか。昇華とは多分に意志的なものである。意志力によって在来の己を乗りこえ

ることである。文章や絵を書いたり、あるいは見たり読んだりすることによって気分の変換をはかりながら、遂に己を超えるにいたるその一瞬一瞬の超克の断層を指しているのである。

私の場合、果してどうなのか。私の内部にそうした一瞬一瞬の断層の形式がなされたのか、そうではないのだ。私は現在の私を、私の意志によって自由に選びとったのではない。私は任意に選ばれたる私にしかすぎない。なんにもキツカケはなかったし昇華なる行為なぞ更に行われ得なかったのである。私は従前より、ずっと分別くさいマゾヒストになれたのではあるが、これは昇華ではない。



## マゾヒズムへのいざない

(十五回)

### 附「告白の2」

黒田史朗

流れにしかすぎない。私はあまりにも過激なるマゾヒズムに関してのいきさつを見聞するとき、そんなことでは自分をほろぼしてしまっただけだ。文章を書いたり読んだりすることによって、その気持を昇華しなさい」という風に説教することが出来ない。そのときの昇華という言葉の無責任な遊びじみた気分なぞに、全く縁のない人が実はマゾヒストと呼ばれる人達なのである。

お前は何故女の足指を吸いたいか。何故彼女の不潔なものを口にしたいか。何故ならばそこに彼女の美しき足指があり、そして彼女の不潔なものがあるからだ。遂に、そうせざるを得ないのだ。これがマゾヒストの言葉である。

女の尻を斬る痴漢の記事に人々は興味を持つ。いろんな興味の持ち方がそこにはあるだろう。一つ、俺もやってみるか、しかし……あるいはこう思う。もっとうまくやったりや、つかまることアねえだろう。あるいはこう思う。何故女の尻を斬りたいのか、さっぱり分らん。あるいはこう思う。その娘さんはさぞ恥かしい思いをしたことだろう。これを機に、痴漢対策をもっと根本的にたて直してもらわなきゃ。あるいはこう思う。政府が悪いんだ。教育が悪いんだ。道徳教育に反対する日教組が悪いんだ。あるいはシタリ顔でこう思う。女の尻を斬りたい気持はよく分る。

分るけれども、その行為はやはりよくない。文章や絵を読んだり見たり、書いたりするところで、その気持を昇華することだ。

ところで当のその犯人はどうなのか。一人は訴えていた。ぼくの手がふるえる。てのひらに握りしめた剃刀、その薄っぺらな鵝の毛ほどもにも軽くあるべき一枚の刃が、どうしてこう重いのか。万貫の重みでもって、ぼくの手はくだけそうだ。

私はマゾヒズムに関して以外のことには全くの慾望をかんじない。したがって女の尻を斬りたいと思うことは一度だってあるわけではない。私は犯人の立場に立って感じることはとても出来ない。しかし、私は彼の云うところの剃刀の刃の重さを納得することが出来る。剃刀の刃の重みというものは、マゾヒズムにも充分に通じるのである。私は彼に一言の忠告も言い得ない私を感じるのだ。何故女の尻を斬るのか、何故ならば、女性がそこにおり、スカートの裾がひるがえっており、豊かな彼女の尻の筋肉があるからだ。遂に、遂に、斬らざるを得ないのだ。これこそ変質者の言である昇華、昇華という言葉の持つそれぞらしさの彼方に変質者が立っている。社会秩序の問題を超えて、そこに変質者が立っている。一体我々はどうすればよいのだ。これが問題に対しての根本態度であらねばならない。根本的な認識であらねばならない。教育

や説得なぞでは解決出来ない問題をほらみながら彼等は存在する。変質と呼び得る人間意識は陽の世界に対しての陰の世界の存在の如く、常態の世界、常態の心理に対応して、はじめから約束されたものなのだ。人類創成のときより約束されたものなのだ。遂に昇華出来ぬ業を背負わされたものなのだ。だからこそ常態でなく変態と言ひ得る。常態とは既にして変態をその内部に約束したものでありただそれを安易に疎外することが問題の解決とはなり得ないのである。

女の尻を斬ってはならない、ということは共同社会生活の場における約束の一つだ。(道徳といってもよいが、約束といった方がピッタリとくる)約束を犯す者があらわれることはお互の生活を不安にし、困難にさせる。当然そこには法が適用され、その男は罰せられる。しかし、考えたいことは、処罰という解決の仕方自体、これも又、一つの約束にしかすぎないということである。約束であり便法である。犯人は一定期間、刑務所に拘禁される。それ以上の犯人に対しての憎悪や復讐心は余計だ。正義観も過剰にすぎるとその為にかんじんの人間を見失う。真の悪徳行為というものは、往々にして正義の名のもとに行われる場合が多い。女の尻を斬った犯人を刑務所に拘禁することは、正義とか、憎悪とか、公德心とかいったものと、全くかわ



りがないのである。極めて冷徹な技術的操作の範囲を出ないものだ。昇華、昇華と、さかんに説教するのも見当外れだ。昇華出来得ぬ程に筋金に通っているからこそ変態なんだ。

私はいつか、江古田のある女子宿舎で事件をおこした。といっても大袈裟な痴漢さわざではない。そして私は決して痴漢ではない。私が二階建のブロック風のその家の前を通りかかって、立止まったのは、その場の雰囲気故だ。何処の、どんな学校の宿舎かしらないが、バイオリンとか、クラリネットの音がさかんにきこえ、ケースをかかえた女の子が出入りするところをみれば、音楽関係の学校あるいは私塾かもしれない。玄関の土間には、色どりはなやかな靴が七足も八足も脱ぎすてられており、玄関前のタタキの上には短パンツの娘が二人バケツを片手に掃除の最中であつた。私はその時、そのバケツの水を飲みたいと思った。大勢の娘がそれを見ていてくれたら、猶よいと思った。二人の娘は、一旦休憩すると箒とバケツをその場に裏手の方へ駆け去った。私はこわこわ近づいてゆき意を決して箒を握った。私は彼女達の小使であり、使丁であり、しもべであつた。この感じは悪くなかつた。私が這いつくばるようにして、そこらを掃ききよめていたって、別にそれは当然なこととし、娘達は私に掃除をさ

せながら、その周囲で愉快に談笑していねばならなかつた。

娘二人が引返してきたときの緊張は、大へんなものだったが、それが同時に私の感動でもあつた。彼女等は、そこに見なれぬ男が、自分達の掃除道具を手にして、掃いたり、水をまいたり、懸命に働いているのを認めたのである。どうこれを解釈したものか、全くびっくりしたにちがいない。彼女等の一人が奥へかけこんで、中年の女を一人ひっぱってきた。女はキラリと光る眼鏡の奥から、私を怪訝そうに、そしてこわごわに眺めていた。私は多くの娘達の視線を身体中に感じた。誰か一人でも、私にことの仔細を問いただしてくれば私は彼女達を直きに安心させ納得させてやったことだろう。口のききようでもって、これは無害な白痴であることがすぐに分つただろう。しかし私は、舞台に立つた初心者のようにのぼせていたので、自分の方から物を言う勇氣がどうしても湧いてこなかつた。私は行動でもって、私の立場を納得してもらふ必要があつた。私はみんなの視線の中でバケツの中の水を手ですくって飲んだ。軽いどよめきと失笑が周囲におこつた。しかし、私の熱演も、このとき既におそく、電話でもしてあつたのか。巡査が二人通りの方か

らやってきた。

私は無心をよそおい、掃除の手をゆるめなかつた。巡査も二人ながら、どう解釈してよいものかと、娘達にまじって、働く私の様子をじっと見守っていた。ところで、私の肩には手がかかり、私は素直に、全く無邪気に彼等にしたがつた。と、背後で一齊に、その人又よこしてね、掃除してもらうから、という娘達の叫びがあり、一度にドッと笑い声がおこつた。

江古田駅前の派出所で、私はトボケとおし、彼等も私のバカさ加減に辟易し、やっとな放免してもらふことが出来た。保護者に直接手渡したかったらしいが、私は一人で十分に帰ることが出来るし、巡査と一緒に帰れば、保護者からひどくおこられるから、一人でなければ絶対に帰らないとおしとおしたのである。にがい失敗談ではある。

巡査なぞに私の秘密が理解される筈がない。道徳や法律の基準で私の場合を押しはかっていたんでは、何も分りはしないのだ。彼等は、陽電氣だけが電氣のすべてだと思ひこんでる。人間の中の変態の部分を除くことと解決されると思つてゐる。先ず第一の先決事項は、常態者を問はず、心の中に剃刀の刃の重さを痛感するその能力だ。

## M・レポート

## 異色美人局

鬼山 絢策

十三回目の終戦記念日を迎えて、私は仲間  
の元海軍士官だった連中二人と池袋で一杯や  
るべく、お茶の水から地下鉄に乗った。  
車内で「シンニチ」という新聞を払げてみ  
てると、八月二十二日付の紙上に次の記事が  
目を引いた。

## 妻をオトリに美人局

## 金を捲きあげ殴打

洋服もズタズタに裂く

街娼とグレン隊の街で悪名をはせている東  
京豊島区池袋で、妻をオトリにして金を強  
奪、その上暴力を振うという悪質な美人局が  
発生した。

池袋署では七日夜、豊島区高松町一ノ一九  
無職、竹山実(二三)を脅迫現行犯、同人妻

静江(二二)を傷害器物破損現行犯で逮捕し  
た。

調べによると、静江は池袋駅東口附近の屋  
台店で働いているが、七日夜九時頃、ブラリ  
と立寄った練馬区北町一丁目三五、建築業  
小沢高市さん(四二)に

「パパのような人、大好きよ。今晚おつきあ  
いして下さい」

と甘い言葉と色仕掛けで、近くの池袋二丁  
目八八五、松喜旅館に連れ込み、太モモをチ  
ラつかせながら

「アパートの部屋代が払えなくて困ってるの  
よ。パパ、何とか援助して下さいさらない」

と、さも肉体を提供するが如くに見せかけ  
て、小沢さんから三千円を受取った。

お金を受取った静江は、トタンにがらっと  
態度を変えて

「どうもありがとう」

と立去ろうとしたので、小沢さんは

「それでは約束が違うじゃないか」

と女を掴えると

「おふざけでないよ。あたいパン助と違うん  
だから!」

と怒鳴り、矢庭に小沢さんに殴りかかっ  
た。このとき、屋台店から二人の後をつけて  
きた竹山が、二人の部屋に飛び込んできて  
「このエロ親父、オレの女房を、どうする気  
だ」

と脅し、さらに静江に向って

「こんな助平野郎には、ヤキを入れて目をさ  
ましてやれ」

とけしかけた。

静江は、恐怖と酔いで動けない小沢さんに  
対し、洋服がズタズタに破れるまで、殴る、  
蹴るの暴行を加え、悲鳴をあげて逃げ廻る小  
沢さんを玄関まで追っかけ、さらにオトシマ  
エとして千五百円を捲きあげて引き揚げよう  
としたが、あまりにもひどい女の暴力沙汰に  
びつくりした旅館側が、一一〇番に急報した  
ため、かけつけた警官に現行犯で逮捕された  
もの。

竹山夫婦は、池袋でも札つきの美人局で、  
金を持っている男が静江の屋台にくると、す  
ぐ色仕掛けで男を旅館に引張り込み、金を受取  
ってイザという間際に夫が乗込み「オレの女

房に手を出しやがって」と脅して金銭をまきあげるという悪質な手段を用いていた。

また静江は、金を要求する際には、売春法にひつかからないために、決して肉体を提供すると言ふようなことは言わなく、暗示的な態度で誘惑するという要心深さであつた。

池袋署土屋 取締りで追いつめられた暴力刑事課長談 団とパン助が、このような悪どい手段で金をまきあげているので、警察としても全力をあげて取締りに当っている。特に酔っているときにはつけ狙われるから、十分に注意して欲しい。

以上が記事の全文である。

これは私達M系の人々には、大きなショックを与える記事であつた。

第一に美人局の男の方が、単なる脅迫現行犯のみで、女の方が傷害器物破損現行犯であるところに非常に興味を感ずるのである。

この罪名によつても、男は直接カモの男に手を下さずに、睨みだけを利かして腕組みでもしていたに相違ない。

女の方はグレン隊の亭主という後楯に力を得て、自信たっぷりな暴力の限りを尽したに相違ない。

何しろ洋服がズタズタに裂ける程、打ったり蹴ったりしたというのだから、これは男性以上の暴力である。

器物破損というのは、襖なんか破いたの

かも知れない。或は湯呑茶碗とか土瓶で男の頭を殴つて割つてしまったかも知れない。

最初は、カモ氏の方も相手が女ではあるし相当抵抗して格闘になったかも知れないが、酔つて身体を自由を失っているし、女のヒモが現れるに至つて、完全に戦意を喪失したとみるべきであらう。

亭主の出現に、いよいよ氣を得た女の方はそれから本格的に、一方的に暴力を振つたものと思われる。

普通美人局のケースというのは、女の役割りは、色仕掛で金を巻上げるところまでで、これから強談判という幕に入るときは、消えてなくなるのが定石である。

それがこの事件では、最初から終りまで女が主役である。野球というなら完投勝利投手兼ホームラン打者というところで、男の方は監督程度の勤めしかしていない。

実際珍しいケースである。

これは、女にS的素質が多分にあることを証明している。

金銭だけが目的でなく、女は男を殴ること蹴ること、或は辱かしめることに金銭以上の興味を持っているのではないかと思えるのである。

この女性は、亭主の眼のまえで、カモの男に獸以下の行為を命令したかも知れない。

公表をはばかる屈辱的な種々のアブ的行為

を強行したかも知れない。

然も、カモ氏を玄関まで追いかけて行つてまた殴る蹴るの暴行を働いたことは、これを他人に見せて誇示する意図が含まれていることは推察にかたくない。

この種の行為を他人にまでみせるということとは、本人にとつて決して有利なことではない。然し昂奮している女には、そうした打算など考へている暇もなかったのではないか。

恐らくこの女性は、これと狙つた獲物の男性を自分一人で最初から終りまで翻弄し、脅迫し殴り蹴り、罵倒を浴せて金銭をまきあげその報酬として屈辱を与えるまでの一貫作業を、単独でやってみたいと思つていたのであらう。亭主は飽くまでも、非常事態の備へとして、いわば消火器的存在ぐらいにしか思つていないのかも知れない。

消火器！ たしかにこの亭主は消火器的な男だ。ふだんは壁の片隅に立てかけておかれているのが、極く稀な場合にだけ爆発したり消火？（或はこの場合、火に油を注ぐ役かも知れないが）の役を果せばよいのだ。

私の推理と連想は、空想にまで飛躍して、とめどなく続いた。

私にもう少し暇があつたら警察へ差入れでもして、本人に直接会つてみたいと思つていゝのだが、その出来ないのが残念である。

# 禪の男を探せ

榎村 奏

青木 審・画

## 発端

私立中学の図工科担任教師松木壮一が、あの異常な殺人事件の渦中に巻き込まれる原因となったのは、彼の一寸した記憶違いから、山道に迷ってしまったことだった。

五、六枚のスケッチをとって、松木が帰路についたのは、昼頃だったが、どこで道を間違えたものか、陽が傾き始めても見覚えのある村落へは出ず、反対に山はますます深くなるばかりだった。そうなっていると、蟬の声までが心細さを唆る。彼は何度目かに道端へ腰を下し、しようにことなく煙草をとりだした

が、すると、そのとき、近くでかん高い人声がした。どうも子供の声のようだ。彼は途端に立ち上ると、声のしたほうへ走った。人の姿は見付からなかったが、数軒の人家を発見すると、松木は一気に急勾配を駆け下りた。

山と山との間の僅かな盆地に在るその部落は、松木の全く見知らぬ村だった。もしかすると、方角を誤って、反対側へ山を一つ越してしまったのかもしれない。

彼は今更の如くウンザリしたが、部落の屋根々々は既に陽が弱り、早くも夕闇の中に沈もうとしている。

通りかかった村人らしい男に、松木は元氣

のない声で訊ねた。

「——道に迷っちゃったんですがね。この辺で泊めてくれるような家はありますか？」  
「そうだな——異人屋敷へおいでしてみたらどうです？」

「異人屋敷？ そんなものがあるのかね？」  
「へえ。あそこなら家も広いだし、泊めてくれるかもしれないです」

「異人屋敷っていうと、外国人でも住んでるのかい？」

「いいえ。住んどののは日本人ですだ」  
「そうか。じゃいつてみようか——」

「異人屋敷」と呼ばれるその家は、すぐに判



った。二階建の木造洋館だが、成程、殆どが藁葺きの山村の部落では、確かに異彩を放っている。

ベルを押すと、出て来たのは、黒っぽい着物に黄色い帯を締めた若い女である。痩せて背が高く、大きな眼と少年のように濃い眉がかなり個性的な感じを与えた。

来意を告げると、彼女は、

「一寸お待ちください」

と云って奥へ入ったが、待つ程もなく、今度はこの家の主人と思える男が現れた。

「それはそれは、さぞお困りでしょう。どうせ家は、姪と私の二人暮しですから、どうぞ御遠慮なく——。宜しければ、二、三日御滞在になってもかまいませんよ」

男は隔てのない笑顔を見せて、愛想よく松木を招き入れる。

松木はホッとしながらも、自分の厚かましさを多少うしろめたく思ったが、云われるままに上へあがった。

「何もおかまいなく」

と云ったが、湧いているのだからと風呂を勧めにくるし、風呂からあがると、食堂へ案内されて、相当贅沢な食事に上等の葡萄酒まで添えてふるまわれた。

「本当によく訪ねてくださった。こんな田舎に引っ込んでいると、都会の人が懐しいんですよ」

「異人屋敷」の主、波多野氏は、心から嬉しげに相好を崩して云うのだった。

「しかし、貴方のような方が、どうしてこんな処へ住まわれるようになったんです？」

「私もかつては都会で色々なことをしてきましたが、ヒョッとこんな処へ来る気になりました。二つ三つやっていた事業も棄てて引込んでしまいました。しかし、今だに後悔はしていないんですよ。私は元来変り者な人でしよう。もっとも、この千秋には可哀想なことをしたと思っていますがね」

言葉すくなく、ひっそりとフォークを動かしていた千秋は、このとき顔を上げると淋しげに微笑んだ。

「これも不幸せな娘でしてね。早く両親に死に別れ、その後は私が引き取って一緒に暮しています。私の処では良いこともありません」

## 鍵穴

松木は、改めて千秋を見たが、彼女は、食事が終るまでズッと俯向いたきりだった。

な物音を聞いたと思ったのだ。彼は、暫くそのままでジッと耳をすましていたが、とうとう我慢できなくなつて起きたしまった。人一倍好奇心の強い松木は、わけの判らない期待に、もう胸がワクワクしていた。

寝巻の前を合わせながら、忍び足で廊下に出た彼は、そこで又怪しい物音を聞いた。

松木が足を止めたのは、波多野氏の居間の前である。彼はさすがに一寸躊躇したが、思い切って扉の鍵穴に眼を当てた。

松木が最初に見たものは、男のうしろ姿だった。しかも、下半身だけしか見えないその男は、裸で、白い六尺褌を締めていた。松木は、当然、それを波多野氏だと思ったのだが、その男が動いて視野から消えると、丁度蔭になっていたもう一人の男が見え、それが波多野氏だった。

松木は、少からず驚き、愈々好奇心を深めた。波多野氏のほうは上半身だけが見え、というのは、彼は床に倒れているからで、やはり裸でいるらしい。

突然、パシッと鋭い音が響き「うッ」と苦悶の声をあげると、波多野氏の顔が歪んだ。

松木は思わず息を呑んだが、

「ああ、もっと打ってくれ。打って打って、打ちのめしてくれ……俺は、お前に打たれているときだけが幸福なんだ——！ サア、もっともっと打ってくれ」

喘ぎ喘ぎ云う波多野氏の声が耳に入ると、何となくニヤリとした。そうか、彼はマゾヒストだったのか。松木の心には漠然と肯くものがあつたが、相手が男であるのは意外だった。松木は、何とかして加虐者の男の顔を知りたいと思つて、色々にやってみたが、鍵穴の限られた視野では、思うようにいかなかった。そのうちに位置を変えたのか、波多野氏の姿も見えなくなり、ただ鞭の音と低い呻きが聞えるだけになった。

それでも尚去りかねて、松木は扉の外に佇んでいたが、フト気づくと少し離れた処に、千秋が立って遠慮がちに此方を見ていた。

松木は、教師にあるまじき行為を恥じて赤面したが、悪びれず千秋に近寄つた。

「軽蔑されても仕方ありません。理由はともあれ、他人の室を覗き見るのは、確かに卑しいことですから——」

「いいえ——それより、松木さん。私、心配なんです。貴方に、もしものことがあつたらと——」

断続して聞える鞭の音に、千秋は眉をひそめながら、蒼白な顔で松木を見上げた。

「それは、どういうことですか？」

「叔父は、もう貴方もお気づきのよう、普通の人間ではありません。貴方をあんなに快くお泊めしたのは、何かキツト魂胆があつてのことに違いないんです。今すぐにというわ

けにもいきませんけれど、明日になったらすぐに、災いのかからぬうちに、ここをお発ちになったほうがいいと思うんです」

「それは、勿論、僕にしたつて、永くお邪魔するつもりはありません。しかし、せっかく叔父様も引き止めてくださるんですし、それに、今夜のようなことがあると、どうもこの家を離れにくくなりましてね。ハハ、僕もどうやら変人の部類ですか」

「でも……」

「いけませんか？」

「いいえ、それは、いていただければ、私も嬉しいんですけれど——」

「ところで、叔父様と一緒にいる男はどういう人なんです？ この家の人ではないんでしょう？」

「ええ、でも、今では、この家の一員といったほうがいくらいなんです。と云うより、叔父が飼っていると言つたほうがいいかもしれません」

「飼う？——」

「あの男は、殆ど人間としての資格がないんです。復員姿でこの村に迷い込んで来たのを叔父が拾つたのですが、その頃既にあの男の脳は狂つていたんです。ポロポロの復員服を新しい衣類と着更えさせようとすると、頑強に拒んで暴れるので、そのまましておきましたら、二、三日して、今度は、自分から着

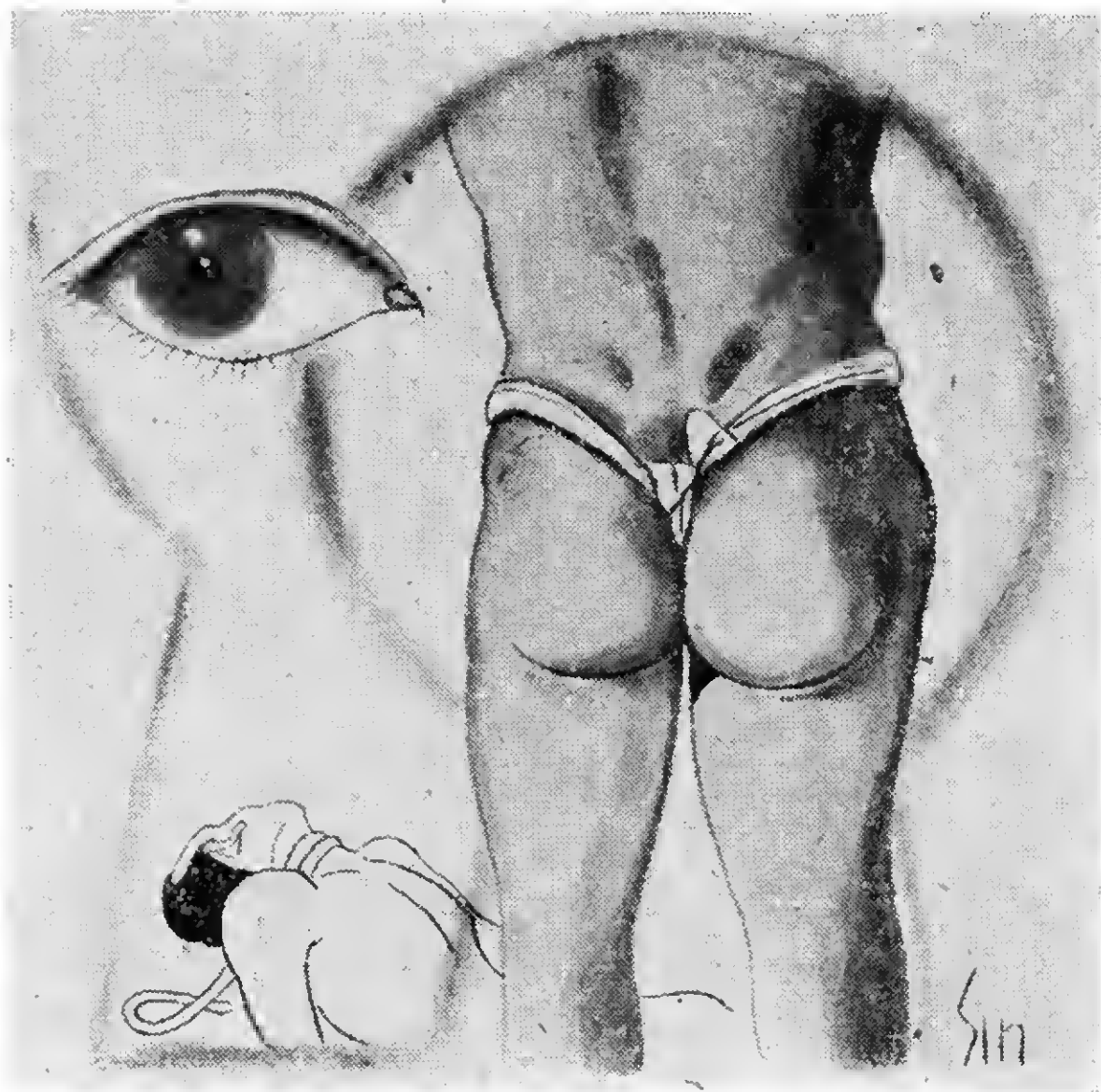
ているものを全部脱いでしまいました。そうになると、もう何を着せても駄目なんです。叔父が、試しに六尺禪をさせてみると、それだけは気に入つたらしく、何時でも締めていて絶対に離しません。でも他のものは決して着ないので外へ出すわけにはいかず、一室へ閉じ込めて食物を与えています。まるで飼っているのも同然ですわ。太郎は、あの男は上衣についていた名前が、かろうじて太郎とだけ読めたので、そう呼んでいるんですが、発狂しているといつても、他人の命令は何でもきくので、衣服以外のことなら、此方の云いなり次第なんです。何処の誰だか判らない人を勝手に飼ひ馴して愛玩するのは勿論、人道にも反することですし私も再三忠告したのですが、叔父がきき入れるわけはありません。今に何か恐ろしいことでも起らなければいいかと、心配しているのですけれど……」

千秋はホッと溜息をつくと、未だ鞭の音の続いている室のほうを振り返つた。

### 刑事係長

この村で、あと二、三枚スケッチしたいからと、もう一晚厄介になることを頼み、松木は夜になるのを待ちかねた。昼間のうちに、太郎と呼ばれる男をよく見たいと思つたが、波多野氏に感づかれてもまずいので、それは諦めた。

昨夜と同じ時刻に寢床を抜け出した松木が、鍵穴に眼を当てると、蹲んでいる太郎の姿が見えた。しかし、後向きなので、やはり顔は判らない。太郎が不意に立ち上ると、脚の間から、床に頭をつけた波多野氏の顔が見



と呶鳴り、尚も軀を扉に打ちつけた。千秋の渡す鍵で扉を開けると、太郎の姿はなく、庭に面した窓が開いていた。松木は、殆ど全裸に近い恰好で倒れている波多野氏の側へ行ったが、

えたが、瞬間松木はオヤツと思っただ。どうも様子がただごとでない。眼を凝らすと、波多野氏の頸には固く縄が巻きつき、呼吸をしていない。明らかに死んでいるのだ。

「波多野さん！波多野さん——」

松木は、夢中で扉を叩いた。

「松木さん……」

千秋の顔を見ると、松木はまるで嘔みつくように、

「千秋さん。叔父さんが大変だ。死んでるらしい。鍵はありませんか？」

「駄目だ。やっぱり死んでいる。すぐに警察へ報せましょう」

「ああ、とうとう恐ろしいことが起ってしまいました！ 太郎は気違いですから、何をするか判りません。松木さん。私、怖い……」

千秋は、半ば失神したようになって、松木の胸に倒れかかった。

「千秋さん。しっかりなさい。僕がついてるから大丈夫ですよ」

まもなく、所轄署から、係官一行が急行して来た。

刑事係長の江崎警部補は、キビキビした態度で係官を指揮していたが、一段落終ると、人懐っこい笑顔を松木に向けた。

「貴方も、とんだ御災難でしたな。それですぐにお帰りですか？」

「ええ、本来ならそうすべきですが、千秋さんも一人になりますし、もう暫く滞在しようと思います」

「そうですか。私もまだ時々やって来ますから、何かと御協力をお願いします」

「それは私にできますことなら——それで、犯人はじきに捕りましょうか？」

「狂人ですから、わけはないと思います。しかし、気違いという奴は、常人には想像も及ばぬことをやってのけることがありますからね。それが恐いですよ」

そう云うと、江崎警部補は、考え深かそうに眼をしばたいた。

次の日の夜はすぐにやってきた。

椅子にもたれてグラビア雑誌をひろげている千秋をスケッチしながら、松木は、こういう場合、普通の男だったらどんな気持だろうと思うと、妙に擦ったかった。千秋は充分に美しい。しかも若い女だ。だのに、俺ときたら、一度会ったばかりの刑事係長を想っている。松木は、千秋の為と云いながら、本当は江崎に合いたさにとどまっている自分に苦笑した。

コトツと窓のほうで物音がした。千秋はハッとして身を固くし、恐怖に満ちた眼射して松木を見る。

すかさず立った松木がガラリと窓を開けると、駆け去っていく人影が眼に入った。裸で確かに六尺褌をしている。

(太郎だ!) そう思ったとき、松木は窓を越して庭に飛び下りていた。

松木は、繁みの中で裸男に追いついた。忽ち格斗になる。そうして、松木は脆くも組み伏せられてしまった。どんなに腕いても、裸男は盤石の重さで押さえつけている。観念した松木が軀の力を抜いたとき、裸男がはじめて口をきいた。

「松木さん。私ですよ。江崎です」

「江崎さん! どうしてまた——」

助け起こされた松木は、まだ信じられぬように、褌一本の江崎警部補をマジマジと覗めた。

「私は、もう、裸で褌をしているから、てっきり太郎だと——」

「いや、驚かしてすみませんでした。しかしおかげで確信ができました」

「って云うと?」

「わけはいずれお話します。ただこのことは、千秋さんには絶対に云わないように。いいですね。何でもなかったとだけ云っておいてください」

「判りました。お言葉の通りにします」

「お願いします。しかし、貴方も仲々お強いですな。すんでのことに私のほうがやられるところでしたよ」

江崎は、笑いながら、木の根元に隠してあった包から衣服をとりだして着けると、肩巾の広い後姿を暗闇の中に消していった。

## 寝 室

勿論戸締りは厳重にしてあるが、万一のことを考えて、松木と千秋は、隣同士の室に寝るようにした。

ベッドに横たわると、松木は、つい今しがたの小さな事件を回想した。太郎とばかり思ひ込み、必死で格闘したとき、江崎の肌にし

かに触れた感触が、それを知った今では、やるせない胸の疼きを伴って甦ってくる。

しかし、寝しなに飲んだ葡萄酒が利いてきたのか、松木はすぐに寝息をたてはじめた。

どのくらい眠ったか判らない。ツツと眼が覚めて、またそのまま眠ろうとした松木は、何か怪しいものを見たような気がして、今度はパツチリと眼を開いた。室の隅に誰か立っている。暗いのでさだかではないが、どうも裸の男だ。それに、仄白く見える褌。

(太郎?……)

今度も江崎だと思うのは虫が好すぎる。

松木は身の危険を感じて、跳ね起きようとした。だがどうしたとか、軀はビクとも動かない。彼は眠っているまに、グルグルとベッドへ縛りつけられてしまっていたのだ。その上、彼は寝巻も何も剥ぎとられて裸にされている。

(もう駄目だ!——)

絶望の中から、松木は、心で江崎の名を呼んだ。

太郎がベッドへ近寄る。

松木は恐怖の余り悲鳴をあげようとした。

江崎警部補が飛び込んで来たのは、そのときである。

それは、太郎にとっても意外だったに違いない。狼狽して窓から逃げようとするところを、後から江崎に組みつかれ、死にもの狂い



で抵抗する。しかし、どういう隙をみつけたものか、太郎は扉から廊下へ逃げだした。

江崎はそれを追うかと思いのほか、落着きはらった様子で電気を点けると、松木の縄を解きにかかった。

「江崎さん。おかげで助かりました」

「危いところでしたな。実は、こんなこともあろうかと、帰った振りをして張っていたんです」

「そうでしたか——あ、千秋さんは大丈夫でしようか？ まさか襲われているようなことは——」

「そうですね。行ってみましょうか」

「ええ」

松木は急いで寝巻を着ると、江崎と共に廊下へ出た。

「千秋さん……」

松木が扉をノックすると、

「はい……」

とすぐに返事があり、続いて、

「何かありましたの——？」

と不安そうな声がした。

「イヤ、別に——一寸声をかけてみただけです。安心してお寝みなさい」

「すみません……」

二人は扉の前を離れ二再、松木の室へとつて返した。

「江崎さん。こんなことを云って僭越です

が、太郎は、この家、少くともこの附近に潜伏しているんじゃないんですか？」

「ええ。それは私も認めます」

「だったら——」

「松木さん。私には考えがあるんです。それもしずれお話ししますが、今は何も訊かないで、私を信じていてくれませんか」

「それはもう、私が貴方を信じないわけがありません！」

「ありがとう。では、一寸行って来ますが、すぐに戻って来ます。今夜はここに泊めて貰いますよ。そのほうがよさそうだから」

どこへ行ったのか、江崎警部補は二、三分で戻って来た。

江崎は寝るように勧めたが、松木はとうとう朝まで起きていた。江崎は、意外に美術の造詣が深く、松木が舌を巻く程だった。二人は、まるで事件のことなど忘れたかのように芸術論を戦わせたが、そうこうするうちに、明けやすい夏の朝は、またたくまに訪れた。朝になっても、江崎警部補は帰る様子がないかった。

昼頃になると、江崎は、千秋に、「どうも犯人がまだこの附近を徘徊していて危険だから、今夜も泊めていただきます」と云って腰を据えてしまった。

## 浴室

江崎のことに、何かと気を配る千秋の態度を、それが当前だとは思いつながら、松木は嫉妬に似た感情を抱かないわけにはいかなかった。江崎の気持は知る由もないが、千秋に比べて、男の自分はいかに不利だ。

松木は、一日中、殆ど江崎警部補と共に過ごしながら、次第に憂鬱になっていった。

「松木さん。元気がないようですね」

江崎にそう云われると、松木は胸を衝かれた。

「いいえ。別に……」

「何か、考えごとですか——？」

「何でもありませんよ」

「こんなことを云って怒らないでくださいよ貴方、もしかして千秋さんのことを——」

「とんでもない！」

だが、(好きなのは貴方です)とは云えなかった。そのかわり、

「江崎さん。貴方こそ——」

と云ってしまい、たしなみのなさに気づくと、ハツとして口をつぐんだ。

「私が？ ハッハハ、御冗談を——私には女房も子供もあるんですよ。それに、事件の度に女に惚れてたんじゃ、いくつ軀があったって足りやしませんよ」

江崎が一笑に附したことは、松木をホッとさせもしたが、はからずも彼が妻帯者であるのを知って、淋しくもなった。

「お風呂が湧きましたから——」  
と千秋が知らせてきた。

「どうですか？ 御一緒に——」

立ちながら江崎が声をかけると、松木は自分でも現金だと思ふくらい、急に気持が躁いできた。

江崎警部補がパンツをはいているのを見ると、松木は、わかりきったことを質問した。

「江崎さんは、普段は襪じゃないんですね」

「そりやアそうですよ。あのときは、随分久し振りで六尺襪を締めて、すっかり昔を思い出しましてね。軍隊では水泳訓練にあいつを締めたもんです。お先に——」

裸になった江崎が浴室の戸を開けると、松木は周章でベルトを脱した。

夕方の柔い光線を一杯に湛えた浴槽に、松木は、江崎と浸っていて、この土もなく幸福だった。

江崎がザブッと湯を切つて浴槽を出ると

「背中を流しましょう」

そう云つて、松木も立ち上った。

夕食後。煙草をふかしながら松木と雑談していた江崎は、フト気になるように、

「千秋さんは——？」と云った。

「さア——見て来ましようか？」

「そうですね——」

松木が出ていくと、江崎は煙草を灰皿で揉

み消した。

すぐに戻つて来た松木が、

「今、風呂に入つてるようです」

と云うと、全部を聞かず、江崎は廊下に飛び出した。

「江崎さん。どこへ行くんです？」

「風呂場ですよ」

「風呂場へ行ってどうするんです？」

「私も、もう一度入ろうと思つてね」

「だって、今、千秋さんが——」

「だから行くんですよ」

「江崎さん。貴方……！」

「そんなに気になるんなら、貴方も従つて来たらどうです」

そう云ううちにも気が急ぐように、江崎は足早やに浴室のほうへ歩いていく。松木は、何が何だか判らなかつた。まさか、江崎の気が狂つたわけではあるまい。

## 解決

脱衣場に入ると、江崎警部補はサッサと裸になる。松木は、江崎の裸身を千秋に見せたくない思いで、胸が固くなつた。

「どなたですか——？」

人の気配に気づいた千秋が、緊張した声で云つた。

「私です。江崎ですよ」

「あの、私、今入っておりますから——御用

でしたら、すぐにあがります」

松木は、無駄と知りながら、江崎の腕を押さえた。

江崎は、ソツとその腕をはずすと、タオルをとつて、ガラリと浴室の戸を開けた。

「江崎さん。何をなさるんです！ 警察官ともあろうお方が——」

浴槽に胸まで沈めた千秋は、顫える声で云つて、激しく光る非難の眼を向けた。

江崎警部補は、かまわず浴槽に近寄りながら、

「御婦人の入浴中にと云われるんでしようが残念ながら、私は認めませんね」

「何をおっしゃるんです！ 貴方は——」

「恥かしくはないかと云うんでしよう。勿論恥かしくはありませんね。その理由は、貴方が一番よく知っている筈だ。入りますよ」

江崎が浴槽を跨ぐとすると、千秋は観念したように、

「恐れ入りました。貴方には到底隠しきれるものではありません。私は御煙眼の通り男です。此の世の中には、男でありながら、女装をし、女としての生活を送る人間のあることは、貴方も御存知だろうと思います。私の場合は、私の性癖がそうだったというだけではなく、叔父もまた異常性格で、私にそれを命じ妻の役目をさえ私にさせていたのです。江崎さん。貴方は、まさか、この宿命的な人生の

敗残者を罰しようとはなさらないでしようね」

「千秋君。君は、どうやら、僕が刑事係長であることを忘れていらっしゃるらしいね」

「……！」

女の仮面を脱いだ千秋の、やはり女のように白い、だが、意外に逞しい裸体と、江崎警部補の、筋肉質の隆々とした、狐色の裸体とが、一瞬、無言のまま火華を散らすように対峙した。

松木は、余りのことの意外さに、呆然として二人を見守っている。

息詰るような沈黙を破ったのは、江崎警部補である。

「千秋君。僕は、波多野氏殺害の犯人として君を逮捕に来たんだよ。勿論、逮捕状もある。着物を着るくらいは待ってあげよう。支度をしたまえ」

「これは不思議なことを聞くもんです。では、太郎はどうなるんです？」

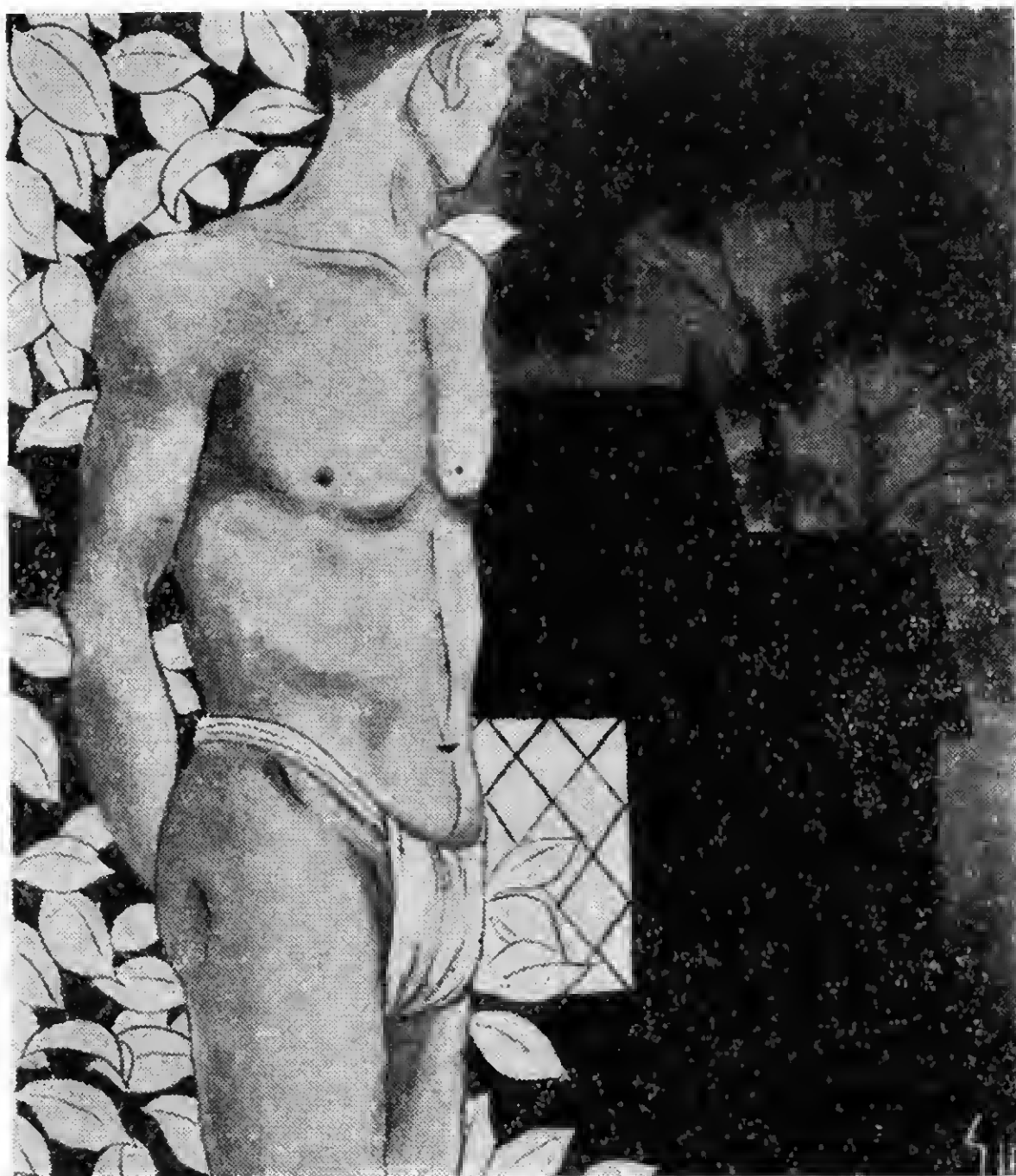
「フン、太郎か。あの狂人は、お前の拵えた架空の犯人さ」

「しかし、僕にはアリバイがある。僕と太郎が別人であること

は、松木さんが証明してくれるでしょうよ」

「松木さんを騙すことはできたかもしれん。

だが、俺の眼は節穴じゃアないよ。いいかね。お前と波多野氏の変態的な生活は、松木さんの泊ったあの夜も中断することはない



た。眠っているとばかり思っていた松木さんが、鍵穴から覗いているのを知ったお前は、一計を案じ、波多野氏に耳うちすると、鞭の音と呻き声とで一人芝居を演じさせ、お前は窓から出て松木さんのところへ行き、太郎の

作り話で、巧みに松木さんを騙いたのだ。それだけならよかったのだが、波多野氏の巨万の富を得る為と、もともと彼を好きではなかったお前は、かねてより波多野氏に殺意を抱いていた。それを、丁度松木さんを騙したついでに利用することを思いつき、遂に実行に移したのだ。松木さんは、お前を女だと信じているから、禪姿の男をお前だと疑う筈はない。太郎には、禪という特徴が与えられているので、簡単に錯覚を起こす。現に、松木さんは、禪を締めているだけで、俺を太郎だと思った。このことは、

云いかえると、禪をつけていれば、誰でも太郎だと間違われるかわり、禪をつけていない者は、絶対に太郎ではないということになる。そうなれば、女であるお前は完全に嫌疑の圏外に置かれる。全く、お前は、うまいことを考えたものだ。松木さんを襲ったのは、太郎の存在を一層現実らしくする為の狂言だったのだらう。しかし、それがお前の運のつきとなったのだ。俺は、あるとき、お前を捕えようとする振りをして、お前の腋毛を撈り取った。鑑識の結果は、俺の推理通り、波多氏の指に絡んでいたものと、ピツタリと一致したのだ。さア、まだ何か云うことがあるかね？」

平和な山村に突如起った殺人事件は、こうして意外な結果を告げた。

もはや、松木も、この村にとどまる理由はなくなった。それに、あと二日で夏休みも終る。

松木は、ゆくりなくも江崎警部補を知ったこの村に、胸の底を風が吹きぬけていくような、深い惜別の情を覚えた。

「松木さん。貴方とは、短いお交際<sup>つきあひ</sup>でした、いざお別れするとなると、お名残り惜しいですなア……」

江崎刑事係長は、しみじみとした調子で云って、普段あまり他人に見せることのない柔

らかな眼射しで、松木を見やった。

M町警察署の一室の、二人の向い合った古い机の上には、若い巡査の運んで来たお茶が冷くなっていた。

松木が、帰るにあたってM町の警察を見学したいと申し出たとき、江崎は、

「警察なんて、およそ色気の無い処ですよ。それに、田舎のちっぽけな警察ですからね」と笑ったが、

「しかし、お望みなら、勿論、喜んで御案内しますよ」

と快く引き受けてくれた。

松木は、それで満足しようとした。

江崎の示すどんな僅かな好意でも、それを愛のしるしだと思ふことで、松木の心は慰められるのだった。

「松木さん。今度の事件も、やがては忘れてしまわれるでしょうが、田舎の小さな警察に江崎という刑事係長のいたことは、忘れないでくださいよ……」

署の石段を下りながら、江崎警部補は、冗談とも本気ともつかずにそう云うと、苦っぽく笑った。

松木は、今なら云えると思ったが、大きく息を喘がせただけで、別のことを云った。

「私は、この町が気に入りました。又キット来ます……！」

そうして、二人は、どちらからともなく手を出すと、互いの心を探りあうように、ゆっくりと力をこめて握った。

石段の端に止った蜻蛉の翅が、キラッと光った。

(完)

## 本誌百号突破記念

### 懸賞原稿募集

#### について

本誌通刊第百号突破記念の懸賞募集原稿は、その後引続いて続々と到着しております。すでに七月号誌上で「お町の最後」を発表以来、八月号では「身悶える妖精」更に九月号では沖竜彦氏の「草双紙に於ける賣場の研究」を、十月号に「女水兵哀史」(女奴隷愛好家の遍歴より)八市田健次郎Vを掲載致しましたが、本月号では、真木不二夫氏の「白い玩具」並に近藤一氏の「継母」を同時に発表

掲載出来ましたことを、皆様と共到大変喜しく存じて居ります。尚、数多くの応募作品中から次号発表作品を検討中であり、優秀作品は今後次々と誌上を飾ってゆくつもりであります。入選該当作品多数の節は、懸賞入選作品ばかりの特別号を臨時に増刊いたします故、何卒奮って御応募下さるよう御待ちいたします。

(編集部)



## 悩ましの

## 乗馬ズボン

告

白

藤山秀緒

この頃の私は、毎日、することもなく、悲しい想いに浸っています。

乗馬だけが昼間の私にとって唯一の慰めですけれど、もちろん馬に跨った快感はあるにしても、私のように「馬装」そのもののへのフエティシズムを持った者は、自室の鍵をきっちりかけて、乗馬ズボン姿に身を固め、鏡の中で身悶えすることで満足なので、奇クの旧号や、乗馬スタイルのスクラップを眺めなが

ら物想いに沈んでいる日の方が多いのです。

私は短い結婚生活に破れました。そして奇クの世界へ戻って来たのです。

私は夫を愛しました。夫も私を理解してくれました。夫は、ノーマルなエンジニアで、休む時も大抵パジャマか浴衣で休み、すべて正常でしたが、私には乗馬ズボン姿で休むことを許してくれ、昔から使ってたものを使わせてくれました。私は、心から夫に

仕えるつもりでいました。

私達は、恋愛結婚なので、物固い親の許しがえられず、遂には夫の両親とは会って居りませんが、私は一見、W過剰のように見える夫に、或る種の期待を持って結婚しました。

それは、夫が女、私が男になって、プレイを楽しめると思ったからでした。

私は夫を刺戟しようとして、わざと荒々しく振舞ったり、一日中、乗馬ズボンのポケットへ手をつこんで夫をこき使ったりしました。

けれども夫は一途にそれを私のヒステリーだと思いこんだらしく、女性化するどころか或る時は悟りすましたように話をそらせ、或る時は私を突き倒して折檻しました。彼を女装させようとするには、やはりハッキリそう云った方がよいかもしれない。私はそう考えるようになりました。

その答は、「不可」でした。

ああ、私の夢は破れました。私の乗馬服姿にプロポーズした彼は、実は私の思うような乗馬服マニアでも、女性化願望のマニアでもなく、「女」としての私を手に入れようとして私のフエティシズムの盲点を衝いただけだったのです。

旧友M子の結婚によって同性愛の夢が破れ

た傷心の私に近附いた夫のプロポーズは私の心に喰入りました。女は親切な夫の腕に抱かれるべきもの。いまのアブノーマルな生活からの解放に、この人の手で、と判断した私は、乗馬服姿だけを条件にして結婚したのです。それは、「奇ク」という実家を出て、奇クの世界の服装をしたまま別の世界に嫁入したことになるのでした。

私は夫の前で、或る夜、腹を切って見せました。夫は、今になって考えれば、波打つ肩や胸、エキサイトした私の目もと、乗馬ズボンもはち切れるばかりの腰の闊えなど、女としての私に興味を示しただけだったのです。「すばらしい、すばらしい」。

夫に抱かれて、こんな言葉を繰返すその唇に、燃える思いで触れたのも、私にとって、私の期待が、次第に形をととのえて来る前兆としか感じられなかったからでした。

でも現実にはあまりにも厳しく、夫は、自分で腹を切ることも、女装することもありませんでした。

私に切腹をもとめることはありません。やがては、私の乗馬ズボン姿を見ながら、これが必要ならば、もっとすばらしいのに、などつぶやくようになりました。

私は、この親切な夫を愛し、敬っては居ますが、烈しい私の悶えを救うには、あまりに

常識的であり、しかも冷静すぎる此の夫を、生薑の支えにすることが不安になって、夫のとめるのもきかず、再び孤独の中を戻って来たのでした。

そして私は、こわばる乗馬ズボンを抱いて車中の人となりました。

短い、不幸な結婚生活でした。そして、関西の或る乗馬クラブへ、傷心の身を日参するようになった或る日、小柄な、きりりとした美貌に、堂々とした乗馬服姿の若い女性を見しました。良家のお嬢さんらしいその人は自分の騎乗がすんでも更衣室へ入らず、ただなんとなく馬場や観覧席などをうろうろしているのです。そうして、もうあと二人で、今日のレッスンは終りという頃、あたふたとフリースカートに、はきかえて出て行くのでした。

もしや、この人は私の気持がわかる人ではあるまいか。尾行した私は乗馬靴の靴音も高く彼女を超越しわざと道路に横転しました。「あっ」

彼女は、立ちどまつて、そっと私を抱き起こし、

「どうぞ」

と云って、自分のハンカチを出して私に手を拭けとすすめるのです。

胸をときめかせた私は、お礼を云い、道々

歩きながら、乗馬の話をさりげない風にとりかわして駅まで来ました。

その話の中で、彼女が私の乗馬服姿をほめたこと、馬は好きだが障碍はこわくて出来ないこと、映画やサーカスの乗馬のシーンに興味を持っていること、ファッション雑誌に乗馬スタイルが殆んどなくてつまらないということ、などから察して、これは私の気持がわかるに違いないと思いました。

その日は、きれいに別れて、翌日も同じ時間に来て、再び、とりとめもない話をし、私は、あせらずに回を重ねました。

そして、とうとう

「私、お姉様の乗馬服姿好き。なんだか、体があつくなくて……」。

この一言を待っていた私は、かるく彼女の肩を抱いて、

「菊枝さん、私の乗馬服、いろいろあつてよ。今日、私の所へいらしやらない？」

その結果は、もうおわかりと思います。

奇クを見せ、私の乗馬服を着せてやったり小柄な彼女の、乗馬ズボンを私が穿いて、きちきちで坐れず、大笑いをしたり……。

そして、その日、私は文字通り彼女の姉になりました。

私が乗馬ズボンをはいた姿で、切腹して見せ、彼女に後を追わせることで、彼女の「切

腹への開花」がはじまったのでした。

ナルチシズムの彼女にとって他から責められたりする苦痛は興味をそそらない様です。

彼女は誇りの中で苦痛を味わう「切腹」という自殺方法が、すぐく気に入ったらしく、隣に気がねしながらも、何度か

「ウウウツ！」

と絶叫して、切腹の苦痛に身を悶えるのでした。乗馬ズボンはごわごわときしんで、二人は互に介錯したり切腹したり、夜の更けるのも忘れてプレイし合いました。

長い日程が終つて、明日は帰京という時、彼女は厚い封筒包を呉れ、必ず東京へ帰ってからあけてネ、と甘えます。

つらい別れは、二人共同でした。

「きっと、東京へ出て行きます！」

菊枝は、そう云って乗馬ズボン姿の赫らむ顔を恥しそうに鏡台からそらせました。

——東京へ帰っても、夫の許へは戻らぬ決心の私は、一先ず知人の処へ行き、それからも転々としました。

彼女のくれた包の中は、いつのまに写したのか、私の乗馬姿の写真、彼女の描いた私の絵、私の切腹しているスケッチ、公開を憚るような器具の数々、そして長い長い手紙がぎっしりつまっていました。——そして、もしやお姉様が藤山秀緒ではないのか。と書かれ

ています。私には恥しくて、それだけが云えなかったものでした。

もう隠すこともない。むしろ、東京へ去った私の形見に、奇クを読んで、せめてもの慰めにしてもらおう、私はそんな気持ちで手紙を書き、菊枝の許へ送りました。

そして、折返すように菊枝が東京へ来たのです！

「嬉しいわ、嬉しいわ、お姉様……」

二人は東京駅で、人目も恥じず抱合っていました。菊枝は関西の御両親に、東京の××博士の指導をうけるという名目で上京を許してもらったのです。毎月一回、三日宛、菊枝は上京することになりました。

彼女は、勉強に午前中通って、午後からの時間は私と共に使いました。

二時に、菊枝は、私の仮住居へ来ます。私は、乗馬服姿で待ちうけ、人目をさけてストラックスかフレヤースカートで来る彼女を、すぐに、りりしい乗馬ズボンに穿きかえさせます。

乗馬ズボン姿の二人が、限られた三日を、どのようなにしてすごして居るのか。それは申し上げません。

ただ私が、その三日だけは、菊枝の夫であり、男としての喜びに酔いしれる倒錯者になり果てることだけを告白いたします。

そして、もう今では菊枝も私の作品に夢中です。離れていても、今日は何月号のあのシンをひとりやって見たとか、その時の様子などをこまごまと書いて参ります。

結婚に破れた私は、もう生涯結婚などを考えまい、と心に誓って居ます。

筆をとる力さえない三日間がすぎて、菊枝が羽田を去って行つた後、私は、菊枝の使った乗馬ズボンや長靴を抱きしめて、ほのかに残る汗の香を求め、自分も馬装に身を固め、ひとり慰める孤独のすばらしさ。誰が見るでもない、ただひとり悶え、恥じ、いとほしむ静かな宵こそ、いまの私にとっての唯一の生甲斐と申せましょう。

そして、二十篇にも及ぶ私の拙い乗馬ズボンシリーズも、ようやく終りが近附いて居るようです。もはや私には、あの頃のような、泉のほとばしるにも似た烈しい情念も、身を灼くような孤独の悶えもないからです。

そこにあるのは、「火のズボン」として屢々御紹介した私の乗馬ズボンと、新しい私の恋人の乗馬ズボン——そして満ち足りた孤独が私を待っているからです。孤独の悲しさ——思いは遠く、私は涙ぐむのです。

(おわり)

×

×

×

## ◎本誌百号突破記念「懸賞募集」原稿入選作品◎

◇ × × × × × ◇  
× × × × × × ×  
× × × × × × ×  
◇ × × × × × ◇

繼

◇ × × × × × ◇  
× × × × × × ×  
× × × × × × ×  
◇ × × × × × ◇

母

(けいば)

近藤

一

〔民法旧七二八条〕

繼父母ト繼子ト又嫡母ト庶子トノ間ニ於テハ親子間ニ於ケルト同

一ノ親族關係ヲ生ス

【註】繼母ハ必スシモ父ノ後妻タルコトヲ要セス。繼母繼子間に親族關係ヲ生スルニハ双方力同一ノ家ニ在ルコトヲ必要トス。

右規定は新法により削除されています。

西の果からさす陽光が何も彼も茜色に染めなす頃の校庭は凄まじい位に寂としている。中学校でもあったなら、放課後の運動部の練習で賑いも残っていようけれど、小学校の校門はまだまだ陽も高い四時半になるときちんと閉ざされることになっている。学童達も

心得たもので四時を廻った頃には殆んど姿を消してしまい、朝からの活気に満ちた空気が嘘のように、閉め切られた窓硝子の空虚な反射が独り華麗を誇っているばかりであった。

志津子はこの道が好きだった。通勤の朝夕に通りながら、通る度に新しい感慨を受ける。小学五年の一人娘の加寿美と肩を並べて歩き、校門の中へ送り込んでから駅へ向う。夕方になって会社を出ると加寿美の待つ我が家へ真直に帰る。その単調な繰返しの生活が一年近くにもなろうというのに、志津子には、全く新しい経験のような、歎びのある毎日であった。

「静かだワ」

細越しに校庭を見やりながら志津子は内心で呟いてみる。

「淋しいけど大好き」



志津子は、はっとして歩みを止めた。ゆっくりとした歩行につれての短い瞑想が一瞬に破られている。

五、六年らしい男の子が三人、それぞれ縄を束ねて手にしていた。一人は炭俵用の荒縄を、一人は縄跳び用の縄を、そしてもう一人は細引の古いのを何で覚えたか捕縄のように束ねている。その三人は学校の裏手の道端に蹲んでいたのだが、志津子の姿を見るや、顔を見合わせ、そしてのっそりと立上った。

縄！

志津子にとってこの感覚は何ものにも劣らず敏感だった。縄！という視覚は直ちに縛りに結びつき、その対象になった自分自身が志津子の脳裡に悶え、のたうち始めるのだった。三人の手にしたものを見ただけで、その形態を見究め、その肌触りを想い起こしている志津子である。

嫌だ！ ああ！ 嫌っ！

あの子達が私を襲う。あんな縄で方式も思い遣りも弁えないごつごつした縛めが私の四肢を、軀を締め上げる。

真逆、そんな……

でも、……もし襲われたら……私は声を立てられない。恥ずかしくって、とても駄目、結局縛り上げられてしまう。ガリバーのように、大人の私が子供達に捉まって広場へ曳かれて歩く。群衆の見守る真中の柱に縛りつけられて、晒し者にされるのだ。子供達の柔い手が私の衣服にかかる。ピリッ！

ああ！ 許して！ いやッ！——

細引を束ねた男の子が近づいて来た。左手の細引を背に隠すようにして、右手を挙げ何ということなしに耳の後を撫でて云った。

「せんせ、さよなら」

子供達は放課後になると、その日初めて逢う先生に対しても挨拶は一つであった。

「せんせ、さよなら」

ぴよこんと頭を下げて通りすぎる三人の子供の動きに志津子は我に返った。

途端にかつと顔に血が昇って行くのを感じて、「あ、あら、さよなら」と、どきまぎして二度、三度とふり返ってみた。

子供達もふり返って、はにかんでいた。あの子供達は去年の春まで私がこの学校に居たことを知っているらしい。そういえば見たような顔だワ、と志津子は思った。

学校の裏手にある公園を通り抜けるのが近道だった。人影も見えない夕景の広場の中は風も風いで、植込の間に昼間の熱気が澱んでいるように静かだった。

公園から出ようとした処で、志津子はふと足を止めた。四阿あやまの蔭の人眼につきにくい辺りで何かの動きを認めたからである。

何かしら？——

一寸躊躇ってから、志津子は歩を戻して植込の影を利用しながら近寄っていた。

薄暗い中に四つの人影が見えた。

加寿美だワ、何してるんだろ？——

夕暮の物影の中でも、母親の、殊に生さぬ仲にして見れば、子供の存在には敏感であった。男の子が三人、一人は孝男ちゃんと呼ばれる六年生の乱暴者だった。あとの二人はもっと小さな子供だからきつと孝男ちゃんの手下なのだろう。母親が日雇労働者をしている苛めっ子の孝男ちゃんが、加寿美に何を？と訝って、志津子ははっとした。

縛られているんだワ！——

白ブラウスの袖を捲り上げ、デニムのズボンの裾も折り返した男の子のような姿の加寿美が立樹に背を凭せて立っていた。両腕は立樹に廻って手首をきっちり括り合わされている。別に胸とお腹を



ぐるぐる立樹に巻きつけた縄尻を、一人の子がぴんと引っ張っていた。離れていながらこれだけのことが見分けられる志津子には、即座にとび出して男の子を追いつ散らす勇気が出なかった。

親が居ないと思って、何てことをするの？ あの子もあの子じゃないの。あんな男の子なんか近づかなければいいのに……

そう思いながら聞き耳を立てる志津子だった。

密書は何処へやった。云えッ！——

云え、云え、云ってしまえ！——

うるさいッ！ 大事な密書の在り場を、お前達なんかに云うものか。——

立樹に縛り付けられた加寿美が、志津子も驚ろく程、勇ましく、しかもそれが自棄でない語調だった。

密書？ いや遊びだったのかしら……

「姫、素直に白状してしまわないと痛い眼に遭うぞ。それでもいいのか？」

「月姫め、強情張るとゴEMONにするぞ！」

小さな子が孝男ちゃんに続いて云った。

「何を云う。私がお前達の拷問なんかに負けるとでも思っているのか、馬鹿者め！ やりたければ拷問でも何でもするがいいッ！」

それが決められた台詞なのか、それとも加寿美の地が云わせたものなのか、とにかく白ブラウスとズボン姿の奇妙なお姫様は真剣に囚われの身を演じている。

棒切れの先に三尺程の細綱を結びつけ、先端に結び玉を拵えた鞭が、孝男ちゃん、掛声諸共、本当に加寿美の、男の子とは違う柔かみを襟に見せている胸の辺りにまで振り下ろされた。

あのムチじゃ痛いワ。六つ、七つ、もう降参しちまえばいいのに……

孝男ちゃんの手加減など無くても同じなのだろう。加寿美は眼を固く閉じたまま、樹に廻した両腕や握り締めた指に苦痛を見せていた。

びしん！びしん！

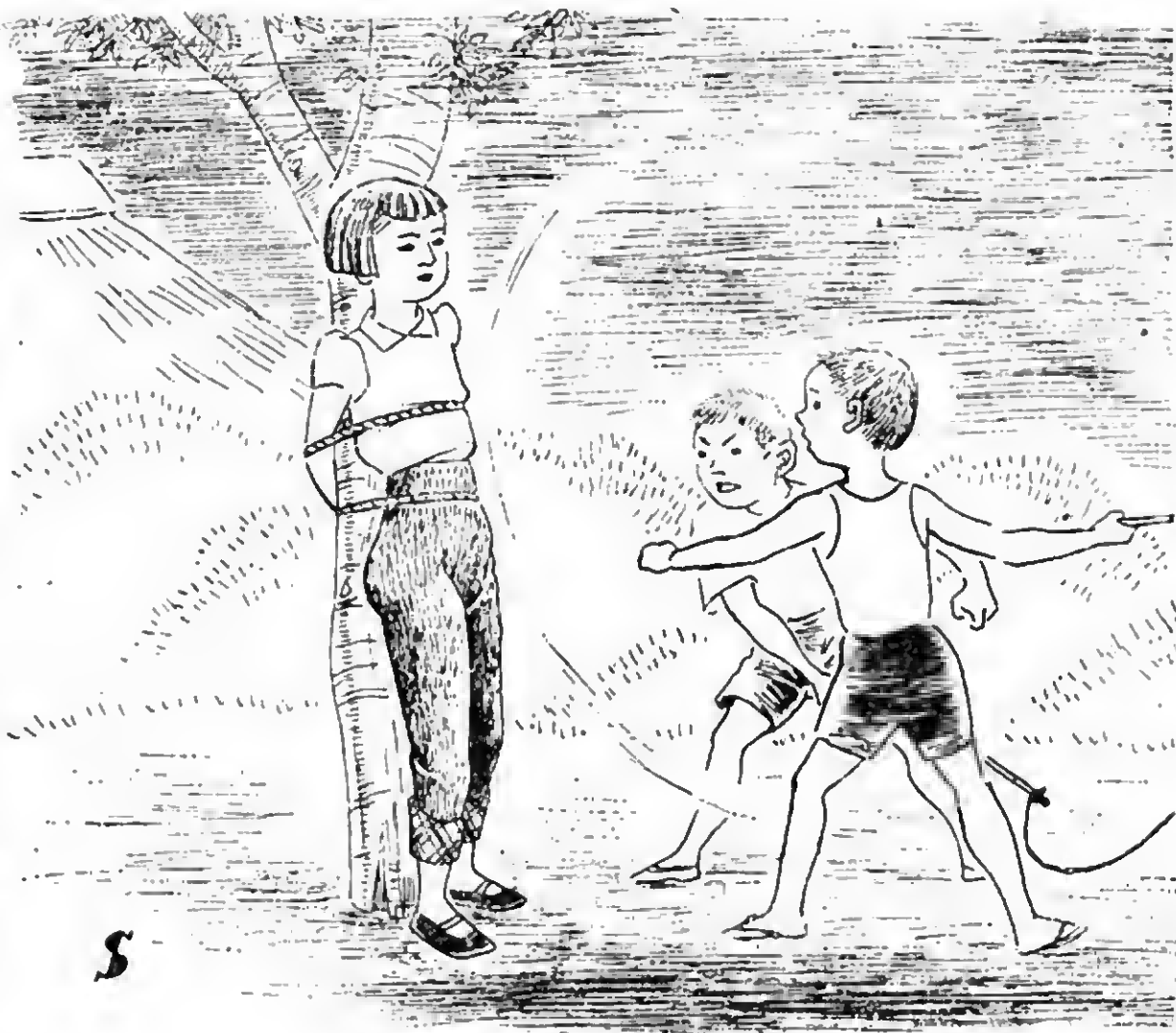
鈍い、それでいて胸を刺すような音に、志津子は背筋が冷く、そして疼くような火照りを覚えた。痛かろう。確かにあれは痛いんだもの。硬張った唇を噛みしめ、半分泣いているような歪んだ表情。ムチが当たった処を凹まそうとして、びくっ！と伸縮する背筋。喉の奥で押し殺したように、くっ！くっ！と呻き声が洩れていた。

泣かなきゃ駄目！加寿美ちゃん。泣くのよ。痛いんだもの……

ママ、よく知ってるのよ。泣かないの？バカッ！泣かないとママみたいになっちゃうのよ——

志津子は立っていらなくなつて、その場にくたくと崩折れた。植込の辺りの雑草の中に両膝をついて坐ると、瞳は加寿美に据えたまま、両手が独りでに背に廻って組み合わされていた。

志津子の妖しい幻想を打破したのは、白鷺の逆襲だった。さつき学校の脇ですれ違った子供達を含めて六人の男の子が口々に、



「姫を救え!」「姫を助けに来たぞ!」と叫びながら、孝男ちゃん達にかかって行った。

「白鷺党の月姫を返せっ!」

「何を云うか!チヨコザイな白鷺党の奴め、この黒岳幻雲齋くろだけんうんさいに抗うと姫同様痛い眼に遭うぞ!それでもいいのか!」

「うるさいっ!幻雲齋め。隼童子が生捕りにしてくれろぞ!」  
孝男ちゃんは、どうやら忍術使いのスーパーマンらしく、隼童子と名乗る子供の他二人の子供を相手に闘っている。残った三人は幻雲齋の手下に跳びかかって、腕を捻じ上げたり尻を蹴飛ばしたりして降参させ捕虜にしまった。

立樹から解き放された加寿美は、両の手首が痺れるのか痛むのか歪んだ顔付で擦っていたが、すぐに元気になって白鷺党の先頭に立った。

「みんな!幻雲齋を生捕れ!遠まきにして縄で搦め取る方がいい!」  
孝男ちゃんは見ると見る内に動きがとれなくなってしまった。手首や足首に縄が絡み、まごまごしているうちに頸にまで縄をかけられてしまった。

孝男ちゃんは、さっきまで加寿美を縛りつけていた立樹に、悪びれた様子もなく括られている。幾筋も重なり合って締めつけている縄目が、苦しくて身動きも儘ならぬのかも知れないが……。

二人の小さい子は月姫の奴隷にされることになった。二人共、加寿美の前に坐らされ、足首を一本の棒に繋がれた。次には四つの手首が別の棒に結びつけられ、二本の棒を地面に抑えつけられたので、加寿美の前に平伏した形になった。

「痛いよウ、ほどいてくれよウ」

「奴隷の癖に何を云うのだ」

「もう、いやだよ。参ったんだから……」

「お前達はあたしの奴隷なんだゾ」

「許してくれよ、ねえ、加寿美ちゃん」

「月姫様と云わぬかっ!いいか、お前達はつべこべ云わずに、わたしの奴隷になるのだ。嫌だなどと云うと、もっと酷い眼に遭わせるぞ。さ、奴隷の誓をするのだ」

加寿美は何で覚えたのか足を突き出して、泣きべそをかいている

男の子達に口づけを強いた。それから、さっき自分が孝男ちゃんからぶたれた鞭を手に取ると、奴隷の背中に振りおろした。男の子達が四肢を抑えつけられた儘でワアワア泣きながら許しを乞うまでやめなかった。

孝男ちゃんを立樹に縛りつけたまま、他の子供達を帰してしまつたあと、加寿美は独り孝男ちゃんの前に立って甘えるように話しかけた。

「お腹がすいたから御飯たべて来るね。ママも心配するから……なるべく速くほどきに来るからサ、それ迄我慢してなよね」

「蚊が喰うからほどいてけよ」

「あたしを苛めた罰だもの。痒いくらい何サ。じや待っててね」

加寿美の、男の子のような言葉遣いや動作もさることながら、そういう総てが服装にマッチして、びったりの感じを造り出しており、そしてそんな加寿美が時折夕食後そわそわした挙句駆け出して行くのを想い起こしたことなどが、志津子の胸をはっとさせる程に衝いた。

孝男ちゃんの家は四大家族だった。父親が亡く、母親はニコヨンと呼ばれる日雇労働者で、上の姉は印刷女工、下の姉は食堂のウェイトレスをしている貧しい家庭だった。

志津子がまだ地元の小学校に奉職していた頃、教員室で孝男ちゃんの素行の乱暴さが話題となったこともあるし、担任の先生から叱られている孝男ちゃんを見ることは珍しくなく、或る時などは教室の片隅で担任の先生に頭を上げ得ぬ母親のモンペ姿のやせた背中に胸の熱くなる想いを味わったこともあるので、志津子が孝男ちゃんに持っている感情は決して良いものではない。

近所の噂も悪く、子供達の間でも苛めっ子で通る孝男ちゃんなのに、加寿美は少しも怖れたり嫌ったりしなかった。

「あら、孝男ちゃんてそんな悪い児じやないわ。あたしのことなん

か、ちっとも苛めないわよ。あたし、孝男ちゃん好きよ、強くて……でも少し乱暴かも知れないナ」

そう云って加寿美は肩をすくめて、くすつと悪戯っぽく笑った。

「あたしにだけ特別親切なの、きつと、あれ、あたしのこと、好きなのよ。ぜったいよ、ママ」

「ね、その、せんせい、って云うの、よししようよ。私はもう先生じやないのよ。今は加寿美のママだから、そうね、おばさん、

そう、おばさん、がいいわ。そう呼んで頂戴」

確かに孝男ちゃんは加寿美を好いていた。

「孝男ちゃんも知ってるでしよ？加寿美が私のほんとの子供じやないってこと。でもね、私は加寿美が好きよ。まだ加寿美の受持の先生だった時から、加寿美は私をお母さんみたいにして甘えて来たわ。私も自分の子供みたいに可愛く思ったのよ。そしてとうとう、私は加寿美のママになっちゃったの。今の加寿美は私の可愛い子供だわ。でもそれだけじやないの。加寿美は亡くなったお父様が残して下さったプレゼントだし、亡くなったお父様から頼まれた大事な預かり物なのよ。加寿美を立派な人にするのが私のお仕事だし楽しみになの。孝男ちゃんは加寿美が好きね。加寿美が立派な人になれるように手伝ってくれるわね。孝男ちゃんならきつとできるわ。私と孝男ちゃんとの二人っきりの秘密の約束よ。誰にも内緒。加寿美のために、私が頼むことは何でもやってくれるわね」

男の子として信頼された孝男ちゃんは、事の重大さを感じ取って緊張に奮だめながらも、好きな加寿美ちゃんのためという言葉に拒むことができなかったのである。

志津子はもうかなり長い間、反省の姿勢を続けていた。いや、続けさせられていたと云う方が適當だろう。

部屋隅にきちんと正坐して、両手を後に組み、顔を真直におこ



して眼を閉じている。この反省は、孝男ちゃんが眼に余る悪戯をした時に受持の先生から加えられる罰であった。違ふ所は反省をしているのが志津子で、それを鞭うっているのが孝男ちゃんだということと、志津子の膝の上下と手首がきっちり括り合わされていることとであった。本当に久々の肉体的苦痛に見事に耐え切れる自信に乏しくて、正坐をする足首までは括る気にならず、子供と同じ年頃の男の子の前では流石に気恥ずかしくてスラックスの腿を縛り合わせるのは自らの手でやった。そうしてから両手首を交叉した背を孝男ちゃんの縄の下に曝したのである。あれこれと容赦ないように指図した結果ではあったが、流石に悪童だけあって、少年ながらしっかりした縛めを見せた。十文字に括り付けられた手首は緊く締めつけられて、摺り合せることもできなかった。

どの位、この姿勢を続けたらうか。十分や二十分ではない筈だった。

「しっかり反省しろっ！動くなっ！」

ビシヤツ！ ビシヤツ！

「は、はいっ！済みません」

五十糎差が小気味良い音を立てて志津子の肩や背に鳴る。予想もしない強い力を籠めて少年は叩く。叩かれて志津子の躰が揺らぐ。

「モゾモゾするな！反省するんだっ！」

「はいっ！はいっ」

びしやっ！ びしやっ！

また叩く。叩く。叩き続ける。

折檻は避けられない。避けたくないのだ。——もっとも、もっと打って！ああ、いい気持。もっと、もっと強く！——全身で渴望するもの、心からの叫びは、しかし口には出せなかった。志津子は物差の雨に曝されながら身を起す。薄い衣服の下の柔肌を桃色に染める折檻を暫らくの間でも止めて貰って反省をするために、姿勢を

崩さずに叩かれ続けていた。

我ながら浅間しいと思う。しかし志津子は自分自身が愛しくてならなかった。志津子にとって、自分の体内に巢喰うマゾヒズムという名の存在は忌むしい処か、却って素敵な性質だった。マゾヒストなるが故に志津子は自分自身を大事に想い、誇らかに思っていた。少年との関係については、だがしかし、彼女は後めたい気持がある。確かに自分は変だワと思う。公園での一寸した状景が志津子の誇らしい特質を刺戟して自分の平静を奪ったのかも知れない。それとも志津子という女はもともと魔性に生まれついているのだろうか。小学校の六年といえば、かなりの分別もつく年頃である。学校の成績はともかく、世間ずれのしている少年が「女」について関心を持たない筈はない。

現に孝男ちゃんは加寿美に対して特殊な感情を微笑ましく示しているではないか。あの感情は確かに淡い恋心とも云うべきものだ。しかも孝男ちゃんは自分に対しても特殊な感情を抱いたのだ。自分が加寿美の母親であるという意識をお互いに強調しようとして特に選んだワイシャツとスラックスの装いさえ、何の意味をも果さなかった。

孝男ちゃんは正座している志津子の背後に廻って襟に顔を押しつけるようにして云う。

「おばさんの匂いって、いい匂いだね」

「そうお？きつと女の匂いでしょ」

「でも加寿美ちゃんはこんな匂いしないよ。これお化粧の匂いじゃないのかい？」

「加寿美はまだ子供ですもの。女の匂いって大人にならなきゃないのよ」

「ふうん。あ、そうだね。俺んちの姉ちゃんも時々こんな匂いする

「ことあるよ」  
 そう云って、さも好ましそうに志津子の肌の香に顔を寄せた少年だった。

両手を動かさないように緊く縛ってと云ったら「おばさん、俺、やだよ、できないよ」と尻込みした少年。

「女の人って手まで柔らかくてピチピチしてんだね。縛ったりして痛くないのかい？おばさん」と小刻みに震えた少年。

手首を括りつけながら、ムッチリと張った軀に衣服の上から触れた時、びくっと硬直して身を引いた少年。

そんな少年の孝男ちゃんが振り続けた物差の鞭には、然し、驚く程烈しい力が籠っていた。まるで何かの悩みを追い払うかのような狂気があり、志津子の肉体が誇示する女への憎悪が、ひしひしと感じられた。

確かに志津子は、少年がまだ知るべきでないことを教えようとしているらしい。

「私は魔女、素敵な悪魔なんだわ——」  
 ウブな少年が、女を苛める悦びを見せつけられて示しているうろたえや戸迷いに、志津子は愉悦を覚えていた。そして少年の狂気を通して、啓一郎を想い起していた。自分をこんなマゾヒストに仕立て上げた男杉原啓一郎が憎らしく懐かしまれていた。

志津子が啓一郎によって縄の味を教え込まれたのはまだ大学にいる頃だった。二人が互いに惹かれ合ったのは入学直後の教室で何回目かに隣り合わせた時だった。それ



以来急激に増した好感情は深く濃やかで、在学四年の間、交際は親密に続いた。誰もが二人の結びつきを信じて疑わなかった。それなのに、志津子は啓一郎の前から身を隠そうとし、啓一郎は志津子を突放そうとした。卒業と同時に二人は親友として新しい交際を始めたのである。

二人の間は清潔だった。友人達の予想に反して二人きりの場で示される愛情は、統治と服従、支配と奉仕の形態で表わされた。慕情の過多なのか、或いは本質的にマゾヒズムを抱懐していたのか、志

津子は啓一郎の奴隷であることに甘んじ、むしろ積極的に悦びをすら感じていた。

ノートを取ること、レポートの資料を蒐めることは四年間すべて志津子が自分の仕事にした。啓一郎の下宿での掃除、洗濯も自ら日課として課した。土曜から日曜にかけては泊り込みで炊事や身の廻りの世話をした。そう云った奉仕は、すべて厳しい仕置の下に行われた。

志津子が啓一郎の部屋に在る間は、屢々衣服を奪われ、肌着だけの姿で縛められていることも珍らしくはなかった。

緊縛のための用具は、荷造り用の縄と細引のほか、志津子が自身で運んだ和装用の紐類を使った。母親が和服を飾りながらの拘束具として心を込めて作ってくれた腰紐や扱帯等は、屢々肌にじかに纏いついて四股を固定するような思いもかけぬ作用をした。

異常な迄に激しい初恋の相手の啓一郎が、結局自分を責めること以外は、非常に紳士的態度でいてくれたことは当然のことながら志津子にとって感謝すべきことであった。啓一郎との間に何も無かつたことが、志津子の場合、ほろ苦い愛憎と共に思い出を新鮮に保ち啓一郎を忘れさせなかった。

志津子のマゾヒズムは緊縛マゾヒズムであり、鞭撻マゾヒズムであった。そして服属的地位に、身も世もない血の疼きを覚える屈服のマゾヒズムであった。筋一つの動きも儘ならぬ無力な女体に、噛みつくような緊縛の痛苦、鈍く或いは鋭く、息つく間をも与えない烈しい鞭撻の苛責、その挙句、否応なしに屈服させられるだけの無抵抗な地位の哀歎、幾度身を震わせたことか。

ムチは多くの場合、革のバンドだった。着衣の肌へは痛みの激しい細身のバンド、素肌の上へは痛みを拡げながら皮膚を裂かないように巾広のバンドを選んだ。

木刀もたった一度だけ使われた。白いネルのズロース一枚に刺がれた志津子が後手に縛られ、平伏するように額を畳につけヒップの豊満を高く誇示していた。啓一郎は木刀を大上段に振りかぶり、微塵に砕くような力を籠めて肉塊に打ちおろした。

えいッ！

びゅっ！ ぶん！

ぐウエッ！

一撃で志津子は飛ばされた。鈍い肉の音と共に、獣の喚きに似たものが喉から迸った。後手のまま、顔を畳に滑らせて志津子は前へのめった。仕置が終わった時、歩行を苦しめた痛みが固着しなかったのは、女の肉の豊かさの賜と云うべきであろう。

竹刀の味も知らされた。「我が生涯の輝やける日」で宇野重吉扮する思想犯の容疑者に、特高警察が加えた拷問を再現しようというのだった。啓一郎の柔道着には、汗や脂の匂いがしみついていた。メリヤスのパンティの裸身に柔道着を纏った志津子は、よく締る細引でギチギチと縛り上げられた。背中に括られた後手首は肩近くまで吊り上げられ、喉に喰い込んだ首縄に連っていた。

啓一郎は、志津子を鴨居から逆吊りにする準備をしていた。縄の味を体の芯にまで浸み込ませた志津子ではあっても、吊られることは未経験だった。縛られた身を逆さに吊り下げられたとしたら、全身の重味で縄が柔肌を責め虐むだろう。体中の血が頭に下って顔は真赤に充血し、呼吸もできなくなるかも知れない。そんなことが我慢できるだろうか。おまけにその躰を竹刀でびしびしと打たれるのだ。息が止まってしまいうだろう。映画でやったのは拷問であり間違つて殺しても構わないつもりで行なうのだ。頑強な男でさえ生死の境を彷徨した挙句、不具になってしまった責苦に、女の身でどうして耐えられるだろうか。志津子の腋の下に、じつとりと冷たい汗が溜った。背筋に、ぞくっとする悪感が走った。

「おい、覚悟はいいかい」  
「こわいワ。打たれるのはしょうがないけど、吊り下げるのだけはユルシテ」

志津子の哀願に逆吊りを諦めさせられた啓一郎は、その腹いせもあってか柔道着の上からと思う遠慮の無さで力任せに殴りつけた。畳を叩くような音がした。

バタッ！バタッ！バタッ！

ひっ！ひい、ひーッ！ひアーッ！

胸乳の隆起や、ぷっくりとくびれを見せて盛上った腹部に竹刀が当たると、歯を喰い縛っても耐えられなかった。自然に前かがみになって痛みの激しい部分を底う形になる。竹刀は肩から腰へ、そしてヒップに集中される。

啓一郎の腕に疲れが感じられる頃には、志津子の額にじっとり冷たい汗の粒が浮び、顔色は真蒼になっていた。小刻みの慄えが止まらなかった。

バシン！バシン！バシン！バシッ！バシッ！

うっ、うっ、ぐうッ！げっげえーッ！

意識の混濁した中で、志津子は遂に吐いた。僅かに軀を起こしかけたが、そのまま前のめりに力を抜いてしまった。

様々なポーズで部屋を飾り立てたこともあった。静物として固定され放置されることもあったし、動物として不自由な悶えの肢態を觀賞されることもあった。或る場合は家具として啓一郎の身を支え続けていたし、物の台にされて重圧に呻いたこともあった。

そのような苛烈な課程を辿ってマゾヒスティンに変貌を遂げた志津子が、啓一郎から離れて行った心境は複雑であった。勿論、互いのより大きな幸せを希ってのことでもあったが、しかし純粹にそればかりではなく、確かに自虐の気持すらあったのである。

志津子は、大学卒業と同時に教壇に立った。涙や汗を浸み込ませ

たあの部屋とは縁を切った。それでも悦虐を忘れることは至難であった。誘惑に負けてあの部屋へ足を向けたことも幾度だったろうか。聖職と呼ばれた職に在る身が、と秘かに苦悩した日々もあった。

石川加寿美は、志津子が初めて受持った組の児童だった。泣虫のくせに乱暴だった。我儘で意地悪で、嘘つきだった。志津子は加寿美に本気で腹を立てた。震え上る程に叱りつけられた加寿美は不思議なことにそれ以来志津子に親しみを覚えて来た。家庭調査の結果加寿美の母親は加寿美が四つの時に死んで以来、父一人娘一人の家庭であることが判った。

ひたむきに慕ってくれる加寿美にいつしか情も湧いて、足繁く出入するようになった志津子へ、加寿美の父親石川隆裕が求婚したのは加寿美が四年になるうという時であった。

この縁談は家族の者に歓迎されなかった。第一に年令が違いすぎる。隆裕は三十六才。志津子は二十三才であった。それに志津子は初婚であるのに隆裕は再婚で、しかも先妻の子が一人いる。女教師が教え子の父の後添えになることは、小説でならともかく、夫婦間の愛情に無理がありそうに思えたからである。それでも志津子は応じた。

区の教育長が仲人になったから、拒み得なかったのも確かであった。然し、勿論それだけではない。志津子が加寿美の父という関係性を離れて、隆裕を慕い始めていたことも一つの理由であった。亡き妻に変らぬ愛情を持ち続ける男、自分を後妻に迎えても心底から妻として愛してくれない男の冷酷さに惹かれていた。隆裕と結婚することは亡くなった奥様の奴隷に過ぎないではないか。やってみよう。そんな生き方こそ、自分に与えられた最適のものなのだ。

隆裕は志津子を大切にしてくれた。それは大事なお客様に対するように、そして加寿美の家庭教師に対する態度であった。世間では後妻は大事にされるといふ。然し外観の優遇ぐらいで引合う話では



ない。後妻は常に先妻の幻に悩まされているのである。想い出は、えてして美しいものになりがちである。離婚したのならばともかく亡くなった人とは競いようもなかった。

結婚後も志津子と啓一郎は親友だった。教科書会社に就職した啓一郎は、時折石川家に客として招かれ、加寿美とはすぐに馴染んで杉原のオジサマと呼ばれた。

結婚後三カ月足らず、突然石川隆裕は死んだ。出張先のバスの衝突という全くの奇禍であった。結婚の実体も纏めていない志津子は急激に起った変事に遭っても涙が出なかった。悲しみを覚えるには時間が要った。

運命を冷酷だなどとは思わなかった。運命というものは、そのよくな批判や価値判断の対象とはならず、双手を挙げて歓待するものでなければ黙々と甘受すべきものだから。経済的には利子配当で充分であった。然し志津子は隆裕の友人の奨めに従って、新しい職場を亡夫の勤めていた会社求めた。

少年は寡黙に変わった。常に何か思索を続けているらしい。近所の子供達に加える実験に基いて次から次へと思い浮かぶお仕置は、もしもそのままに実行したならば、あの憎らしい女に嫌われそうで、恐くて、躊躇された。

志津子にも同じ悩みがあった。あくまでも加寿美のために受けるお仕置を實行するというのが大義名分であり、そのために着衣やポーズ、方法等は罰としての仕置か、少なくとも少年の感情を必要以上に刺戟しないものに限らねばならなかった。

——私は加寿美の母親なのだ。孝男ちゃんにとっては、先生と呼ばれる立場にあったこともある。慎しみのない真似は許されないのだ。然し時折は、嵐のように激しい誘惑に襲われることがある。うっすらと脂ののった白い肌に烈しい折檻の味をじかに烙きつけて、

自由にのびのびと絶叫してみたい。いけないとは判っていても私はやりたいのだ。

少年は焦った。彼が雑誌や映画などで知ったお仕置は悪者がするか、悪い女がされるかであったから、ずっとずっと酷いものだったギリギリ縛り上げて思いっきり踏んづけて、蹴つとばしてぶら下げて、血が出る程、棒でぶん殴ってみたい。

——畜生ッ！オバサンの馬鹿ッ——

少年は自分の前にひざまずいて罰を受け、おずおずとおびえながら許しを乞う一回りも年長の女の美しさに、烈しい恋心を感じた。

孝男ちゃんのそんな変化を加寿美が気づかぬ訳はない。少女の敏感受性に複雑なものをピンピン響かせていた。

加寿美は孝男ちゃんが好きだった。少くとも加寿美を好いてくれる孝男ちゃんに好感を持っていた。それなのに、その孝男ちゃんが加寿美よりママの方を好きになるなんて、ママの美しさを絶対と思うだけに耐えられない。美しすぎるママに嫉妬をすら覚えた。

加寿美はママを愛していた。恋していた。十三しか違わない志津子は加寿美のママというより綺麗なお姉さまという方がふさわしかった。

「会社の人ね。ママのこと、お姉様でしよって云ったわよ。」

志津子に寄り添って頬を摺り寄せた加寿美であった。

ママが孝男ちゃんと秘密を持っていることは知っている。実際に見もした。ママは犬みたいに縛られて四つん匍いになって雑巾がけをしていた。孝男ちゃんは奴隷を使うみたいに威張って、バンドでビシビシ、ママを打った。ママは柱にきっちり縛りつけられていた。孝男ちゃんは縄目に棒を押し込んでギリギリ捻った。ママのおなかにはひょうたんみたいにくびれて千切れそうになったし、涎をたらしながら呻いていたママは「もうしません。決して。しないから許して、お許し……ううッ！」と大粒の涙をこぼしながら哭いた。ママ

は脚を組んで坐っていた。駄のどこをも伸ばせないように、どこをも縮められないように何重にも括りつけられて可哀想だった。孝男ちゃん竹のムチでパシリパシリと叩きのめすと、ドタリドタリ転げ廻っていたが、終りには「うっ、うっ、うっ、うっ」と泣きながら打たれているばかりだった。

そんなママは加寿美に悪いことをした罰を受けているのだった。

「一体ママは何をしたの？いつ私を苛めたの？何か悪いこと考えたの？何故ぶたれるの？継母だから？優しくして、私がこんなに大好きなママなのに、何で、酷い眼に遭わされなければいけないの？——ママを苛めるのはよして！酷いことしないで！やめて！孝男ちゃん、やめて！」

隆裕が亡くなった直後、志津子が石川家を去るように人に奨められ、断固として拒んだことを加寿美は知っている。

未亡人とは云うものの、志津子は二十四才の新妻であった。同情も集まり縁談も多かった。然し志津子は加寿美の母である地位を捨てなかった。法律的には親子関係なんかないのに……

だが加寿美はそんな恩義のほかに、もっと激しい感情をもって志津子を慕っていた。愛していた。恋していた。ママの美貌が誇らしかった。見事な容姿に恍惚とした。温かくて白く艶やかな柔肌が羨やましかった。しつとりと重い肉の塊のすべてが大好きだった。添寝のうちに母の匂いを感じ得て甘えてみた。そんな大好きなママが、孝男ちゃんに踏み躪られるのは堪らなかった。ママが可哀そうで、孝男ちゃんが仲良しだけに尚のこと憎らしかった。

「ママ、アタシのためにお仕置されるのいやじゃないの？」  
「うん？」

余りに澄み切った加寿美の瞳に、志津子の胸は痛んだ。

「痛いんですよ？ぶたれたら……」

「ええ、痛いわヨ、とても」

「ね、もうやめて。ママ何も悪いことなんかしてないじゃない。優しくしていいママよ。あたしが叱られることはあっても、ママがあたしのためにお仕置されることなんかないわ」

「それはネ、まだ貴女には分らないのよ。ママは今よりも、もっともったいいママになりたいの。そうなるには今の儘じやアまだまだ足りないのよ。悪いところも沢山あるんですもの、お仕置でも何でもうんとして貰って、早くいいママになれるように一生懸命やっているのよ。ね、分ってくれるわネ？」

「嘘ッ！嘘よ。そんなの」

「嘘じゃないワ」

「嘘、嘘。ママは孝男ちゃんを盗っちゃったんだ。見てよ、孝男ちゃんアタシよりママが好きなんっちゃったじゃないのサア」  
非難するというより哀願する調子だった。

「そんなこと。加寿美ちゃん。それは貴女の思いすごしだワ」

「じゃア、ママは苛められることが好きなの？縛られたり打たれたりするのがいいの？孝男ちゃんてなくっていいんなら、そんなことアタシがして上げる」

娘に恋されることは苦しいことであった。娘の男友達に慕われることは悲しいことである。そしてその責任の半ばは自ら負わねばならぬ、ふとした戯れの心の仕業であった。それが根ざす所は、あの憎らしくもまた素晴らしい悦虐の性であったのだ。

「ママは酷い。ママのためなら、アタシ何でもするの……。謝んなさいよ。孝男ちゃんを盗っちゃって御免なさいって。ママには杉原のオジサマがいるじゃないの？」

台風近づいたことをラジオが喧しく報せ、蒸し暑く雨雲が厚く垂れ籠めて、強い風が時折大粒の雨をバラバラと吹きつけていた。  
「あんまり細い木じゃ駄目よ。風速二十五メートルなんて云うと倒

されちゃうかも知れないから……」

雨の中で、志津子は少年と一緒に手頃な庭樹を探していた。

「風当りは強くたっていいけど、怪我するといけないから、何かが落ちて来たりしない方がいいワ」



色を艶やかに光らせた。

少年はレインコートを着たままで細引を捌いた。細引も濡れてしまった。

鶯の樹を背に負うように、志津子は腕を背後に廻して立った。袖

東京では珍らしくなってしまうた蟬が、よく鳴きに來ている柿やいちぢくは避けた。

大きな庭石の傍に五メートル近い高さの鶯の樹があった。

「これなら大丈夫。これにしましよう」

志津子は、そう云ってレインコートのフードを背へ除けた。風に吹きつけられた雨がピシピシ胸へぶち当って気持よかった。

レインコートの下は紅葉を散らした浴衣に黄色の伊達巻を締めた涼しげな姿だった。風にあおられて裾の乱れるのを左手で抑え、脱いだレインコートを袖畳みにして庭石の上に置いた志津子は、少年を促して駒駄下を脱いで庭石の脇に揃えた。足袋はなく素足だった。疾くも肩から胸、袖へかけて雨が抜けて通っていた。駒下駄も濡れていた。レインコートにバシバシや音を立てる水の粒は、皺になったゴムの窪みに溜って、灰

口から露わになった肌は肘の上の辺りまであって、樹の皮のざらざらした感触が堪らなかった。

「着物の裾が風で揺がらないように、膝や足の方もちゃんと縛ってヨ」

髪はびっしり濡れた。腿から裾へも抜けた。素足の爪先もピチヤピチャと洗われた。

「さ、孝男ちゃん、今日は磔よ。磔って本当は死刑だけど、オバサンは罪人じゃないワ。死刑囚じゃないから本当に殺される訳にはいかないワ。加寿美に悪いママだった罰に受けるお仕置なんだから、だから本式じゃないのは我慢して頂戴。でもぶったり苛めたりするのは本気で構わないのヨ。オバサン覚悟してるんだから、うんと酷い目に遭わせて頂戴。今日はこれからもっと酷い嵐になるそうだから少し位、怒鳴ったって悲鳴を上げたって他所に聞こえやしないワ。それでネ。帰りたくなったら貴男はお家へ帰っちゃっていいのよ。オバサンはこの儘にしといていいワ。あとで加寿美に解いて貰うから……。いいわネ。さアやって頂戴！」

浴衣は雨を含んで、べっとりとへばりついた。髪の毛は房々と濃いだけに、びっしり重くなって、打たれて苦しむ度に四辺に水を撒き散らし、前髪は額に垂れて張り付いた。髪に余った雨は、白い襟足を撫でて背へ流れた。襟首や喉の辺りからも雨が容赦なく流れ込んだ。伊達巻の緊さに押し上げられて、こんもりと益々盛り上った胸乳の丸味に、ぽつんと乳首が透けて見えた。

袂からはポトポトと雨が頻りに漏れて落ちた。裾からも同じだった。

雨はもう全身に抜けていた。下腹部の丸味も外観に露わだった。心ない風を恐れて、浴衣の前を腿に挟んでおいたのが、却ってすんなりと柔らかく伸びた曲線を晒すのに役立っていた。

棒が当る度にビシヤビシヤと水が飛ぶようで、帯の処はポトッポ

トツと鈍く鳴った。細引で締め上げた体をぐるぐると力任せに藪の樹へ括りつけた荒縄がたっぷり水を吸い込んで、くびれた女体を緊く虐んだ。

雨も風も、すっかり猛々しくなった。

志津子は眼を見開いてみた。瞳を洗うかのように嵐は眼の中に吹き込んだ。チクチクと痛かった。耳の穴へ水のはいるのを防ぐために乱れた髪の毛で覆おうとして、志津子は首を激しく振り続けてみた。

「孝男ちゃん」

嵐の喧騒の中で、虐まれた女体の発する言葉は絶叫でないと聞き取れなかった。

「オバサン、孝男ちゃんが好きよ。今日は好きな通りにして！そしてネ……」

「何？オバサン」

「そしてネ、オバサンのこと忘れるのヨウ」

少年は怒った。納得し難い憤りだった。

嵐は、ビヨオウビヨオウと吹き荒れた。

あわっ、ああう！わアん、わアア、うわアん、うわううっ！

志津子は子供のように泣き喚いた。雨が口の中に流れ込んだ。涙は烈しく洗い流されながらも湧き続けた。

うわん、うわん、うわうん、涙と雨をゴクゴクと嚥みながら志津子は哭いて哭いて、いつまでも哭き続けた。

「ママッ！」

少女の顔は涙でベトベトだった。

「ゆるしてッ！」

「アタシの気持が分らないママなんか、誰が許すもんか。いつまでもそうしてればいいんだ。それで病気にでもなっちゃえばいいんだ



!

「もう駄目、苦しいッ!」

「もっともっとビショ濡れになって反省してればいいんだ!」

少女は、わっと声を上げて哭きながら、家の中へ走り込んだ。

「加寿美ちゃん、苦しいのヨ、もうゆるしてッ、ううっ!」

加寿美はベッドに突っ伏していた。ママの心遣いが知れる清潔なシーツが頬に快よかった。涙をどんどん浸み取ってくれた。

「ママなんて、ママなんて、死んじやええ、いいんだ! バカ、バカッ! ママのバカッ!」

少女はクックツと泣きじやくった。

熱が出た。まるで志津子の体に燃え沸るように牀中焼きつくす程の熱だった。肺炎の恐れがあつて医者はペニシリンを注射した。

「どうなの? ママ死んじやうの?」

ぐったりと眠り続ける母を、甲斐々々しく、介抱する啓一郎の肩越しに覗き込みながら、加寿美は案じ顔だった。

「アタシがほめてあげなかったのがイケナカッタのね。どうしよう」

「大丈夫だよ。ママは不死身なんだ。これっ位で参ったりしないように僕がしておいたんだからね……」

元来の健康のせいか、薬の特効が現われて来たのか、志津子はかなりの生気を取戻した。葡萄糖とビタミンを注射した。

「ほら、もう平熱みたいなものだよ」

啓一郎は体温計をかざして見せた。加寿美の硬張った頬が微笑でひきつった。志津子は朝顔模様の浴衣に水色の腰紐を締めて横になっていた。

「ママをお仕置しなきゃいけないネ」

加寿美は啓一郎に手伝ってママを縛り上げた。両手は合掌して胸

にとめた。脚は右を上にして足首をぴったりと合わせた。胸乳の下、ウエスト、腿、膝の下、足首まで細引がまるで朝顔の蔓のように緊く絡んだ。加寿美は泣き顔で一生懸命力を籠めた。夢現の裡に志津子は自分に加えられている容赦ない緊縛を感じていた。うっすらと開いた瞳に加寿美の真剣な表情が映った。傍の啓一郎が首を横にふって眼顔で云った。

——何も云うんじゃないヨ——

志津子の臉からジツと涙が溢れて耳へ流れた。それをハンカチが抑えてやった。

「君も堕ちたネ。僕の志津子はこんな悪い奴じやなかった。子供を誘惑したり、心配させたり、この態は何だ。これで石川さんに顔向けできるか。こんな真似をして石川さんを傷つける位なら、君は加寿美ちゃんを一人にしても石川家を出て再婚した方が良かったじゃないか。」

「貴方が私にそれを云うのネ」

「そうだヨ。僕が悪かったんだ。君の監督を怠ったりして」

啓一郎は志津子を抱き起すと自分の胸に凭れさせた。

「駄目よ、いや、いやッ」

然し二人の唇は重なった。残った熱を燃いつくすように熱い永い接吻であった。

「もう一度僕の処へ来るんだ。そして、今度こそ永久に僕のものになるんだ」

「駄目よ。私はもう貴方の奥様になんかなれやしない」

「当り前だ。君は僕のドレイになるんだ。朝から晩まで苦しみ抜くんだ」

「汚れた女なんだ、君は。それだけで死ぬまで罪を償わなきゃならない立派な理由なんだヨ」

志津子は石川隆裕に嫁いでよかったと思った。急に隆裕が恋しく

なった。そして、自分はいつまでも隆裕の妻なのだと安堵した。

啓一郎の帰りを見送って寝室へ戻った志津子は、薄暗い中にぼんやり力なく立っている加寿美を見出してどきっとした。

「どうしたの？ ママ心配かけて悪かったわ。御免ね」

加寿美の両眼は、キラキラしていた。

突然、わアッ！と声を上げて少女は母の胸に飛び込んだ。すくすくと育った少女の突進を受け止め兼ねて、志津子は二、三步後退して仰向けに倒れるのを防いだ。

「バカバカッ！ ママのバカッ！ アタシ、ママなんか嫌いだ！ 大ッ嫌いだ！ ママなんかお嫁に行っちゃえ！ 杉原のオジサマンとこへ行っちゃえ！ バカ！ バカッ！」

少女は抱き止めている志津子の腕の中で身悶えしながら、拳を握

りしめてママの胸の膨みを力を籠めて叩き続けた。

「痛い、痛い、痛いワよ。許して！」

無抵抗のママをぶち続けながら、拳に伝わって来る丸い弾みの快よさに少女は安堵した。そして見上げた母の顔が泣きながら優しく微笑んでいるのを見ると、急に済まない気持になった。

志津子を突き除けて少女はベッドに突っ伏して鳴咽した。ママはそっと背を擦り、柔らかに肩を抱いてくれた。

「ママ、どこへも、行かないで、アタシを、一人ぼっちに、しないで、ね」

途切れ途切れに訴える少女に、志津子はこっくり頷いた。そして少女の髪を撫でながら少女の頬を自分の頬に押し当てて柔らかくこすった。少女の甘い香りがした。濡れてびったりと合わさった頬に流れる二人の新しい涙も、暖かく気持ち良い涙だった。（終）

### 奇譚クラブ旧号の在庫案内

本誌は復刊以来、すでに三十五号を数えました。現在既刊の中左記の通り在庫しておられますから御入用の方は、お早い目にお申込下さい。既刊の中、すでに若干の売切品が出ておりますが、売切品の補充は絶対に出来ませんし、在庫している中でも、残部の僅少なものがございますから、欠号は今の中に御求め願います。

#### ★復刊号の分

復刊第1号（昭和30年10月号） 〆売切〆  
復刊第2号（昭和30年11月号） 〆売切〆  
復刊第3号（昭和31年4月号） 〆売切〆  
復刊第4号（昭和31年5月号） 定価二百円

復刊第5号	復刊第6号	復刊第7号	復刊第8号	復刊第9号	復刊第10号	復刊第11号	復刊第12号	復刊第13号	復刊第14号	復刊第15号	復刊第16号	復刊第17号	復刊第18号	復刊第19号	復刊第20号	復刊第21号	復刊第22号	復刊第23号
昭和31年6月号	昭和31年7月号	昭和31年8月号	昭和31年9月号	昭和31年10月号	昭和31年11月号	昭和31年12月号	昭和32年1月号	昭和32年2月号	昭和32年3月号	昭和32年4月号	昭和32年5月号	昭和32年6月号	昭和32年7月号	昭和32年8月号	昭和32年9月号	昭和32年10月号	昭和32年11月号	昭和32年12月号
定価二百円	定価二百円	定価二百円	定価二百円	定価二百円	定価二百円	定価二百円	定価二百円	定価二百円	定価二百円	定価二百円	定価二百円	定価二百円	定価二百円	定価二百円	定価二百円	定価二百円	定価二百円	定価二百円

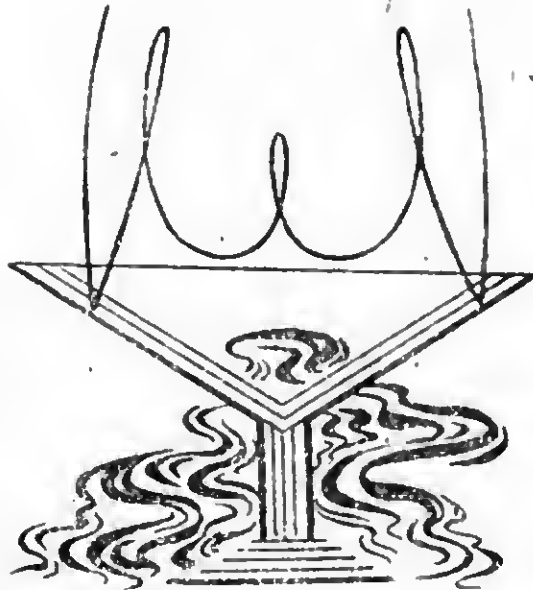
復刊第24号	復刊第25号	復刊第26号	復刊第27号	復刊第28号	復刊第29号	復刊第30号	復刊第31号	復刊第32号	復刊第33号	復刊第34号	復刊第35号
昭和33年2月号	昭和33年3月号	昭和33年4月号	昭和33年5月号	昭和33年6月号	昭和33年7月号	昭和33年8月号	昭和33年9月号	昭和33年10月号	昭和33年11月号	昭和33年12月号	昭和34年1月号
定価二百円	定価二百円	定価二百円	定価二百円	定価二百円	定価二百円	定価二百円	定価二百円	定価二百円	定価二百円	定価二百円	定価二百円

〇本誌復刊号は全部送料は当方にて負担いたします。故、誌代のみお送り下さい。六冊以上一箱にお求めの方は、手札型写真三枚、十二冊以上一箱にお求めの方は、ヤビネ版写真三枚贈呈いたします。

# 愛好家の記録

——コプロ者のひとりごと——

とやま かづひこ



(64) はじめに沼氏へ

十月号で、小文に対する御見解有り難く拝読しました。確かにおっしゃる通り、かづひこは自分を『M』と見ています。けれど、次のような説は如何でしょうか。

竹村文祥氏の新刊『性に関する九八章』のなかに、Mの解説をして、

Mの心理のなかには、Sの心理がある。

つまりマゾヒストは、同時にサディストである。

と述べておられます。全文を転載したいのですが、手元に本がありませんので、文章の要旨を御紹介しておきます。自分を正しとするために、都合のよい文章のみを取上げよう

とするものではありません。こうして、何回にも亘って、マゾ的な文章を書いていながらも、かづひこは自分の体内には、MとSが同居している、とまだ信じております。

但し、この素朴な考え方が、もしも学問的に違っているということならば、訂正するに決してやぶさかではありません。黒田史朗氏へのお答えも右と兼ねさせて戴きます。

なお、十月号一七一頁の沼正三だよりで、乗杉貴代子氏に便りされる文体は、その内容にもよりましですが、非常にやさしく丁寧で下から仰いで答えておられる様子をアリアリと感ぜられます。『ウマの分際で……』と、極端に下降し、はるかに高い所に住まう女主人

人への、おそろおそろという調子で答えておられるその文調が、かづひこに対しては威丈高な云い方にガラリと変る、その変化振りに、当事者として深い興味を感じました。(沼さんは、ほんとうにシンからマゾヒストなんだな)

かづひこは、一七一—一七二頁のあなたの便りを、そう感がい深くおもいつつ拝見したのです。

こうなると、あの『家畜人ヤプー』が惜しまれてなりません。

新しいKKが来ると、封を切る手ももどかしく、先ずヤプーの全文を胸をドキドキさせて読んだものでした。

プロットや、道具立てには、かなりの不自然さを感じさせられながらも、ヤプーの生態は本当に憧れそのものでありました。

どうか、沼氏よ。一日も早く、ヤプーをつづけて頂きたい。天下幾百万のマゾ党を代表して、この機会に切におねがいするものであります。

### (65) 飛んできたもの

都電は新宿へ向って走っていた。

暑い八月の昼さがり、九段下から麴町へ。

この辺りは東京でも景色のよいところ。

かづひこは週刊誌を読む目を一寸休めて、

外の景色へ見るともなく視線を向けていた。

と突然、かづひこの左の頬へ、冷い水のし

ずくが、ピッと飛んできた。

冷く、ヌルリとしたその水滴は、かづひこ

のメガネと、頬へハリついた。

(何だろう)

ハンカチを取り出して拭こうとするとき、

その水滴の原因が判った。

かづひこの一人おいた左隣の席に坐ったサ

ックドレスの女性が、どうやら犯人らしい。

彼女は、ハンドバッグから紙を取り出して

澄ました様子で口の廻りを拭いている。

どうも察するところ、窓から唾か痰を吐い

たらしい。

かづひこの頬に飛んできた水滴は、恐らく

彼女の口から吐き出され、ソレが窓から吹き込む風に乘って、丁度かづひこの顔に向って飛び込んできたものらしい。

ハンカチで拭くのも惜しく、ソッとその水滴を指の先にとって、においをかぐ。

ツバキ特有の乾草のようなにおい。

(たしかにあのひとのものだ)

ひそやかな、乾いたにおいに酔いながら、

一しゆんのコプロの世界に遊んだ思い。

顔や手に、胸に、ふざけて唾を吐きかけら

れた経験は、かづひこにもある。

かけられるときの何ともいえないスリル、

精神的な卑屈感。そしていつまでも皮膚に残

るヒヤリとした水滴の質感。

これも又、彼女のからだから出たもの。

液体と同じ味わいをもち、しかも不潔感が

殆んどない、プレーンソーの味。そこにかづ

ひこはたまらない魅力を感じるのだ。

### (66) トルコ風呂にて

友人が、新しい形式のトルコ風呂を開業

したから遊びに来いというので一夕、様子を

見にゆくことにした。

トルコ風呂と云っても、普通のとは一寸異

り、婦人を主なお客様とする『美容風呂』と

云うべきもので、フランスからもってきたの

だという。

木製のカマボコ形の桶に寝て、首だけスッ

ポリ出し、桶の中の裸の体を、四方八方から四十度以上の熱で、蒸すのである。

スイッチを入れて十分ほどすると、ジワジワと全身に汗が吹き出る。

桶の足のところには小穴があり、その穴からはビニールのパイプが出ていて、全身の汗は一カ所に集り、やがてポトリポトリとシズクとなって、パイプを伝ってコップに集められる。

一回の入浴で、平均コップ半ばいの汗が取れ、実に気持がよく、忽ち二キロくらいは瘠て、全身美容になるそう。

かづひこが現場を見せてもらっていると、丁度三十くらいの上流婦人らしいのが入ってきて、かづひこには目もくれず(風呂の従業員とも思ったらしい) この桶におさまった。

タバコ一本すい終る頃から、見てみると小さな水滴が、ポトリ……ポトリ……とコップに溜ってゆく。

例によってかづひこは考える。

美しい人のだったら、自分の口をコップの代りにして、思う存分、汗の味を舌にころばせてもらいたい。御本人が、全然気づかぬ間に、ソツとあこがれのものを、パイプ伝いに賞味できるとは、それこそ美酒の泉。コンコンとしてつきさるうまさに、おもわずも酔い痴れてしまうことであろう。



## (67) 蹴られる喜び

都電の日本橋から銀座までの出来事。

かづひこのスグ前を、サックドレスの颯爽とした女性が、ハイヒールでステップを上った。

信号が青に変わり、電車が動き出そうとするので、あわてて乗ろうとするかづひこの左膝を、彼女のハイヒールの踵が、突然、強く蹴った。

蹴った方も、ついやったことだし、さすがにかづひこだって、まさか蹴られようとは思わなかった。

痛いというより、軽いショックと云った感じ。

彼女は気づいたのかどうかは判らないが、そのまま車内へ入ってゆく。

かづひこの白っぽいズボンには、鮮かにハイヒールの跡が、黒い泥で印刷されたようにクッキリと押された。

電車は案外、空いていた。

蹴った御主人さまを探し求めて、車内へ進むと、いた、いた。

つんとすまして、英字紙に目をやっている彼女の案外の美しさは、かづひこの目を捉えて離さない。

(あなたは、ぼくのからだを蹴って下さった。どうぞ思う存分、腕でも顔でも、そのハ

イヒールで蹴って、踏みこじって下さい)

心の中でつぶやいた。

蹴ったときの彼女の表情なり身体のかなしから推して、おそらく彼女自身、蹴ったことを意識はしているに違いない。

まして、空いている車内だもの、おまけにチラリとかづひこを見たそのまなざしに、充分気持の動きが感ぜられる。

軽いタッチのマゾヒズム。これも又、ロマンチックマゾと云えよう。

## (68) 馬になつた騎手

乗馬の愛好家に読んで頂きたい文章があったので紹介しよう。

以下は八月十八日の内外タイムス。筆者は馬の研究家として有名な小津茂郎先生。

題は馬になつた騎手。

この頃、女性の乗馬熱も盛んになってきた。三越のデパート嬢や日航のステエワートが、熊ならぬほんとの馬にまたがってお馬のけい古である。また映画女優も、これは撮影のためにせっぱつまって馬乗りを実演する。

という達文の書き出しが、先ず惹きつける。

つい先日、松竹の有沢正子が「花嫁の抵抗」で馬にのつたのはいいが、ヒザをすりむいて「もうお馬はコリゴリ」といったと

か。これは乗馬ズボンをつけ、長靴をはいたところが、その下がパンティーだけでは膝の内側をすりむくのが、あたりまえである。ご婦人でも馬にのるときは、男のような長いズボン下をはかないとすりむいてしまう。しかも、日本の女性は横のりの婦人鞍でなく、男用の鞍にそのものズバリとまたがってしまうから大したものである。

さすがに馬の博士といわれる小津先生だけに鋭い目を向けている。

吾々は乗ることよりも、乗られることにより魅力を感じるが、乗る方は、このように快味を満喫されるのであろう。

かづひこは、この文章をくり返し読みながら、よくイギリスのニュース映画『ワールドニュース』に登場されるエリザベス女王の颯たる乗馬姿を思い描いたのであった。

## (69) 文化トイレ

デパートをブラつくと、時々面白い品物にぶつかる。いつぞや御紹介した、ストックینگシーカー——33年2月号——などもその一例だが、ここに御紹介する『文化トイレ』なるものも、我々としては仲々、興味が深いので煩をいとわず、同品のカタログから、要項を転載してみよう。

本便具は西洋式腰掛便器の馬蹄型座板を、改良工夫して、これに折畳み式の脚部を取付

# 秋の縛り時代劇から

嵯峨美也子

けたもので、用便の際両股を開き、御尻を下した時、両股の大腿骨の当る部分を、およそ股の太さに凹ませてあるので気持ちよく腰を掛けることができます。そして高さは日本人の標準体軀に合う様、適当の高さになっておりますので、からだの目方が自然にお尻と股の部分にかかり、大していきむ必要もなく、ごく気持ちよくすらすると用便することが出来るのであります。この処が本便具の最も特長とするところであります。

色は純白色の特殊塗料を四回乃至五回塗付

し、入念に仕上げてありますので、すべすべしておりますから見た目も美しく、お掃除も簡単にすみます。

この「文化トイレ」はごく楽な姿勢で用便することが出来ますので、便秘の方、痔疾の方、血圧の高い方、肥満した方、幼小児、妙令の御婦人、特に妊娠婦の方々には最も適した便具であります。

云々とカタログで云っている。

現品は極めて簡単なものだが、この道具、コプロ党にとっては、アイディア次第で面白

く使えそうにも思える。

というのは、10月号『文部大臣の専属室』マリアンヌの手記——一六二頁で、美女の液体を摂取するのにこの文化トイレに似た器具を使用する場面があるが、現品を仔細に見るとこの「文化トイレ」うまく使うと、液体や固体を取るのに重宝便利と思えるのである。

このほかデパートには、改良型の便器などがよく陳列されていることもあるので、かつひこは、その売場の前を通ると、胸をときめかすことがある。

姿はさぞ見ものだろう。

刑場の露と消えんとするところを西郷隆盛に救われる。大曾根監督の「花の生涯」では淡島千景の村山が鴨川原で晒しの刑にあうシーンがあったが……

秋の松竹、大映、東映等各社の時代劇の大作には、大いに女優連の素晴らしい縛りシーンを見せてくれる作品がある。

最近の封切作品で今後の作品をシナリオからピックアップしながら書いてみよう。

先ず松竹の大作、高田浩吉、松本幸四郎、嵯峨三智子らの松竹時代劇三十五周年記念作品「大東京誕生、大江戸の鐘」（監督大曾根辰夫）は江戸から東京への歴史の大転換期に江戸を舞台に、小栗上野之介（幸四郎）勝海

舟（浩吉）など歴史上有名な人物が登場するが、この中のヒロインが嵯峨三智子のお竜、江戸娘で薩摩の御用盗に手ごめにされ、大川へ身投げしようとするのを、上野之介に救われ、彼を慕うようになる。ところが彼女を手ごめにした薩摩兵に出合いこれを刺殺する。捕えられて高手小手に縛られ、ハダカ馬に乗せられ、江戸市民の同情の眼を浴びながら、江戸市中を引廻しにあう。

嵯峨三智子の本縄で縛られて、引廻される

さきの松竹ラッキーマンセブンボーイズ売出しの「七人若衆誕生」で林与一の八弥と佐乃美子の茶屋の娘が女犯の罪で「石子詰」の刑にあう、片肌を脱がされた上から後手縛りにされた佐乃美子が、後から寺侍にこづかれながら引出される。砂利の上に坐らされ、男をかばう痛々しいシーンは新人の熱演で仲々よいものだった。最後は折からの雷雨の中で濡れながら……後手もキッチリと縛られていた。それから竹矢来の中で縛られた姿で穴の中に突き落され、石を詰められる。顔だけ

出した痛々しい姿は後半になって幻想で現われる。迫力のあるシーン。この作品で、富士真奈美のお梅も猿轡で縛られ、刀を突きつけられる。

この第二作「七人若衆大いに売出す」にもまた縛りシーンがある。女スリお清は、はじめグラマー泉京子だったが、これがカリブソ娘、浜村美智子に変わった。人気落目の浜村が、イキな着物の縛られ姿で人気の目を出すか見もの。大映の川口のふも縛られ姿を見せる予定。

泉京子といえば、新人監督酒井欣也——往年の大スター酒井米子の息子——の第一作品南条範夫の「大盗小盗」で、女賊おきくになり最後は三橋美智也の小盗らとハリツケにあう。ポリュウムのあるグラマー泉京子のハリツケ姿も大いに目を奪うものがあるう。

「浮世風呂」でも、湯女山鳩くるみが一寸縛られたが、大したことはなかった。次に大映作品だが、社運を賭して製作した「日蓮と蒙古大襲来」(監督渡辺邦男)で、日蓮を慕う淡島千景の白拍子吉野が、鎌倉幕府の侍に捕えられ、日蓮の行方を白状せよと折かんされる。

さきの「新平家物語、静と義経」で淡島は静御前になり、捕えられて太縄で縛られ折かんされたが、今度も白拍子姿で責められると

は運命的だ。痛々しい中にも美しいだろう。「銭形平次捕物控、鬼火燈籠」で、新人岸正子が可憐な縛られ姿を見せてくれたが、彼女と梅若正二のシリーズもの「山を飛ぶ狐姫」で三田登喜子が能楽師の娘で男装になり、能面を探すうち捕えられて縛られ、いわゆる「鉄の処女」の刑にあおうとする。「天馬小太郎」でも美しい縛られシーンを見せた三田のリリシイ男装の縛りシーンは楽しみである。

社長命令とか、最近大映作品に縛りシーンが多い。「消えた小判屋敷」で毛利郁子が妖艶な姿で吊り下げシーンにあうのもギョッとさせたが、今度の「執念の蛇」では、ラストで裸の毛利が何匹もの蛇にまといつかれ、水中でのたうつ物凄いシーンがある。気が弱い女性などは気絶しそうだ。それが縄にまといつかれた感じ、この中で近藤美恵子が女中で悪者に拐かされ、猿ぐつわ、前手縛りをみせる。一寸わかりにくい……。

「勝新太郎の「血文字船」が婦女誘拐事件を扱うもので、悪支那人のため外国へ売飛ばされる日本の女達の痛ましい姿を描くが、地下牢で二人づつ柱に括られた哀れな女達をみせるらしい。小野道子、浦路洋子らが活躍。

次ぎは時代劇の東映、「旗本退屈男」で長谷川裕見子が、顔に黒い猿轡、身体はガンジ

ガラメに縛られ、海老の様に畳の上を這いまわる。さすがにベテラン、今しばらくでスクリーンから消えるかと思うと惜しい。だが若手は続々責出されている。大川恵子が大なるものだろう。「怪傑黒頭巾」で大槻東一郎の姉娘早苗になり、松島トモ子、横木智恵子の姉妹と共に幕府に捕えられ、吊下げの刑にあい鞭打ちされる。美しい顔が苦痛に歪むのが痛々しい。市内を縛られたまま追われてゆくのもよかった。

次の「紅顔無双流」では徳川家康の娘鮎姫で、男姿に化けて逃走中を捕えられる。柱に繋がれているところを、錦之助の番之助に助けられるが、危難に逢う美女にはもってこいである。

彼女に次いで、花園ひろみ、高島純子だろう。花園は「鳴門飛脚」で女目明しになり、阿波の侍に捕えられる。勿論、橋蔵の不知火小僧に救われるのだが……。高島純子は「小天狗霧太郎」で盲目の照姫になり、よく可愛がられる。松竹スターになった紙京子も一緒に縛られ鞭打たれる。

新東宝作品にも縛りシーンが最近多いが、小畑絹子の「青蛇のお蘭」が大立廻りの末、捕えられたり、身体にものを云わす、よい姿を見せてくれるだろうと期待される。

——女体散華異聞——

機 上 切 腹

法 谷 四 郎

機 上 切 腹

大陸の夕ぐれの空は紅く、火の球の様に地平線を染める夕陽は、まるでお芝居の祭壇であるかの様に草も木も羊の影も紅く彩って居ます。その夕焼けの空をさつきから力無く飛んで行く一台の戦闘機！

激しい戦を漸く脱けてきたのか、ともすれば不調になろうとするエンジンをややし乍ら、この弱りきった機体を運んで行く一人の飛行士。

噛みしめた唇、頬を伝わる涙、夕焼けに燃え上るその顔は、飛行帽に見えかくれするその美しい顔は、ああ女です。

牧野光子、彼女は白系ロシア人を母に持つ混血児でした。ソ聯との戦が満州で始まると

共に、彼女は志願して日本派遣軍の飛行隊附きの無線係になったのです。スパイではないかと疑われ乍らも、彼女は沢山ロシア文の暗号を解読しては多くの手柄を立て、今では飛行隊の人気者なものでした。

所が昨夜おそく光子は暗号文らしい手紙の中に、ロシア軍がA地区に集結し、攻撃の手筈を整えつつあるらしい節を読みとったのです。勇躍した彼女は司令官に其旨報告すると共に、自らも一台の戦闘機を操って爆撃行に参加することを願ったのでした。光子は戦争前、女流飛行クラブの有力な一員として数多くのトロフィーをもらい、女乍らも素晴らしい操縦技術の持主であったので、司令官はそ

の願いを特別に許可したのです。

未明、砂煙りをけって舞い上った三十数台の爆撃機と護衛の二十台の戦闘機の中に光子の凛々しい飛行服も混っていました。

大爆撃隊は翼を振り、腹一杯の爆弾をかかえて山を野を過ぎました。所が目的のA地区まで五分と云う時、突然最前方にいた第一戦闘隊長佐藤少佐の機がグーッと舞い上りました。ハッと目をこらせば上空にはゴマをまいた様な無数の点、云わずと知れた敵ミグ戦闘機の待ちかまえた姿です。

それから先の事は、光子にとって胸を抉るよりも悲しい光景の連続でした。不意を討たれた味方の戦闘機は、姿勢を立ち直す間もな



く火を吹きました。ビューン、ビューンと舞い降りるミグ、火の柱を吹いて落ちて行く爆撃機、その揺れる翼に悲しく見える日の丸。ミグに体当たりして共に火の球になって落ちて行ったのは、光子に好意を寄せていた長岡少尉でしょうか。

追い迫る二台のミグを交わし雲に突込んだ光子が我にかえった時、空の戦場には仲間の姿はもとより、ミグの姿ありません。しかし其の時、暗号も使わず、あけっぱなしのロシア語で、基地と通信する敵隊長の声が聞こえてきたのです。「……日本軍爆撃隊、全機撃墜。戦闘機、撃墜十数機……日本軍は偽の暗号に見事にかかった……又、試みよう……」

光子は唇を噛みました。嗚呼彼女の過ちが日本軍飛行隊の全滅を招いたのです。この上は死より外にはない。味方の散ったこの空で、いさぎよい自爆をして……光子は息を呑むと、グーッと機首を立て直したのです。しかし敵の謀だけは、何としても味方に知らせねばなりません。さもないければ、日本軍は再び過ちを冒すに違いないのです……。

思いつめて再び基地へ……。光子の頬に止めどもなく溢れる涙、想いは千万無量、千々に狂い廻ります。

基地に帰って報告、軍法会議、スパイではないかと疑って居た人々、そして敵の暗号についての彼女の言を今後、誰が信用してくれる

るでしょう。

真赤な夕焼けの空を飛ぶ孤影悄然たる戦闘機の中で光子は身を揉んで苦悶するのです。

怪し気なエンジンの響き、知らない間に撃たれたのでしょうか。風防ガラスにも翼にも、弾の跡が見えます。

やがて基地が見えて来ました。なつかしい飛行場、しかし、昨日まで並んで居た飛行機は、もう居ないのです。

機影を見つけたのでしょうか。基地からの呼出信号が鳴り響きました。

「……こちら基地。〇時〇分、風速〇米、東南、着陸可能……」

光子はジッと目をつぶりました。着陸してすべてを報告し軍法会議を受けるか。その結果が無罪であろうとも生きては居れぬ吾が身です。報告してしかる後自ら生命を断つ。しかし其の様な機会があるでしょうか。自爆、しかし一台でも大事な日本の飛行機なのです。我儘は許されません……。

光子は、キッと顔をあげました。それはもう、死を決した者の持つ涙もない美しい顔でした。

右手が通信機のスイッチにかかりました。赤いネオン管がボツと点って、通信機は無事の様です。

「……こちらは牧野。こちらは牧野……」やがて思いがけぬ岡野司令の声がレシーバ

ーを通して聞こえて来ます。参謀、副官何れも待ちあぐねて光子の報告を待っている模様です。

「……報告。吾が爆撃隊はA地区上空において、敵、ミグ戦闘機の襲撃を受けて全滅。第七戦闘機隊も殆んど戦死したものと思われま……」

一瞬、レシーバーからうかがわれる基地司令部内は死の様に静まりかえり、ついで怒声、叫声が入り交って聞こえてきます。そしてそれらの騒ぎをおさえて響く岡野司令官の声：「……牧野。直ちに着陸して詳しく報告せよ……」

遂にその時がきました。しかし光子は落着いて機上からの最後の報告を続けるのです。

「……昨夜、私が解読した暗号は偽のものでした。これは一三一例と一四三例を組合わせて出来たもので、敵はもう一度この暗号を使って吾が軍をおびき出すつもりです。今度こそその裏をかき、無為に散った私共の仇をうって下さい。お願い……」

「……牧野。直ちに着陸せよ……、牧野。着陸せよ……」

不安気な岡野司令官の声……。

「……敵は近日中に必ず、この暗号を今一度使います……。その時こそ、反撃の機会です。私の机の上にある黄表紙のノートに、こ

の解き方が書いてあります。暗号を解き、それにもとずいて次の作戦を立てて下さい……」

光子は深く息をしました。基地から尚も光子を呼ぶ声がレシバーにひびきます。しかし遂にその時がきたのです。

「……皆様。永い間色々お世話になりました。大事な方々を大空の華と散らしてしまつた牧野は、この飛行機の中で自害します……いいえ、覚悟の上です。牧野は第七戦隊の皆様と散りたかつた。しかし暗号の事だけが気にかかつて戻って参つたのです。でも生きては皆様にお目にかかれません。光子は、この飛行機の上で、日本の女としてお腹を切つて散ります。切腹、父の短刀で、父の言葉通りに。お腹を切り裂いてから着陸します。飛行機はきつとこわしません。では、準備します。一度スイッチを切ります。……」

「……牧野、早まっていけない。牧野……」呼びかける司令。しかし、スイッチを切つたものか、もう何の応えもありません。

ガラスでかこまれた司令室の窓の外遠く、光子の飛行機が施回しているのが見えます。光子の悲壮な心をいたんでか、エンジンの調子も幾分立直った模様。

岡野司令始め将校達は、ジツと其の黒い機影をみつめています。誰の心にも、あどけない光子の姿が、そして其の美しい光子が自ら死に行くのを止める事も出来ない焦慮が、嵐

の様に駆けめぐって居ます。光子を乗せた飛行機は二度、三度名残惜し気に基地の上を旋回します。

そのジェラルミンの生き物の中で、白系ロシアの混血児、牧野光子は自らの肉体を切り裂くのです。飛行服のボタンを外し、前をくつろげ、ベルトを押し下げ、そして白刃を逆手に、刻々と死の用意を整えて居るのです。切腹！自らの手で下腹部を切り裂き、臓腑をくり出し命を断つ。無惨な、しかし、美しい死です。

男でも困難なこの割腹を乙女の身で、しかも飛行機を操縦しながら光子は行おうとするのです。

再びスイッチが入りました。耳をすます一同の上に、爆音に交って落着いた光子の声が聞こえてきました。

「……皆様、とうとうお別れの時が参りました。牧野光子は今から、キノ2型戦闘機上で割腹いたします。力の限り、切り裂いて、腸も掻き切つて、日本の女として見事な切腹をして御覧にいきます……いいえ、苦しくてもきつと切つて見せます。見て頂けないのが残念ですけれど、でも通信機をはめたまま切腹して、出来るだけ死に様を御報告します。日本の女がどんな風に死んで行くか……。きつと、うめくでしようけれど、それは許して下さい。それから若し飛行機の姿勢が狂ったら

知らせて下さい。……」

再び高まる爆音、

岡野司令は旋回する飛行機に向つて敬礼すると副官を通じて急ぎ全基地に向つて事の次第を述べ、光子からの電波をキャッチする様に命令します。

光子の最期をスピーカーの前で肅然と耳をすます全基地の人々……。

姿が見えないだけに死の前の異常な静けさが辺りを覆います。

深い深い息がスピーカーに響きます。

「では……」

深い息、一息、二息、

「うっ」

肺腑をえぐる様な気合と共に押し泳がえた呻き声。

「うーっ、うっ」

充分に突立てたか、ガバツと吐き出された息。

深傷をこらえる激しい息使いが、物凄く響きます。不意に飛行機が、グラツと傾きました。高度が下がる。ハツと見守る人々が息を呑む間もなく、機体は再び正常の位置にもどりました。血にまみれた短刀を離して光子は操縦桿を握つたのでしよう、その傷ましき。高度を高くとつた飛行機から又、光子の声が聞えてきます。

「……う、うっ……こ、これよりひ、ひき廻

わして……」

「ウーッ、ウム、ア、ア、キ、切れない、なんの……ウッウームッ……」

切な気に大きく呻めくと、軍靴でも蹴ったのでしようか。ガチャンという音が聞こえてきます。苦痛に身をよじる光子……。

「……ハッ、ハッ、ハッ、まだ、まだ足らぬ

こ、この通り……」

「ウームッ」

喰いしばった歯から洩れる凄惨な呻き声、右脇腹まで掻き切ったのでしよう。ドサリと前へ突っ伏した光子。真白なお腹は、バックリと口をあき吹き出す血の糸は操縦席一杯にふりそそぎ、計器も操縦桿も血にまみれてい



ぞ、臓腑が……ウ

ム、……司令、ア

ッ、ウーム、……

司令、光子の腹

は、い、今、四寸

程……肉が、ハッ

はじけて……」

四寸も切り裂か

れた腹は、脂肪の

間から血にまみれ

た灰白色の臓腑を

少しずつ押し出し

ているのでしよ

う。しかし光子は

尚、右脇腹迄引き

まわそうとするの

です。

「いざ、くっ、く

くく、ああっ、

ああっ……もっと

右へ、ああっ、

ます。

「牧野、……牧野……」

「ウーッ、ウムむむっ……司令、み、光子

は、切りました……こ、この通り、もう腸、

腸が溢れて……アアッ、なんの、ま、まだ、

ぐっぐっむむっ、むむむっ、ああっ、アッ、

くくくーっ、か、風は……」

着陸しようとするのでしよ、光子は風

の方向、高度などをききます。

「ああっ、ううっ、むうっなんの、なんのこ

れしき、うむ、ううむ、できぬ、うむ腸が邪

魔、は、はらわたを……ううっ、はらわたを

切って、ええっ、ウウーっ、うううーむっ

……ああっ」

操縦桿にまつわりつく腸を自ら切り裂いたか。余りに悲壮な光子の最期に、岡野司令始め寂として声もありません。しかし、一文字に自らの腹を裂き、腸まで掻き切った光子は、その深傷をこらえて、着陸が出来るでしよ、あわただしく空の一点を見つめるのみです。

「……目が、目が……むむーっ……なんの、

あうっ、ウウム、ウム、べ、ベルトがしまら

ぬ、ああっ、うむ、む、むうっ……」

臓腑が溢れるほど切り裂いた腹に、金属と革のベルトが喰い込みます。しかし、もうそれは無理、恐らく締めあげれば締めあげるほ

ど腹中の臓腑は傷口からこぼれ出し、ガバガバと血潮が吹いているでしよう……。

しかし遂に飛機は着陸姿勢に入りました。

ヨロヨロとよろめき乍ら……。

唇を噛んで見つめる人々。誰の心にもゴワゴワした飛行服の前を押しひらき、血と腸を抱き乍ら歯を喰いしばって操縦桿を握る光子の姿が浮んでいます。

爆音に混って、堪えても、堪えきれぬ光子の苦悶の声が時折、耳を刺す様に聞こえてきます。

「むむっ、むーっ、くくくくっ、あっ、ああっ、むうっ……くくくくっ、……ウーッま、ま、牧野、た、ただいま着陸っあうっ、……ウウっ……ウウウウーっ……」



## 切腹フォト談義

南方 純

### (一) 短刀保持の型について

代理部発売の「女体自刃悦虐図」について八月号読者通信で岐阜のK・N生氏が右手の短刀の握り方が逆ではないかと指摘さ

グラツと傾むいた機は、たたきつけられた様に着陸しました。片一方の車輪がはずれて機体は傾むいたまま、しかし遂に牧野光子は腹を切り、腸さえかき裂き乍ら無事に血にまみれた飛行機を基地に戻したのです。

サイレンをあげ近寄る救急車、司令、副官達。

しかも皆が到着する前、傾むいた飛行機の窓が開き、飛行服に身を包んだ光子がヨロヨロと立ち上りました。

その右手には短刀が……。そして静かに胸の方へ……。

「牧野、牧野……」

呼びかける司令に、かすかにうなずきながら、その身体は短刀を抱いてガックリと……。

「ウウッ、ウウッ、あうーっ……」

断末魔の苦悶の声、二度、三度身をよじり座席に摺まつてのけぞると、柄までとおった短刀を引きぬき、やがて静かに静かに座席にくずれ落ちたのです……。

美しい金髪を飛行帽で包み、しなやかな肢体をゴワゴワした飛行服が包み、幅広いベルトが断ち切った腹部を締めあげた牧野光子はここに壮烈な機上切腹をとげたのです。亡骸に敬礼する一同、火の球の様に地平に落ちる太陽と、光子の魂と……、大陸の夕ぐれは黙然とたたすむ人々の影を、長く長く地に這わせて居ます……。

(終)

思ったので同感の意を読者通信で述べておいたところ、偶然演劇雑誌で、本朝二十四孝の勝頼切腹の勘弥の写真を見ると、なんと「悦虐図」通り右手の握り方が逆になっているではないか。さあ、こうなると心がいささかおだやかでない。早速、本誌旧号その他を取り出して調べて見た。どうも理窟ぼくて恐縮であるが、切腹の場合の刀の握り方には幾通りあるのであろうか。右手をR、左手をL、小指の方を腹につける形即ち受ける形をU、拇指の方をつける形即ち押える形をOと記号をきめ、腹に近い方を先に書くことにすれば、RuLu・RuLo・LoLu・LoLo・LuRu・LoRu・LoLo・LoRu・



LuRoの八個の組合せが出来、これに片手の型 Ru:Ro:Lu:Loを加えれば十二個の型が可能となる。勿論両手で握った場合、こぶしとこぶしの間が相当開く時もあり、ぴったりつく場合もあり、又片方のこぶしの上にかぶせて握ったり、掌を添えたりすることもある訳だが、余り細分すると切りがないから大まかにこの十二個の型に分けることとする。

合掌して両手を組合わせた場合、左手の拇指が上になる人と、その逆に右手が上になる人とがあり、それには遺伝関係があるとされている。自然に出来る組合わせの逆を無理にやれば、変な感じがして落着かない。まして切腹などという壮挙(?)に、握り方は最も自然なやり易い型をとるのは当然で、その人その人で勝手な握り方をするであろう。右ききも左ききもあり、あながち「悦唐図」が画空事とはいいい切れない。

昨年の十一月号から本年十月号までの本誌について切腹の口絵、挿画、カットを調べて見たところ、十六例があった。Ruの片手型が十で断然多く、次に RuLuの両手型が三、RuLoが一、LoRuが一、衣裳のかげになり、握り方の不明のもの一という事で「悦唐図」の RoLu型は見られなかった。

八犬伝第六輯巻之三にある栗飯原夢之助の切腹はLuRuという逆の珍型である。もっとも広く漁って見たら十二個全部は無理としても七八個の型は見つかるのではなからうか。

## (二) 豪華版切腹フォト

何億の資本を投下しても回収のつく映画とは異なり、ほんの一部のアブノーマルなマニアを対象とする切腹フォトは、採算の面で第一次的に制約されて、目をたのしませる傑作には容易にめぐり合うことが出来ない。そこで先ずは実現の可能性のないことを、せめてはイメージとして書いて見よう。

第一にモデル嬢であるが、容顔、体格等にすぐれているのに越したことはないが、相当の演技力が必要だ。特に表情がむずかしく、斯道の趣味を解するものでなくては無理であろう。余り圧倒的な肉体派よりは中肉で、やや表情に憂いのある人がよい。時代は江戸にとりたい。パーマネントで切腹はいただきかねる。長くたらしめた黒髪がふさわしい。

第二は場面であるが、大名の屋敷の内といった心で四段目の装置でいきたい。畳二枚裏返し白布を覆い、しきみを両側にかざり、後に白い屏風をめぐらす。出来るだけ本格的に小道具を揃えることと、擬態写真としてのトリックを充分發揮すること。

(第一景) 白無垢で正座。前の三方に据られた切先が光っている。

(第二景) 上着をはね、襦袢の前を開き、左手で腹を押え、右手で短刀を突きさそうとする。

る。

(第三景) 左脇腹に突き立てた瞬間。本紅使用。

(第四景) 左手を添えて下腹部臍の下まで引回したところ。切り口は出来るだけ写実的に工作すること。

(第五景) 右脇腹まで切ったが、苦しみにあたえかねて、左手を前について体を支えているところ。

(第六景) 再び左手を添えて右のあばらに向けてかき上げようとしているところ。初めて向って右後に介錯人を出す。介錯人は刀を引いて構える。

(第七景) カメラを左側面より向ける。やや前かがみになり、左手を挙げ首を打てと合図する。介錯人、刀を振り上げて延びた首筋をねらっている。

(第八景) 両手を前について、うつぶせに倒れている。黒髪が首筋にかかり横顔が見える。

(第九景) 介錯人が黒髪を掴んで顔を上げて差添で掻き首にしているところ。

(第十景) 台上に据えられた生首一つ。黒髪を乱し、まぶたにアイシャドーをつけやつれを出す。口から一筋血が流れている。目を閉じ、やすらかな表情。写真のトリックとして焼込も可能だが、芝居でやる本首のカラクリをつかった方が面白い。

薊 銀 十 郎 懷 手 帖  
あざみ きんじゅうろう ふしころで ちよう

## 妖 異 人 肌 人 形

緑 猛 比 古

## 一

その晩、風間利兵衛は堺の町奉行長谷川左右衛門のお召をうけて火急の要でアタフタと雨中に出て行った後、お小夜は、どうせ今夜は帰ってこないだろうと思ったから、下男に云付けて戸締りを固くして、早く寝床についた。

根締のゆるんだ緑の黒髪を、明日は結び直させるつもりでバラりと解いて、くるくると束に丸めて晒布で巻くと、急に頭が軽くなつて、お小夜は父の留守になにか仲々とした思いだった。

霧除けを叩く雨の音が次第に激しくなつてゆくうちに、ぐっすり眠ってしまったらしい。何刻であらう——。ホトホト表戸を叩く音にフトお小夜は眼をさました。

「まあ、この雨の中を、父上は帰ってこられたのかしら……」  
そう思うと、あわてて

「今すぐ……すぐあけますから……」

緋の長襦袢一つで、お小夜は急いで表戸にかけつけた。

心張棒を外すと同時に、サアーと雨風が吹き込んで、ガラリと開いた表戸から、絆纏を雨除け代りに、スッポリ頭から蔽った男が三人、ドヤドヤと乱入して来た。

「あっ——、お、お前達は……」

と、お小夜が驚天して叫んで、尻ごみすると、最後の奴がぴしやりと表戸をしめて、

「何でもいいから俺達と一緒に来い」  
いきなりお小夜を取囲んで躍りかかって来る。

「あれッ——た、たすけて……」  
と、云う間もあらばこそ、救いを求めるお小夜の可憐な口を手でふさぎ、もって来た手拭で素早く猿轡をかませると、もう二人の奴が、暴れるお小夜の両手を後に捻じ上げて後手に縛り上げ、両足を



小夜は思わずゾツと寒肌に鳥毛立った。  
「フッフ、堺でも評判の大小路小町のお小夜——。きようまで男知らずで通して来たようだから、俺がゆっくりと教えてやる……。未  
来永劫——その方の柔肌を保存してやるからなフッフフ……」

力まかせに結んで  
「邪魔のへえらねえうちに、早く駕籠にかつきこめ」

両手を縛った奴がそう云うと、

「おう合点だ」

土砂降りの中を、お小夜は、かっ  
ぎ出されて、駕籠に放りこまれた。

それから、どこをどう走ったのか  
。

どしんと乱暴に駕籠が降りて、か  
つぎ出されたお小夜の目の前に、総  
髪（おんがみ）の眼の鋭い男が黙然と突立ってい  
た。

男の背後にこんもりと青葉のしげ  
る天神の森が、晩夏の夜空に静まり  
返っていた。

「風間利兵衛の娘、小夜だな……」  
と、ニヤリと嗤った気味のわる  
さ。

ぬっと近づいた総髪の男が、いき  
なりお小夜の首を抱えて引寄せた。  
縛られる時がいて、はだけたむ  
き出しの肌に男の手がかかると、お

猿轡の顔が恐怖に歪んで、夢中でもかくお小夜を軽々と小脇に抱え込むと、怪しい男は天神の森の裏手の方へ立去ろうとした。その時――

「おう、ちよいと待ちな――」

音もなく奴等の前に、幻の如くぬうと現われた浪人がある。

ギョッと一同がかまえる処へ、ズイと割込んで

「台詞はすっかり聞かしてもらったぜ。この処、通り魔の様に次から次へと美しい娘をかつ拐っては、この結構な堺の街を恐怖のドン底に叩き込んでいたのは、さては手前達だったな――」

「ウーヌ、怪しい奴め。何者だ！」

「なーんだと、怪しい奴がきいて呆れるよ。お手前方は、一向に怪しくないに見える」

折から、雨の晴れ上った雲間に月が覗いて、この浪人の姿を照し出す。

白哲長身。苦味走った顔立ちの何処かに拗ね者らしい虚無的な蔭が浮んで、着流しの無紋の黒羽二重に、不可思議な謎めいた気振りが窺われる。

嗟ッ！ と物をも云わず、絆纏着の男達がいつ引き抜いたか七首の切先鋭く、突っ掛けるやつを、いとも無雑作にいなして素手であしらった。

一步、一步、総髪 of 男は小夜を横抱きにした儘、後退した。

「逃げるか――」

おどし掛けて、浪人は颯々と一刀を抜く。間髪を入れず、総髪 of 男の投げた一丸が、瞬間白煙となって地上にもくもくとふき上げると、忽然として、お小夜諸共二人の姿は没していた。

「フフ、逃がしたか。まあいいわ、これはチト面白くなって来たぞ」

白哲の顔を歪めて苦笑すると、浪人は何事もなかった様に、一刀をパチリと鞘に納めて悠々と歩き出す。

「風間の娘お小夜――。田所陣左の娘きぬ……松平兵部の娘いね――小松原伍兵衛の孫娘白妙、讃岐屋のお雪……こう数えてくるとこりやチト臭いぞ――。通り魔の奴がねらう女達はいずれも……ウーム、ひよっとすると……」

その浪人、薙銀十郎は思わず口に出してつぶやいていた――。蚊食鳥が三羽、五羽、羽ばたきを森にこだませて、銀十郎の背後から飛び立った。

## 二

その頃――。奉行所の奥座敷で顔をよせる二人――。

云う迄もなく、堺の町奉行長谷川左右衛門と風間利兵衛である。

桐一葉散って、世は徳川の天下になったものの、堺の街々も豊家の最後の運命を決した大阪の役には、尠からぬ戦禍を蒙っていた。或いは焼かれ、或いは壊されて、町人の町と誇った堺も瓦礫と化した。天下平定と共に堺の街の復興が叫ばれ、学識、手腕優れた算数に明るい長谷川左右衛門を、幕府は町奉行として派遣したのではあったが……。

普請奉行風間利兵衛を今宵、火急に呼立てたのは、そうした事とは凡そ縁遠い血腥ぐさい妖しい事件の為であった。

「……と、まあ、そんなわけで昨朝、川尻川に浮んだ皮を剥がれた裸の死体は、どうやら小松原伍兵衛の孫娘、白妙の様じゃ」

「何とも、上を恐れぬ不屈極まる仕業、一体、又如何様にして、その様な残酷な所業を致すので御座いますようや」

「さあ、それは早速にも取調べ致さねば判然とはせぬが、過日来よりの行方不明の娘御達を数えて見ると、わしにチト不吉な心当りがあるのじゃ――」



「と、申しますと……」

「よいか、驚くでないぞ。拐わかれた娘達を数えると田所、松本、小松原、それに讃岐屋善兵衛の伴の妻女となる。この銘々から考えて、どうじや利兵衛、何事か思い出さぬか」

「……」

「過ぎし日の大野……」

「呀——、それでは大野道犬一味の復讐とでも……」

「かも……知れぬて——」

云い終る間もなく、けたたましい騒ぎが門前から伝わってきた。

「申上げます——。唯今、風間殿息女、小夜殿が……」

「何！ 拐わかれたと申すのか——」

「ハイ、実は唯今、下男が駆け込んでまいりまして……」

利兵衛の顔は沈痛によるめいた——。

今こそ紛れもなく、大野道犬の子孫による何者かの復讐に違いあるまいと断定されたのである。

利兵衛の肩が、ガククリ落ちる——。

「小夜！」

その叫びは血を吐く絶叫であつた。

「さっそく手配せい——」

奉行の叱咤もうつろに聞いて、彼は「小夜！ 小夜！」と口走り乍ら、さうろうとして歩を運んでいた。

まざまざと想い浮ぶ、元和元年六月二十七日の朝の出来事——。

並松町の処刑場が、ぐるぐると利兵衛の脳中で激しく回転し始めた。

### 三

暮れ六つ頃——。

薙銀十郎は大小路大道の東の辻に立っていた。陰陽師の阿部晴明

が、ここに神符を埋めて陰陽を占ったとかで、人呼んで占の辻と云う。

「旦那——」

いつのまにか、後に来ていた鎌いたちの弥六が、銀十郎の袖をひいた。

「わかりやした——。てっきり凶星でしたぜ……。表看板は何の変哲もねえ人形師の屋敷が、一步ふみ込めば、ドンデン返しのおっそろしい化物屋敷だ」

——ふふ。人形師か……。

銀十郎は喉の奥で微かに笑った。我が意を得た時の、この男の癖だ。

「あいつでげす。お雪ちゃんを引っさらいやがった悪党野郎は」

「ふふ、てめえが岡惚れの讃岐屋のお雪は、どうしていたんだえ」

「さあ——、そいつがどうも変な按配で。実は旦那の仰有る通り、あの天神裏、俗に観音の地屋と称する戎之町を東に這入った古びた観音堂の床をめくれば、てっきり地下道が通つていやした。人一人十分立って歩ける穴を、どんどん進んでゆくと、突き当りに縦穴がぽっかりと口を空にあげてお星さまがキラキラだ。おあつらえ通り縄梯子がかかっていやして、あっしは難なく古井戸から這い上りやしたが、そこが一体どこだと思ひやす？ 人形師、石山梅道の屋敷の裏庭じやござんせんか」

銀十郎から秘策を授けられた、彼の腰巾着の鎌いたちの弥六。此奴素性を洗えば、浪速と堺を跨にかけた名うての巾着切り。

高須の遊廓でとんだしくじりをやり、地回り達に半死半生の踏んだりけつたり御難の最中、銀十郎に助けられてひどく恩に着てからと云うもの、事ある毎に銀十郎の片腕を買って出て、根は滅法に気のいい、いなせな男。況してや今度は、讃岐屋善兵衛の養子伴の

嫁のお雪が未だ嫁ぐ前、此奴が心底から惚れ込んでいた女であつて見れば、力の入れ様も亦格別であつた。

去る夜——、総髪の人形にもう一步でまかれた銀十郎が、川尻川の裸死体とこれを結びつけて、大野残党の仕業とにらんだ彼一流の推理眼は、総髪の男が忽然と消えた俗称観音地屋一带を怪しいと睨んだ。戎之町東へ三丁のこの辺りに昔、妖火出でて地下より観音像現われ、ここに一字の堂を建立して観音堂として像を祀つたが、今は風雨に曝され戦火に残骸を残して見る影もない、あばら屋となり果てている。怪しいと睨んで弥六に探らせたのであつたが……。

「月明りに辺りの気配を窺うと、シンとして宵を過ぎた許りと云うのに、いやに静まりけえってやがる。グルリと庭つづきに屋敷をひと回りすると、どうやら人形師の仕事場と覚しき辺りから一条の灯りが洩れていやした。灯りを頼りに近付いて、ソツと隙間から覗こうとしたが、壁の割れ目じや一向に判つきりしねえ。えゝい儘よと鎌いたちをきめ込んで、大胆に屋根裏に忍び込み、仕事場の天井裏までソロリソロリ。節穴に嚙りついて、部屋を覗いて驚いたのなんの——」

人形材が仕事場一杯に転がっていて、足の踏み場もない。



労咳を病む人形師梅道の、蒼白い疲れた顔にさっと血が上った。大姐板に裸で縛りつけられた女は、まぎれもなく、お雪に違いな

かった。未だ妊まぬお雪の柔肌は、仄暗い蠟燭に神々しい迄に白く輝いていた。色白で富士額の瓜実顔、錦絵から抜け出してきたような、弥六が血道をあげたのも無理からぬ美女である。

梅道は既にして命且夕に迫りつつあることを意識していた。それまでには是が非でも――。

かすかに震える手が、気ぜわしそうにお雪の額を、頬を、豊かな胸を撫でさすり、つかみ上げる。灯の色に、ためつ、すがめつ、指先で何度も何度も、満足げに撫でてみる。

お雪の生命の灯は未だ絶たれてはいなかった。既に拐わかされて三日――、それなのに、何と云う美しさだろう。

「あーあ、この柔肌がむかれる……。それも今宵――。何と云うむごたらしいことを……。わしは余命幾許もないを知って、あの男の云われる儘に、生娘を三人迄も人肌人形につくり上げた……。わしの精魂は、もう尽き果て様としているのだ。それがもう二体つくれとは……。何と云う残酷な事だ……。」

ハラハラと梅道は落涙して、いとはしげにお雪の温かい柔肌に瘦せさらばえた頬をこすりつける。梅道のすぐ背後には、お雪の為の白木のままの人形が坊主頭で既に上半身出来上っていた。

凝然と喰い入る様に、お雪の麗身に魂を天外に飛ばしていた梅道は、やがてそれが神への冒瀆であるかの如く、ツと眼を外らせるとそっと白布を延べて、お雪に着せ掛けた。

立て掛けられてある人形材の壁にコツコツと音がする。物憂げに梅道は立上って、木片を二三本取り除けると、そこに精巧な開き戸が現われる。梅道が鍵を外すと、開き戸は音もなく壁の向うから押し開けられた――。

総髪の不気味な顔が、ぬっと突き出た。

「どうだ――、もう人形の下地は出来上ったか――」

「御覧の通りじや。今宵、子の刻限頃までには下半身、何とか荒削

りで――」

「フフフ、よしよし。もう一人、昨夜の生娘のピチピチしたのがおる。今宵の料理を見せてやるとしようか――」

「むごいことを――」

「何を――。その方の労咳の妙薬、女の生血が、それ、そちの横の甕に、またたんまりと溜る事じやて。生胆を喰い、生血を吸って、精々長生きさるゝがいゝわ。フフフ……師匠――、今夜一晚、それまでこの女を精々可愛がってやることよ――」

「――けだもの奴……」

「フフフ。まあ何とでもいうがよいわ。おれのおやじも……可愛い姉も、生き乍らにして焼き殺された恨みを思えば――。おれは……おれは地獄道を歩むだけだ――」

その時――、天井裏の闇のなかゝら、黒い影が、音もなくスルスルと這ってすべり出ていた。

「旦那、口惜しいね。あのお雪さんの命が今夜っ限りなんだ。助けて下さいよ。――」

銀十郎は、世にも情けなさそうな弥六の顔を尻目に、ポツリと

「もう一人――。風間の娘、小夜は見かけなかったか――」

「さ、それがもうそれどころじゃねえと、大急ぎで引返えしやじたので――」

「迂かつな……」

「だって、旦那。あっしはもう、お雪ちゃんの事で、頭へ血がカツと昇っちゃって、へえ、お免なさい――」

「フフフ」銀十郎は喉で低く笑った。

「ちよっと、おかしいな」

「ヘッ？」

「いやさ。既に三人の生娘が、生きながら皮をはがれて、白木の人

形にスッポリと縫いつけられた肝心の人肌人形が、何処に鎮座しますかってことよ」

「へッ、胴震いがしやすね。」

「過日、川尻川に上った裸の死体は白妙として、残る皮をむかれた二人の残骸の仕末はどうしたのだろうか——」

「あ、あつしが知る筈がありませんや。」

「やるか——」

銀十郎は呟いた。

「畜生め、若い生娘やお雪ちゃんを次から次へと引っさらった挙句、あんな血腥ぐせえ部屋で、昼も夜もなく女を可愛がったり馴ったり、責めさいなんだりする外道の罰当り奴。旦那が唯でおく筈がねえや」

弥六は、まざまざとあの部屋で展開されていた情景を妄想し、我むしやらに腹が立ってならなかった。

「——このおれが、指一本させなかったお雪ちゃんだ。それをあんな野郎共が……畜生奴」

#### 四

お小夜は肌に夜気を感じて、昏睡から醒めた。上半身裸の、乳房の上から、ぎりぎり太縄で縛り直した、後手がもがれる様に痛い。

「おう、気がついたかい。随分手間をとらせやがったぜ、ヒヒ、だが見れば見る程いゝ女だぜ——」

舌なめづりをしている見張りの男、亀造の眼は蛇の眼よりも不気味だった。お小夜を拐わかった男の一人だ。

「よう姐さん。大小路小町と云われるだけに、その睨んだ顔付は又格別だぜ」

「な、なんの恨みがあつて、こんな非道い眼に逢わせるのです」

「恨みなんか、あるもんか。おいら頼まれてやったただけの事よ。」

だからよ、魚心あれば水心——。急にお前が無性に可愛いくなくなったまでの事さ。」

「いゝえ、早くこの縛しめをといて下さい。お願い」

「ふッふッ、後手の縄はめったに解かれねえ。それによ。その真ッ白い搗き立ての餅の様な肌に、きゅっと締って喰い込んだ縄目の姿は、又格別だからなあ。おっとっと、余りじたばたすると、ふんわりと腰にまといかけた着物がずれて、おいらの親切が無駄になるってことよ」

辛うじて蔽われていた腰から下が、亀造の云う通り絡んで乱れ、露わに白脛が覗けて見えた。

「ねえ——救けて、御恩に着ます」

不安が刻々募ってお小夜は哀願する。激しい疲労と空腹感に、ともすれば意識が薄れそうになるのを、必死にお小夜は耐えていた。年頃になってから、まだ他人の眼にさらしたことのない白い肌を無頼の前に晒して、世間知らずのお小夜は涙も涸れ果てた思いで必死であった。

「いゝともよ。可愛いゝ弁天様のお願えだ。お前、気持よく俺の女房になると云うんだな。それなら縄をといて、存分に可愛がってやるぜ——」

「誰が、誰がお前なんぞの様な卑しい男の……」

「へッへッ……いくらお前が強がり云ったって、もうじきこゝの親分に散々馴りものにされた挙句、頭のとっぺんから足の爪先まで、クルリとその柔かい皮を引っぺがされて殺されちゃうんだぜ。フフ、嘘なもんか。俺ら、この目でもう三人もの女が、そうやって皮をむかれるのを見たんだ。真ッ赤のグニヤグニヤのいなばの赤兎みてえな死体を、菰に包んで仕末したなあ、この俺様よ。皮をむかれて殺されるのがいいか——それとも心掛けを入れかえて、俺の女房になるか——二つに一つの返事だ」



ひよろひよろと立ち上った亀造が、いきなりお小夜の首を抱えて縛った後手の儘あおむけに倒した。

「いや、いや……た……たれか、たすけて……」

「ふっふっ、いくら泣こうと喚こうと、此処は地下の密室だ。誰もやって来やしないぜ、おとなしくした方が身の為だぜ——」

「いやッ、あ、あ——」

お小夜はもう、生きた心地もなかった。

胸に盛り上った、新鮮な桃の様な二つの乳房。雪のように汚れを知らない肌。野獣になった亀造には、それがもう何ものにもかえがたい垂涎ものであった。纏っていた腰の緋袴袴が纏れて解けて、むき出しの双臀が左右に激しく揺れ、白脛が空にのたうった時——

突然、

「莫迦者奴——、死にたいか」

声と共に板戸がガラリと開いて、人形師の作業場から地下の隠れ家へ戻って来た総髪の子、大野道竜軒が形相鋭く亀造を睨みつけていた。

「あッ、親分……、あうしや何も……ええ、このアマが逃げ様としたんで、慌てて押えつけた処なんで、あ、あッしは……」

「行けッ——」

道竜軒は顎でしやくって叱咤した。

——風間の娘……。これで五人目。やっと俺の本望は達せられそうだ。呪いの人肌人形を、堺の町人共に曝してくれるわ。

道竜軒の呪いの籠った蛇の眼が、お小夜の打伏した姿にそゝがれ彼は呟く。

復讐し得た快感が、キリキリと道竜軒の胸に突き上って来、その時、父、大野道犬が京の宿で、幕府の探索人、田所陣左衛門、風間利兵衛、松平兵部、小松原伍兵衛を隊長とする一隊に襲われ、捕えられたあの刹那が、マザマザと脳中に去来した。道竜軒の新丸は、

当時九才であったが、利潑な妾腹のこの子供を、父の道犬は他の誰よりも可愛がった。

## 五

「儂はもう逃れられぬ。せめてそちのみでも逃げのびて儂等を葬ってくれい。乳母と一刻も早く——。早く、躊躇するな……」

父の道犬の血を吐く声を耳朶に残して、大野新丸は乳母の背におぶさって、辛くも危地を逃れた。併し、風間始め手の者によって、遂に大野道犬は京の大仏殿にて捕えられ、眷族一統もすべて縄目をうけて生き恥をさらす事になったのである。

太閤なき後の大野道犬は、淀君の寵を一身に蒙った。凡愚ではなかったが、利に賢い道犬は淀君の孤閨を訪れるに及んで、次第に増長していった。遂には大野一族によって城内人なきが如く、その振舞いは専横を極めた。

硬骨な反対派は大野一派を軽蔑し、側近の奸賊とのゝした。

徳川方の圧力が次第に加わるにつれて、淀君は大野道犬を益々信寵し、今や二人の仲はかくれもない事実となって現われていた。

彼の側室の外、愛妾が三人、それらが道犬を取り巻いて、豊家末期の主家の崩壊を目前にし乍ら、彼にとっては、この一時期が得意の絶頂でもあった。

利高い彼は、町人の街として巨万の富をつむ堺の商人に目をつけ、屢々、味方に引き入れ様として堺に足を運んだが、既に先を見通した堺商人が、次々と徳川方に情を通じるのを知って、歯噛みする思いであった。

徳川方との戦火が開いた元和元年四月二十八日の払暁、突如として道犬は何の前触れもなしに、手勢を引きつれて堺に乱入した。

「町に徳川方の兵糧を匿まいおる——。敵に渡っては一大事——」逸早く堺の富を掌中にせんとして、道犬は家々に放火し、焼払い

を命じた上、巨財を奪略したのである。

堺の町民義勇軍は猛然と手向ったが、多勢に無勢——、道犬によって放たれた劫火は全市を火の海と包んで、夥ただし無事の町民が焼死し、宮々として築いた巨万の富は灰燼に帰したのであった。堺の町民の恨みは道犬の一身に集って、何とかこの恨みに酬いるべく、その機を狙っていた。

豊臣に利なく、大阪落城、淀君自刃の時、道犬独り主君に殉せず巨宝を身にして京都へ逃げたのである。

卑怯な武士として、豊臣、徳川を問わず、世の弾劾を受けた道犬は、密告によって、遂に風間始め徳川の手勢によって捕えられた。

これを伝えきいた堺の町民達は雀躍りして喜び、道犬の非行を徳川に訴えて身柄の下げ渡しを願い、叶えられた。訴状の頭棟は讃岐屋善兵衛であった。

六月二十七日の朝——

並松の広場に曳きずり出された大野道犬は、憔悴し切っていた。

この余りにも卑劣なる男に対し、誰一人として同情を寄せる者なく、捕われの道中、人々は石を投げ痰を吐きかけ、糞便をふりかけた。

恨み重なる堺の町人の私刑は、酸鼻の極をきわめた火炙りの刑だった。

刻、一刻と群衆は集ってくる。

逆磔にされた道犬の両手に五寸釘が打たれ、両眼に小柄を突き立てられ、裸にむかれた裸身には、梶棒、木刀の打撃跡が全身を蔽って既にして道犬は瀕死であった。

家財は勿論、一夜にして妻子六人を焼き殺された讃岐屋善兵衛は、その時、復讐の権化と化していた。八ッ裂きにしても飽き足らぬ道犬の逆さ首を足蹴にすると、だらりと垂れ出た舌に錐で穴を明け、四、五貫匁もあるうかと思われる分銅を吊り下げた。

火炙りは卯の刻から始まって、ヂリヂリと焼き始め己の刻まで長々と焼きつづけた。

恨みは眷族に及び、愛妾も逆磔の上、真紅に焼けた鉄串を突きさされ、その尖端は咽喉まで貫通し、惨殺された。

道犬の捕えられた三名の子供達も、或いは腹を裂かれ、或いは股裂きにされ、或いは石臼で突き砕かれて、並松の処刑場を一族の血で真紅に染めたのである。

鬼哭啾々として、並松の松籟に浜風は吹き渡り、酸鼻の極の刑場から、道犬の骨灰は風にのって堺の町々に血腥ぐさい匂いを撒き散らした。

それから——十八年。徳川泰平の堺の町に、突如夜な夜な妖しい通り魔大野道竜軒が風の如く跳梁し始め、父道犬を捕えた四人の幕史、そして、父を私刑に追いやった讃岐屋に、激しい復讐の炎を燃やしたのである。

## 六

お小夜は、全身に走る悪寒にがちと震え、眼をつぶった。

プーンと血腥ぐさい胸のむかつく異臭の漂よう、この梅道の作業場で、お小夜は半身を裸にむかれ、案山子のように両腕を横に伸ばして、背にあてられた太い青竹にしっかりと縛りつけられていた。

抵抗の跡も生々しく、猿轡が犇々と口を蔽って、凄惨な処刑の場を否応なく眺めさせ様としていた。

蒼黒い道竜軒の形相は、鬼畜を思わせた。

「女——、眼を凝らして、よく見るのじや、ふっふッ、やがて、お前の白木人形が出来次第——、こうして皮をむいてくれるぞ——」  
道竜軒は、散々弄んだ末、これから腑分けしようとする、お雪に眼を移した。

——殺すに惜しい、いい女だが……生かしておけば、後々俺を恨



み通すに違いあるまい。ふっふっ、それにまだもう一人、ピチピチした生娘が恐怖に戦いて控えている。人形の出来上るまで、ゆっく

りと慰さめるだけ慰さみ、女が狂う程弄んだ末、料理するとしようかい——

鬼畜道竜軒は呟き乍ら、スルリと腑分け刀を抜く、細身にギラギラ脂の浮いた解剖刀は、一曳、お雪の頭上できらめいた。

「亀造、水をぶっかける——」

「へい」

云われて、無雑作に傍らの桶をとり上げると、亀造は全身を残りなく曝した俎上のお雪に、容赦もなくザブリと水を浴せる。

深い昏睡から醒めて、お雪の両眼が薄く開いた。

既にして完成した、等身大の白木の荒削り人形が、お雪の生血を肌から吸いとるのを待ちかねてでもいる様に、無気味に白く突っ立っている。

「女——、恨め恨め。親爺の讃岐屋をうんと恨め。奴の手によって、舌を抜かれ逆磔になった父、大野道犬の遣児大野道竜軒が今こそ父の恨みを晴らしてやるのだ——。

ふっふっ、見えるか、この腑分けの生き血を吸った刃が……。咽喉から股まで一裂きに引裂いてくれるわ——」

「ひ——っ——」

お雪が絶叫し、お小夜は「呀っ」と気を失う。

ギラギラと悪鬼の形相に、眼を血走らせて、道竜軒の刃は一寸、二寸とお雪の咽喉

許に近づく。

お雪は、視線一杯に塞がってくる悪鬼に、断末魔の悲鳴を挙げ、ぐいと乳房の上に焼きこてのような男の手を感じて失神した。

卵のむきみのようなお雪の体が、肩から、胸、胸から胴、胴から腰へと激しくけいれんし、それが道竜軒の残酷な最後の一瞬に激情の火をそそいだ。

盛り上った胸から腹へと、しばし撫で下し、この造形の美を壊す最後の名残りをしばし惜しむかの様にした道竜軒が、やおら咽喉に刃をあてんとした一瞬早く、

「呀っ」と握られた刃が空に飛んだ。

掛金をかけ忘れた観音開きがパツと開いて、薊銀十郎の投げた小柄が狙い違わず、グサリと道竜軒の小手に突きささっていった。

亀造がいきなり、遮二無二銀十郎に突き掛ってきた。匕首がその手に光っていた。

「死ねッ——」

一言、颯ッと一刀が走って、背を石榴に割られて、

「ぎえ——ッ」

悲鳴をあげ、前かがみにぶっ倒れる。

苦しまぎれに掴んだ白木の人形が、バタリと亀造の上に倒れた。

「弥六よ——、この場は引受けたぞ。手前は早く、お雪さんを助けてやりな——」

「よしきた。」

大急ぎで太縄をとくと、お雪の白い肌を、此奴は眩しいものでも見る様に眼を細め、あわてて、素袷をクルクルと脱ぐと、パラリとお雪にきせかけてやる。

「あっ、弥六さん——」

生死の紙一重を彷徨したお雪は、助かった喜びの途端にパラパラと涙が流れる。

「あ——、あしがすくんで歩けない——」

「おぶってやろう。さあ、遠慮はいらねえぜ」

お雪は恐怖と羞恥で、ともすれば気の遠くなりそうになる我が身を、夢中で弥六の背に投げかけた。

「観念しろ、けだもの——。じたばたしたって始らねえぜ。手前が慾深親爺の大野の犬畜生の忘れ形身か知らねえが、やる事があくどすぎるじやねえか。やるなら何故、男らしく、きっぱりと親達をやっつけねえんだ。罪科もねえ娘をさらって、散々玩具にした上、生皮を剥いでの人肌人形だあ、どこまで親子揃っての犬畜生なんだ。この銀十郎が女共に代って成敗してやるぜ——」

「ち、ちくしよう」

破れかぶれの道竜軒の仕込杖が風を切って走ったが、一瞬銀十郎の長剣が早く伸びていた。

「風間のお小夜さん。悪い夢を見た、すっぱり忘れて、明るく暮すんだぜ。もう半刻もすれば、家から迎いが飛んでくる事だろうよ」

さっ、さっさとして刀で背の青竹を縄から切り放す。

——ふふ。

それが癖の銀十郎の忍び笑い声——。

「あ、待って下さい——」

激しくあえぐお小夜の訴えだった。羞恥も忘れて、生の喜びに夢中で銀十郎に縋りついてきた。

その体当りに、よろめいて踏みとどまった銀十郎、お小夜の体臭をこよなきものと感じて、ふらっとなった。

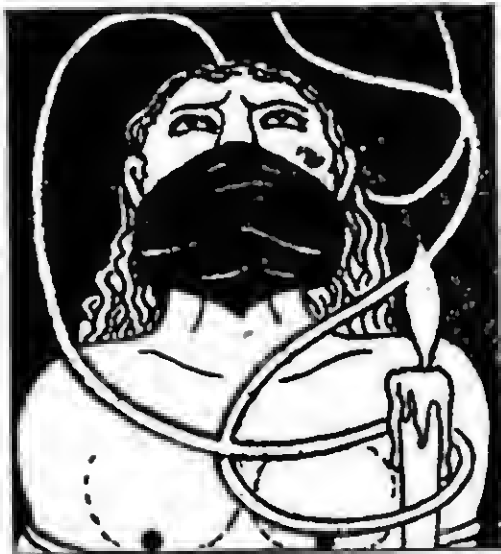
あえぎにあえぐ、お小夜を抱きしめて、

——ハテ、どうしたものだろう——

銀十郎、途惑い乍らも、蒸し暑く薄暗い、このおぞましい殺ばつな部屋が、かえって都合よかった。

(続)





# 緊縛テレビ

## 観賞日誌

海野 築 朗

本誌に緊縛映画速報が毎号載っています。そこで小生はテレビで見た縛りについて、又今後それが予想される番組について紹介して見ましよう。

昨年度は時代劇が少く、僅かに「半七捕物帖歩兵の髪切」後編で、半七の妹菊が後手猿轡の場面が一回と、「右門捕物帖・張子の虎」で芸人の親娘が襦袢一枚で後手猿轡があった位である。

今年の春からは俄然、時代劇が勢揃いして来た。

月曜日・夜八時（以後時間はすべて夜）から大助捕物帖がNTVである。主演は丘久美子、市川染五郎で、原作はいう迄もなく野村胡堂。

「娘軽業師」その他二編ばかり縛りの場面があったが丘久美子は未だ縛られていない。七月の中頃「晒された女」があった。これは原作によると豪商の美貌の後家が、裸にむかれて日本橋の真中に後手猿轡のまま晒される所があるのだが、テレビでは旭輝子の扮する後家が長襦袢一枚で二度ばかり細引で縛られるだけで、猿轡はない。

次に八時三十分から同じく胡堂の「銭形平次」がKRである。主演は若山富三郎に、お静役の田代百合子である。胡堂の初期の作品を放送しているので、近く縛りがあると思われるが、今迄にはない。

火曜日・NTV八時三十分から「幡随院長兵衛」がある。阪東好太郎、北沢典子、中山昭二の白井権八、関千恵子の小紫であるが、今迄にはない。これは旗本と町奴というストーリーの関係上、或は出て来得ないのかも知れない。時代劇で女の緊縛がない程、味気ないものはないと痛感している次第。

水曜日・NTVで九時十五分より「宮本武蔵」だが、これは御存知の様に通だけに縛りがあるので、今はもう巖流島のクライマックスに來ている。

KR十時から「ありちゃんのおかっぱ侍」だが、これはコメディでまず望みない。

木曜日・KR夜八時三十分「鞍馬天狗」がある。大仏次郎の原作には縛りの場面は殆んどないのだが、テレビは脚色者のオリジナルなので仲々楽しめる時がある。

第二話「地獄の門」では、黄八丈の娘が後手猿轡で駕籠の中から出てくるし、俠美の女掏摸が縛られたまま人喰い沼の中に投げ込まれようとする。現在は「羽団扇道中」という密書の奪い合いをやっている。

金曜日・なし。

土曜日・KR七時三十分「松平長七郎若君日本晴れ」がある。明智十三郎、村田正雄、桑野みゆき等であるが、これは明朗時代劇と銘打ちはしてあるが、一番怪奇趣味があるしケレン味が多い。

殊に八月初めの「鬼面組退治」はその縛りも堪能さしてくれた。

長七郎を慕って、江戸から水戸迄追って来た近江屋の娘美代（女優名不詳）は、前編で鬼面組に誘拐される。

次の場面で、鬼面組の巢窟である古寺の本堂の片隅に、鼻口を覆う手拭の猿轡、細紐で結わかれてうなだれている。その前で、鬼面組達が豊臣の遺姫（桑野みゆき）を中心にして、水戸家襲撃、松平長七郎暗殺の計を練る。美代が僅かに残された眼を開けて、恐怖にののく――。

後編に入って、長七郎の暗殺に失敗した鬼面組の一人が、本堂で美代を折檻する。

後手に縛られた美代が、背中に振り下される鞭に身悶える。

「おい娘、貴様は何で松平長七郎の後をつけているのだ。正直に云え！」

と云う決り文句で凄むと

「えっ？あの方は松平長七郎様……」

「そうだ。水戸光圀には伯父に当る松平長七郎だ」

「ああ、知らなかった。あの方が松平長七郎君……」

と、思い入れあって、と知れば所詮叶わぬ恋……。 (いっそ、舌かみ切って……)

とばかり、うつむいて舌を噛み切ろうとする。その様子を見てとった鬼面組の男は

「舌をかまれて、たまるか！」

と美代の傍に落ちてしている手拭で、グイとばかり猿轡を嵌める。

この時、手拭はやや捻じられて、唇と唇の中にすいこまれた様であった。であるから鼻孔は塞いでない。

やがて場面がうつり、すべての計画に失敗した鬼面組は、姫の諭しを入れて再挙を計るべく逃亡しようとするが

「その資金は如何いたす。もはや我等には一文の所持金もないぞ」

「心配いたすな。先日より捕えてある娘は江戸の豪商近江屋の娘、よって身代金を請求いたし間もなく到着するであろう」

という所へ、廊下から背中を小突かれて美代が入ってくる。

後手猿轡の姿であるが、猿轡は捻じれたのも締直したらしく、しっかりと唇だけを覆っていた。

どんと突かれて、よろよろと裾を乱して鬼面組の面々の前に倒れた美代。

「はっはっは、お美代、さぞ苦しかったであろう。もう暫くの辛抱だ」

と首領が笑うと、其処へ明智十三郎の長七郎が乗り込んでくる次第――。

そして乱斗となり、不自由な身体を片隅によけていた美代が、やっと縄を解かれる迄、三十分の半分は縛りの姿であった事は、珍らしい一編であった。

しい一編であった。

九時十五分、大江戸風流男がNTVである。これは中村芝雀、宮城千賀子、森健二のレギュラーメンバーであるが、外に若手女優が大分出る。縛りはまだない。

十時、又四郎行状記、KRであるが、これは山手樹一郎の原作である。原作に依ると多恵姫が一度、谷主水という悪家老に縛られ、猿轡で犯され様とする所がある。テレビでは、その場所迄ストーリーが進んでいない。又四郎、中村竹弥、多恵姫、鳳八千代。谷主水、穴戸説で外に浜田百合子、小林重四郎等の出演である。

この他にも、キドシンのでかんしよ武士、赤胴鈴之助の漫画から脚色した番組や宇野信夫の、大岡政談等時代劇はあるが、縛りとは縁遠い。

扱、此処で見落してならないのは、縛りはセットで行われる時代劇の外に、テレビ映画の中に意外に多い事である。

テレビ映画と云うと、アメリカ物だが、家庭内で見るとテレビ映画に、縛りが多いとは……一寸面白い現象である。

八月第二月曜のNTV九時十五分より放送された、米テレビ映画名作集、海水着の女は、女尊男卑の米国で、これ程女をサジズム的に扱うかと思われる程の緊縛ぶりであった。見ている方も思わず眼を疑って、アレヨ

アレヨという凄じさであった。

この「海水着の女」は最後に紹介するとして、他のテレビ映画から縛りをあげると、まず筆頭に「スーパーマン」がある。

御存じの様に、弾よりも早く、力は機関車よりも強く……に始まる超人の物語は、彼がクラーク・ケントを名乗って正体をかくして勤めている新聞社の社長の女秘書レインが、持前の冒険好きから、しばしば悪漢の為に危機に陥るサスペンスが身上である。

テレビではもう百本を突破しているので、再放送がしばしばであるが、「王様と夢男」「謎の石膏像」等々、五、六編レインの後手猿轡が見られる。このスーパーマンは絵物語で見ると、大概一編の終りに、レインが危機に直面するのであるが、最新科学の原子ロケット砲に猿轡のレインがつめられたり、奇妙な殺人光線の実験台に縛られたりしているが、猿轡がつきものであるのも面白い。

「名犬リンチンチン」の「伍長の結婚」では、騎兵隊の伍長と結婚する許婚が、銀行で退役する伍長を待つ間、銀行がギャンブルに襲われ、レースの結婚衣裳で顔一ぱいの猿轡椅子にグルグル巻になったり、ブレイブイグルでは酋長の混血の娘が、他のインディアンに捕えられ、手足を縛られ、歯と歯の間に布をくわえさせられたり、「マーチンケーン捜査シリーズ」では令嬢が人質になり、後

手ハンカチの猿轡「ラマーオブジャングル」一話では交易商の娘が椅子に縛られて黒布の猿轡等々書いてくると尽きないものがある。兎も角、縛りは人生の或るドラマであるからだろう。

扱「海水着の女」の構成は――。

或る山中の湖畔から物語は始まる。ドライブに出掛けた娘が、湖の清涼さにひかれて其処で水泳を楽しんでいるうちに、自動車に盗まれてしまう。

物音に驚いた娘は、駆けつけて其場に途方に暮れた。着衣も荷物も一切、車の内に置いてあったからだ。

そこへ、あだっばい中年の女が運よく車で通りかかり、その車に同乗した娘は女の豪荘な別荘に着く。

山中で、召使い一人なく無気味な雰囲気の家である。

女は、海水着の娘の災難に同情し、二階の一室をあてがい何くれと面倒を見る。

シャワー、コーヒー、そして着替え。

だが、事故を町に報せる電話は不通だと云う。女の出でいった後、娘は自動車の音を聞き、二階から窓越しに見ると、一人の警官が自動車でこの家を訪ねた所だ。娘は、扉をあけて廊下に出ると、階下で警官と女の話声――つい、その崖から車が落ちて火を出した。乗っていた娘は黒焦げになったが、所持

品の焼け残りから身許が判った。その娘の名はA町のメリーである。本部へ連絡するから電話を貸して欲しい――。

娘は聞いた。

メリーとは自分の名である。おかしい？娘は階下へ降り様とすると、突然背後に男が現われて、娘の口を掌でがばツと塞ぐ。

「うッ、うッ、うッ……」

と、その悶えて掌をはらいのけ様とする間に、男はポケットからハンカチを出して、娘の口の中に押し込むと、そのままずると室の中へ引き入れて仕舞う。

警官は帰った。

女が室の中へ入って来た。

ベッドの上にロープで後手に縛られて、口の上を更に白い大型の布で縛られた娘がいる。傍に立っている男。

「この娘、もう少しで騒ぎ立てる所だった」

と男は、冷やかに云う。

「ポリは帰ったから、娘に因果を含めたら、

いいわ」

「よし」

と男は娘に近寄り

「楽になりたいか」

娘は、うなずく。

「よし、縄を解いてやるが、ジタバタするんじやねーぞ」

と、ロープを解く。猿轡もとって、口の中

からハンカンも出してポケットに仕納う。

「どうして、口をふさいだりするんです？」

娘は喘ぎつつ云う。

「ポリとの話を聞いたろう。お前は当分ここから出せねえんだ」

男は凄む。

「私を帰して下さい。私は自由の筈です」

「お前は死んだ事になっている」

娘はビクツとする。

其時、階下でベルの音。

「貴方、きつと弁護士よ」

女は面を緊張させる。

「あれ！助けて。誰か、助けて！」

一瞬の隙に、娘は扉に向って走る。

男と女は驚の様に襲いかかると、男の手は

娘の口をふさぐ。

「ポケットからハンカチを出せ」

こんどは二人がかりでハンカチを詰め、その上を更に布で縛る。

「ロープだ。早くしろ！」

女の手からロープが娘の胸、腰、足に絡みつく。

階下で、弁護士と男とが話している。

「奥さんに逢わせて下さい」

弁護士が云うと

「奥様は、絶対安静が必要です」

と、いつの間にか看護婦の白衣をつけた女が二階から降りてくる。

「然し、奥様の署名がなくては、この別荘を

売る訳には参りません」

「ゆうずうが利かない男だ。妻は病気、この家売りたがっているのだ」

「私は、奥様にここ一年ばかり逢っていますん」

「奥様は、誰にも逢い度くないそうです」

女が口をはさむ。

二階で物音——。

無残に縛られた娘が、ベッドの上で必死に

操縦している。悩ましい腰の線を見せて——

やっとの事で起き上ると、兎飛びに飛んで

窓際に行き、後向きになって縛られた手首で

窓を開く。又ベッドに帰って、何か包みを不

自由な手首でつかみ、それを窓から落そうとする。

痛々しい努力——。

やっとな目的を達すると、娘は床に倒れる。

男と女が入って来て、慌てて窓を閉め娘を

ベッドに抱き返し、狼轡、縄目を調べる。

大きく見開かれた娘の黒い目が男を睨む。

頬に喰入っている狼轡。

男は娘を瞞めて、女に云う。

「妻が死んだと判ると、妻の実家からの仕送り

りが絶える。どうだ、この娘は。妻に似てい

ないか……」

「そうね。背恰好、顔、似ているわ」

女は娘の頤に手をかけて、娘の顔をつくづ

くと見入る。

「この娘は、まだ役立つ。この家は売るのを

後にして、連れて行こう」

男は、ニヤリと笑う。

娘は、張りつめた緊張に耐えられず失神す

る。

〔通信〕

## 私の不満 姫馬痴人

復刊以来、旧号の域に近いまでに着々と内容を充実して来られた貴誌の御努力に感謝し、今後に期待しますが、只一つ不満な

ことは、旧号当時より男性マゾの記事が相当減っていることです。殊に巻頭グラビヤには我々男性マゾは毎月、今月こそは、と



頁をめくる度に失望落胆に突き落されま  
す。何故、男性マゾの写真、挿画を載せて  
頂けないのですか。春日ルミ様は御健在で  
はないのですか。若し何かの御事情でマゾ  
・フォトに御登場頂けないのであれば、他  
にサジスチンの役割を演じて下さる方でも  
結構です。如何なる事情も超越して是非、  
旧に倍するマゾ・フォトを毎月連載して下  
さい。私は、マゾだからと云つてサドの写  
真が掲載されることに反対する意志は毛頭  
ありません。私自身の好みに反したからと  
云つて、サドの方々の興味を尊重すべきこ  
とは十分理解しております。お互いの傾向  
の夫々独自の立場を認め合う処に奇クの成  
立つ意義があるというのが、以前からの私  
の持論ですから——。しかし最近、頻発す  
る凶悪犯罪の発生の度に「雑誌の影響」が  
云々されるので、余りドギ強いサドの写真  
が掲載されると、理解のない人々に変に誤  
解されはしないかと心配しています。マゾ  
・フォトでしたら、現実、社会的に影響を  
持たぬ故、そう云う心配は全然不要な訳で  
す。消極的にはこの意味でも、貴誌グラビ  
ヤ初め内容記事についても、マゾをもつと  
数多く取上げた編集をされるのが、むしろ  
良策だと考えます。積極的には要するに男  
性を鞭打ち殴打し、踏みにじり蹴り倒し、

組み伏せて顔、腹に跨がり、犬になり馬に  
なることを命じる美しい女王様の御写真を  
切望するのです。十月号でニューヨーク・  
シティ・バレエ団の演じた「檻」の反響が  
出て居りましたが（私がこれについて投書  
したのは六月でした）掲載された写真も見  
事な場面ではありますが、何んと云つても  
あのバレエの中の庄巻は、男が女の脚に首  
を挟みつけられてギョッと締め上げられる  
シーンでした。この場面の写真がどこかに  
ありましたら是非共御掲載下さるよう御願  
い致します。

乗杉貴代子様、貴女様の男馬調教の御様  
子は？鷹野めぐみ様、貴女のサジスチン青  
年期の御話は？そして御二人共御関係のあ  
る、バー乃至はキャバレエの名前を覚えて  
下されば幸いです。その他、サジスチンの  
女王様方の活発な御投稿を伏して伏して御  
願い申し上げます。又、最近号「マゾヒズ  
ム百景」は楽しく読んで居ります。千葉の  
海岸の海女達に屈服させられ、存分に凌辱  
齎弄されて土下座して哀みを乞う男性の姿  
等、我々マゾの男性の堪能する読物でし  
た。今後とも期待しています。最後に重ねて  
貴誌編集に御願ひ。男性マゾをもつと豊富  
に取上げて下さい。

× × ×

又、ベルの音——。

弁護士が引返して来て、男と争う。

——警察でA町の湖で泳いでいた娘の事故を  
聞いた。だが、死体は娘ではないそうだ。奥  
さんには逢わせない。然し二階に誰かいる。  
いろいろ判断して或る結論に達した——と。

男は拳銃を出す。

「余計なお節介をやくな」

だが、火を吐いた拳銃は誤って女に当る。

男は女に駆けよる。女は云う。

「私達の恋も、終りだわ……」

男は静かに電話で警察を呼ぶ。

二階のベッドに縛られた娘の縄を解いた弁  
護士は娘をいたわり乍ら

「貴女が二階の窓から捨てた包の中には海水  
着が入っていましたね」

娘は、ニッコリ笑う。

以上のストーリーで、犯罪の伏線もお分り  
と思う。

山荘に起きた、金持ちの病妻を持った夫と  
看護婦の邪恋、そして巧妙なる殺人事件、そ  
れにあやつられた美しき娘のスリルとサスペ  
ンスに富んだドラマと云う趣向であった。  
テレビもまたたのしのである。

○ ○ ○



## マゾヒズム百景

## 馬場好男

## 第十三景「女ざむらい」

## 只今参上」をみて

大したものではなからうと、見る前は考えていたが、それでも他のものを見るよりと思つて見た映画が「女ざむらい只今参上」。こんな映画を見てよろこんでいては、マゾヒズム芸術時評に比べられて笑われるかも知れないが、私には結構楽しめる映画であった。

美空ひばりが唄って踊って、おまけにチャンバラまで見せると云うのがこの映画のすべて。即ち女剣劇以上のものである。

時は幕末、江戸の勤王商人の娘お春（美空ひばり）は、お茶や踊りを習うよりも町道場

へ通つて剣術の稽古に励み、近所の不良などは一歩も近ずけないと云う男まさり。道場に於ては剣道着に袴姿の若者共を美しい着物姿のお春がピシリピシリとなぎ倒し、街に出てはならず者を手玉にとつて「エイ」「ヤッ」と投げとばす。もてあました父親（田崎潤）が倒幕のチャンピオン、桂小五郎（近衛十四郎）に「何とかいい方法はありますか」と相談をもちかける。娘に文句を云い、お転婆すぎると怒鳴つても此の父親は、娘がお転婆すぎて自分が怒鳴れるのが倅せみたいに思える位で、お春が可愛いくて可愛くてたまらない。然し事の成りゆきで、お春は桂の云う京都へ奉公と云う話を承諾し、密書を中山大

納言に届けるべく別の仕事も引きうける。男装をして東海道を下るお春、この密書を狙う佐幕派の隠密、やくざ、新選組等、手を変え品を変えて切りかかるが、お春は牛若丸の様に飛び廻つて悪い大人どもをやっつけてゆく。然も小町娘、若衆、女役者、浪人、姫君と大江美智子も顔負けの変化ぶりだ。

それに又、歌も「男なんてウジ虫、すぐつけあがつて始末に困る」と来る。道中でおくるさまざまの危機を逃れて、倒幕の密議をこらす京都御所へ密書を届け「女ざむらい只今参上」と云うわけだが、スピーディなチャンバラの演出の中に、女でもこんなに強いのだよと云ったポーズが到る所にみられるのだ。

演出(渡辺邦男)が美空ひばりの男、女装とりどりの変化や歌と踊りと歌舞伎調の特技を洗いざらいに並べようと意識してか、嘘も矛盾も強引に押しきってひばりを売りまくっているが、マゾ愛好の私には子供だましみたいなものにせよ面白いと思った。これをみて不断考えたのだが、私の場合はお春がチャンバラをしたり、ならず者を投げとばしたりする時に、お春が男装で戦う時より、女は女で女装の場合の方がずっといいと思った。女剣劇等でよくやくざ者に扮して大江美智子等が男装で芝居をやるが、私はこれでは余り好めないのだ。芝居の主演者は女性かも知れないが、筋が男になっているのでは興味半減と云う次第なのである。芝居のストーリーも、女性を男をやっつけてゆく嬉しくなるのだ。だから形式にとらわれる様だが、実際もそうなら筋の上でも女が勝たないと、つまらないと云うわけである。私だけが特異かどうか知らないが、こんな映画がもっともっと出るといいものだ。

私はこの映画を観賞中、お春が男を組み伏せたりする場面でもないかと期待したが、残念乍らこのシーンはなかった。

そのうち、この映画のシナリオを私の好みに書き直して、独り楽しもうと思っている。

それから映画のついでだが、新東宝の「バラと女拳銃王」は題名も宣伝文句もよかつた

が、内容はいささか期待外れだった。非業の最期をとげた母の復讐に燃えたつた娘が、仇のキヤバレーに勤め、たちまちナンバーワンになる。

最後は拳銃を振り廻して大立廻りとなるが、迫力もなければ俳優の演技も下手で、それに筋もおかしくマゾ向きどころか、おせじにも面白い映画とは云えなかった。女性が男に復讐をする云う眼のつけ処が非常によく、拳銃も太腿のつけ根の所に忍ばせると云うアイディアも満点なのだが、おしむらく筋がなっていない。マゾ好みをめきにしても筋の拙劣は眼につき、誰が見てもつまらないと思う。どうも肝心な此の景の題名を無にする様だが、ついでにもう少し。

七月六日の日曜日、毎週午後六時半より日本テレビで「光子の窓」と云う番組がある。資生堂の提供だが、草笛光子が主役になってのミュージカルである。歌つて踊つての番組だが、この日は私むきによい場面があった。半裸に近い草笛光子が踊り乍らステージに出て来て、椅子に逆に馬乗りに坐って歌うのである。腿もあらわに大きく椅子の背を跨いで馬のりになるその動作が、私には普段が余りお転婆女優でないだけに、ハツと胸おどらせで見つめてしまった。自分があの椅子なら、このシーンがいつまでも続けと私は只、一生けんめいにその映像を頭にやきつけようとした。

ていた。そして私はこの番組が終らないうちに、NHKの六時四十分から始まっていた清水崑の「河童天国」人形劇に六時五十分だと思ふが切り替えてみた。すると始めを見ないでよく判らなかつたが、男の河童泥棒が畑を荒してその女主人に見つかり、背中を踏んまえられて謝る処をやっていた。

大体このマンガの原作が女尊男卑を描いているだけに、女河童が男河童を踏みつけたり蹴つとばしたりでさつき「光子の窓」に続いて私は嬉しくなってしまう。そして、これからしばらく見続けてみようと思っている。

東京タイムズの七月五日附より、小島功のマンガで「おれんじ娘」と云うのが始まった。この日はおれんじ娘の挨拶を兼ねた紹介と云う処だが、この娘がおしとやかにどの着物を着て出ようと母に相談しているが、すぐ下の弟が本当はお転婆ですと読者に告げている。それで四駒目はおれんじ娘が弟を組み敷いておさえつけているわけだが、私はマンガによくマゾ的なものを見つめる。これなども私は今後を期待してみてもいい。この景はどうもトンダ脱線をしてしまったが、忘れないうちに書いておこうとつけたしたものである。

## 第十四景 その昔マゾを求めて

今でも私は勿論、マゾを愛好しているが、十年位前の二十一、二才頃は、もつとこのマゾ愛好が旺盛だった。当時は若すぎて社会的に世馴れしないし、姉妹がないから尚、女性に魅力を感じて、充たされない欲望を求めてやまぬため盛んだったのか、どうかは知らないが、その頃から比べると多少の体験も経た故か、それとも年をとったためか、最近はずレキがきくと云うのか、とにかくおとなしい方である。若く美しい女性に苛められたい。あの女性の馬になって這い廻りたい、顔の上をお尻で踏みしかれたい、胸の上に馬のりに跨ってもらいたい——そんな欲望がどんどん私の身体中に燃えひろがり、果てはツバを吐きつけてもらいたい、と考える様になった。私のその頃の空想は少年時代の女性に馬のりにおさえつけられる事から、肉体的苦痛を味わされる事。いわば悪化だか進歩だか近眼みたいに次第に度が進んでいった。その頃、戦争が終って二、三年ようやく世情が、食なし、住なし、衣なしから立直りかけた頃だが、まだまだ何かしら騒然として落ちつかないものだった。私はよく街に出て、根氣よく歩いたものだ。こちらで、氣をつけている事とは知らぬ女性が、人通りのないのを見てかツバを道に吐く。私はそのあとへ行つてツバのアトを探しあて素知らぬ風で、それこそ下駄でも拭く様な恰好で、その地面に吸いこま

れようとしているツバキを指先にとり（土がつかない様に）その指を咬えては、ひそかに自分を慰めたものである。しかし不思議にそのあとは自分で今度は、ベッベツとツバを吐いてしまつて、矢張り何処の誰とも判らぬ人だからと云う氣があつたのか、瞬間だけのマゾ的感じを味わうとあとは後悔した様な氣になるのだった。或る夜、近くで火事があつた。復興なつた商店街が焼けたのでヤジ馬が大変で、私も胸をドキドキさせて、そのヤジ馬の一員となつて見ると、人垣の中に背伸びしながら見物している一女性が眼についた。その横顔がハツとする程美しく感じられたのだ。私の注視は一瞬にして、火事現場から女性に移つた。私は引かれる如く人を押し退けて、その女性のすぐ後に近づいた。咄嗟の……衝動とも云うべきものが私を働かせたらしい。私は人に押された恰好で彼女の背をぐいと押した、そしてすぐしやがみ込んで両手を揃えて地につけた。前に押された彼女は人垣に押し返えされてよろめいた。ぐいっと私の両手の上に彼女の下駄が乗り掛り、彼女は更に倒れ掛つて、足元にうずくまつている私の背に腰掛ける恰好になつてしまつた。両手甲を強く下駄の齒に踏まれ、背に美女のお尻を頂く。全く予想外の有難い火事見物であつた。彼女は、パツと頬を紅潮させ、「済みません」と小さく云つて、逃げる様に人垣を

潜つて行つた。その僅かの瞬間の屈辱感、強いられぬ屈辱でないのが物足りなかつたが、それでいてあとの妙な後悔が全く矛盾して、自分にも判らないものであつた。ハナをかんた女性の紙、映画館のトイレから出て来た女性のあとへ即刻入つてみたりで、親爺のスネを噛つて遊んで暮せてもいた故か、街にマゾを求めてよく根氣強く歩いたものである。そして従妹とか幼い時の事以外で、それこそ初の体験（苛められたくないのに苛められると云う事でなく）を味わつたのが咲子と云う女である。行きずりに知りあつて、いつのまにか仲よくなつた。自分のマゾ的性癖を話してプレーをやつてもらいたいと云う望みは強かつたが、今ほどの図々しさはなくて、とてもそんな話は出来ず、正常に逢つて正常に別れるのが私達の仲で、私だけが今夜も駄目だつたと考えるだけで、相手にしても他人に話しても当然の事だつた次第だが、欲望やみ難く一度、自分で書いたマゾの絵を五、六枚のばせて、いかにも道に落ちていた様にして二人でその絵を見あつたのである。

「まア、何なのコレ……変な絵ね」女の口に私は失望したが、「これは面白そうだ。これをやってみようよ」と私は女を口説いて、自分のイメージを実行にうつす事に成功したのだ。「これでいいの？ 何だか変ね、妙な氣持よ、ふふふ」咲子はそんな事を云つて脚を



つぼめ乍ら、私の夢を實現してくれたものだ。よく咲子は「私は女は絶対にものを跨ぐものでないいつも黙られた」と云っていたが、今でこそそんな事は余り気にしない様になったが、その頃はまだまだそんな女性が大半で時代の移りはこれからますます我々むきになってゆく様である。最近の書に石垣綾子の「女は太陽の如く」と云うのがあるが、このまえがきに「太陽であつた大昔の女は、歴史の進展のうちにいつしか、蒼白の月と化して他の力に頼って生き、他から幸福を投げ与えられる事を待つ女になった。中略——真けんに人生を生きる情熱は、女を強くたくましく美しくする。女は、その光を取り戻さねばならないとあるが、新しい女性の在り方が太陽であれば、男は自然とその前に平伏せざるを得なくなるだろう。女性は男の太陽だとかって私が心に考えていた事が世の中となつてくると、そのむかしマゾを求めた私は一つの先駆的なものではあるまいか？ 等と考えてみる。

## 第十五景 復讐する女

「ほほほ、眼が覚めたかい。何さ、その寝床け顔は。御覽の通りさ、お前は私にぐるぐる巻きに動けない程縛りあげられているのさ。ジタバタしても無駄だよ。ええ、冗談はよせ

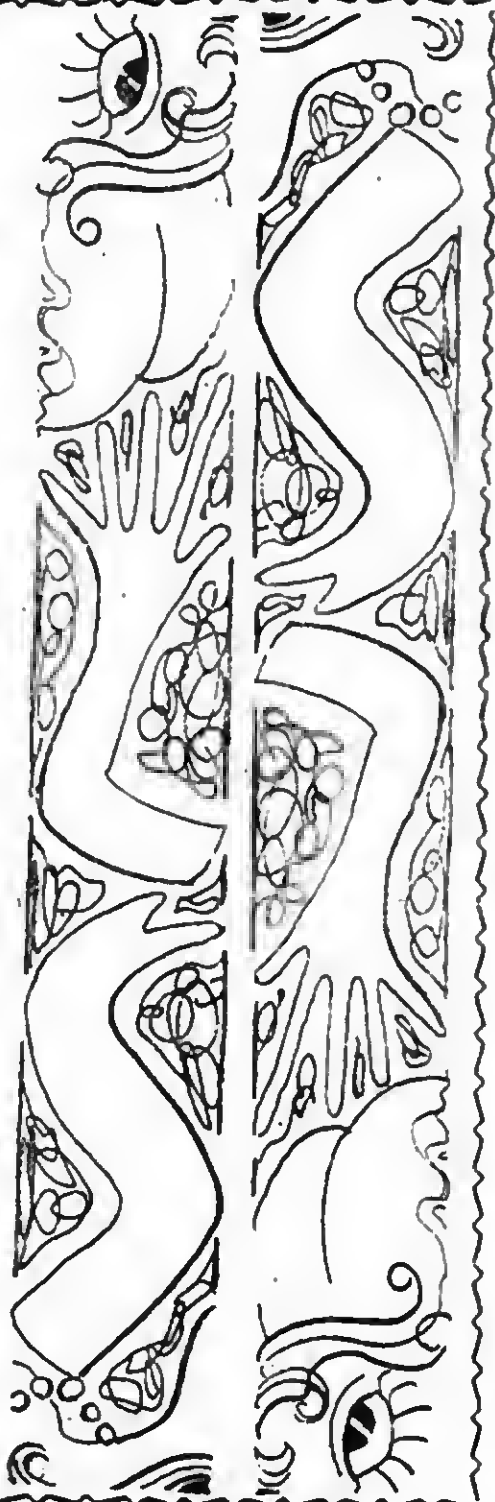
だって、口は利けまいがそんな力オだよ。馬鹿野郎、私のこの真剣な顔が判らないのかよ。私はね、お前を殺すかも知れないんだよ。いや、殺さないよ。殺したんじや私の今のまでの苦しさが味わえまいからね。お前のこの姿を写真に撮って、いいかい、私のお尻の下にふみしかれるお前の顔をね。そしてお前の会社の誰にも見せてやる。社長さんの処へも届けてやるからね。お前はケダモノみたいな男だから何故、私からこんな目に遭わされるのか判るまい。よく私の顔を御覧よ。思いつてもっと苛めぬいたんだろうね。そんな人達に代って、今夜こそ私自身の仇もうたせてもらうよ。おとなしくするんだよ。ホラ、あばれるところだよ。これでもかい。これでもかッ。本当は革の鞭で思いきり、ひっぱたいてやりたいけれど、このアパートの部屋では音がするからね。こうしてお前の口に猿ぐつはをかませ、後手に縛つた処へ両足もえびの様にまげて一緒に縛つたその上で、この竹の棒でお前の身体中をつき刺してやるのさ。お前はまだ五十一、二と云うのに頭の毛は一本もない。やはり軍人だった故だね。ふん、何さ。さんざん威張りぬいて戦争に負けて十二、三年も経ったのだから温和しくしているのかと思つたら、今では会社の重役、要領よく立廻る奴はいつでもうまい汁ばかり吸って

いるんだね。まだ私が判らないかい。私の年は三十、名前は千津子。お前のおかげで私の性格はがらりと変って、とうとう青春時代は灰色で終ってしまったのだよ。そうそう私の話をこうして聞かせてやろう。お前の身体を両手両足を下にして仰向かせてね、このタイコの様にもり上ったお腹の上に私が馬のりになつて、よいしょと、ふふふ、苦しいかい。こうして私は足をのばして、さて話を続けようかね。まだ判らないかね。お前はあの頃、憲兵だったね。そう、戦争が誰が考えたって私の様な十七の小娘が考えたって負けると判つた昭和二十年の春、R駅に私達女学生は傷痍軍人の出迎えに行った。私達は戦争に行つて一生けんめい斗い傷ついた兵隊さん達には本当に感謝の気持ちで一杯だったんだよ。手をもがれた兵隊、盲になった兵隊、片足のない兵隊、みんなこれからの青春と云う男が生れもつかぬ片わになつてゐる。私はあれをみて唇をかみしめて今にも泣き出しそうになつてゐた。その時、両手も両足も失つた兵隊が、タンカに乗せられて私の前を通つた時、もう私はがまん出来ずに涙をポロポロ流し乍ら隣の親友だったK子さんに「嫌、嫌、人間の身体をあんたダルマみたいにしてしまふ戦争は嫌よ」と云つた時、ふん、判つたかい。思い出したかい。お前が私の後にいてその言葉はどう聞いたのか知らないが「名誉の傷痕

軍人を見てダルマとは何だ。戦争が嫌とは何だ。こっちに来いっ」と私の手首をねじりあげて列から外し皆の前で私をつきとばし、平手で頬を五ツも六ツも撲りつけたわね。何の事か判らなかつた私が痛さと恐しさに「御免なさい、かんにんして」と謝るのを尚も撲る、蹴るの乱暴で、駆けつけた先生にも怒鳴り散らして私を憲兵隊に連れて行った。思出したかよ。ちく生っ。今にみている。今度は私のこの十年年の気がすむまで仇をとってやるから。私は冷いコンクリートの上に坐らせられた、それも十七才の乙女の両手を縛りつけてね。私は泣いて泣いて泣きあかし、両親に引きとられて翌朝、家に帰った時から、もう世間に顔も出せない女になっていた。誰も何も云わないけれど、私の性格が誰にも逢えない様になっていたんだ。私は毎日泣いて暮した。お前がにくらしかつた。不用意に喋った自分と云うものを恨みもした。知らない土地に行つて徴用となり戦争を憎み、お前を憎んで敗戦となつた。両親や兄弟は空襲で死んでしまい私は自暴自棄の様になつて生きぬいた。苦しい生活だが自由の日本。それでも私の心はいつも暗く陰気だつた。お前の事が忘れられず男がみんな憎かつた。私はそのうちお前に逢えば必らず復讐してやると誓つた。復讐が出来るだけの女になつたのさ。私はおとなしい誰からも賞められる位の娘だつたん

だよ。しかし神様はいるもんだね。何をもうのさ、静かにおしよ。ホラ、ハイシハイ

シ、おい、お前をあとで拷問にかけてやるからね。帰しやしないよ。偶然に私のキヤバレ



△新聞切抜通信△

日課の下着泥棒

藤木仙治

サイクリング用の立派な自転車で、早朝の散歩のついでに、通りがかりの家の軒先から女性の下着ばかり、三十数点を盗み回つていた少年が、神楽坂署に捕つた。

新宿区筑土八幡町三三、筑土アパートでは最近、物干のブラジャー、パンティ、シ

ユミーズなどが、ひんぴんとなくなるので、アパートの住人が集り、色とりどりの下着でエロ漢をワナにかけようと考へた。この計略、マンマとあたって二十日早朝、同アパートの理容器具商、高木康之さんが犯人を捕えてみれば何と高校生。

「で、お前と逢い、私は本当に驚き、もうこれでいつでも死ぬると思ったんだよ。今夜はお前を殺して私も死ぬよ。何だよその泣き顔は、それでもあの憲兵かね、大きな顔をして威張っていた……オヤオヤ涙を流してる。口惜し涙かい。へえ、首を横に振って違うの。じゃ私が恐いのかい。それとも私に許しを乞うているのかい。へえ、やっぱりそうかい。そんなに許してもらいたいのかね。何だい、ハゲ頭のくせに。一寸私が色じかけでささやいたらもう此のさまだ。誰がお前なんかを私のアパートへ惚れて連れてくるかね。ウソに決まってるじゃないか。お前が私の誘いにのって領収書をごま化し、会社に何度も出した事も喋ってやるからね。静かにおしっ、許さないよ。許すもんか。ここが何処かの地下室だったら、それとも山の中だったらお前を鞭で打ちすえて打すえて半死半生にさせるんだよ。何だい、その泣き顔は。私はお前のその泣き顔をみるとムラムラとハラが立つんだよ。ちく生ッ、もう構うものか。さ、これでこのお前のベルトで半殺しにしてやる。ホラエイッ、いい音だねえ。いいかい、もう一度、エイッ、ちく生ッ、ちく生ッ仇をうつんだ、私の仇をうつんだ、これでもか、これでもか。私の恨みを思い知るがいい。一人の女の一生を台なしにしたお前を殺してやる。これでもか、これでもか」

この少年は文京区新諏訪町に住む高校二年生のAで、今月初め新宿区新小川町二丁目の江戸川アパート附近で、若い男が捨てて逃げたボストン・バッグを持ち帰ったところ、女性の下着が七、八枚あったところから、自分でもやり始め、日課の自転車の散歩には、必ず一枚、二枚と盗み回った。自宅には盗品の下着がボストンバッグにいっぱいあって、係官をあきれさせた、(東京タイムズ紙、昭和三十三年八月二十一日附記事より)

○

この記事で面白いのは、下着泥棒のエロ漢を捕まえるのに、わざわざ、色とりどりの下着でワナをつくったという点である。

記事が短いので、くわしいことはわからないが、想像はできる。エロ漢のよろこびそうな色ものパンティ等を軒先に干して、犯人を誘いだしたのであろう。

殺人鬼に罠をかける、というフランス映画があったが、これはまさに「エロ漢に罠をかける」である。

女の下着を集める男なんていうのは、もちろんアブノーマルで、ことに他人のものを盗むなんてことは社会道義上許せることではないが、この少年を釣るのに、自分た

ちの下着をエサに提供した女性たちにも、いささか、アブの匂いがするような気がする。

いや、アブというよりも、女性が解放されて、下着をそんな小道具に使うために、人眼にさらすことも平気になった、ということなのであろう。

男性たちの前で、堂々と「下着ショー」なんていうものが開かれる時代である。

この勇敢で行動的な女性たちを、露出症だとか、サディスティックだとか呼ぶことは、もはや時代遅れの感覚かもしれない。

さりながら、パンティでエロ漢を釣るという行為に、筆者はどうも、男に対する女性のサディズムを感じて、なんとしても、おもしろく感ずる。

この犯人の少年を、エロ漢だとか、アブだとか、書いたが、案外、そんなギョウギヨウしいものではなく、異性に興味を抱きはじめる年頃の、単なる人騒がせの悪戯かも知れないのだ。

道を歩きながら、ふと、よその家の庭に、ピンクのパンティ等がひるがえっているのを見た時、一瞬ニヤニヤした気持になるのは、なにも、アブ・マニマのみではなからう。

# 竹夫人



三條卓史 作画

芳枝が大阪行の汽車に乗ったのは翌日の午後であった。わざと人目を避けて、次の駅から乗った芳枝は、小さな田舎の駅のプラットホームにぽつんと立って、いつまでも手を振っていた五郎の姿が眼に残った。

きた。今膝の上に軽く組んでハンドバッグを抑えている彼女の夏手袋の下には、その手首の処に紐で括られた痕が薄紅く残っている筈であった。

思いなしか、芳枝の前の坐席にいる老人が眼鏡越しに彼女をじろじろと見ているようで彼女はわざと眼を窓外にそらした。

夕方家へ帰った芳枝は、陳に、五郎に金を融通して貰った事を話した。勿論、竹の家での事は云わなかった。陳は芳枝の何か活々としたような表情、話し振りなどを注意深げに観察しているようであった。彼女が一通り語り終ると「そうか、それはご苦労だったな。お前に仕事の資金の事まで心配させて、ほんとに済まないと思っているよ——。お前、今日は疲れただろうから、さっさと湯を流して早くお寝み……それから明日、眼が覚めたら一寸私の処まで来て呉れないか」

陳はそう云うと、ベッドの上で寝返りを打って向うをむいた。

その晩、芳枝は独りベッドの上で転輾していた。疲れてはいたが竹の家の五郎の姿が想い出されて寝付かれなかった。彼女は廊下の隅から竹箒を持って来るとドアに鍵をかけた。それから窓を締めてカーテンを引いた。

部屋は暑かったが、もう誰からも覗かれる心配はなかった。



彼女は竹箒の柄を芯にして夏蒲団を海苔巻きのようにくるくると巻いて、紐で縛ってベッドの上へ置くとガウンを脱いだ。

灯火に照らし出された芳枝の豊かな肉体は、抑えがたい回想に浸っていた。彼女はベッドに上り、巻いた蒲団に背をつけて、後ろ手にそれを抱いた。竹の籠とはまた違った蒲団の弾力が彼女を快よく刺激した。張り切った両の乳房にうす紅く竹筒を押しつけられた痕が浮び上っていた。——五郎さん。——芳枝は口の中でそう呼んだ。

○

翌る朝、芳枝が重い頭で陳の部屋へ行くと陳はベッドの中で冷くなっていた。青酸の小瓶と、コップが床の上に転がっていた。彼女は驚愕して老支配人の延周に電話した。医者も飛んで来たが、どうする術もなかった。陳の遺書には

「私のなすべき事は凡て終わった。芳枝は郷里に頼れる人がある様だから、そこで新しい人生を掴むがよい。延周には出来るだけの報償をしてやって欲しい。大栄公司は私と共に地球の上から消えて行くのだ」

と認めてあった。

彼女は、ただ果然と放心した様になっていた。延周はそうした彼女を促して葬式を済ませ仕事の整理をした。

或る日、債権者の楊大が芳枝の家へやって

来た。延周が仕事の事で留守をしているのを狙って来たらしい。

「奥さん。私は陳さんに、若し貸金が払えない場合は奥さんをお預りすると約束していたのです。今日はその約束を実行して貰いに来ましたよ」

と云って一枚の証文を芳枝に見せた。それには漢文で沢山文字が書かれていたが、彼女には読めなかった。

「でも私は陳から何も聞いておりませんわ」

「奥さんが聞いていないくても、この証文があるのだから仕方がありませんよ。さア、表に車が待っています。おいでなさい」

楊大は芳枝の言葉なんか、てんで受け付なかった。いきなり彼女の手をぐッと掴むと、ぐいッと後ろに捻じ上げた。

「な、何をなさるんですッ。離して……」

彼女が驚いて身体を引こうとする後へ、何時の間にか二人の若者が突っ立っていた。

「静かに」

そう云うと、一人が手早く芳枝に猿ぐつわを噛ませ、他の一人は大きな麻袋の口を拡げて芳枝の頭からすっぽりと冠せてしまった。

——誰か、誰か来てッ——彼女は必死で抵抗しながらそう叫んだが、それは既に猿ぐつわに遮られて声にはならなかった。

楊大は大きな麻袋を担いだ二人の若者を従えて用心深く玄関の扉を開けて表に出ると、

素早く自動車に乗ってアクセルを踏んだ。

「さア早くッ」

と若者を促してドアを閉めてハンドルを切った。車はスーッと走るように走って、見るうちにアスファルトの道に小さな影となつて行った。

玄関わきの植木の繁みの蔭から、じつとこの様子を窺っていた一人の男があったが、彼は楊大の顔と自動車の番号とを確かめると、急いで流しのタクシーを止めて彼等の後を追って行った。

○

その夜——

楊大は第三夫人の蘭子に酌をさせながら、上機嫌で杯を重ねていた。

「おい蘭、今日からお前の妹分が出来たぞ。お前が此処へ来る以前、俺と取引をしていた陳の奥さんだ。あの女もお前と同じ様に日本人だ。支那の女も良いが、俺は日本の女が好きだ——おい、酒を注げ——いつまでも恥しがり屋で、はかない抵抗を見せる姿は、まるで博多人形を弄んでいるようで楽しいもんだ。」

楊大は顔を赤くして独りで喋っていた。「どうだい、その服は、よく似合うじやないか。何しろ俺が考えた、よろめき服、だものな。ちよっと此方へ来い」

楊大は、そう云って蘭子の右の上膊部を掴

むと、ぐいと自分の傍へ引寄せた。彼女はよろよろとよるめいて上体を楊大の方へ傾けながら、持っていた洋銀の銚子を思わず落しそうにした。

蘭子が楊大に牽かれて倒れそうになったのも道理で、彼女の両手と両足は、極く短かい鎖で繋ぎ合わされているので、両手は前に揃えたまま、また足は小刻みに両足を運んで均衡を取りながら、なめくじのように緩くしか歩けない。一寸突いたり押したりすればそのまま重心を失って顛倒してしまうのである。彼女の着ている「よろめき服」は乳から上は完全に露出して二本の紐で肩から吊っている。腹から腰、太股から下股まで縫いぐるみのように身体の凹凸に合わせてびったりと吸い付いている。背部を千鳥に絡んだ紐が、オレンジ色のサテンの布で出来たその服を引締める役目をしている。肩から吊った二本の紐は乳房の上部で左右に割れて、ふっくらとした両の乳房を一層盛り上らせている。上体をくの字にまげた彼女の服に金糸で宝珠の玉を縫取り、二匹の竜が一つは腹の方から下を向き、一つは膝のあたりから上向いて、その珠を奪い合う図柄が黒と金とで縫い取られている。彼女が身を動かす度に、その竜も妖しく身をくねらせた。

楊大は、そんな姿の蘭子を自分の傍へ引き寄せると

「銚子を置け」

と云って、彼女の顎を右の指先でグイと持ち上げた。彼女がうすく上下に開いた唇の奥に、細長い螺旋の猿ぐつわがキラリと光った。ちよつと見ては気が付かないような細い金色の糸鋼で、その猿ぐつわは彼女の両耳に懸けられていた。彼女が一言も口を利かないのはそのためである。

楊大は蘭子の顎を引いて唇を大きく開かせると、右手の棚から褐色の瓶を取ってたらたらと彼女の口へ注いだ。蘭子は苦しげに頭を反り返らせて、その液を飲むのを拒もうとしたが

「じつとしていないか」

と楊大は彼女の髪を掴んで、ぐッと胸へ引き付けると、更に瓶を傾けた。ごく、ごく、と彼女は否応なしにその液を嚥み下す。長い睫毛の眼を上眼遣いに見開いた。その悲しげな表情を楊大は愉快げに見まもりながら、遂にその液を全部彼女に嚥下させてしまった。

「さて、お前は今夜もこの薬を飲んだ。これから俺は一寸、陳夫人に挨拶して来るから、暫らく此処で待っているんだ。あとで引合わせてやるぜ」

そう云うと、彼は蘭子を傍の椅子に腰掛けさせ、卓子の上の花瓶からダリヤの花を一本抜き取って彼女の胸の間に挿した。長い茎がサテンの服の上部から腹へかけて無理矢理に

押し込まれ、オレンジの肌にびったり添った服が、其処だけ縦に筋立った。

楊大は羅宇の長い煙管に煙草を詰めて、ゆっくりと一服吸いながら蘭子の姿態を見ていたが、やがて、ついと立って隣りの部屋へ足を運んだ。

○

「何をなさるんです。早く帰して下さい」

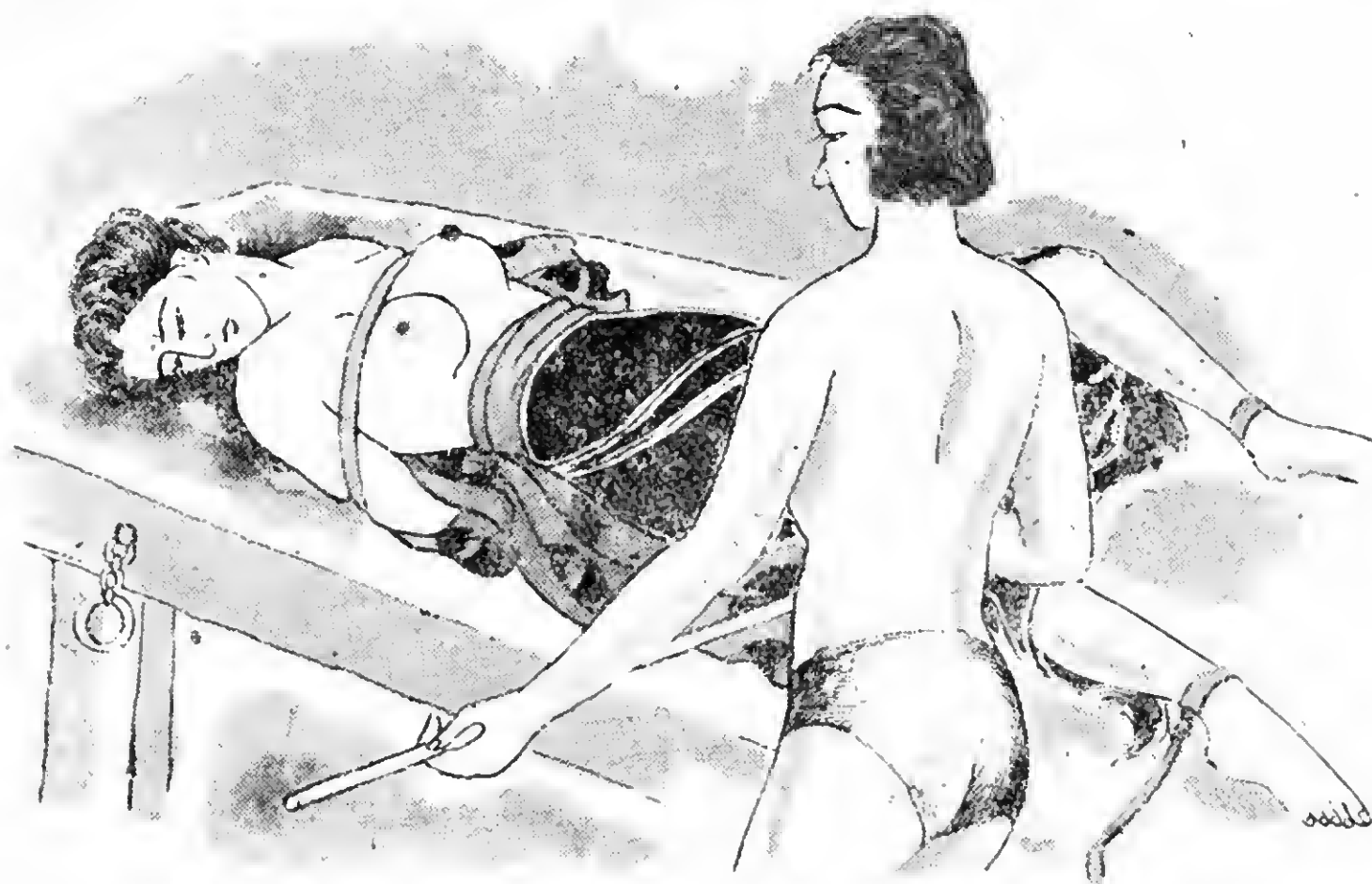
芳枝は、膝で滑って後しざりしながら叫んだ。彼女は、この部屋へ連れ込まれると嚴重に後手に縛り直されて、そのまま夜まで閉じ込められていたのだ。小千谷縮の着物の裾が乱れて、赤い布が艶かしく膝にこぼれた。

楊大は、壁際まで退って憎々しげに睨みつけている芳枝の顔を興味深げに見ながら「怒ってるな、ハハハ、いくらでも怒るがいい。大きな声で喚くがいい。いくら喚いたって、お前さんは今日から俺の第四夫人だ。なあ、芳枝じや工合が悪いな。そうだ明芳（ミンファン）が好い。今日からお前さんの名を明芳と呼ぶことにするぜ。いいかい？」

「何と云う失礼な、わたしを此処から出して下さい。」

「まあ、来た早々そんなに苛立つもんじやアない。この部屋はお前さんの部屋なんだからゆっくり落着くがいい。そら、あそこにはちやんと安眠用のベッドもある」

楊大は酒くさい息を吐きながら左手で部屋



の隅を指した。そこには、初めて見る変った型の寝台が置かれてあった。

「あれを此処では登霞台というんだ。第二夫人も第三夫人も、皆あの台の上で素晴らしい天女の舞を舞った。お前さんも、ああ明芳だったな、明芳も当分あの台の厄介にならねばなるまいて」

その台の脚やボディに装着してある環やベルトは、台上の人間を拘束する用具である事が芳枝にも察せられた。彼女は一瞬、その台上に置かれた自分を想像して身を震わせた。

「嫌です。早く帰して、あなたは何の権利があつて、この私を……」  
「権利？、権利はあるんだよ。俺は陳君に貸した金の代償に、お前さんを買った事になってるんだ。中国では女は金で買うものと決っている。だから中国の女は買われた男の自由にならなければならぬと諦めている。俺はそんな意志のない女より、好き嫌いをはっきりと現わし、貞操観念を捨て切れないで、心の中で懊悩を繰返しながら、抗し切れない圧力に屈

伏して身を悶える日本の人妻が好きなんだ。明芳、お前もそうして存分に藻掻くがいい。だが、どう藻掻いたって、これからは俺の思うままになる外ないんだ。とにかくお前は俺の第四夫人だからな」

楊大はそう云いながら、益々芳枝に近付いた。そして着物の衿に手を掛けた。

「あッ、何をするんですッ」

「フフフ、これから第三夫人と引合せてやろうと思つてさ。それにはお前の姿が整い過ぎているので少し崩しておいてやるのよ」

そう云いながら、両手で衿を左右に強く引いた。

「ああッ」

無理にはだけた胸に、引締められた乳房が露出した。ぐるぐると帯を解かれると着物の上前がしどけなく膝に滑った。

「ああ、何ということをやめて」

「まア、こんな格好でいいだろう。じやア蘭を引合せてやろう。そうしていな。下手に動くと却つて変な格好になるぜ」

そう云うと、楊大は立ってあちらの部屋へ行った。

間もなく第三夫人の蘭子が胸へダリヤの花を挿したまま、両腕を前へ伸ばし、その手の間の鎖を楊大に握られてそろり、そろりと入って来た。

芳枝は第三夫人と云う女の異様な姿を見て

ハツと胸をつぶした。女の身体の自由を束縛された、完全な玩弄物である。

「どうだい、こちらが新らしく第四夫人になった明芳、これは第三夫人の蘭だ。」

楊大の声に俯向いていた顔を上げた蘭の顔を見た途端、芳枝は思わず

「あッ、あなたは蘭子さんッ」

と叫んで一膝乗り出した。

蘭子は陳等と同じ様に貿易商をしていた劉の細君で、一年程前、事業に失敗して夜逃げをしたとか云われていた。芳枝は陳や劉がまだ盛大に営業していた頃、二、三度招かれて往き来していた間柄であった。

劉と蘭子が逃げていたのを楊大に捉まったのか、劉が承知で蘭子を楊大に譲ったのか知らないが、蘭子は日本人で芳枝より五才程の年上であった。

「どうだい蘭、妹分が出来て嬉しいだろう。今夜はこれから妹分の前で、第三夫人の勤め振りをを見せてやるんだよ」

蘭子も芳枝を一目見て、ハツと驚ろいたが螺旋の猿ぐつわを嵌められているので言葉をかける事が出来ないのだ。

「おい明芳、おろおろしないでよく見ておけよ。お前のこれからの好い参考だから」

そう云いながら蘭子の手錠を一旦外して後手に留め、壁際の釘ぼたんを押すと天井から一本の綱がするすると降りて来た。楊大はそ

の綱の先端の金具を蘭子のオレンジ色の服の背中に造りつけてある環にパチンと嵌め合せて綱をぴんと張った。そうしておいて彼は更に一方の壁を押すと、其処は隠し戸棚になっていて、すーッと開いた壁の奥に十数本の鞭や、細綱や手枷足枷、鎖や締金具などの外女体の責めに用いる各種の薬瓶などがぎっしりと並んでいた。

彼はその中から三極程の幅広の皮鞭を取り出すと二、三度宙に素振りをした。パチンと鞭は撓って鮮やかな音を立てた。

「いいかい蘭、そら行くぜ」

楊大は両足を斜に構えてピシーッ、ピシーッと鞭を振り下した。

「う、うーッ」

蘭は眉を大きくしかめ、身を反らせてその鞭から逃れようと身悶えた。その丸い尻へ、オレンジ色のサテンの布を透して波打つ腹へ桜色に上気している素肌の肩から胸へ、その褐色の皮の鞭がまるで蛇のように纏れついては又離れた。

「ええいッ」

楊大の力を単めた一打ちが、両の乳房の真中にパシッと鳴ると、挿していたダリヤの花びらがばらばらッと散って蘭子の足許に舞い落ちた。

芳枝は思わず眼をそむけた。見るに堪えられない激しい鞭打ちに、彼女は自分が責めら

れているような息苦しさを感じていた。

「おい明芳、こっちを向かないか、こんなのは序の口だ、まだまだこれ位では夫人の勤めは勤まらないぜ。一寸息を入れさせてやるかな。もうそろそろ薬が利いて来る頃だが……」

楊大はそう云いながら鞭を置くと蘭子の手足の鎖を解いた。手は全く自由になったが、足許の方はオレンジ色の服の裾が思い切って狭く詰まっているので両足を拡げる事も出来ない。その上、天井から下った綱は蘭子の服の背にきっちりと繋がれているので、立ったまま、数歩の位置を変える余裕はあっても、膝を折って坐る事さえ出来なかった。

楊大は蘭子をそうした格好で部屋の中央に立たせておいて、今度はじり、じりと芳枝の方へ近付いて来た。彼の右手には鞭のかわりに太さが万年筆位で長さが二メートルばかりある朱塗りの棒が握られていた。

「いいかい、もう間もなく蘭が喚き声をあげながら自分自身でどんな格好をするか。女の本性がどんなものか、よく見て置くんだ。

明芳はその登霞台の上でな……さア、立って台の上へあがれ」

「いやです」

「いやだって？ 此処まで来てまだお前さんの意志が通ると思っているのかい。何度も云うようだが、お前さんはわしの第四夫人になったんだぜ。わしは中国流に云えば夫であり



又主人だ。お前さんや蘭なんかは、体の良い女奴隷さ。それが主人のわしに抗らうなんて笑止だよ。さア、何でも良いから、あの台へ行くんだ」

楊大はそう云いながら屈めている芳枝の膝頭を朱塗りの棒で軽く押した。

「きやッ」

途端に芳枝は驚ろきの声を上げて飛び退いた。怒りに燃えていた彼女の眼が一瞬恐怖の色に変わった。

「そうだ、そうしてそろそろ行くんだナ」

楊大は、自分の意志にさからいながら現実の恐怖におびえて次第に生簀の坐に近づいて行く芳枝の様子を娛しむように、その朱塗りの棒を次々と彼女の腰に、背に足に押し当てた。

その朱塗りの棒は握りの所に仕懸けがしてあって、そこを押すと棒の尖端から細い針が飛び出す様になっていた。その針は芳枝の素足に、また着物の上からも容赦なく肌に喰い入った。

芳枝は後手に縛られたまま、帯ほどのしどけない姿で針の飛び出す棒に追われて、ベッドの下までいざり寄ってしまった。もう絶対絶命であった。

「そら、立って……その台に足を掛けるんだよ、そら、そら」

「ああ、五郎さんッ」

芳枝は追いつめられた自分が、最後に縋り付く人の名を思わず叫んだ。

「え、何だって？」

楊大は途端に自分の耳を疑うように、一寸行動を中止して芳枝の顔を見た。だが今の彼には、女がどんな言葉を吐こうと問題ではなかった。むしろ無益な反抗に悶える獲物を前にした猛獣のように、思いきり弄って最後にそれを完全に征服する歡喜を味わえば事足りるのだ。何とでも喚け、うんと苦しめ。彼は心の中で快哉を叫んだ。

「良い加減に世話を焼かせないで云う通りにするんだ……そら、よいしょッ」と

楊大はベッドの脚の下に崩折れている芳枝を抱えると、引摺るようにして台の上へ担ぎ上げた。

「ああ、かんにんして……」

もう恥も外聞もない。最後の悲鳴をあげながら懸命に遁れようと台上で蕩揺く彼女の足を、楊大は手早く左右の環に縛りつけてしまった。着物は無残に乱れ、髪もぐしやぐしやになっていた。

「さあ、もうこれでお前は完全なわしの明芳になった。今夜はこれから陳夫人から明芳への身替りの式をするんだぜ」

楊大がそう云った時、突然

「大人（ターレン）」

と云う声がした。部屋中央に綱で繋がれ

ている蘭子が、自由にされた手で猿ぐつわを引きはずして叫んだのである。

「大人、こっちへ来て、この綱をはずして……」

両手を前へ差出し、身体を蛇のようにくねらせて楊大を呼ぶ蘭子の眼は、妖しく情炎に血走っていた。

「フフフ、そろそろ始まったナ」

楊大はそう云うと、予期していたもののように芳枝の傍を離れた。

「ねえ、早く……」

蘭子は物に憑かれたように両手で自分の乳を抱えて足摺りをした。

「下手な競走馬のように無暗にいきり立つんじやアねえ、今自由にしてやらア」

薬が全身に廻ったらしく、日頃のつましやかとは打って変った蘭子の狂態に近い身悶えを、愉快げに見やりながら、楊大は彼女の後ろに廻って、千鳥掛けの紐をするすると外していった。そして彼が再び壁際の鉤を押すと、蘭子の背中を繋いでいた綱はオレンジ色の布をぶら下げたまま滑るように天井に上って行った。

芳枝は登霞台と呼ばれる固いベッドの上でその状景をじっと見凝めていた。彼女は蘭子が薬の作用で発作的に狂態を演じているとは知らないの、あれほど淑やかだった人が！と意外の感に打たれ、また蘭子に次々と無恥

な行為を指図する楊大に、限らない嫌悪を感じていた。

楊大を背中に乗せて、まるで白い驢馬のように部屋の中をぐるぐる廻った蘭子が、やっとその馬から解放されると身体ごと打つけるように楊大に縋り付いたが、

「今度は虹の懸橋だ」

と云いながら、邪慳に蘭子突き飛ばした。

「まだいじめるのねエ」

「そうだ。その代り、今夜はお前に明芳への挨拶をさせてやらア」

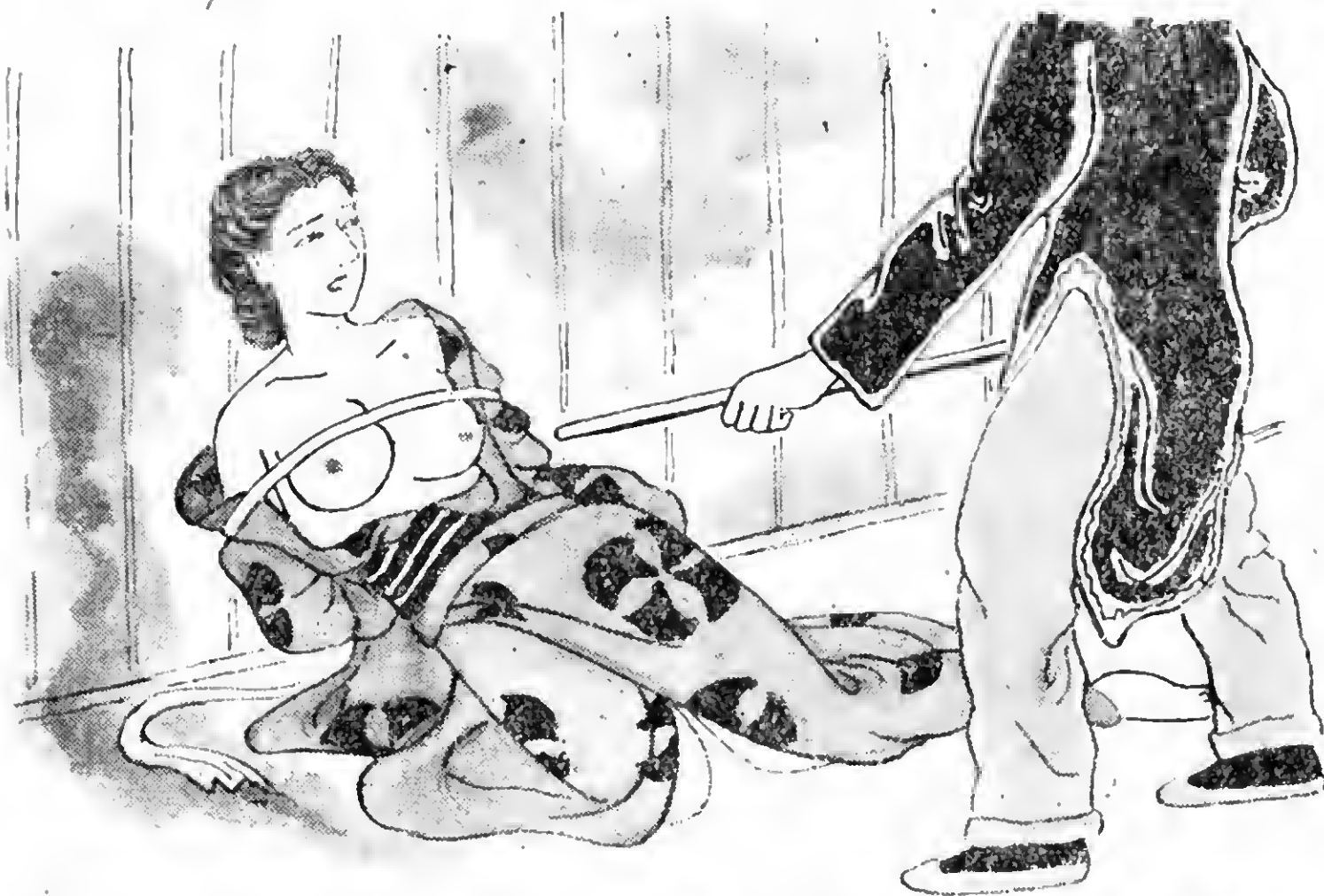
「こうするの？」

蘭子は両足を踏ん張ってそろそろと上体を後ろに反らした。両手を伸ばして、ぎりぎりの線で床へ屈かせようとする途端に、思わずドシンと尻餅をついてしまった。

「なアんだ、も一度やり直し。……うんと両足を開いて、顎をぐッと伸ばすんだ」

まるでアクロバットの練習のように不自然な姿態を要求する。腹の皮が伸び切って太鼓のように張った。二つの乳が生き物のようにぶるぶると動く。

「腰を落さないように力を入れて、そ



ら、お手伝いだ」

楊大は蘭子の宙に伸ばした両手首を握ると、じーっと低く下げて床を支えさせた。

「ちよっと、そうしているんだ」

彼はそう云うと、隠し戸棚からウィスキーの瓶とグラスを取り出して来て蘭子の腹の上に置いた。急にひやりとした冷い硝子の感触に、思わず腰を落そうとするのを必死で支えている蘭子であった。

「どうだい明芳、これを花テーブルと云うんだ。これからはお前にも色々な事をさせてやるから楽しみにしているがいい。どうだい、一杯注いでやろうか」

楊大はベッドの上の芳枝をからかうようにグラスをあげて洪笑した。

蘭子は頭へ血が逆流するようで、長くそんな姿勢ではいらなかった。彼女の喘ぐ呼吸で腹の波打ちが大きくなると、彼は手早く瓶を戸棚に収めて再び朱塗りの棒を手にとった。そして

「おや、又尻餅をつきそうだぜ」

と云いながら、蘭子の尻を下からピシヤピシヤと叩いた。その朱塗りの棒は鋼鉄の螺旋で出来ているので、振る度に適度に撓った。

「いい加減、張り切ってるじゃアないか」  
 声と共にその棒が蘭子の胸へ、そして腹へ  
 飛んだ。身悶えすらできない無惨な姿の女の  
 肌を打ち据える光景に、芳枝は思わず眼をそ  
 むけて息を嚥んだ。

——やがては自分もあの様に責められるの  
 だ——

そう思いながら、今更のようにみじめな自  
 分の姿を見た。

着物は肩からずり落ちたままで身繕いをし  
 ようもない。両手は後に両足は開いてベッド  
 の両端に縛られたままである。

暫らくすると楊大は、打擲でへとへとにな  
 った蘭子を引摺るようにして、芳枝の縛られ  
 ているベッドの傍へやって来た。

「おい蘭、これで明芳に妹分の挨拶をしてや  
 るんだ、いいな」

そう云って朱塗りの棒を蘭子の手に握らせ  
 た。

「構わんから、今夜は思う存分責めてやれ、  
 第三夫人の威厳を示して見せるんだぜ」

「ああッ、蘭子さんッ」

芳枝は後手に縛られている右手の腕をベッ  
 ドに落すと、思わず叫び声をあげた。薬の作  
 用で逆上した蘭子の眼が、獲物を狙う狼のよ  
 うにギラギラと輝やいて、じりじりと芳枝に  
 迫って来た。

——ヒュン—— 空気をきる微細な金属音

と共に、朱塗りの棒が芳枝の胸へ飛んだ。

「ふえッ」

着物がずれて剥き出しになった乳房に、焼  
 けるような痛みを感じて、上体をその棒から  
 避けようとしたはずみに、どっとベッドに仰  
 向きに倒れてしまった。鞭打ちには絶好の姿  
 勢であった。

「はあッ、えいッ」

蘭子は眼を血走らせ、肌に汗をにじませな  
 がら、荒い呼吸遣いと一緒にピシッ、ピシッ  
 と芳枝を打ち据えた。その蘭子の棒は、格好  
 の良い芳枝の二つの乳房に集中した。自分が  
 楊大に責められて、何処が一番敏感なのかを  
 一番よく知っている蘭子であった。

「フッフッフ、自分から勝手に着物をずらせて  
 しまつて、良い格好だぜ。そうやって今のう  
 ちに、せいぜい人魚の踊りでも踊っているん  
 だな。あとでゆっくり料理してやるからナ」

楊大は傍の椅子に腰を下して、長い煙管を  
 口に咥えながら芳枝の打擲に身悶えする姿を  
 面白そうに眺めていた。

蘭子は芳枝を打ち疲れると、今度はその棒  
 の先端を芳枝の真赤に腫れ上った乳房のふく  
 らみに当ててチクッ、チクッと針を突き出し  
 た。

「ぎえッ」

魂切るような悲鳴と共に、ぐるりッと背を  
 向けで耐えがたい乳房への針責を遁れようと

すると、楊大がずかずかと寄って来て

「こっちを向くん」

と肩と腕を驚掴みにし、はだけた胸を蘭子  
 に向って真正面に捻じ向けた。

「ひッひッ」

蘭子は狂気じみた奇声を発して、芳枝の胸  
 乳に針を突き入れた。極度の恐怖と苦痛に、  
 芳枝は思わず頭がボーッとして気が遠くなり  
 そうであった。

「ハハハハ、少しは参ったかな。じゃア今夜  
 はこれ位にして、これから夫人随順の儀式に  
 移ろう。蘭はここで明芳の洗礼を見ているん  
 だ」

楊大はそう云うと、蘭子を先刻まで自分が  
 掛けていた椅子に両の手足を別々に四力所へ  
 縛り留め、床に落ちていた螺旋の猿ぐつわを  
 再び彼女の口に嵌めてしまった。

「どうだい明芳、朱塗りの棒の振舞いで、少  
 しは良い心持ちだったかい。今夜はこれから  
 陳さんに代ってお前さんを天国に遊ばせてや  
 るよ。ほら、あそこで天使が明芳の前途を祝  
 福してるだろ」

そう云うと芳枝の髪をつかんで捻じ向け、  
 椅子へあられもない姿で縛り付けられ、こち  
 らを充血した眼で睨みつけている蘭子を見さ  
 せた。

「いいナ、泣いても喚いても、もうわしの手  
 からは遁れられないんだ。女の全能力、全生

命を捧げて、わしに奉仕するのがお前達の役目なんだよ、わかったかい」

芳枝の髪を掴んだまま脂切った顔を近付け、喋べる楊大の眼に、芳枝に対する淫らな情炎の色が漲っていた。

「ああッ、たすけてッ……」

芳枝は必死に抵抗しようとした。

「おおッ、芳枝さんッ」

余りの恐怖と屈辱に半ば気を失いかけていた芳枝の耳に、何処かで聞いた事のある男の聲が流れて来た。

「あッ」

と気が着くと、彼女の眼の直ぐ前に竹の家の五郎の顔が大きく映った。

「ああ、五郎さんッ」

意外であった。五郎さん、助けて、と彼女の心ではそう叫んでいたが、その人が現実眼の前にいる事は奇蹟に近い事であった。

「芳枝さん、安心なさい、もう大丈夫です」

五郎はそう云う言葉も、もどかしそうに芳枝の足の縛しめを解いていった。

ふと見ると、楊大は四、五人の警官に床の上に捻じ伏せられて、後手に手錠を嵌められていた。蘭子はまだ椅子に縛られたままでボカンの其の場の状景を見凝めていた。

○  
その翌日――

姫路の駅で乗り換えた五郎と芳枝は、客の

少ない二等車の窓辺に向い合っていた。

「神戸の店の者に、あなたの様子をそれとなく見張らせていたのです。それが、昨日電話

でああなたが自動車で連れ去られたと知らせて来たのです。神戸へ飛びました。それから店の者の見定めて置いた自動車の番号を調べる

とR貿易の自家用車と分ったのです。そこでその時刻に自動車を使っただ人物を調べようと思っただが、こちらの探索を相手に感付かれち

やまずいと思って、それとなくR貿易の自家用車を自由に使い得る関係者を調べて何人かの容疑者を掴んで、それから警察へ持ち込んだのです。僕はその容疑者をしらみ潰しに調

べるつもりだったんですが、警察ではそれらの名前を見ると直ぐ『これだ、この楊大とい

うのはこちらでも密貿易の嫌疑をかけて内々調査を進めていた処だ。女関係も兎角の噂を

耳にしている。こいつを洗おう』と早速手配をして昨夜の急襲となったわけです。勿論、

あなたの身が心配だったので、僕も特に頼んでついでに行った次第です」

五郎は、オレンジジュースの罐に穴をあけて紙コップに注ぎながら、彼女が攫われてから救い出されるまでのいきさつを話した。

「ほんとうに、五郎さんには大変なお世話になって、何と云ってお礼を云っていいか分かりませんわ」

芳枝はうつむいて、折目のついた五郎の青

鼠色のズボンの膝のあたりを見ながら、改めて軽く頭を下げた。

「もう、そんな固苦しい辞儀はよしませう。それより、あなたは又あの竹の家へ来て呉れますか」

嬭々と吉井川のせせらぎ音の聞える竹の家で一夜を明かした胸の疼くような想い出が芳枝の脳裡に蘇って来た。彼女は黙ったまま、そっと五郎の顔を見た。彼の優しい眸が明るく大きく、慈父を思わせるようなまなざしで微笑んでいた。

――五郎さん、いつまでも、いつまでもあなたの傍に置いていて下さい――

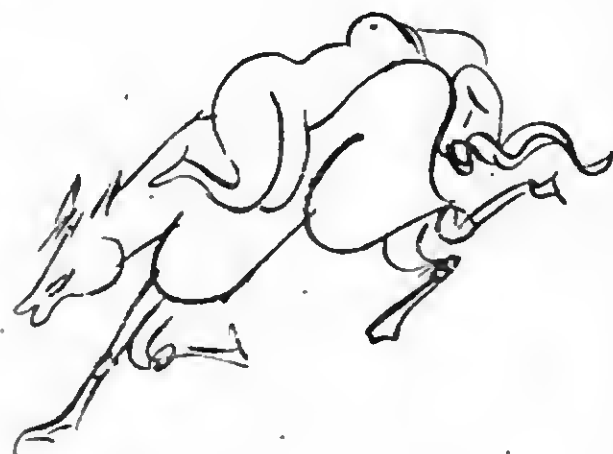
芳枝は心の中でそう訴えながら深くうなずいた。

けたたましい汽笛と同時に汽車は県境のトンネルに入った。五郎と芳枝とは、どちらからともなく固く手を握り合っていた。(完)

### 代理部分護品総目録

女体緊縛フオートの部として新版十七組  
最新版『縛り』写真五組、新人モデル新  
作姿態六組、女体「責」写真集二十組、  
花坂嬢優美姿態緊縛集四組、女体緊縛フ  
ォト・オンパレードR組百花撰、外に女  
体切腹フォト、浣腸写真、マゾフォト、  
禪美写真等満載。切手八円同封にて御申  
込次第急送いたします。





# 話の屑籠

辻村 隆

緊縛——なる言葉は本誌の専用語かと思っ  
ていたら、最近の週刊紙にも使われ出したの  
は聊か愉快である。

『週刊サンケイ』九月十四日号の、今東光氏  
作の「悪太郎」の第三回に、甚だ奇妙な一節  
があるので右に紹介しよう。

小説「悪太郎」の主人公は、紺野東吾なる  
関学中学部三年の、小説を耽読し、反逆精神  
に富んだ少年であるが、ミミズク先生と呼ば  
れる、内村数学教師に数学責めにあつて、レ  
ジスタンスを起す。彼がその友達と語る会話  
が振っている。

「お前ら海老責めいうのん知ってるやろ」  
「知っていると」

彼等は道場で柔道衣になると、海老責めと  
称する責め手を使ったが、逆に両足をすくわ  
れて転倒したものだ。

「あんな簡単なものやあれへん。ほんまの海  
老責めはな。徳川五代將軍綱吉の頃にな。火  
附け盗賊改め役ちう重い役があつたんや。奉  
行に当る役やが、主として強窃盗と放火犯の  
追及に当る役目や。その奉行の中山勘解由ち  
ゆう人が案出した惨忍な刑やな。」

それはな。はじめに犯人に胡坐をかかせる  
んや。それから両手を背の方へ廻し、身体を  
前へ折れ曲げさせ、両方の足首を青い細引で  
一つに結ぶんや。もうそれだけで大概苦しい  
で」

「せやろ」

（この海老責めに関しては、旧号大判時代、  
緑猛比古氏が「怪異海老責縁起」と題して、  
中山勘解由の半生を、詳しく書いておられた  
が、東光和尚の説明も仲々に、微に入り細を  
穿っているのではないか）

「やってみい。両手くくられて背中へ廻さ  
れ、両方の胡坐の足首から頸へかけて細引で  
くくられてんねやで」

「苦しいやろな」

「それだけやないねん。足首から頸をかけて  
縄をかけたやつを、ぐい、ぐいと絞め寄せ  
て、胡坐にした両足首と頸が密着するまで絞  
めあげるんや」

「緊縛ちうやつやな」

（この、緊縛ちうやつやな——と合槌を打つ

一言に妙味がある。まるつきり奇ク向きだからだ。海老責めは、勿論、緊縛の最たるものであるが、そうそうザラに会話にのせない言葉の筈である。紺野東吾自身、海老責めに關し異様に詳しく説明するが、この「悪太郎」全文を通して読むと、この引例文のみが、全体から浮上っている感じである。

「せや、せや、そないすると半時間も経ったら、全身真赤になって、まるで海老みたいになるんや。それで海老責めちう名がついたんや。」（緊縛の仕方によつては、他の方法でも全身が紅くなるもので、私は海老責めの語源は、蝦のあの、屈曲し、彎曲した姿に凝して名付けられたと思うが、諸公は如何？）

そのうちに冷汗が出るよ。もつと時間が経つと紫色に変わるんや。紫色から青黒うなり、それから血色が無うなつて白うなると、死ぬそうや。（右文でも分る通り、海老責めは、単に全身真紅のみでなく、斯くも、体色の変化するところをみると、愈々色に似せて海老責めとこじつけたのは可怪しい。）

「へえ、死ぬんか」

「死ぬとも」

「その海老責めを、役人の隙見て縄抜けする名人があつてんな」

「ふうん、そんな器用な芸当でけるんか」

「出来る悪党があつてんな」

「どないするんやろ」

「比奴は自分の腕や足の関節を抜くんや」

「脱臼するんか」

「そうや蛸みたいに、ぐにや、ぐにやになるやろ。縄するりと抜けるがな。捕縛ちうもんは、身体に抵抗があるさかいに、あんじよう掛るんやないけ。その抵抗を抜いたら、なんぼ縄かけたかてあかんがな」

（所謂、忍者と呼ばれる、忍びの術の秘伝を心得る者はこの縄抜けが、重要な一つの修業であつて換骨脱胎自由自在でなければ一人前ではなかつたそうだ。ここに書かれた様に悪党でなくとも、忍者、隱密の類いは、大方この縄抜けの術を心得ていた）

「蛇くくるようなもんやな」

「そうやがな。わいは海老責めの縄抜けしたようなもんや。数学に抵抗するさかい緊縛（ここでも又使われている）されたんやな。その抵抗をどないして抜くかちうことが問題やけどな」——以下略——

（細々した諾否はともあれ、今をときめく流行作家の、今東光氏が、柔かい河内言葉で、海老責め談義のいくさは、近頃にならぬ収獲であつた）

東光和尚の最後の件りの縄抜けを、私は幼い頃、屢々目撃した事がある。

縁日か夏祭りに、大道支那芸人が、何れはさらったか、買ったのであろう小さい子供を

相手にして、地べたに輪を描いて、その円内で、甚だ惨酷極まる見世物を曝していた。

私の緊縛に対する興味も、或いはそんな幼い頃の見世物に胚胎している様な気がする。片言交りの日本語で、支那人は口上を述べて子供を犂々と本縄縛りにする。首から掛けた本縄は縛りなれた男の手によって、巧みに觀衆の目前で、子供を高手小手の後ろ手に縛り上げ、まやかしものでない証拠に、ぐるりと円内を子供をこづいて一周し、後手の固く縛った結び目を示す。

子供一人が丁度這入る程の白い袋をとり出して、ここで永々と説明が入る。その間、子供はじつと立ちん坊で縛られた儘、悲しげな顔付で、円の中央に立ちすくんでいる。

薄汚れのランニングシャツと短袴きりのあかだらけのみすぼらしさは、子供の頭髮が、てっぺんだけを長く残して、円くそり上げられ、もみ上げがそり残され、顎の辺りまで伸びている。滑稽な容貌も、却って哀れに感じるのだった。子供心に私は、父親の手をぐつと握りしめ、胸をドキドキさせ乍ら、どうなることかと頬を紅潮させて、この痛々しい見世物に魅き込まれていた。

白い袋に子供を入れる直前、男は汚ない帽子を脱ぐと、ペコペコ頭を下げて、喜捨に廻り始めた。その時の集った金が案外少なかったのか、男はいきなり子供の縛った後手をぐ

つと捻じあげて背と腕の間に丸い棒を挿し込むと子供の腰に足を当てがい、えいと一声、子供の高手小手の肉に喰い込んで縛った両手を高々と持ち上げた。鈍い骨の外れる音と共に、後手に縛られた両腕は附け根で外れて、子供の頭より高く挙げた。まるで両腕だけが独立して、背中にくっついてヒクヒクとうごめいている恰好だ。痛ましそうな嘆声があちこちから洩れると、この支那の芸人は、さも得意げに、棍棒を逆転した後手の縄目にぐいぐい挿し込んで、目に一杯涙をため、ぐっと歯を喰い縛った子供を棍棒で小突き小突き再び一周する。

バラバラと又幾許かの金が、帽子に這入ると、男の顔に満足げな笑みが浮ぶ。

広場の中央で、子供の背に足を掛け、えいと掛声と共に、子供の両腕はコトリと元通り納まる。両手首がすっかり血色を失くして、蒼白くなっているのは、長たらしい口上の間に縄が喰い入ったの事であらう。

やっと子供は袋の中に立つ。男は御丁寧に子供の足首をしっかりと縛り、その余った縄を後手の縄につなぎ、こよりで封印する。よろけもならぬ子供を立たせた儘、袋の口はするすると引き上げられて、すっぽりと子供を包み込み、袋口を強く縛って再びそれにも封印する。

余程馴れているのか、袋はよろけもせず、

広場の中央で佇立した儘だ。コソとの身動きもしない。

支那芸人の気合一声。前列の観衆の一人が出て、袋の紐を解く。パラリと下った袋の中から、何時の間に解いたか、子供がここにこそ素手で現われる。

私は激しい昂奮と羞恥に身悶え乍ら、その癖まばたきもせず、この見事な縄抜けを眺めていた。あの見事さが、今にして思えば、完全に仕込まれた換骨脱胎であつたのかと、三十年近くも昔の事が今も歴々と眼前に浮んでくる思いである。

児童福祉法と共に、こうした子供を虐待する見世物は姿を消したが、年配の方なら、必ずや、一度や二度、この大道支那芸人の縄抜術にお目にかかったのではなからうか――

× × ×

こんな見世物を見たせい、私は子供の頃から、縛りに興味をもち、退屈すると、二階のはこりっぱい物置で、懸命に自縄自縛しては、自分の胸にまとわりついた数条の縄目と後手にしまつて行く、緊縛の感触に堪能し、秘かに幼稚な縛りの想像図を落書しては、誰にも知られぬ、秘かな愉しみに、独り耽溺したものだった。

泥棒ごっこをすると、じやんけんに負けてわざと泥棒の役になり、追われた挙句、いつも遊ぶA山の丘の木立ちに、荒縄でぐるぐる

巻きに縛られて、激しい羞恥にかられ乍らもワクワクする縛られる歓びを心算かに愉しんでいた。

羞恥に狂れると、いつしか私は縛る側に廻る様になった。縛ったり、縛られたり、それが私一人でなく、幼い悪友達も、結構縛る事に興味を抱いている事を知って、同好の志を見付けた思いで、内心我が意を得た気でホクホクしたものだった。

子供は実にこんな遊びが好きだ。長じて、内攻する者もあり、私の様に恥を曝け出してしまふ者もある。

唯、この種の遊びが、度を越すと思ひもかけぬ悲劇をひき起すもので、八月三十一日号のサンデー毎日に掲載されていた一文を読むに到って、思わず慄然として、子を持つ親としては、決して見過しに出来ぬ遊びと、今更乍ら思い知らされた感である。

× × ×

「ふとんむし」の殺人——十代兄妹の変質遊びの悲劇——と云う見出しで、所は、高知県土佐郡土佐村田井と云う田舎の、山腹にポツンと立った一軒の農家での出来事であった。

八月十四日の黄昏、荒れた六帳間の、古びたカヤの中で、高石武男（一五）と云う田井中学三年の少年が、風呂敷で両手を後手に縛られた上、両足までも御丁寧に縛られて絶命していた。

その犯行が、なんと実妹の小学五年生の加代(一〇)と云う少女の手によってなされた。しばらく遊びの、恐ろしい結果であった。彼等の父は強盗殺人囚として服役中であり、母は日雇で、辛うじて露命をつないでいた。終日、兄妹二人切りの生活では、いつしか学校から戻っても、余り戸外に出ず、何かの動機から、こうしたしばらく遊びを、二人だけで楽しむ様になっていた。

事件後、母が述べた言葉に、

「武男と妹が、昨年ごろ、よく手足をしばって遊んでいたのを見かけ、きつく叱ってからは、そんな遊びは見かけなくなったのですが……」

と云っている様に、彼等二人のこの遊戯は相当期間続いていたに違いない。仲のよい兄妹は、恐らくは兄妹以上の気持で、お互いに縛ったり、縛られたりしては、人かない山腹の一軒家で、心行くまで、しばらく遊びに耽溺していた事であろう。それが彼等にとつて、唯一の慰安であり、娯楽であつたかも知れない。併し縛りは単調に飽くと複雑になり、狂れてくると昂進するものだ。

始めは簡単な真似事が、いつしか興にのつて日が経つと、それに飽きたらなくて、より以上の刺激を求め、変つた行為を欲する様になつてくる。危険な一歩誤れば大事をひき起す程の行為にも、感受性が鈍くなって、も

っとも欲求する様になつた挙句。遂に彼等の誤つた遊びが惨劇となつて陽の目を見たのである。

「サンデー毎日」の、その時の経過を原文の儘引例して見よう。

『八月十四日ひるすぎ、夏休みといつても、山村の子供たちには、これといった遊び場もない。いつものように、手足をくくったり、くくられたりする風変りな遊びをはじめたがこの兄妹にとつては、なんの抵抗感もない(抵抗感がなくなつた緊縛程、恐しいものはない。そこには刺激もなく、羞恥もなく、日常の茶飯事化してしまうからだ)なれた遊びだつた。この日も、武男君が、

「くくつてもかまわんヨ」

と加代ちゃんにうながした。寝起きのままのカヤの中で、

「足をくくつてもかまわんヨ」と云う。

いわれるままに、両足を交叉させてしばらく。(既に両手は後手に縛つてあつたらしい)「ふとんおいてもかまわんヨ」(今迄にも度々ふとんを使って遊んだらしい)

加代ちゃんは、重いふとんを取り出し、まず毛布で兄の体を包み、ふとんを頭に重しして起き上れないようにしたまま戸外に出た。兄のことなどすっかり忘れ、近くの山林で遊びふけてから、夕方帰つた加代ちゃんは「兄ちゃんはどうしているかな」と、ふとん

を除くと、武男君は口からアワを吹き出して冷くなつていた。』(茶飯事化した習慣性がこうした大事をひき起した最大の原因で、しばらく遊びの、緊縛によつたものでなかつた。偶に、こうした風変りな遊びをする程度であれば恐らく戸外に出る事もなく、しばらく遊びで念頭一杯であつた筈だ。勿論、彼の死因は解剖所見による迄もなく、窒息死であつた)

死体は毛布で折りたたまれ、その上にふとん五枚を、頭に重しした様な恰好でかぶせてあつた。ナイロン風呂敷一枚、木綿風呂敷三枚、毛布二枚、上ふとん三枚、敷ふとん二枚を使つたこの凶行が、拷問にも等しいこの行為を易々として妹にさせた。彼のマゾヒズムの昂進の、いかに激しかったかを明らかに物語っているではないか。

既に十代になるかならずして、マゾヒズムなりサジズムが胚胎するものである事を、手持つ親は充分に頭に入れておくべき、余りにも生々しい教訓ではあるまいか。

× × ×

子供を縛りの興味に迫りやる映画が又余りにも多過ぎる事も考へて見なければならぬ。我々にとって垂涎もののこの種のものも理性の整わないロウティーンにとっては、少々度ぎつい刺激になり兼ねない。低料金の二番館は三本立——。



前の席は殆んど子供によって占められ、その二本までが縛りを用いている。

曰く、新東宝の「憲兵と幽霊」

曰く、大映の「消えた小判屋敷」

天野信監督の「消えた小判屋敷」は先刻封切前、既に紹介済で、矢張り予想通り、毛利郁子と荒木忍が、高々と松の木に吊り下げられ、台詞もたどたどしいグラマー女優が、それが取得の肌も露わに、吊り下っていたのは、私の前回の予告が嘘にならなかったのでホッとした。

中川信夫監督の「憲兵と幽霊」——。これは凄い映画である。ずっと以前に投稿しておられた青柳謙次氏が見たら、随喜の涙を流しそうな憲兵の拷問振りである。

庄巻は、中山昭二の逆吊りの拷問——、逆吊りの儘、鞭打たれるので体がぐるぐる廻り後手縛りもきっちり、首にかかった縄も本式で、しかも俯かん撮影は天井裏から、彼の逆吊りをくまなく見せてくれる。

誤魔化しのないのが有難く、しかも相当時間堪能させてくれる。

それで終りかと思うと、次は中山昭二憲兵伍長の妻、久保菜穂子と母親（女優宮田文子）が拷問をうけるシーンがある。

中山昭二は竹刀に両手を伸ばして縛られた竹刀責め——久保菜穂子はベッドに裾も露わに縛りつけられて手首をぐいぐい逆に押し曲

げられる責めで、彼女の顔が、ベッドよりガクンと頭をはみ出して逆さに撮るところなど、リアルな苦悶の迫真力を出している。

固い鉄柵ベッドに首筋がじかに当って頭が垂れ下っているのだから、相当こたえたに違いない。

母親が本縄縛りで犇々と後手に縛られて、縄先が足を縛って、身動き出来ない。

三人の縛られた姿がワイドの画面一杯に、苦悶し、喚いて、凄惨極まりない。こんなのを撮らすと、新東宝は実に忠実そのものだ。

「憲兵と死美人事件」では天知茂が逆吊にされ、今度は天知茂が、逆吊りを責める役で、実に逆吊りの好きな会社だ。

次に交りましたは、はりつけにされて銃殺される最後の中山昭二の血まみれのはりつけ姿が、遂々最後まで入り替り立ち替り、オーパーラップされて随所に現われ、これにオヘソ丸出しのグラマー万里昌代、ムンムンする肉体を湯槽に浸す三原葉子と、御膳立はもう完璧の、私にいわせれば、奇ク向超弩級篇である。

聞くところによれば、ゲテモノ好きの大蔵貢社長は、営業成績に気をよくして、今後益々、この種のをとりまくなるとの事、甚だ心嬉しいではないか——。

× × ×  
今時、そんな凄いのを地で行くのがないと

思っていたら、ミナト神戸にこの種の責めを見世物にするのが、猟奇に飽いた外人客相手にボツボツ姿を現わしたらしい。

たった一服のペーが欲しさに、麻薬業者の悪らつな手先に、自由自在に操弄される女。肉の随まで腐り切ったペー患者の女の幾人かは、脂汗を流し、ペーにありつきたさに、外人の鬨りものになっている。

二三国人経営——。表面は単なる薄暗いパーも、一步這入って闇と狂燥に馴れると、悪徳が渦を巻いている。

噂はどこ迄も噂であろうか——。しかし噂は真実の土台より起るものだ。  
地下に潜って、麻薬に酔い痴れた彼等、より強烈な刺激が欲求される。

バーの女か——それとも飼ひ慣した奴隷女か——。蒼ざめた顔に、紅飾を扮して、男に小突かれるようにして、地下に降りてくると、狂言廻しの荒くれ男が、両側からドレスを引きめくり、コルセットをはぎとり、裸にしてコンクリートの床に蹴転がす、スポットライトが、女の全身を照して、暗い片隅に息をこらす数人の外人の姿は闇に包まれてい。女の額にムクムクと静脈がふくれ上り、冷汗がジットリと女の肌を濡らす。氣息えんえんとする女は、誰が見ても判る。ペーの禁断病状だ——。男の一人がやおら一包の白い薬包紙をポケットよりとり出して女に示す。

女の手が伸びる――。

必死に女はペーの執着に縋りつく。羽をもがれた哀れな牝鳥は、なす術もなく、裸体を右往左往して、力つきては倒れる。

そして、外人の好みによるシヨウが、自在にあやつれる女に次々と課せられて行く――

曰く、カクサカ……曰く、ガッデム……

生傷と、黒いあざと、刺青が女の肌に生々しい爪跡を残して、外人共が堪能して消えうせると、困憊の極に達した女に、ポイと一包

のペーが渡され、気が狂った様に、震える手で、女はもどかしくポンプに吸い上げて、既に注射ダコの出来たコチコチのかいなを撫で

さすり、あきらめては、左手の指関節の合間を縫う細い血管に悪徳を流し込む。

生色が蘇り、女は、一刻前の狂態と、肌に生々しく残る悔痕の傷跡に、一瞬の羞恥と、諦観の念を浮べて、ものうげに衣服をまとうミナト神戸に、昨日も、今日も、又明日も、ペーの絶滅なき限り、女は一服のペーを求め

て、自ら破廉恥の道を歩んで行くに違いない。

× × ×  
屑籠の最後に、小説、辻村隆のフィクション臭いものが混ってしまった。

噂を書けば所詮こんなもの。自身、悪の愉しみにふける癖に、妙に説教じみてしまった事をお詫びします。



## 最近の 縛られ 女優達

大河原珠樹

▽月光仮面・第一部（東映作品）藤井珠実

科学者の中山博士が発明したH O ジョーが発爆弾とその製造法を手に入れようと、国際ス

パイ団の囑託仮面達が、まず中山博士を捕え続いて博士誘拐の捜査に当たっている祝私立探偵（実は月光仮面）の妹の木の実ちゃんを拐

かす。そして口のかたい博士から製法を教えてもらう責道具に木の実ちゃんを雁字搦目に縛って穴倉に吊し、さらに火焙りにする。まだ中学生か上級小学生位の少女だが、後姿でみると遠慮なく胸にはグルグルと数巻きしてあり、その縄で両腕を巻き後手首を締めあげ文字通りの雁字搦目。さらに別に首縄がこれまた縄尻を体に巻きつけるといふ相当荒い縛りかた。その上にトリックなしでグイグイと吊り上げられる。但し吊られてからの縛り方は多少違って、腕に巻いた縄はなく緊縛感には薄らいでいる。この姿で火焙りにされ、苦悶絶叫するポーズは子供ながら一寸すざまじいサジスチツクなシーンだ。

▽月光仮面・第一部（東映作品）

若水 ヤエ子

中山博士邸の警戒をしていた祝探偵の助手

五郎八(柳谷寛)とカボ子、それに木の実ちやんと繁少年がドクロ仮面達に逆に庭先で縛りあげられる。子供達は前手に縛られ、大人達はグルグル巻き後手縛り、そして一塊にされている。集団縛りによくみられる型的なものではなく、かなり嚴重に縛っていたようだった。

#### ▽女狐風呂(大映作品) 橘 公子

南伊豆の温泉宿「花屋」の若女房おくみが誰かに殺されかかり、その容疑のあったやくざ者の源治が殺された。宿に保養に来ていた江戸の目明し文吉と女房お光。そのお光が出しや張って源治殺しの犯人だと、おくみが実家から附添いに連れて来ている女中のおはまを挙げる。だが、それは間違いだと亭主の文吉が腰をあげ、宿のお客から使用人一切を一室に集める。部屋の隅に縄付きのおはまもいる、ごく細い紐で胸を三巻して後手縛り。緊縛感も乏しいうえに、かつては可憐な容貌でスターだった橋公子も、このところメッキり老けて魅力も消え、見ばえのしないことおびただしい。

#### ▽人肌孔雀(大映作品) 山本富士子、浜世津子

勘定奉行、土岐安房守達にだまされ牢死した鍵屋の娘のおしのが、芸者染香に化けて土岐一味に近づく。だが土岐が彼女の正体に疑

いを持ち、京極若狭之介と名乗る美貌の若者と同一人でないかと一味の越前屋を染香の監視に残すが、若狭之介は、ちゃんとそこにいる。そのはず、かつて鍵屋の使用人だった俠盗流れ星の宗吉が越前屋を当身で倒し、染香実はおしの変身若狭之介をさし向けたためだ。いぶかしげに帰って来た安房守は部屋の中に越前屋と一緒に縛られている染香と菊次をみて狂言強盗のあととは知らず染香と若狭之介は同一人でないと信ずるようになる。でその縛りだが、染香の方はすでに縄が解けたあとで、菊次だけが後手にグルグルと三、四巻きされ手首を背中に締めあげ加減に嚴重に縛られて俯伏せに転がされている。越前屋が事の次第を説明する長い時間をこの姿でいるのだから浜世津子も御難。かつて数年前まで東映の看板女優だった(御園裕子といっていた)彼女もこの映画ではセリフ一つなく、この縛りだけが重要な役割とは……。

#### ▽人肌孔雀(大映作品) 三田 登喜子

京極若狭之介こと鍵屋おしのおびき出す囹に土岐達に捕えられた元鍵屋の使用人弥助の娘おみよが、密輸物資をかくした倉の中に縛られている。ほの暗い倉の中で胸にはグルグルと縄を巻き後手縛りで縄尻は柱繋ぎ。悄然と座っている。准ミス日本で、好きな女優の三田登喜子だが、ポリウームの不足が目立

つ。やはり、やせている人は派手に縛ってくれないと魅力に乏しい。

#### ▽旗本退屈男(東映作品) 長谷川裕見子

伊達忠宗の狂気乱業を探索にきた早乙女主人之介。その退屈男に調べられては都合の悪いお家横領をたくらむ伊達兵庫一味が、忠宗をそそのかし主人の妹の菊路を拐かす。主人之介達が宿泊している江戸屋の女主人おたきがそのトバッチリで縛られる。黒い布で猿ぐつわされ、同じような黒い紐で後手縛りにされて転がっている。縄から抜けようともがくところなど何時みても巧い演技だ。

#### ▽旗本退屈男(東映作品) 桜町 弘子

そこで拐かされたほうの菊路は、忠宗のお浜御殿の座敷牢の中で、これも黒い縄で胸を固くグルグル巻きにされ、後手縛りの姿でキチンと座っている。桜町弘子らしいオトリとした縛られかたである。

#### ▽旗本退屈男(東映作品) 花園ひろみ

忠宗に拐かされる何人かの女のうちに家臣の松崎文之進の娘百合江もいる。黒装束達にかつぎ出される時に白布で猿ぐつわをされていることだけわかったが、縛りの方は残念ながら見落した。あるいは縛られなかったか?

#### ▽怪傑黒頭巾(東映作品) 大川恵子・松島トモ子・植木千恵

最初の後手首だけを縛られ、二度目は胸に

も縄がかかり、三度目は鎖吊りで折檻される。まず角兵衛獅子をしている三人が「黒頭巾の歌」を唱ったばかりに縛られる。これは手首縛りだけだが、高下駄姿でヨロヨロと連行される大川恵子の姿がイケる。

次は三人姉弟の素性が蘭学者大槻東橋の子供達と発覚したため、東橋から新式銃の製法の数学をとりもたらねばならぬ役人達は三人を捕える。まず姉の早苗が両腕をつかまれ後手に胸へも二巻きばかりかなり強い縄をかけられる。

次が拷問で三人は横一列に万才型両手を頭上の鎖に吊られ前から青竹で打たれる。二の腕までまくれた袖を恥らいながら責められる早苗の苦悶するアップは目をひかれた。

#### ▽花の遊侠伝（大映作品） 女優名不詳

暗闇の丑松が助けた、身投げ爺さん彦六の娘の八重が、奉公さきの悪商人近江屋にだまされて無理につとめさせられた林肥後守から自由にならぬと暗い納戸の中に押し込められる。帯より少し上の胸乳のあたりを三巻して後手に縛られている。悄然と縛られて座っている姿は、まだ仕出し女優で名はわからないが、風情があって平凡なポーズだがいだけだ。

#### ▽小天狗霧太郎・第二部（東映作品） 円山栄子・月笛好子

足利家の財宝を教える金、銀の鈴を巡って善悪いり乱れての鈴争いがこの映画のテーマだが、その銀の鈴の方を、ふとしたきっかけで理由も知らず手に入れた「お春の茶屋」の給仕女、お春とお好が鈴を奪いに来た海賊黒汐灘右衛門の手下達に縛りあげられる。二人は背中合せに後手縛り、胸へもグルグルと二巻三巻、そして円山栄子のお春は黒い布で、月笛好子のお妙は白い布で、それぞれ猿ぐつわをされていた。

#### ▽小天狗霧太郎・第二部（東映作品）

紙京子・高島淳子

霧太郎の妹で盲目の照姫（高島）と、彼女と同じ大蛇丸を敵に持つお幸（紙）とが黒汐灘右衛門の手下達に捕わって土蔵の中で縛られている二人とも胸をぐるぐると数回巻き後手縛り。割合に強く締めている。但し数シーン後に、もう一度同じカットがあるが、そこでは紙京子の胸に巻いた縄の数が三巻に減っているの、おかしい。二人は第一部では牢に入れられたり笞打ちの折檻を受けるが一度も縛られない。

#### ▽小天狗霧太郎・第二部（東映作品）

若水 美子

足利家の血筋をひく雪姫が、邪心のため大蛇丸と手を握り、互の持つ金銀の鈴（実はニセ物だが）で財宝を手に入れようとするが、

悪人の大蛇丸は途中で姫の家臣達を殺し、雪姫は小舟にたった一人を舟ハリツケにして大洋へ流してしまう。帆柱に十字に横木をわたし白い振袖衣裳の雪姫は両手を左右にひろげて手首を縛られグッタリとなって海を漂っている。ロングで1カット、上半身アップで1カットだけだが手首の縄は緩いのを通りこして横木と腕の間に余裕をもっているからつまらない。

#### ▽紅顔無双流（東映作品） 大川 恵子

徳川家康の娘で北条氏勝のもとへ人質におくられている鮎姫が男装（といっても束ね髪小袖小袴の野性的な姿だが）で前後三度縛られる。ファストシーンから胸を数巻後手に縛られた鮎姫が、傘で顔はかくれているが兵士達にこづかれてよろめきながら連行されて来る。

次は陣屋の柱へ継がれている。胸を三巻後手縛りで縄尻は柱に継がれ座っている。そこへ通りかかる眉殿喬之介の美貌にひかれて縛られたまま振返る姿は一寸魅力がある。その場は喬之介に救けてもらうが、逃げる途中でまた北条の兵にみつかり、今度は納屋みたいなところへグルグル巻きに胸を巻いた後手で縛られている。酔っぱらった侍が男装をしていても女と見やぶって淫な行為にでようとするが、再度喬之介に助けられる。このところ



大川恵子は縛られ役に大モテである。

▽憲兵と幽霊 (新東宝映画) 久保菜穂子・宮田文子

田沢憲兵伍長は機密書類を盗んだスパイである。無実の罪を強制自白させられる。その責道具となったのが愛妻明子 (久保) と母のしず。明子は夫の眼の前で長じゆばん一枚で床の無いベッドの上に仰向けに縛られる。胸に数巻きの縄、乳房よりやや下目にも同様沢山の縄がかけられ、しかもこの縄は二の腕にもからみ、背中を横に通した縄を交叉して縄で体をはさまれて身動きも出来ぬ姿。これで指責めにされ太モモまであらわになって悶え苦しむ。また母しずは上半身しかみえぬが、首縄つきの本縛りの後手にされ、背中と腕の間に竹刀をさし込んでこじあげられる責めにあう。中山昭二の田沢伍長への責めは男責めマニヤ向きであるかも知れぬ。

▽緋ぢりめん女大名 (新東宝作品)

女優名不詳

実のところ予告編しかまだ見ていないのだが、宝蔵院流槍術師範とは表向き、実は豊臣家の残党で軍用金集めに強盗、婦女誘拐をしている大神典膳一味が、女達をあちこちから拐かして来る。無論、夜分に押入り寝間着姿の娘に猿ぐつはをかませ、グルグル巻きに縛ってさらう。この娘達は今度は地下牢の中で

上半身を裸にされ、一本の横木の上に俯伏せに両手を左右水平に張りひろげさせられて手首を縛りつけられた上、その肌に入墨をされる。その娘達の中にこの映画で腰元役である最近売り出しがかって来た浜野桂子加わるらしいのだが、そこは見えていないので……。今月もまた女優の縛りの無い映画を随分と見させられた。

▽遠州森の石松 (東映) ▽怪猫からくり天井 (東映) ▽怪談乳房榎 (新東宝) ▽亡霊怪猫屋敷 (新東宝) ▽おこんの初恋・花嫁七変化 (東映) ▽血汐笛 (東映) ▽大岡政談・幽霊八十八夜 (東映) ▽満月かぐら太鼓 (東映) ▽ちやつきり金太 (東宝) ▽殿さま弥次喜多・怪談道中 (東映) ▽続ちやつきり金太 (東宝) ▽呪いの笛 (歌舞伎座プロ・松竹) ▽国定忠治 (東映) ▽小天狗霧太郎・第一部 (東映)

などを見てガッカリしないよう念のために書いておきます。

このほかに小生の見落した映画も

▽若様千両傘 (東映) ▽天保水滸伝 (松竹) ▽七番目の密使 (大映) ▽女ざむらい只今参上 (松竹) ▽口笛を吹く渡り鳥 (大映) ▽太閤記 (松竹) ▽七人若衆誕生 (松竹) ▽旅姿鼠小僧 (東宝) ▽江戸は青空 (大映) ▽消えた小判屋敷 (大映) ▽薔薇と女拳銃

王 (新東宝)

などがありますが——このうちでも佐乃美子が刑場で縛られ、さらに石籠詰の刑にされる「七人若衆誕生」やグラマー毛利郁子が松の太枝から後手に吊り上げられる。「消えた小判屋敷」、それに小畑絹子が半裸に近い姿体で双手を鎖り吊りにされて拷問されるといふ「薔薇と女拳銃王」などは、ちゃんと映画の中に縛りシーンがあることを承知でありながら見落したのは残念。

なお予告めいて来るが大映作品で「月の影法師・山を飛ぶ狐姫」で三田登喜子が縛られるシーンのあることを知らせておきます。

(了)

## ◎ 予 告 ◎

限定版『女体緊縛

フォトアラベスク』

予定価格 五百円

新人の美貌モデルを中心に、あらゆる緊縛姿態をお目にかけるべく、目下千数百枚のネガの中から選定中です。緊縛マニアの座右の宝典として珍重するに足る素晴らしい限定版として何卒御期待願います。

## 眞説

## 水野十郎左衛門

海野 築 朗

## 一

幡隋院長兵衛と水野十郎左衛門の意地の立引は講談・小説・戯曲の上で人口に膾炙している。

十郎左衛門は水野出雲守成貞の長子、母は蜂須賀阿波守至鎮の娘で、名門の出である。慶安三年父の遺領三千石を継いで、四代將軍家綱に仕えたが、病と称して出仕を怠り、市中に出でて不法の所行があったので寛文四年、評定所へ呼出されて、死を賜わった。

十郎左衛門の処刑は普通には、幡隋院長兵衛を殺した為といわれているが、長兵衛を殺したのは明暦三年であって、切腹はそれから七年経った寛文四年であるから、これは一寸理由にならない。当然時効になっている。

まして三千石の旗本と、割元と称する町方人夫口入稼業の長兵衛

とでは、身分の相違が大きいから、伝説をそのまま受取りかねる所がある。

『翁媼夜話』という本には二人の事を次の様に書いてある。

いつの頃にや御旗本に水野十郎左衛門という人有。男立の暴れ者にて様々の悪事をなす。諸人のもて余し者也。

其頃、町の男立に幡隋院長兵衛という者有。此者水野が我儘を聞いて、いっぞ大きに手をとらせ男立てを止させんとねめ居たり。

或時、吉原の土手道にて、長兵衛、水野と出合い、わざと口論を仕懸け散々に水野をし付、深田へ踏みこかし大きに恥辱をあたう。

其後、又上野の花盛りに貴賤老若群集する折節、長兵衛も花見に來りけるが、水野、異風なる出立にて、不遠慮に花見の幕を覗廻り、傍若無人の体にて我儘をする。長兵衛此時も水野をとらえ、数万人の見る前にて、したたかに手ごめをする。

水野此事深くいきどほり、兎角幡隋を殺すべしと工夫し、長兵衛方に使いを立て、明日、明後日両日の内、昼より可被参綴々貴意可申——（中略。ここで長兵衛は命を投げ出して水野の招待に応ずるのだが）——待請し者共大勢集り、手取足取庭へ降り、杭、丈夫に打ちて、手足を引のべ、したたかに締め付、胴中を挟竹にてしめ合せ、生胴にしかける。幡隋血眼成申候。

水野、これを見てあざ笑ひ、己長袖の分際にて入らぬ腕立を好み、侍に對し度々の慮外をなしける故、天報を受けて今、ためし物にせらるゝ也。汝を胴切にして、屍を骨か原へ捨てん犬鳥の餌食と成、其後青蠅になれと、一文字定則の道具にて生胴をためし、屍をひそかに片蔭に埋ける。

然共天眼常にねぶらず、此事かくれなかりしかば、長兵衛が兄、神田山新恩寺幡隋院覺山上人此旨を聞き、大きにいきどほり、水野が惡逆訴へ出でける儘、御詮議の上にて水野に切腹被仰付云々——とあるが、長兵衛が水野の屋敷で非業の最期を遂げたのは間違いないとして、長兵衛の死に方が悲惨であり、旗本側が脚色した節も考えられる。又幡隋院の上人が兄であるなど、これは全くのウソ八で、長兵衛はもと武家の出で、人を殺めて、死罪になる所を上人の命乞いで町人に下り、幡隋院の寺内に居住した事があるだけである。

では、十郎左衛門処刑の真因は何であろうか？

## 二

寛文三年の春——。

神田四軒町は軒を並べて弓矢の看板が立っていた。夕方七時になると、店の体裁をがらりと変えて、格子の内に金屏風などを立廻し、女共は衣裳を美しく着替え化粧も新らしく仕直しては客を待つ。

そして此処が名代の風呂屋に代るのである。女共は湯女と云つて裾を捲し上げて客の垢をこすり、或は長煙管片手に、隆達節や弄齊節を唄うのであった。

その風呂屋の一つ、紅葉風呂は生前幡隋院長兵衛が、子分達を連れてよく上った店で、風呂の主人長次も伝法肌で、長兵衛を江戸ッ子の守り神の様に崇めた男であった。

その長次の一人娘菊路。

それが又評判の美人で、色の白いのが第一、場所柄にしては清浄無垢、男共に愛嬌こそ振り撒かないが、年ごろの肉ずきの好きが美艶を添えて、深く澄んだ眼は、荒い男の魂をも、いつか解かす魅力を持っていた。

紅葉風呂のその名も菊路。楚々たる中に妖しさを秘めた娘を一目見ようと、只それだけで紅葉風呂の暖簾をくぐる男達は限を知らず御家人達の中にも、熊谷笠に人目を忍んで格子先をうろうろしている者があつた位だった。

へ逢うて立つ名が立つ名のうちか

逢はで立つこそ立つ名なれ

唄や三弦や湯女の嬌声で、四軒町一帯が包まれた春たけなわの或夜、紅葉風呂ではふつてわいた様な事件が起つた。

それは、酔客の一人が嫌がる菊路に、白酒を無理に飲ませようとしたのだ。甘酒にも酔うからと、蓄の唇を結んで拒んだ菊路は、相手の無理強いについて腹立しさの余り、茶碗をとって中身の白酒を外に捨てた。

折も折、水野十郎左衛門、加賀爪甲斐、坂部三十郎を始め、同気相求める神祇組の旗本達が格子を開けて、店へ入ろうとする所を、ドップリと白酒を其袴に打掛けられたのであった。一番被害を受けたのは、先頭の主領株水野であつたが、流石に貫祿を見せて、た

だ、眉をピクツと動かしたただけであつたが、後につづく神祇組の暴れん坊達。



袂から匂う様な色をこぼして、平伏していた菊路は、はッと手拭を出して袴の白酒を拭取ろうとした。

「無礼者！」

割鐘の様な声で、睨み付けた。

「何とも申訳の致し様が御座いませぬ。唯々御寛大の程を——」

と、主人の長次はこの有様を見るより早く飛んで来て、真蒼になって平伏した。

「私の不調法で御座います。どうぞ御許しなされて下さいませ」

菊路も、唇をふるわして白い手をつかえた。

「ならぬ！ 物もあるうに白酒を、水野殿のお袴に打掛けるとは、不届至極！」

「其分では捨て置かれぬ。覚悟致せ！」

と、加賀爪甲斐に坂部三十郎は白色の刀の柄に手を掛けた。

理を非に曲げた所行を事とする、神祇組の中でも、この二人は、

へ夜更けて通るは何者ぞ、加賀爪甲斐か泥棒か、扱は坂田の三十か

と唄に迄謂われた無頼者だ。顔面朱をそいだ如く、今にも菊路の細首を打落さんばかりにつめ寄った。

「待て」

十郎左衛門は二人を制止すると、

「先ず、其前に袴の汚れを始末致せ。其上にて詫びを聴こう」

と、ドツかと上り縁に腰を掛けた。



「こりや、手拭で此袴が清められると思うか、他の物ならいざ知らず白酒じゃぞ……」

「では、如何すれば？」

限りない妙令の魅惑に包まれた、菊路の眼に当惑の色が浮んだ。

「しれた事。其方の舌の先で、残らず嘗めて取れえ！」

神祇組の主領様として、此位な事を云い出すのは当然の事だが、と云って花恥しい美女が犬の様に、袴に附いた白酒を嘗められるものか、

「それは？　どうか御許し下さい」

「許せぬ。さア嘗めろ！」

十郎左衛門は、グッと袴の裾を菊路の目の前へ捲る様に突き出した。

にゅッと遅しい毛ずねが露われる。

シーンとなった紅葉屋の中は、客を始め皆此の様子を見ているのだが、美しい娘が恥辱極まる無理難題を吹きかけられているのに誰一人、口を出すものもない。

公方の尻持男伊達と称し、江戸中を傍若無人に横行するこの神祇組。加賀爪、坂部の後ろにも綱、金時、定光、末武と名づけられた四天王の家臣達が、肩を怒らして此場の成行き如何と睨め廻している。余計な口出しをすれば、即座に首が素っ飛ぶのは必定だ。

「それでは、手前が替って清めさして戴きます……」

と見兼ねて長次がにじり寄ると、十郎左衛門は足を上げて、ボンとその額を蹴った。

「あっ！」

と叫んで、倒れた長次の額から血がにじみ出した。

「白酒を掛けたのは、その娘だ。いらざる口出しは控えろ」と憎々しげに云い放った。

余りの暴虐であり、余りの非道である。

「やりやがったな！」

長次は絶叫した。

すつくと立上ると、勘忍の緒を切らして、無謀にも素手で十郎左衛門に打って懸ったが、何の苦もなく身を交した十郎左衛門は、ぐっと長次の鬚を驚掴みにすると、そのまゝ往来へ引摺り出した。

「何をなさいます！」

と必死に取組む菊路を、加賀爪と坂部が、左右から飛掛って、其の両手を押えた。

騒ぎで、いつか表に集っていた黒山の如き見物人が、ワッと道を開くと、その中で十郎左衛門は散々、長次を足蹴にして、終いに半死半生の長次を溝の中に投込んだ。

その後は、紅葉屋にとって返し客を追出し、ふるえる湯女に酌をさして、飲み食う踊ると乱痴氣騒ぎ――。

恐る／＼のぞき見る見物人達も、口惜しそうに見守るだけで、手の出しようがなかった。

寛文の頃は、武士がこのぐらい威張って乱暴しても町人は、どうする事も出来なかったのである。

殊に此のあたりでは侠客の町奴、幡隋院長兵衛すらが、水野の為に非業の最期を遂げているから、皆無念を忍んでいる。

菊路は――。

敵わぬ迄も必死の抵抗をしたが、加賀爪と坂部の為に白い刀の下緒で後手に縛られて、水野の前に据えられていた。

髪も衣紋も乱れ放題乱れて、見るも凄艶な美女の姿態だった。

「こら、娘。おどなく酌をせぬか」

水野は、とろんとした目付で菊路の姿をねね廻した。

唇を噛み、瞋をつり上げて、菊路は水野を睨み返している。

「湯女の分才で、この水野の云う事が聞けぬとは不埒な奴。こうして呉れるぞ！」

よろよと立上ると、いきなりボンと菊路の肩を足蹴にした。一瞬、裾が散って鮮かな花模様を描く。

「此奴が！」

ごろりと、前よりも緋の色が裾から拡がるのを、神祇組の連中は、どっと拍し立てた。

湯女達も思わず顔をそ向ける位、颯って蹴転がした末。

「おい、引揚げるぞ」

十郎左衛門は叫ぶと、

「この娘を、身共が屋敷へ連れて行け」

と肩も露わらに喘いでいる菊路を、足で小突いた。

「水野殿、どうなさる？此の場は、金を置いて行けば済むが、女を連れていくと後がうるさくなるぞ」

「天下の直参水野十郎左衛門が、公方様のお膝元で何をしようと天下御免じゃ。この女には、袴の白酒を清めて貰わねば気が済まん」

「うむ、それもそうだ喃」

加賀爪甲斐、したり顔にうなずくと、

「おい、この女を連れていけ」

と配下の四天王に云いつけた。

「私を、どうしようというのさ！」

荒々しく菊路を引き立て様とする四天王の腕の中で、菊路は身をもんだ。

あれ程苛なまれて、どこに未だこんな気概が残っているかと思う位だ。

「気の強い娘だ……」

「何を云うのさ。町人の娘だって、これっぽっちで参るもんか。畜生！この仕返しは、きつとしてやるから……」

美女の舌端、火を吹くばかりだが、所詮は女の非力、しかも後手に縛られている不自由な身だ。

「はっはっは、何を世迷言を抜かす。おい、その口も縛って仕舞え」

大の男数人に、娘一人。そして、その可憐な蕾の口迄、無慈悲に封じて仕舞おうというのだ。

むごい猿轡が、菊路の美しい顔を掩った。

### 三

旗本三千石の屋敷は、一丁四方を越えた大邸宅である。

その奥座敷には白綸子の褥が敷かれ、床の間には磁の花瓶、極彩色の大幅に描かれた孔雀。そしてそれにもまして、豊麗な色彩に包まれた菊路が、崩れた大輪の花の如く褥に据えられていた。

無残にもあのまゝ猿轡を嚙んだ菊路は、芳紀まさに十九歳。湯女とは云え玲瓏玉をあざむく美女だが、髪は乱れて猿轡の食い込んだ頬にかゝり、朱骨絹行灯の灯影をさける様にして、その美しい面を横にそむけ乍ら、ものも云えぬ身の苦しさ、口惜し涙を流しているのだった。

やがて、ぷーんと酒くさい息を吐いて、座敷に這入って来た十郎左衛門に、思わず体を堅くした菊路だ。

いくら体を堅くしても、襟からは白い肩が抜け、ふっくらとした乳房も露わで、裾は二つに割れて、緋鹿の子の長襦袢や真紅の腰のものが、白い脛にからまって男の欲情をそゝる。

水野は、しげしげとその艶かしい姿を、ねめ廻していたが、つと菊路の前にしやがみ込んで、手拭の猿轡をはずし、口の中から布を引出してやった。

そのベツとりと濡れた布を、掌でもて遊び乍ら、  
「菊路とが云ったな。この水野に何で、その様に楯をつくのじゃ……」

と薄気味悪く猫撫で声。

「余りの仕打ちで御座います！」

菊路は、吃と水野を睨んだ。

「余りの仕打ち？ はっはっは、考えても見ろ。天下の直参、三千石の旗本が、町人の娘に白酒を掛けられて、そのまゝに済ましたとあっては、旗本八万騎の武士の名がすたるではないか」

「しかし、私共も人間の子、犬猫の様に這って嘗める事は出来ません。それを余りと云えば、理不尽な……」

「然らば、外の方法で清めると申すか」

「はい、人間に粗相はつきもの。充分お詫び申した上、湯水で、おすすぎも致しましょう……」

「左様か——」

水野の眼が、キラリと光った。押し隠していた獣欲が、ムラムラと込み上げて来た様だった。

「其方は、湯の娘であつたな……フフフ」

「……」

淫な男の笑みに、思わず乱れた裾や襟を直そうとして、不自由な身をもむと、プンと乙女の香ばしい体臭が流れる。

「袴は清めて貰わずとも良い。どうじや、身共の身体を清めては呉れぬか……」

水野は、にじり寄った。

「……と、申しますと……」

菊路は、あらん限りの隙を窺めて、水野を見返した。

「身共と湯に入るのじや……」

「えっ？」

「驚くな。湯女のする事位は知っているのであろう。さすればこの水野の顔も立つ。袴に白酒を掛けられたが、体を清めて貰ったとな



……どうじゃ、何と名案ではないか、はっはっは……」

その笑いも、上ずった様にすぐ消えて、水野の目は、菊路のまだ男を知らぬ、清純そのものの様な乳房や脛に焼けつく様にそゝがれた。

「は、はい。承知いたします。では、私を家へ帰らして下さいまし。紅葉湯へお出て下さいまし……」

菊路は、綸子の褥から身を退らしたが、裾はそのまゝ褥に残った。

その残った裾を水野は、むずと攪むと、

「何で、逃げる……」

と情容赦なく、ぐいと手前に引く。

ピ、ピリ——。

と絹の裂ける音がして、下半身、長襦袢の緋鹿の子が無残に露わになる。

「あっ、その様な、お許し……」

「許すと申しているではないか……」

水野は又、にじり寄った。

「では縄を、縄をといて下さいまし……」

「うむ、といて仕すぞ。だが、家へ帰る前にこの屋敷の湯で、清めて行くのじゃぞ」

「えっ！」

「三千石の小身とは云え、槇の湯船位この屋敷にもある」

「は、はい……」

次に迫りくる何か恐ろしい予感に、小雀の様に身を震わせて菊路は、やっこの思いでそう答えた。

「うむ、愛い奴じゃ。どれ縄をといて仕わそう……」

と水野は、柔い手首を背に捻上げて括っている下緒を解いた。  
「あゝ」

軽い吐息をした菊路は、両手を畳へついた。白い手首に痛々しく縄の痕が、うっすらと血さえにじさせている。

痛みと痺れの為、しばらくは交互に撫で擦ることも出来ぬ有様であつたが、思い直した様に乱れた裾を取繕おうとした時、

「そのまゝで良い、直す事はあるまい」

水野の濁った声がした。

「えっ？」

「はっはっは、此度は帯を解いてやろう。それとも湯女は裸にはなれんと申すか……」

「何を！」

菊路は、必死で水野の腕をはらいのけ様とした。だが男の腕は、帯をつかんで離さなかった。

「あっ！ あれ！」

菊路の帛を裂く、羞恥の悲鳴が続いて起った。

菊路は、褥の上に再び横倒しにされ、転がされた。そして様々の色彩が捲られ剥がされていった。

「フ、フ、フ、あがくな、あがくな」

楽しむ様な声である。

やがて、ゆらめく行灯の灯に雪の如く玉の如く滑らかな処女の白肌が、僅かに湯文字一枚を残して浮出した。

「あっ、ああ！」

菊路は絶え入る様に息を引き、必死に身体をかがめた。

「さあ！湯船へ参れ」

「嫌です！死んだって——」

菊路は必死に首を振った。

「何！」

白い肉体の戦慄のリズムに、楽しそうに淫獣の笑みを浮かべていた水野は、慌てた様に抱き起した。



「くっ……」

再び布が菊路の口に結められ、その上から手拭が巻かれた。

「舌をかまれては玉なしじゃ」

そのまゝ男の眼が、ねばりつく様に、じっとりと菊路の姿の上を這い廻った。

#### 四

榎の湯船。この風呂桶は、旗本三千石ともなると毎年新しいのと換えたものである。尤も今日、金の面で謂っても、二百五十万の月給取に当る三千石である。

六畳の高麗縁に続いて、六畳の板の間、壁一ぱいに薄絵をほどこした湯殿である。

奥庭をわたってくる風が、湯殿の高窓から吹き込んで、暗い霧の様な湯気が揺れる。

「う、う、うッ——」

と押し潰した様な菊路の呻きが塗り扉の向うから聞えて、手燭の灯がさした。

がらり——と扉が開かると、着物の裾をからげ上げた水野十郎左衛門の腕に、白い菊路が軽々と抱き上げられて、湯殿の中に入ってきた。

菊路は、まだ必死に身を跳ねているが、いつか縮緬の扱帯で後手にも縛られていたし、口は猿轡のまゝである。

かつて幡隋院の長兵衛が俠客道の意地をたて、悲惨な最期を遂げたであろう、この湯殿に、水野と美女、が妖しげな悦虐の絵巻を展開したのである。

ドブン——と湯しぶきが上って、菊路の体は湯船の中へ投げ込まれた。

ばしゃ！ ばしゃ！ と菊路と菊路の足が湯の中で烈しく掻いて

悶絶しそうになると、水野の手が菊路の鬚を掴んで、水面に引き上げる——。二度、三度。

濡れた黒髪が、ペットリと海草の様に白い肩にまとわりつき、水を吸った猿轡も収縮して美しい菊路の肌は吊り上って、苦悶の表情は見るも無残な生地獄である。

「どうじゃ、まだ意地を張って身共に逆うか——」

ニタリニタリと悪鬼の様な形相で、湯に浮いた菊路の髪をゆさぶっていた水野は、やがて菊路を湯船よりすくい上げた。

すのこの上に後手で俯伏している菊路の体は、湯の温度の桜色にそまり、それが途切れ途切れに喘いでいた。

「うんと申せ。素直に身共の垢をこすり、肩を叩けば良いのじゃ。どうじゃ——」

水野は手桶で菊路のむっちりとした尻を小突いた。だが菊路は、命ある限り此の残虐な責を憶える積りか、こっくりともせぬ。

「うぬ。小女郎！」

ばりばりと歯噛みをした十郎左衛門。手にした手桶で湯を汲むと菊路の頭へ、ざーと注ぎかけた。

菊路の俯伏した上半身が右へ逃げれば右へ——左へ逃げれば左へ——湯が次々とかゝった。

ざーと湯がかゝっている間、菊路は呼吸が出来ない。その上、濡れた猿轡が鼻孔迄塞いでいるのだから、その苦しみは言語に絶した。猿轡と口の僅な間隙にも容赦なく湯が入って菊路はすのこの上を七転八倒して転げ廻った。

「うぬ。これでもか！ これでもか！」

十郎左衛門は狂鬼の様に湯を掛け、転げる菊路を足で蹴った。

だが、菊路の猿轡はそのうちゆるんできたし、縛めも次第に解けて来ていた。菊路はこの事に気付くと、わざと大仰に苦悶して見せていたのだが、頃合いを見て渾身の力を振るって、十郎左衛門の足

許へ転がったのである。

ドッサ――。

と十郎左衛門の身体は、横っ倒しに引っくり返った。

湯を汲もうと一寸、目を離れた瞬間だった。すのこは、一面びしよ濡れでつるつるしていた。

「あっ！」

と叫んだ十郎左衛門は、倒れる時に湯船の角で鳩尾を突いて、他愛なく悶絶して仕舞った。

菊路は、やっとの思いで縛めを解くと、猿轡をかなぐり捨て、奥座敷にとって返す暇もなく、濡れて足にベトトリまつわりつく湯文字一枚のまゝ水野の屋敷から逃げ出したのであった。

## 五

塀続きの路角を曲ろうとした菊路は、そこで一挺の立派な駕籠にぶつかった。

その駕籠の中には時の老中、久世大和守広之が乗っていたのである。菊路が、衣裳を着けずに逃げ出したという事は、此時非常に役に立ったのである。久世大和守は菊路から事情を聞くと、烈火の如く怒った。

「たとえ、直参旗本でも、婦女子を拐かすとは言語同断である」と直ちに翌日、評定所へこの事件を持出した。

久世大和守は寛文二年に老中に補任した、人物識見共に中備を得た大名であった。この前の老中、稲葉美濃正明は、

九月号、十月号、十一月号の三号を開いて  
月号は楽しい物語を見るような気がします。  
て思いつくままにペンを走らせてみよう  
私の好きなカットです。  
と思います。

目次カット、九月号と十一月号が、い  
ず  
れ劣らぬ趣を感じさせてくれますが、十一

グラビヤ、四馬氏のいふしぜめ、汚物漬

鼻吊り、の三葉、揃って傑作だと思います。

氏の描く女体は、眼、鼻、口許の表情に虐げ

られる女の哀れさが余す所なく表現されて  
います。涙、鼻汁、鼻孔の拡がりなど全く  
稀少で、美女が時折十等身程になることを  
除けば全く隙のない画風だと思います。こ  
れに対し杉原氏の灰皿、稽古台は対照的な

「町奴の分才にて、大名旗本に楯を突く不屈者が多いとやら。左様な奴は片ッ端から引捕えて、相当の処分を致さねば相成らぬ」と町奉行中山勘解由に命じて、町奴狩りをやらした位、えこの人物であった。

此の為に幡隋院長兵衛の死も、あたら無駄死に終っていたのだった。

評定所へ召された水野十郎左衛門は白衣着流しで、その態度不敬であったので一時、母方の蜂須賀阿波守至賢の子、光隆に預けられた。

寛文四年秋、再び評定所で取調べを受けた十郎左衛門は、約百日もの間月代も剃らず、立髪というものに揃え、額を抜き上げ衣服は漸く膝へ届くといういでたちであった。

並いる久世大和守始め大目付、勘定奉行等はすっかり興をさましそこで調べは苛酷を極め、遂に数来年の市中に於ける喧嘩等の不行跡が段々判明し死刑になった。

十郎左衛門の辞世として、

「氣のつまる、婆婆にながなが居たくない。地獄の底へ、ところが残っている。」

それにしても世上、十郎左衛門の如き者をかぶき者と呼んでいるが、その処刑の直接の原因は、湯女誘拐事件である事は面白い。

十郎左衛門の処刑を期として、神祇組の面々も夫々、処分を受けた

麗筆です。女同志のSMの動きが、S女性の晴々とした美貌と凄じような笑み、M女性のうっとり泣くように見える恍惚の笑みを、それぞれふつくと柔らかな曲線に表現して素敵な雰囲気醸しています。

九月号の大塚嬢のフोटオあのヴォリュームを締め上げる厳しい縛しめ、豊満という言葉そのまの女体に充分しまったウエストのくびれ、あれで髪さえ梳ってあったらど惜しまれます。十月号の大塚嬢は、やはり胸、二の腕、腹部への縄目の喰い込みが見物です。益田嬢の清潔な雰囲気好感が持てます。脚線美というより首筋の美しさが目立ちました。十一月号の愛川嬢は乳房が主題のようですが、私は絹川嬢の美貌と端麗な容姿に感嘆しました。手入れの行届いた肢体の媚やかさ、縛られた女の美しさに明るいものを感じます。

記事のカット、十七ページの扉のカットは毎号秀逸ですが、私は十月号を特に優れていると思います。挿画には敢えて触れることもないでしょう。

記事、私が特に感興を以て読了した記事だけを列挙させて頂きます。バー「ナナ」

## 本誌最近号の読後感

近 藤

一

の人々(九、十月号) マリアンヌの手記(九、十月号) 蜚氣楼(九月号) 翳り、女水兵哀史、浣腸と妊娠(十月号)、漂流の乙女、腹切る女スパイ、三吉と女奇術師、賭(十一月号)の諸篇は楽しく拝見しました。紅山彦は登場人物が増して京子への親しみが薄れた感じ、魔教団は息抜きがないので、ついに行くのに気疲れがします。蜚氣楼(奥田滝夫氏)を拝見して、何ともいぬ情感に胸が疼きました。S・T嬢のこと、小生殆ど気に留めずいたので早速二十八年九月号を引っ張り出してみました。なるほど彼女は私の好きなタイプのマゾヒストになってくれそうです。しかし、あの記事の中の被縛フोटオでは、「肉がまだつかない、なんだか未熟な感じ」が確かにしますね、あれから五年、彼女も二十三歳の女盛りなら、現況を知りたいと思うのは私一人ではない筈です。

十一月号、冒頭の高橋孝氏の「男性的女性

切腹のマンネリ傾向」は藤山秀緒氏に解決して頂いたら……と思います。芝利吉氏の御意見は全く同感です。南方純氏のおっしゃる通り編集者の方々には読者の一人として衷心感謝に耐えません。

総体的に観て、KKが号を追う毎に着実な歩みを前へ進めていることは良く判ります。それが或る一つの性向を採り上げてみれば、マンネリズムということもあり、またネグレクトされたということもあるでしょうが、編集に当る各位の労苦、そして読者各位の協力の結晶であってみれば、永い目で、大きな気持で、前途を見守ってやりたいものです。二十九年末から三十年にかけての特大号の頃とは違った雰囲気を持つようになったKKです。創刊以来百号を突破し、懸賞原稿募集をやっているKKです。読者原稿によって盛り立てられているKKです。不満の点はどしどし意見を発表し、或いは自らの投稿で補って行きたいものだと、読者の一人として常々考えているのです。(一九五八、九、二七)

×

×

## 魔

## 教

## 園

No.  
8

その十

## 土 路 草 一

## (一) 下等動物宣言

黒天使高原の朝涼は短い。烈陽が地平線上に顔を出した途端、水銀柱は駿上りに空間を埋めてゆく。

一般に大陸的気候とは、昼夜の気温の差が甚しく、又、朝焼けとか黄昏とかの仄かな情趣の時間が短くて味気ないものである。この高原も朝ぼらけなどという余韻は、かけらすらなかった。

暗夜の重幕が引き上げられるが早い、陽は火箭のように地上に突き刺さった。

土から陽炎が上り、草はいきれたち、砂は波となって照り返った。

黒天使高原の一部は、緑樹に蔽われた灌木地帯である。

整備された道路が、偽装されてはいるが、従横に走り、処々、繁みに隠されて小屋が建ち、地底への通路が黒く口を覗かせていた。その通路の脇に、鉄条網で囲まれた一劃がある。

五、六棟の練瓦で造った小屋で、軒下に小さな鉄格子の嵌った明り通りの窓があり、戸口には鉄錠が嚴重にかかっている。

門柵の看板を見てみよう。

『入荷畜集積所』

即ち、日本や其の他から移入した白い家畜

達を、調教師に割り振る迄、集荷しておく舎屋である。

折しも舎内で、けたたましいベルが鳴った。

耳膜を破らんばかりの響音が、壁から噴き出して来て、ウルルオ号で運ばれた日本の美女達は泥睡を否応なしに醒される。

扉が開けられて、手に鞭を下げた助教士達が、床の環から鎖を取り脱す。

「出る！」

一人が、ひゆうと鞭を喰らせ、一人が鎖端を掴んで引く。

一匹、二匹、四匹……。首輪で珠数繋ぎに



されている美畜達は、足を縛しながら、よろめき出てくる。

燭やかな、陽の目を見なかった白肌が、烈日の下で痛々しく戦いた。

次の小屋から、その次の小屋からも……

おどおどと竦ま<sup>ス</sup>っている裸の群は、鋭く鳴り渡る鞭に追いつてられる。

乙女達は餅のように柔かい素足で、尖った石ころ道を心そぞろに歩いた。

樹木のトンネルを潜って、群は砂利の広場に集められる。そして幾列かに杭に括られて坐った。

ふくよかな膝頭に石が当り、艶やかな脛は砂塵に埋まった。

銀座の舗道を、或は有楽町駅の階段を、娘と軽やかにスカートの裾を蹴しながら濶歩していた脚である。

紅縞のバジヤマや緋の絹蒲団で、暖かく大切に包まれていた麗わしい脚である。

それが今、眩しく剥き出されて、泥砂の上に罪人のように、否、首輪を枷られて犬畜生のように坐る。

罪なくして手は後に廻り、足捌きは制限され、抗議の口を留められている。

世の悪風を知らず、汚れに染んでいない清純な乙女達ばかりである。美貌と騒がれ、佳人と評された女性達ばかりである。

美畜の群は、啾々とこみ上げてくる哀憐に

美しい瞳孔を潤ませ一様に消然と項垂<sup>ウツタ</sup>れている。た。

端に坐らされた比奈地路子もそうだ。

街を行けば、人々は感嘆の眼差でその佳貌を振り返り、店に入れば人は口々にその佳姿に讃嘆の言葉を送っていたのだ。

それが今、トップモードに変えるに、己がミルク色の素肌を以ってし、バックスキンのシューズに変えるに、可愛い五本の指をつけた己が瞼を以ってしている。

酷陽に背肌を灼かれ、日陰に避けることもならず、ぶつぶつと汗を浮べ、耐えているその姿も、畜生のものとして捨て置かれる。

路子は、くくつと声を嚙んだ。智の頭脳に激しい嵐が吹き募り、情の胸に悲しい雨が降っていた。

一人の男が正面に立った。

黒い縮毛、狡猾そうな眼、ひしやげた鼻、厚い唇。アンダーシャツまがいの黒い袖無しシャツを着て、黒い半ズボンを履いている。その皮膚は黄褐色である。

「顔を挙げる！」

どすの利いた声で命ずると、じろつと刺すような視線を群畜の上に注いだ。

ぴしっ！と後方で助教士の振る鞭が肉の音を発した。頭を起すのが遅い畜生に対しての罰である。

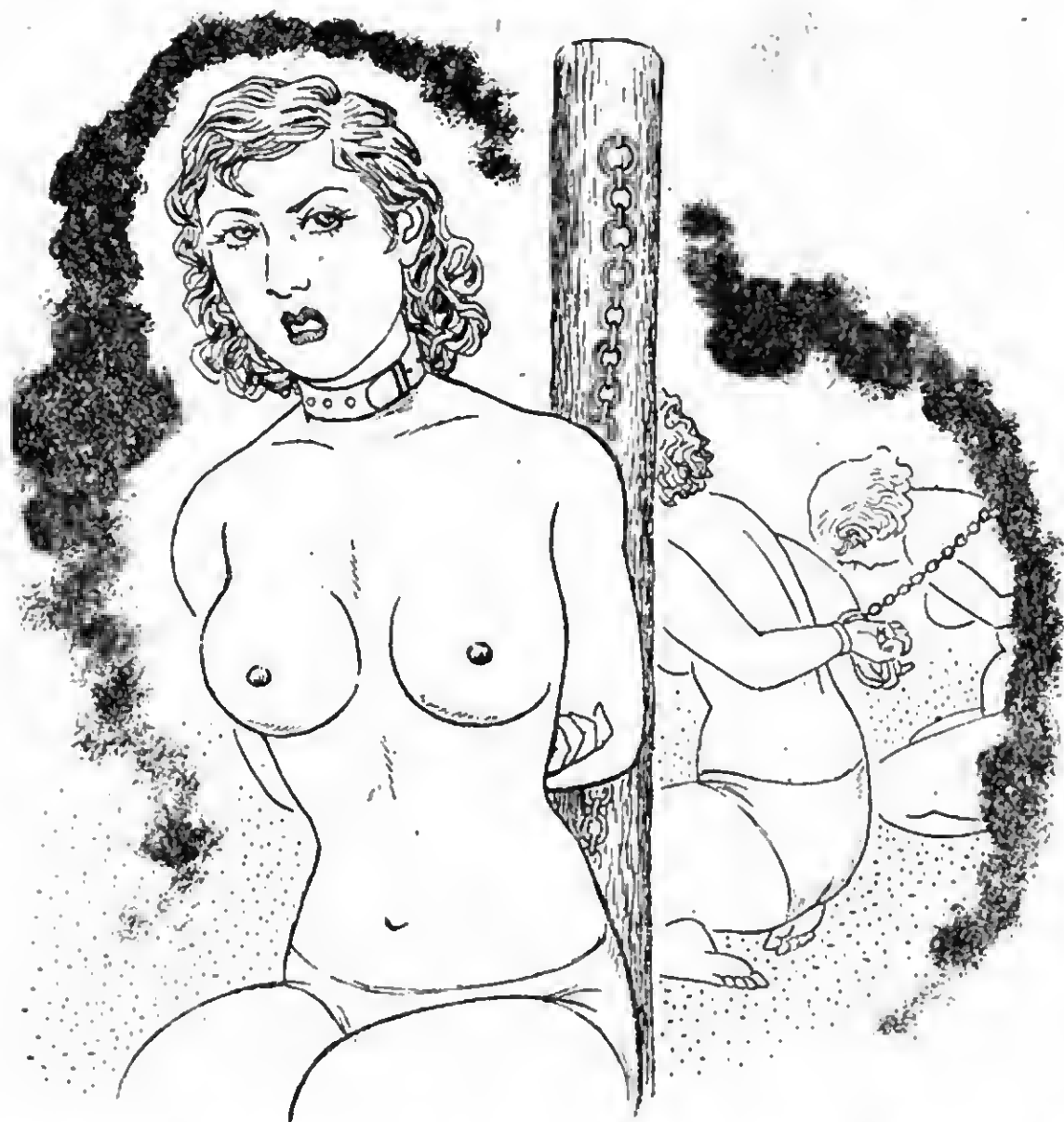
「俺の胸を見るのだ。」

と、毛むじやらの胸許を指示しながら「眼を外らすと鞭が舞うぞ。しっかり見て、しっかり聴くのだ」

男は訛りのある言葉で話し始めた。

「お前達は畜類である。野に放っておいた獣畜である。その放縦な性質を矯め、その纖弱な肉体を錬え、この国の飼育物に相応しい動物とするのが我々調教師の仕事なのである。断っておくが、お前達は家畜にさせられたのではなくて、生れついて以来の家畜なのだ。馬や牛を牧草地に放牧しておくように、黒天使様は我々信徒の負担を軽くする為に、お前達の躰が成育する迄、放牧されておかれたのだ。我々黒天使教徒と同等な生物ではないことを自覚しなければならん。」

俺の手許に廻って来た送書には、お前達の生年月日と肉体尺度しか記されていない。それで充分だからだ。お前達の経歴や財産、或は学歴や技能などは、此処では何等必要がない。それぞれの経歴は今から畜歴として記録され、畜技は鞭の下で発見してやる。だから従来どんな智慧を有し、どんな職能を持っていたか知らないが、家畜としての智慧、家畜としての技能でなかったら、一片の価値もないのだ。細かいことは調教師の方々が教導して下さるが、要はお前達の間意識を消滅させ、心身共に家畜の姿に戻すことを以って調教の本旨としてある。思い上っていた身には



少し辛いだろう。だが、これがお前達の本当のあり方なのだ。やがて本来の生存方式の中に、真の楽しさや喜びを見出すことだろう。今迄のように複雑な知識や煩しい考慮を必要としない家畜の暮らし、動物的に行動出来、畜本能を剥き出せる暮らしが、どんなによいもの

か？御主人様に奉仕する楽しさ、褒めて貰った時の嬉しさが、過去のどんな喜びにも増して身内を疼かせるものであるか？やがて、わかるようになるだろう。」

調教部長は、一応、穏やかに話した。最初から家畜達を刺激することは畜保健の上からも避けねばならない。除々に鞭に順応させ、脳組織を変革してゆくほうが、自殺や狂気などの事故も少く、効果的であったからだ。

併し、魔教徒からいったら生温い教化の言葉であっても、女達にとっては相当なシヨクであった。多少は故国で句わされ、鞭打されたとしても、中継施設としての手加減があった。だが此処では完全な

畜類扱いである。

麗女達は華やかに熟した婦肩を律動させ、透き通るような若腿を石のように固くした。

## (二) 専任助教士

部長が、助教士に命じて家畜群を立たせ、身長順に揃える。

「よし、先頭から別けるんだ」

部員が、背の高い順に一匹宛、各調教班に割振ってゆく。長身、小柄が均一に行き渡るように配分するのである。学歴や智脳は毛程の考慮も払われてないのだ。肉体だけを対象にした分配である。

「おっと、これは指令品だったな」

つい先日迄、ダイヤが煌めいていた路子の白い咽喉に、針金で留めつけてある赤い荷札を見て、男は、

「フーガ調教師！」と呼んだ。

柄は大きい、まだ十五、六歳の少年が小走りに部長の前に出る。

「班長は今、企画部へ行っておりますので代りに受領に参りました」

気負って、幼い唇を尖がらした。

「イレ助教士か、御苦労。これはYA二十八指令品だ。君の班で調教することになっている」

「はい。自分がこれの専任助教を命ぜられております」

一つの調教班は通常、主任調教師と助教士三人くらいで構成されており、路子のような指令家畜には専任助教士を定めて責任をとらせる。

特別指令品は別名を赤畜と呼ばれ（指令書が赤い用紙の為）一般家畜より数段激しい調教を受ける。普通畜ならば鞭三打で済むところを五打され、千米走ればよいのに千三百米は駆けさせられる。早く肉体を慣らし、優良な家畜に促進する為である。

赤畜は、姿形共に吟味された家畜であるし上層部の発註でもあるので、洗脳を完全にする為の処置であるともいえる。それだけに、管理に慎重を期さないと衰弱し、異常を招く心配がある。その為に専任助教士の監督を必要とするのである。

調教師並に助教士は少年といっている若者に依って占められている。

何故ならば、若さは疑うことを知らない。国の命令、宗祖の御差図とあらば、一心を傾注し、ひたむきに職務を遂行して怪しめない。上司に賞されれば名誉と思い、良畜を仕上げることを誇りとしているからだ。（且つての神風特攻隊や予科練が、上部から教唆されて殉国の大義として誇りを持ち、完爾として死んで行ったことを考えて戴ければわかって貰える筈だ）

路子は、フーの班に割当てられた美女達と

連縛されて、石ころ道を愛らしい軟かな素足で歩いた。紅い実が毒々しく葉蔭を彩っている名も知らぬ緑樹の根下から、鎖の音を悲しく鳴らしながら地下へ降りる。

薄暗い照明の地下道は、太い鉄格子の扉にぶつかるとギギーと鉄扉は軋んで開き、家畜を呑みこむと又、重々しく閉った。

あゝ……。比奈地路子は、ついに絶美な肉体を調教生物として収納されたのだ。

培かった聡明も教養も反古と化し去って、改めて家畜的考察を可細い咽喉で呻吟しながら、柔らかな肌を痛苦で鳴らしながら、学びとってゆかなければならないのだ。

黒髪が揺れている肩先を数歳も幼い少年がこづく。たたらを踏んで、こんもりと盛り上っている麗しい乳房が躍る。少年はきっちり腰の上で合わさっている異国の美女の掌を凝視める。仲々撓やかで形のよい掌だ。それに上膊部の肉付も弾んで円い。背肌や腰の純白と脂肪の載り具合も素晴らしい。

助教士は、この美しい乙女が自分よりは年上であることは解っていただろう。併し彼女が日本でも有数な財産家の娘で、豪奢な生活環境の中で育ち知性、教養、聡明さに於いて己れより数段も否、数十段も優れたやさしい女性であることは露知らない。

彼は只、秀抜な一匹の放牧畜として、その純美な肉肌を観察し、自分の気儘になる此の

畜生に、先ず何から教えようか？どんなことを仕込んだら上司に面白がられるだろうか？と考えていたに過ぎない。俺の唾を舐めさせて専任助教士の体臭を納得させてみようか？

口の毬転がしを練習させてみようか？そして最初に背肌へこう鞭を振り、掌から腰へ斜に打ち込み、乳房へ返して腿を真向から叩く。否、背から腹へ返し打ったほうがいいかな？響きはよさそうだな。手応えも、びいんとときそうだな。どんな鳴き方をするかな？この咽喉じや膺高そうだな。始めての専任助教だ、うんと鍛えてやろう。

跣足で育ち、朽ちた藁葺家で成長した少年は、上司の信頼に応えるべく、愚鈍な意慾を燃やして、良識の高い香りを放っている絶佳の裸身を、鳥獸を見るように蔑んだ眼差で睨めつけて、哀れにも錠されて萎んでいる、ふっくりした掌を、鞭柄でぐりぐりっと挟じり押し飛ばした。

「あっ！」

含み鳴いて、智を蔵した令嬢は黒い鉄輪の嵌っている足で冷い装具室の床を踏んだ。

### （三） 畜具装着

装具室。それは各調教班に一部屋宛設置されている。

新入荷した家畜達に轡を嵌め、髪を過激な運動に邪魔ならぬよう縛り、手鎖、足鎖を新

しく初期家畜取扱規定通り装着する処である。別に所有主や管理者の要求に応じて整えられるよう、あらゆる種類の調教器具が取揃えてある畜具調達所もあるが、当座の調教具は大抵、この装具室で間に合うよう準備されている。

数匹の雪肌の家畜は隅に纏められる。

「今日の割当品だ」

イレ助教士は椅子から立上った係員にいった。

「轡から嵌めようか？」

「そうだな」

連縛を解いて係員が路子の髪を掴んだのに眼を留めると、

「そいつは赤畜だ。舌帯圧着にしといてくれ」と少年が声を掛けた。

此処で轡の説明をしておこう。

轡の方法には舌切断、舌縫着、舌帯圧着、舌袋、声帯圧着、歯茎固定の諸方法がある。

舌切断とは、字の通り舌を切りとることである。これは余程の場合でないと行われなない。成績の悪い家畜で足や手に細工し、別な生物のように加工する場合しか適用されない。舌縫着には二つの方法がある。直接舌を下顎に縫いつけて了うやり方と、舌の先端に穴を穿ち小さな鉤を植えこみ、下前歯の根に同様嵌めこんだ金具にホックのように引掛けて、舌の動きを停めて了う方法である。

前者の場合は縫目を切らなければ喋れないが、後者の場合は、管理者の勝手に話させたり停めたり出来る。どちらにしても、この方法だと家畜は舌を覆うものがないので、味覚を充分に堪能出来るのが特長である。

舌圧着とは、左右両臼歯に細い金棒を差渡し、鼠取り式のバネを取付けて、舌を強く押しつけて了う方法である。舌袋は金網の袋で舌を包んで了うやり方であり、声帯圧着とは奥歯に差渡された棒から、舌とは逆に咽喉にバネを差込み、咽喉の筋の動きを停める方法である。歯茎固定とは上歯下歯を合わせてネジで留め、噛み合った儘、歯を動けなくして了う方法である。

声帯圧着を除いては、どの場合も声は出る。併し言葉にはならないのだ。

彼等は悲鳴や叫びは楽しむけれど、家畜が意志を表わす言葉を好まないのである。

路子だけは先に手錠をかけ直される。

三程程の幅の鉄輪が左右の手首に別々に嵌まり、ボルトで締め突出端を叩いてかしめる。そして、後手に右手首を上、左手首を下にして十字に交叉させ、鉄輪を上下から押しつけると連結の部分が組合って、ぴんと錠されて了う。路子は錠を外されれば両手首が離れるが、鉄輪は半永久的なブレスレットとなつて、抜き去ることは出来ない。

金色の小型時計や翡翠を鑲めた腕輪に代り

黒く錆びついた鉄輪は細く滑らかな手首を畜生として飾り立て、飼育物として彩つてゆくのだ。そして必需品として脱されることはないであろう。

手首から二本の鎖が伸びて肩を越え、腹の所で胴を巻いたベルトに接続される。肩から抜けられないように、緩い首輪状の金具が頸に嵌まり鎖が留まった。

足首も同様、鉄輪が装着され五十糎ぐらいの間隔で鎖がついた。

鉄杭に括られる。

丁度、医者が聴診器を両耳に挟んだように押え金で両耳孔を、ぎゅっと締めつけられる。男がハンドルを引くと自由を失った顔ががんと仰向けになった。

「口を開ける！」

圧迫感に支配されて、路子は無意識に唇を緩める。係員が歯の隙間に小さな金挺子を突き入れて、ぐいと振った。真白な艶やかな歯が鳴って、桃色の舌が覗く。支え木が入られ、花恥しい乙女の口内が河馬のように丸見えになった。

揃った歯並である。黒じみ一つない純白な瑠璃がさまさまな山型を朱の歯槽の上で描いて綺麗に並んでいる。黒奴達が見たことすらない一流料理を噛んだ歯である。ケーキにしても果物にしても、名のある店の品しか入れなかった口である。それが、餌を貰う動物の





ように顎関節一杯に捻げ、薄黒い  
蛮人に展示している。

助教士は指を差込んで、咽喉口  
に垂れている滴型の肉をひよいと  
突ついた。

「げっ！」

路子は吐き上げそうになる。だ  
が、何も食べていない食道は、胃  
液を胸許へせり上げた。智の美女  
が鈍の黒奴に、咽喉迄いたずらさ  
れて、なすすべなく露を浮べる。

係員がドリルのような小穿孔機  
のスイツチを入れた。唸りをたて  
て廻り始めた尖端を、傷もなく輝  
いている皓齒の根下に当てる。

「あ、ああっ！」

ががっ！と根が抉られて、震動  
は頭芯を貫き通した。

路子は咽喉を絞る。麻酔も何も  
ない荒療治である。芳香の息が激  
しくドリルに吹きかけられ、頬肉  
がひくひくと震えた。

朝晩かかさず丁寧に磨き、絶間  
なく美しい魅力を落していた齒な  
のに……無惨にも言葉を消す器具  
を取付ける為に削られ穿たれる。

何たることであろうか。

鉄棒が差渡されて、押え具が装

着される。留ネジが抜きとられると、ぼちっ  
とバネが作動して、豊かな知性を言葉してい  
た舌は、哀れや齒の内側に閉じこめられて了  
った。

押え具は幾つかの疣で出来ていて、舌の血  
行を妨げることはなかったが、令嬢は儘なら  
ぬ舌と異常な口腔感覚に、ごぼと不自然な唾  
液を咽喉へ流していた。

#### (四) 視線の禁止

「御苦労」

路子の後方で声がした。

「あ、班長！お帰りなさい。指令品はこれ  
です」

隣の牝畜に移って作業していたイレ助教士  
が、手を留めて路子を示した。

「うん」

路子は髪をいじられ、ざらっぱい手で額か  
ら耳の生え際を撫でられた。

「泣いたのか、弱牝め！」

涙の痕を見つけたのか、そういつて横髪を  
指で弾じいた。

班長と云ったからにはフーが調教師に違  
ない。どんな人なのかしら？

令嬢は悲愁のどん底で、更に己れに重圧を  
かけてくるであろう人物の顔を見たかった。

併し彼は、路子の仰向いている頭の後に  
いる上眼の視界には少しの差で撮ってこなかっ

た。

爪の伸びた手が眼前に迫り、眉毛をさすつて、長い睫毛の植わっている上瞼をつまみ、ぐるっと引くり返す。路子は観念して瞳孔を停めた。

「俺の指を見る！」

調教師は一方の手を右へ翳して強要する。

新畜は語氣に押されて、周章でて眼球を動かした。男は家畜の視線を左へ移動させながら、指を近づけたり離したりして焦点の整え具合を見た。湖水の瞳は痴呆のように白眼を剥き、球体の状態を惨めに表現する。

手は形のよい鼻に移る。指腹でぐりぐりと鼻骨を押え、挟んで捻ねる。鼻梁が伸びて、つうんと痛感が駆け抜ける。

助教士の差出したペンチを受取って、今度は鼻孔をぐいっと拡げる。そして鼻毛を挟んで、きゅっと抜いた。

「あっ！」

づきんと令嬢は悲鳴を上げた。

「嗅覚テストを後でやってみる」

助教士にいいつける。

「鼻の疾患はないようですから、訓練してみます」

犬のように、この類ない美女を這いずりまわらせ、匂いを求めさせるのであろうか。

フーガ調教師が、ひよいと口の中を覗いた。路子の網膜に逆になったその顔が映じた。

「あらっ？」はっと乙女は胸を早める。

見覚えがあるのだ。

汗ばんだ掌が、ふくよかな頬からソフトな感触を持つ顎へ廻って、咽喉仏から肩へ下り、ぐるりと令女の前へ出た。

黄褐色の顔と胸が眼前に立つ。

「あっ！やっぱり！」

はっきり視野に入った男の顔に、路子は激しく胸が衝かれた。

これは何としたことだ。まさか、彼だとはあの哀れな少年だったとは夢にも思わなかった。

フーガとは三カ月程前迄、自宅に寄食していたイーベラさんの従者ジグではないか。

あの黒人坊の少年が、あの怖れ戦いてイーベラさんに仕えていた少年が私の調教師？私を家畜として扱い、畜生として仕込む魔教徒？信じられない。とても、本当のこととは思えない。違う、違う、違う。

路子は胸の中で争う。でも、この手は何だと云うのだ。何者の手だと云うのだ。

イーベラさんに鞭打され、必死に許しを請うて拝み合わせていた奴隷の手ではないか。私から菓子恵まれて、頭上に捧げていた手ではないか。

それが、女の私が愛しみ誇っている顔や柔肌を、好き放題にいじり廻している。

あの奴隷が、あの黒ん坊が……。

口の利けない路子は精一杯憤りの瞳をフーガに叩きつける。僅かな範囲しか辿れない視線で……。

ジグ、否フーガ調教師はそんな家畜の反撥など全然意に介さず、柔かい双つの膨みを捻り上げる。

「張りが良さそうですね」

助教士も共に弾みを検する。

路子は穴を見つけたい羞恥が全身を駆け抜けた。ぽっと上気し、身を竦めようと脳細胞が働いたが、紅らんだ象牙色の肌面が僅かに波打つたに過ぎなかった。

「ふん、こいつ恥しがってやがる」

イレ助教士が贅沢な奴だといわんばかりに染まった頬を見たが、終らぬ内にその言葉に被せて主任調教師は冷く鋭い罵声を発した。「牝虫！お前のような虫けらは俺達の気儘で生かしておくん。どんなにされても、空気が吸えるだけ有難いと思え！恥しいなんて勝手な感情を出しやがって、註文主様の検分が済んだら、ゆっくりその駄に教えてやるからな！」

路子の肌から、さっと色が退く。

その言葉は余りにも冷酷無惨であり、余りにも意表外であったからだ。そしてそれが、可愛がり疵ってやった少年の口から出ただけに……。

秘奥の肌を曝していることも、反撥出来ぬ

拘束の口惜しさも、強烈に襲った蛮人の咆哮の前にたじたと退潮する。

今にも鞭を振り下さんばかりに憤怒している少年の姿に、路子は只ならぬ恐怖を感じる。惨めな己れの姿容を振り返り、みすばらしく保身を思わねばならなかった。

フーガにしてみたら知合であり、それもイーベラの友人として主人並に仕えた女性であつただけに、自分を甘くみられたくなかつた。そして、縁故を種に家畜が情を要求してはならないと考えたから、最初から一発食わせ、己れの権威と云うものを家畜の頭脳に叩きこみたかったのである。

「これから註文主様、即ちお前の所有者である御上主様に入荷点検をして貰う。それで云つておくことがある」

イーベラが奴隷に命ずるより冷く、身動き出来ず仰向いている乙女に云つた。

路子の頭の中に、ふと連想が湧いた。

フーガは、イーベラさんの奴隷だった。あの権高い金髪娘に飼われていた従僕だった。とすると……？イーベラさんが此処にいる筈だ。もしかしたら……もしかしたら、註文主と云うのは、あの美貌の白人女性ではないだろうか？御上主様と尊び崇めねばならない所有主とは、あの冷く刺すような冷嘲の眼を持つイーベラではないだろうか？

思い当たると路子の胸はぞっと冷却した。

イーベラ。情と愛の欠除した女性イーベラ。路子は白人娘の数々の私行を思い浮べた。黒奴少年に対する理もなき鞭打、疲労や病をかまわない労わりのない酷使、路子を含めて周囲の心遣いに対する感謝など露思わぬ冷淡。その残酷、その冷酷、その執念深さ……

それが、これから私に加えられるのだ。絶大な権力を振るう飼主として家畜の私に加えられるのだ。令嬢の胸は氷のような恐怖が張つた。そうでありませんように……イーベラさんが註文主でありませんように……路子は心の隅で祈つた。

併し、併し、路子の思う通りなのだ。

ユーマ女性イーベラこそ、聰明な頭脳を有し、月のような光り耀きを肌に湛える美貌家畜の註文主であり、所有者なのだ。

そして、豚人と称されるユーマ人でなければ、己が親しい友を、世話をかけた友人を畜生として過し、飼育物として残酷な取扱いをするのではないであろうから……

「他の牝虫も聴け！」

フーガ調教師は他の家畜の注意を促がして路子を見下して云つた。

「お前が我々以下の生物であることは大凡解つたろうから、これからそれを態度で表現するのだ。即ち、我々に対し尊敬と絶対服従を動作しなければならぬ。お前達の生殺管理

権は我々が有しているのだから、俺達の前では跪いて従順な姿勢をとるのは当然なことだ。服務規定には次のように定めてある」  
調教師は家畜取扱規定と書いてある小冊子を出して、ぺらぺらと頁をめくつた。

これは調教師必携本で家畜取扱の大様が記されている。その服務の項目には——家畜が主人、幹部並に黒天使教徒に対する時は、次の姿勢を執らしめ、已から卑猥たることを意識さすべし。——と記し、その態様が図解詳説してある。

フーガは解説文を読み始める。

「先ず一般人の方に逢つた時は、五米ぐらいの距離で片膝立に跪いて降り、眼を二米ほど前方の床に注いで通り過ぎられるのを待つのだ。我々調教師を含めて幹部の方の場合は十米ぐらいで両膝を折って正座し、上体を傾け、膝前の床に眼を落す。御主人様、即ち御上主様の場合は姿を拝したら、直ちに膝を折り全力で十米ぐらい前に膝行し、其処から額を床につけ、這いずって歩行のお邪魔にならぬ近さへ伏す。立てとか、起きるとか命ぜられた時は命令通り行動する。だが視線は、一般人に対しては咽喉、幹部の方の時は胸、御主人様の場合は腰から下へ注ぐのだ。命ぜられた姿勢で、やむを得ず視線が上部へ行く時は眼を瞑るのだ。家畜の卑賤な眼が我々教徒の姿に当ることは冒瀆として絶対許せない行

為と看做されている。主侮辱と云う重大な罪になるから、心に刻んでおけ」

と言葉を区切り、煙草を点けて

「お前の御主人様は強いお方だ。些細なことでも厳しく罰される。だが、お前にとってとは絶対な神様にも等しいお方なのだ。最初でもある。気分をお損ねしないよう、十分に気を配らんと怖いぞ」

フーガ調教師の、見知っていた者に対する情けであったと云えるだろう。主人の残酷は骨身に耐えて知らされていたし、この美しい娘がへまをすれば激しい罰鞭が、こよないミルク肌で鳴り響くことは解りきっていたからだ。

路子は杭から離されて、少年の足許に座り項垂れる。

あゝ、この肌を黒人の視野から遮ぎることは出来ないのだ。二十一才の乙女は哀れさに胸底はさめざめと濡れていた。

「顔を挙げる！」

おすおすと美貌が起きる。

「のろい！」

助教士が髪を束ねて引起すと、巾広いゴムをぱしっと豊頬へ叩きつけた。

「あっ！」

乙女は灼痛に悲叫する。そして僅かに動く眦を裂いて、知合の調教師に抗議した。

「馬鹿！眼を瞑らんか！云われたことが解ら

んのか、牝虫！」

ぱしっ！ぱしっ！続いて頬と額が音たてて焼ける。

路子は、思わず怯む。だが、心はぐっと煮えていた。何と云う男なのか？他人ならいざしらず、陰になり日向になって庇ってやった男なのに……。

且つて、私を凝視めるのさえ遠慮していた黒奴が、私の視線を卑しい注視として閉そう

とする。この少年が神々しい存在と云うのか私が振り仰げない尊い人間なのか？

麗女は、むらむらと抗心を湧かした。かつと瞳孔に炎をたて、黒人を睨みつけた。膝が伸び、肩が張った。

「こいつ！生意気な！」

怒声と共に、黒い足が、があっと乳房を蹴り横面を踏んだ。ぱしっ、ぱしっ！ゴム帯が処嫌わず打叩く。





路子は急速に胸が萎んだ。肉が痺れ泣き目先は昏んで、ちらついた。唇が噛み合い、ことごとと無念が脉を打った。ああ！と悲鳴の咽喉を締めて、思わず臉を落す。

視界が閉じ、がっくり顔が垂れると痛みが停んだ。

「もう一度やってみろ！しっかりと脳髓に畳みこんで、習性とするんだ。立て！」

乙女は、よろよと腰を立てる。黒シャツの衿が映じた処で視界に臉の幕を下した。あゝ、彼女は己が身を支配する憎むべき魔教人の顔を、その澄んだ瞳に映し見ることは永久に出来なくなつて了つたのか……。

「歩け！」

背を突かれる。美貌の畜生は、お目見得の為に均整のとれた脚をたどたくしく運び出した。

### (五) 畜類の伺候

廊下に出る。

二曲り程すると、やゝ広い道路に出た。

伏眼勝ちの美畜の双眸に、小さな四つの車輪と白い四本の脚が映った。

不審の面差が素早くその正体を見極める。

そして、あっ！と驚きの色を刷いた。

それは二頭立の家畜車だった。

白い家畜鼻輪を嵌められ、鉄の口輪を唇に食まされて、壁の環に繋留されている。

肩と腰にかけられた曳具が二人分だけの座席を有する小型の車体に繋がっている。

この社会では至極当り前の風景なのだが、路子にとっては始めての見学であった。

怖々と瞠目している顔の下に可細い咽喉を廻っている輪に、調教師は車体に植えつけてある曳き鎖を引掛けると、轡畜の繋留鎖を取脱し、身軽に座席に飛び乗った。

これはフーガ調教師専用の連絡車である。彼の足代りになって小まめに乗り廻される車なのだ。

ひゆうと鞭が空気を斬る。リリンと鈴が鳴って二匹の若畜はゆっくり走り出した。

少年は手綱を握り、シートにそり返って新牝を見やった。

歩幅を鎖で制限されている佳身は、前のめに跪いて、今にも倒れそうだ。フーガは手綱をしごいて、歩運びの限度を見計った速度に直す。

そして肘棒に頬杖をつき、横手に眺めている麗胸を眺める。

この牝の足を拭いてやったこともあった。

この家畜の靴下を畳んでやったこともあった。これからはこの柔かな乳房を靴マットにしてやろう。この愛らしい朱唇を靴ブラシにしてやろう。だが、あの時は主人の友達だと思つたから美しく見えたつもりでいたが、布地を取った畜体がこれ程見事だとは……。

この躍っている胸、この清白な皮膚質、この弾力を蔵した肉付、何と素晴らしいことか。逸品だな。御主人は流石にお眼が高い。

少年は、しげしげと冷眼を注ぐ。

が、路子は懸命だ。歩度が緩まっているとは云え、慣れぬ足捌きのぎりぎりで駈けていたのだ。小刻みに足を送り、転ぶまい遅れまいと肩を波打たせている。

額はねばり、鼻孔は膨み、口からは心臓の苦悶が荒っぽく吐きでていた。

奴隷として蔑まれた少年が車上にゆったりと腰を下し、高貴と持囃された良家の娘が拘束された素肌を曝して全力で床を駈ける。

汗が純白な畜皮を、びっしり濡らす。乳房がぶるんぶると、こよない躍動曲線をえがいた。

車は、やがて絨氈を敷き詰めた廊下に入つて、金蛇の装飾のある厚い扉の前で停った。

フーガは飛び下りて車を壁に繋ぎ、呼鈴をブー、ブー、ブーと間隔をおいて押した。

扉に割り抜いてある小窓が開いて、褐色の女の顔が覗いた。

扉が開く。路子は突き転ばされ、首筋を鞭柄でぎゅっと押えつけられた。

「YA二十、八指令品を運んで参りましたと御主人様にお伝え願います」

受付の女は頷くと、奥の扉に消えた。フーガは新畜の足鎖の巾を二十種ほどに詰

め直してから、噛んで含めるように云った。  
「これからは、立ってはいけません。膝で歩くのだ。眼は絶対に上げてはいけません。御主人様のおみ足が見えたら顔を床に摺りつけるようにして近付き、靴先に接唇するのだ。違背するとお前は死ぬ程の罰を受ける。いいな！」  
路子は殺されてもいゝと思った。高踏な育ちから来る自尊が傷つけられて、激しく渦潮を巻いた。

褐色の女が戻って来た。

「よろしいそうです。どうぞ」

奥の扉が開くと、細長い控えの間になっていて、扉口に二人の女がきちっと正座して出入口を護っていた。

御座所へ入る扉は、莊重な白雲が浮彫してある茜色の鉄扉で、緋の幕が房紐に依って左右に開いている。まるで神の御室へ入るように重々しい雰囲気である。

ゆっくりと扉が動いた。

フーガは頭を下げ、腰を屈める。路子の首輪に繋いだ曳鎖を左手に、右手の鞭柄でしっかり首筋を押えて、おそろおそろ主人の居室へ入る。

臍脂のカーテンを潜って眩しい女主人の御姿が見えると、ぴたっと床に座り固張った声で報告した。

「僕、フーガで御座います。今朝到着致しました御調達品を御内覧に呈する為、参上致し

ました。取扱いの御指示を賜り度く存じます」

路子の瞳には床の絨氈しか映っていないかった。上質の、緑の厚生地だけが、視界に展がっていた。

十米ほど先に、三カ月前迄は共に語り、共に笑い合っていたユーマ女性イーベラが、遅い朝のミルクを飲み終って、白い彫像達が支えているふんわりした椅子に横座りになり、煙草を旨そうに吸っていたのだ。

陰のある流し眼でじろっとフーガを見、顎をしやくって前へ来る様に差図した。

黒奴は恐懼して前進する。

路子の眸に、赤い飾縁のついた室内履が入って来た。流れるように緊った美麗な足首の両脇に、主人を守る犬のように二匹の栗毛の畜女が控えている。

「畜を前へ出せ！」

澄んだ声が抑揚を擧げて、男のように命ずる。

清雅な乙女は豊満な尻を叩かれて覽る。無造作に投げ出された布の靴が顔前に迫った。

路子は顔を上げて、主人と名乗る女を見てやろうかと思った。が、不思議とそれが出来なかった。

入室の時から頭を圧するような雰囲気、控えている畜女の敬虔な態度、フーガのへり下った動作、何か威圧を受けているようで、路

子の純真な心は凝って怯んだ。

だが、綺麗に手入されているとは云え、靴には唇を当てる気にはならなかった。

「御眼見得の御挨拶をせい！」

後方から怒ったようにフーガが督促した。路子の心は意固地に固まった。

「こらっ！」

調教師は己れの仕込みが云々されるかと、やきもきして声を荒げた。

「着いたばかりで痛みを与えないと解らないのよ」

女主人は冷く云い放って鞭を取り寄せる。

路子の頭脳に、はっと谷子に受けた電痛が蘇った。悲哀が痕々と胸底に拡がる。総てを奪い去られた身に何の反抗か。波風のなかった育ちの娘は、氣張った自尊心と腹合せに強烈な責を耐える肉体力を欠いていた。

路子の自尊は痛苦の蘇生に悲しく諦める。

乙女は胸を湿らせて、おすおすと布靴に唇を寄せる。そして睫毛を合わせて震える紅い唇を飾靴へ下した。

### (六) 魔女イーベラ

女主人はにんまり笑う。

「これらの書類は黒山谷子さんが御手渡しするそれで御座います」

聞き流して鬼女は

「顔を起せ！」

と命ずる。

傷心の乙女は固く臉を閉ざして、美貌を内覽に供する。鞭柄が額から眉鼻から唇へと当たった。肩肉と鎖骨が叩かれ、乳房と腹部が突かれた。

「どう？フーガ。三月ばかりだけど少し贅肉がついたと思わない？」

「はい、太りましたような感じで贅座いますね」  
観念の臉を引いていた美女は、あっ！と思う。やっぱり、やっぱり、イーベラだ。

私をこんな姿にし、こんな扱い方をする。

瞬間、乙女は胸心が沸騰して、ぱっと瞳孔を開く。

円らな、深い智を湛えた瞳が、きらきらと激情

を涙にして、昂ぶった怨嗟をユーマ女に叩きつけた。

「牝虫！眼を抉りとられたいのかい！」

白人娘は且つて見せたことのなかった峻しい形相を路子に向けて、鞭を振り上げた。



絶体、神なる主人の手に依る第一鞭なのだ。  
びしっ！

コードが柄に接続してある鋼の鞭は凄まじい烈痛を純美な肌に炸裂させる。

「あわおっ！」

びしっ！白い女性は臍を裂いて、力一杯打ち落す。

「うわお！わあっ！」

肺腑の底から絶叫して、路子はぐんと背筋を固めて伸ばした。ずずんと背髄が割れて、ぐらぐらと中枢神経が揺れた。

びしっ！

「牝！よく覚えてお置き。

この鞭はね、お前の所有者である私が与える初鞭だよ。いいかい。この鞭をその体へ与える意義の第一はね、畜類の癖に人間の暮しをし、私と対等に交際した罪を罰するのよ。そらっ！」

びしっ！びしっ！

肩から背へ、鉄鞭は毒牙のある蛭のように吸いつく。赤い条痕が傷一つなかった滑らかな統肌にくつきと印される。

「次はお前が今迄頭の中に詰っていた過った人間的思考を叩き出す為よ。そらっ！」

びしっ！ふくよかな誰一人覗けなかった麗しの乳房へ、腹へ、黒鉄は撓やかに噛みついて行く。

「第三に、その体が早く鞭に馴れ、家畜の務めに励めるよう鍛えの鞭だよ。そらっ！」

びしっ！びしっ！豊腰に白腿にぶち当る毎にどくつと血管が痺れた脉を發し、神経はびりつと破れた。

「わあおっ！ぎやお！」

脳芯がどろどろと熔解し、艶やかな黒髪が逆立つ。

坐り正している体筋の限界は来た。どさりと木偶のように艶美な肉塊は倒れ伏す。が、その上にも容赦なく急激の鞭が降る。

がくっ、がくつと関節が震動し、白くのぞけた咽喉から、優雅な乙女らしからぬ獣の悶叫が遡った。

「起きろ！」

鞭を停めてイーベラは怒鳴る。

腹中に一片の食物も留めていない身には、がくつくり精氣を失い、ただ全身の膚だけが荒々しく呼吸している。

びしっ！無惨にも又鞭を降らせて

「起きろ！」

囚女はもう反抗心もなく、懸命に力を絞って、やっと坐り直す。

額も肩も腿も、びししよりと芳汗を流し、激しく起伏している。

主人の鞭柄が頸を起す。もう眼は開けられなかった。

友人イーベラの顔は愚か、高価な衣裳に包

まれた胸も胴も、再び網膜に写し出すことは不可能になって了ったのだ。

困憊した内臓の動きが苦しげに口を出る。咽喉が間断なく鳴った。

「口を締める！」

せわしなく活動する肺に、兎もすれば口を開けて空気を貪りたくなる。

麗畜はびくつと唇を合わせる。胸は恐怖に縮っていた。只、恐怖だけをやさしい胸一杯に膨らませ、ぼろぼろ涙の糸を頬へ流していた。

イーベラ。やさしく親切に歓待してあげたユーマ女性、離日の際は別れを惜しんで抱き合ったイーベラ。

それが鬼よりもひどい扱いで私を迎える。肌は露出させ、手足は括り、言葉は留める。

そして品物のように乙女の肌を点検し、姿を見たと言っただけで死ぬ程にも鞭打つ。

イーベラ！貴女の心は魔者なの？貴女の頭脳には悪魔が棲んでいるの？

支えの鞭が脱されて、路子は俯向いた。露に溢れた瞳で、ぼんやりと薄いストッキングに包まれた主人の媚やかな脚を凝視めた。

脛から流れた曲線が踝できゅつと緊って、奇麗な脚である。イーベラと毎日逢ってはいたが、こんなにつくづくと彼女の脚を見たことがなかっただけに、透けて写る肌色の白さと形には改めて眼を瞠った。

魔女はそれを意識してか、

「私の脚をよく覚えておくのだよ。お前は主人を判別するのに、この脚でしか出来ないのだから。脚の形、歩き方をよく頭に刻んでお置き」

と室内靴を脱いで鼻先に突きつける。

マニキュアした紅い足指が見え、ぷうんと香料の混ざったイーベラの脂臭がする。

女主人は衣裳も変え、靴も取替えるだろう。顔を見れない家畜は、只、スカートの裾から踝迄の間の脹脛の形と体臭だけで女主人を判断しなければならぬのだ。

イーベラは黒奴を見下して

「肉を少し削ったほうがいいから、これには明晩迄餌も水もやらないで置いて」

豊かだった令嬢も、今はもう、御主人様イーベラの意志一つで水も食物も口へ入れることは叶わなくなってしまったのだ。

「はい、承知致しました。ついでに今晚も眠らせないで置きましょうか？」

「そうね。それじや直ぐ畜力と畜機能のテストをやってごらん。云っておくけど、私の赤畜だからと云って手加減する必要はないのよ。お前は調教師なんだから、お前の好きなようにやるがい。骨の一本や二本折れても仕方がないし、標準能力が出ないようだったら、潰しに廻して構わない。これは消耗品なのよ。私の所有畜だからって、下手に甘い点



で申告すると後で私の恥になるからね」

魔女は冷淡に云い放つ。

路子は、もうユーマ女性を友人視する気持は失せていた。その一挙一動に気を配り、一語一語を耳敬て、恐怖しなければならぬ存在だった。

路子の胸は、知らず知らずイーベラを絶体主人として容認せざるを得なくなっていたのだ。

そして、完全な品物扱いの言葉に、氷をぶっかけられたように凍えが充満した。

「はい、お言葉通りに致します」

「牝！」

呼んで、イーベラは黒い束ねられた髪に靴を載せる。

路子は怖気で、びくっと円美な肩を震わした。今度は何を云われるのか、且つての友人の言葉は絶大な支配力を持って、日本娘の胸に残酷に突き刺ってくるのだ。

「聴えたらうが、お前は屠殺することの容易な豚並の畜類なんだよ。無能力の家畜を飼う程、私は物好きじゃないし、そんな牝の餌代を負担する程、金持でもないからね。これ迄お前に掛った費用はその皮を糶し、その肉を肉屋へ卸せば算盤が合う勘定に出来てるのさ。まあ折角、この国へ連れて来たんだ。私だって殺したくはないし、お前だって二十一才の生命を無駄にしたくはないだろうね。フ

ーガの指導で頑張ってごらん。どんな賽の目が出るか、お前次第だからね。フーガはお前にとっちゃ良い調教師だよ。日本にいた時から、お前の性質を観察しとけと云いつけてあったんだから、お前を家畜の姿に返してくれる適任者よ。お前は私の奴隷とみくびって横柄な態度だったね、奴隷だって人間よ。でも、お前は奴隷以下の家畜なんだよ。鯨立ちしようがお前は奴隷と称される人間にはなれない下等動物なのさ。せいぜい奴隷に鞭や火で潜越のお返しをお貰い。足指でも舐めさせて戴いて、人間の尊厳を教えて貰うといわ。家畜は鳴かせれば鳴かせるほど良畜に仕上ると云うから、フーガはその声が出なくなる程鳴かせてくれるだろうさ。そうすりや自分が畜類だと気付くだろうし、畜生の生き方を早く弁えることになる。まあ、いずれ私やフーガに感謝するようになるわよ」

魔心の美女は肉椅子に腰を戻して、控牝に足を揉ませる。

路子は儘ならぬ後手のふっくりした掌を握り締め、こみ上げがちな咽喉を緊めて、嗚咽を耐えた。

魔女め！悪女め！こんな、こんな酷薄な、残酷な云い種ってあるものだろうか？

痒いところに手の届くような厚いもてなしを受けていた時から私を家畜にしようと計っていたなんて、あんまりよ。人間じゃないわ。

路子は愁々と胸が痛んだ。

此処の世界では、報恩感謝など云う社会通念は通用しないのだ。魔教徒達こそ畜生理念の所有者ではないか。

二十一年間培かつて来た教養や倫理は、がらがらと崩壊して、天資の魔質は、ほろほろと大理石のような白腿に雫を落した。

抗議しようにも舌は動かない。だが、云ったとしても此処では通らぬだろう。訴えようとしても眼を合わせれば激烈な罰を受ける。温雅な娘は、純真な心を真黒に塗りつぶされ、乳白の佳肌をよよと律動させて獻<sup>スリ</sup>敬くだけであった。

「連れてお行き！」

黄褐色の少年は畏って首鎖を把り、主人を見上げて訊いた。

「鼻輪は嵌めときましようか？」

「勿論よ」

「それから呼名は何と付けたらよろしいでしょう？登録番号を刷ります時、一緒に印したいと思しますので……」

「そうね、明晩迄に決めておくわ」

佳畜は曳かれる。麗美な、素性のよい畜体は、神を伏し拝むようにイーベラに向って深く頭を垂れ、ずずと後退りに退出して行った。

(未定)



最新映画 スナツプシリーズ

寒牡丹の巻

元お糸 伊達子 土下万石

撮主 橋本 牧 高志

冬ともなれば女性とは  
よなく冒険を敢えて好む  
ものである。事件は、い  
ささか旧聞に属するが波

乱に富んだ昭和三十三年  
を送るに当り、この一篇  
を回顧するのも亦、無駄  
ではないであろう。ただ  
文金高島田に紫矢耕の裾  
を曳き『おい!』と呼べ  
ば『あい』と答えて、腰  
元の彼女が来るかどうか  
……、何分にも雨がかつ  
た切れそうなフィルムで  
あるだけに心許ない次第  
だが誌上公開の責任を果  
たすために『今更私なん  
か御紹介なさらずとも:  
』と尻込みする彼女に  
因果を含めて登場願うこ  
とにしたことを御諒承願  
いたい。

映画の筋、登場の人物  
演出の監督などについて  
は既に知悉されており、  
ここに紹介の労は必要と  
しないが、新春咲くべき  
福寿草を待つ余り寒牡丹

丹の鉢を陽の当る縁側に置くのも奇クなら  
では出来ない芸当であろうことを附記して  
映写機の旧作フィルムを回転する次第であ  
る。

牧『あなたが事もあらうに陰密の大使命  
を帯びて御家老——原田甲斐先生の部屋に  
様子を探りに行く処はひやっとしました  
よ。ああ云う悪人は心眼でちゃんと見抜く  
んですからね。そもそもこのあたりから、  
あなたが狙われたと思うんだが……』

腰元お糸『行きずりのお廊下なら兎も角  
お庭なんですよ。真実、本当に苦労しまし  
たのよ。お部屋で何を密談されたのやら判  
らぬまま、これは容易ならぬ事と思ったも  
のですから、忍び足の脚が慄えて大急ぎで  
お部屋へ戻りましたが、ちゃんと見抜かれ  
て了いました』

牧『そのあとで原田甲斐に呼ばれたんじ



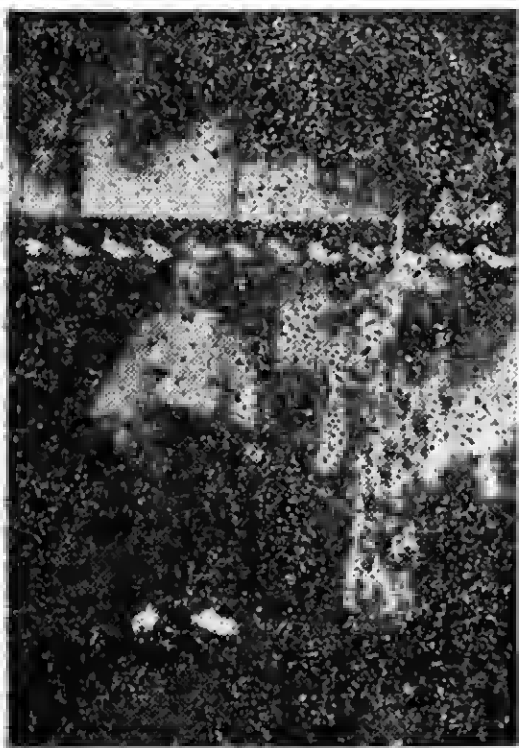


やないのかい？何用あって余の部屋を探ったかと……」

お糸『どうとも、よきに御判断なされて下さりませ。ホホホ……』

牧『で——君は早速、密談の趣を手紙に托して知らせようとした。まあそこまでは、講談調なんだが運悪く、再度の吟味とあって、御家老さまがお呼びです、と来た。僕はこれを観て、もう駄目だと思った』

お糸『アラ、何故ですの？ あたしが苛められて可哀いそうだと思召したんですか。ホホホ……お気の弱い、伊達や粹興に敵地に乗り込んだのではなく、身体を張って命がけで陰密になったんですもの、大丈夫ですわ』



牧『処がそうではなかった。家臣が障子を閉めて帰ったあと、君は蒼白となって不安気な顔付で筆先を見つめていたじやないか。だから、僕は、いつかチャンスかと握り締める物を握り締めて……君の現われるを待ったんだ』

お糸『まあ——お人の悪い』

牧『少し小さくてお気の毒だけど鼠に——ただの鼠じやあるまいと眉間を打たれた悪人家臣が堀越に顔をのぞけると、いわゆる絹をさくような女の悲鳴が聞えた。音の中に鞭の音まで混じっているから正に、シャッターチャンス……』

お糸『あたしが後手に縛られて松の木に吊下げられた姿を御覧になって、びっくりなさいましたでしょう。あの時、貴様の身体に用があるから来いッとお部屋から曳き出され、



二、三人の男達の手で矢絣の上から両腕を捻じ上げられて二巻き縛られ、帯にさらしを巻いて宙に浮かせるんですもの、苦しくて苦しくて……でも大勢の方に見守られて折檻されるのでなくて、ホッとしましたのよ。だって……恥ずかしいんですもの』

お糸『あの方——あたしを責めるお武士さんから云われぬか、誰に頼まれたか白状せいッと言われ、肩の処を身に泌みる程四、五回鞭でたたかれた時は泣きたい位、痛くて眼の先が真暗になるようでしたわ。どうして、何の因果で……』

牧『か弱い腰元風情を苛めるんだらう……と正にその通りなんだ。こちらはただ、君の哀姿をスナツプするだけでいいんだけど、——失礼な云い分を怒らないで呉れ給えよ。実



の処、気の毒で堪らなかった。この素材は一幅の絵になる。天然色で矢絣高島田を活かしたい。君の裾の乱れもスケッチしたいナンテ考えているうちに君に曳きずられて一瞬十数枚のフィルムを消費したって訳さ。観せる映画を観る男って、馬鹿な奴だね、全くの話が……」

お糸『……でしょ。ですから右半分の肩の痛さに耐えかねて身体を、いえ、脚をバタバタすれば裾前が割れそうだし、吊られ放しの白足袋の先きは感覚がなくなってうような気がして……。でも観て戴く映画なんですから、女の責めがどんなに凄惨なものか。アラ、飛んでもない減らず口をお喋りして、御



免なさい。いえお許るしなされて下さりませ。この糸は、糸は決して、そのような大それた事は……身に覚えのないことで御座ります。あれッ、そのような鞭で、アッ、切なう御座います。どなた様からの云い付けでも御座いませぬ。ただ御家老さまにお仕えするの心の外に何んで他意が御座いましょう。アッ、痛いッ、どうぞお見逃しの程を……」

牧『と君は哀願したんだけど……』

牧『この場面を観て、いやスナツプして、この映画を作品化した会社は、都会は別として田舎廻りをすりや、きつと受けると思ったね。カラーに熱を上げている僕の口から云えば何故スタンダードでも、天然色で撮らなかつたかと惜しまれて堪らないんだ。腰元の折檻、しかも絶世の美女の吊責めは時代劇と云う処に安全弁がある。何しろ、講談本なんだからね。処でその憎くつたらしい責め役の家臣が君の襟口を鞭で上下にしがいた時、どんな気持がした?』

お糸『先程のお言葉の通り、もう駄目だと心に決めましたわ。ここで責めて責められて死ぬんだわ……。でも、死んじやいけないその前に一眼なりともお逢いして……』

お糸『その方(あなた)はここには居(ゐ)らっしゃらない心細い女の折檻場——をスナツプされて、い



え、お恥しい姿を御覧に入れて、さぞお見苦しくお思いになったでしょう。雷(かみなり)さえ乱れてのクローズアップ……』

牧『さに非らずですよ。何回かテストされたの本番だろうが、真に迫った君の顔は僕の愛機が捉らえて決して離さない。カメラアイは爛(らん)爛(らん)として暗黒の客席に在(あ)って光らしていたんだから……』

けど君をたたく鞭の映像は十数枚あるんだが、公開するに忍びないから、ひっ込めたんだ。それを敢えて発表する程僕は惨忍な男じやないんだからね。いや、本頁(ほんぺつ)を繕(つくろ)く満天下の奇ク(きく)の読者はそうかも知れない。少くとも



性は善なりと自負する紳士達ばかりと思って頂きたい』

お糸『それを承って安心致しました。ホホホ……、男の方<sup>なた</sup>って皆さん、お人が悪くて相<sup>あ</sup>当な心臓を持<sup>も</sup>っていらっしやるのねえ。これは嘘<sup>うそ</sup>なお話。

『ですけど、昔で云えば半刻もの間、松の木に吊られて折檻を受けると失心してううでしょうね。もうあちこちしびれて……』  
牧『そこがまた狙い価値のある処、いやこ



ちらの話……なんだけど、君が、矢絣の着物に黒帯を締め放して吊られるより、このあたりから帯を解いてさ、緋の長襦袢で折檻されたとすると、大分艶めかしくなるんだが惜しいことをした。僕若し監督なりせば、無情のようでも、そうするね。ただ君を責める時刻が昼間でなくて夜の庭先きなんだからカメラには至極不向きとなる。実際、再撮りする方は苦勞だよ。強力現像処の騒ぎじやない』

お糸『ですから、とうとうこんな姿になっ



て了いました。哀れな女、雷<sup>かみなり</sup>ががっくり、乱れ髪の腰元、いじらしいとお思ひになりますでしょ。緋の長襦袢に緋縮緬の蹴出しはおあいにくさまでした。この次はきつとお望みのようにして御覧に入れますわ……』

牧『僕がよくても映倫と云う奴が許さないだろうから、またの娛しみとして、こんなに責められても君が白状しないもんだからお手盛りの毒杯と持<sup>も</sup>って来た処は御丁寧だった。まさか毒を吞<sup>の</sup>まされるとは君も知らなかったろう。正に原田一味は極悪人の部類だね。余



計な腹いせかも知れないが、甲斐がお腹のど真ん中に刀を突き刺されて歩く断末魔は、痛快と云うよりは、客席から失笑が湧き上った位でナンセンス、御苦労さまと嵐寛さんにお伝え下さい』

お糸『これから先、御覧になっちゃ嫌や……だって、思いも寄らなかつた毒水を、半ば失心しているあたしの口へ無理やりに吞ませるんですもの。縛られて自由を失った上半身を起して、ぐっと首筋を掴まれてこの女も最後か……と。』

ですから白縮緬の長襦袢の裾を乱して、アラ、まだ早いんですの。

ぐっと最後の一滴まで干して毒水を吞み終った時、キヨロキヨロとあたりを見廻す辺はゼスチュアが下手でお芝居のようでしたですよ。』

牧『何んとか云う大映の女優さんのように眼の玉をクルクル動かすと情景が出たかも知れない。しかし君は一応散々折檻された後なんだから、じっと見つめる方がいいんだよ。これはその時のスナツプ、枚数を節約して未公開として置こう』

牧『これから君が文字通り裾を乱して立ち上って逃げようとする処になる。非常に動作が速いんだ。水泳じやないが一秒何分フラッ



トが問題になる瞬間物だけに苦労したねえ。

馬鹿な実績を発表して笑われるかも知れんが、この一連の駒を撮すために映画館に通うこと回数にして五六回、高感度のフィルムを費消すること四五本と云う有様。君がじっとしていない証拠だよ。こうなったのはさ……』

お糸『どうもお気の毒さま。だって、立ち上ってあしろ、こうしろと監督さんから云われるんですもの。でも裾を曳いたままでしよう。転びそうで、転びそうで、それに足元がおぼつかなくて、縛られたまま駆け出したんですのよ……』



牧『いい場面だったね。あの時、我若し監督なりせば——よ。あっちに行つては倒れ、こちらに足を運んでは苦悶する長シーンが欲しかったと思うんだが、少し無理かな？ しかし君の苦悶する表情は非の打ちようがなく正に百点満点だ。』

ハイティーン時代の君の演技にしちや上級に位すると太鼓判を押すよ。乞い願わくば、単にセミクロースアップでなしに、全身を曝け出している姿態でありたかった。だから僕は云うんだ。何故カラーで撮影しなかつと……さ。』

お糸『でも、恥ずかしいわ。そりや、若い女の責め物で色気も大切でしょうけど、スタジオの内なんですよ。皆さんの前であられも

ない恰好をして見ろって仰言っても、どうぞこのたびはお許しなされて上さりませ…よ。悪しからず、ホホホ……」



牧「何んだかんだとお喋りしているうちに大団円になっちゃったね。最後のセリフがいいへ素直に御家老さまの云うことをきけばこんなみじめなことになるまいものを——と。誰が脚色したものか、思い切ったの長時間の折檻物だった。出来栄えの良否は別として、マニア向きとしては最上級のものだと思うが、スナップして整理に悲鳴をあげたのは僕一人



かも知れない。馬鹿は死ななけや直りませんね。アハハッ……」

お糸「ホントですわネ……アラ！いけない大変失礼を申し上げまして。平に、平にご容赦下さりませ。……ホホホ……」

牧「これは手厳しい。ハハハ……恐れ入りました。けれどネ、その馬鹿を承知で、哀れな君の姿に絶大な声援を惜しまない数多くのマニヤの存在を、夢お忘れなく……」

お糸「皆さん、どうも御声援、有難う存じました。これを御縁に何分よろしくお願い申し上げます。では御機嫌よろしう。さようなら」

### 〔次号予告〕

次号誌上には

大映作品『鬼火燈籠』を予定して居ります。

新人、岸正子の被縛艶姿をどうぞ御期待下さいませ様に……









創作 運命の少女	嵯峨 紀世
創作 紅山彦(四)	三條 卓史
切腹 幻想曲	佐藤 すみ子
創作 一月明に泣く	河村 操
私のイメーシ 憧れの女性	近藤 三郎
研究発表 切腹風土記	壬生 愛造
残虐なる女性達	森本 四郎
女斗美短歌	土儀 四股平
子供時代の浣腸	池田 喜代子
古典にみられる男責について	菅 良太
乗杉様に寄せて「私の馬」	西田 佐代美
懸賞募集 原稿入選作品	
創作 お町の最期	花巻 京太郎
断層の女	辻村 隆
美容病院(完結篇)	久留木 栄
再びビーチボールの魅力	佐田 春雄
緊縛映画速報とその雑感	藤木 仙治
魔教団N08(その五)	土路 草一
マゾヒズム百景	馬場 好男
今月の縛られた女優達	大河原 珠樹
沼正三たより「手帖速報欄」	沼 正三
読者通信	
〇八月号(復刊第三十一号)	
【定価二百円】	
口絵	
孝傑作集 拷問會	四馬 孝画
緊縛映画名場面集 提供・楓月	太田 太郎
新東宝「朱桜判官」	若杉 嘉津子
新東宝「毒婦夜嵐お絹と天人お玉」	江見 涉・若杉 嘉津子
新東宝「幽霊沼の黄金」	瀬戸 麗子
新東宝「サタン城の魔王」	益田 房子嬢
ニューモデルの緊縛模様	南村 俊平画
俊平戯面集	
「床間のニューデザイン」	「飾櫓」
「ロボット」	「模型鉄道」
写真後手(高手小手)縛り愛川	悦子
女殺油地獄(近松について)	南方 純
「サタン城の魔王」の縛り雑感	佐渡 完
浣腸と妊娠	羽村 京子

〔奇譚クラブ最近号主要目次〕

婦人補導院の保護具……………佐渡 完  
 映画に見る男性實……………梶 孫  
 最近の時代劇縛りシーンから……………嵯峨美也子  
 一研究発表「切腹風土記」……………壬生 三郎  
 現代マゾヒズム芸術時評……………原 忠正  
 妖艶木乃伊地獄……………海野 築朗  
 残虐なる女性達……………森本 愛造  
 女斗美相伝……………土俵 四股平  
 話の屑籠……………辻村 隆  
 告白小説「屈辱の砂」……………横村 史  
 マゾヒズムへのいざない……………黒田 史朗  
 「愛好者の記録」……………とや 高志  
 「腰元女の吊責」と題して……………牧 草一  
 魔教団N08（その六）……………土路 好男  
 体験「鼻いじめのこと」……………花房 孝子  
 マゾヒズム百景……………馬場 純  
 切腹特集号に関するアイデア……………南方 時夫  
 体験記バー「ナナ」の人々……………奈加 田  
 磯・Gクラブ撮影会報告……………泉 かよ子  
 歌舞伎にあらわれた禪美……………菅 良太  
 創作「紅山彦」……………三 卓史  
 私的女性下着コレクション……………小野 比呂  
 懸賞作品「身悶える妖精」……………辻村 隆  
 妖虫は夜にうごめく……………辻村 隆  
 読者通信……………辻村 隆

○九月号（第三十二号）

口絵……………【定価二百円】

孝傑作集 いぶしセメ……………四馬 孝画  
 俊平戯画二題……………南村 俊平画  
 「大井川渡渉」「河童と少女」……………滝い子画  
 縛り絵責絵師の苦心……………大塚啓子嬢  
 縛り写真特報……………大塚啓子嬢  
 縦と横の線、柔肌の熱き血潮……………大塚啓子嬢  
 緊縛映画名場面集……………提供・梶・田辺  
 日活映画「殺人計画完了」……………日高澄子  
 日活映画「悪魔の爪痕」……………筑波 久子  
 東映「少年猿飛佐助」……………山東 昭子  
 東映「変幻胡蝶の舞」……………桜町 公子

實画 灰皿……………杉原虹児面  
 入選作品「草雙紙に於ける賣場の研究」…沖田彦  
 創作 受刑の肌……………近藤 一  
 通信 最近号を読んで……………近藤 一  
 子供 頃の流暢（その二）……………池田喜代子  
 「檻」への執着……………鬼山 絢策  
 マゾヒズムへのいさな……………黒田 史朗  
 「戦場にかける橋」とほくの賣小説……………菅 良太  
 続・女斗美短歌……………土俵 四股平  
 幕末奇談手枕お千代……………海野 繁朗  
 今月の縛られ女優達……………大河原 珠樹  
 残酷なる女性達……………森本 愛造  
 切腹風土記「江戸の切腹」……………壬生 三郎  
 ニュース小説 復員船……………榎村 奏  
 愛好者の記録……………とやま  
 体験記 バ「ナナ」の人々……………南 時夫  
 お座敷シネ・プロ始末記……………牧 高志  
 マゾヒズム百景……………馬場 好男  
 「奴の拳銃は地獄だぜ」に思う……………浦田 紀夫  
 創作 紅山彦……………三条 卓史  
 裸馬との対話……………乗杉貴代子  
 手帖雑報欄……………昭 正三  
 今後の縛り映画……………嵯峨美也子  
 文部大臣の專屬室……………鴉嘔吐 夫沢  
 盛気楼……………奥田 滝夫  
 現代マゾヒズム芸術時評……………原 忠正  
 魔教團N08（その七）……………土路 草一  
 紺緋の郷愁……………菅 良太  
 告白 マゾヒズムの谷間……………鍵村江津子  
 読者通信……………

○十月号（復刊第三十三号）  
 【定価二百円】

口絵  
 孝傑作集 汚物漬け……………四馬 孝画  
 俊平戯画選……………南村俊平画  
 「縛りごっこ」「水飴のプール」……………滝れい子画  
 縛り絵 岩礁……………

縛り写真特報「羅目」	大塚啓子嬢
写真・脚線美	益田房子嬢
洋画スチール二面	編集部・選
米映画「指紋なき男」	
伊映画「荒野の抱擁」	
賣面襟の女	浜 毅・面
告白私の青春遍歴	川西 繁子
私の傑作写真報告	長瀬 昭子
創作囃り(かげり)	久留木 栄
洗腸室	池田喜代子
マソヒズムへのいざない	黒田 史朗
話の腐糞	辻村 隆
相対性原理	牧高 志
創作 最良の仲人(一)	若松 宏
アブ目八目	佐渡 完
麻生保氏の生活と意見(八)	麻生 保
休験記バー「ナナ」の人々	南 時夫
「ヌード春泥尼」から	佐渡 完
愛好者の記録	とや ま
今月の縛られ女優達	大河原珠樹
殊虐なる女性達	森本 愛造
創作 紅山彦(完結篇)	三条 卓史
本誌「緊縛絵画」論	千草 忠夫
切腹風土記「切腹の研究」	壬生 三郎
創作 偽縛(ぎばく)	榎村 奏
殉国女性に捧げる	中康 弘通
レイソコート姿の女腹切	藤山 秀緒
揮雑記	百田 章二
入選作品「女水兵良史」	市田健次郎
浣腸と妊娠(続)	羽村 京子
マソヒズム百景	馬場 好夫
告白血潮の疼き	菅 良太
魔教園NO8(その八)	土路 草一
文部大臣の專屬室	鴉囀吐夫訳
現代マソヒズム芸術時評	原 忠正
映画スナツプシリーズ	
「紅葉の巻」	牧 高志

読者通信	沼正三たより (九月号院後)	沼正三
口絵	孝傑作集 鼻吊り	四馬 孝画
縛絵	縛り責め	瀧い子画
責面	稲古屋	杉原虹児画
縛られた女優達		
新映画作品「蜘蛛男」	河上 敬子	
新映画作品「人喰海女」	三原 葉子	
新映画作品「蜘蛛男」	宮城 千賀子	
特報 喰い込むコード	愛川 悦子	
ニユーガールの緊縛模様	絹川 文代	
複式探りマシンの考案	南村 俊平画	
アブノーマル人物評	林 志雄	
創作 最良の仲人(第二回)	若松 宏	
現代マゾヒズム芸術時評	原 忠正	
漂流の女	泉 かよ子	
お隣漫録	須藤 律夫	
月明りねずみ小僧	海野 築朗	
マゾヒズムへのいざない	黒田 史朗	
創作 乾濕	横村 弘通	
詩集 女剣断腸譜	中康 好男	
マゾヒズム百景	馬場 良太	
告白「憧憬」	菅 孫一郎	
再び映画に見る男性責	堀 三郎	
切腹風土記(女の腹切り)	千生 三郎	
愛好者の記録	とや 紀夫	
涙は宇宙空間に輝く	浦田 秀緒	
腹切る女スパイ	藤山 牧高志	
映画「スナッブシリーズ残菊の巻」	三條 卓史	
創作 竹夫人	藤兒 郁	
三吉と女奇術師	藤木 仙治	
緊縛映画速報とその雑感	土路 草一	
魔教團NO.8(その九)	佐々 京之介	
創作「賭」	佐田 春雄	
告白羽村京子夫人へ		
読者通信		

## 読者通信



十一月号本欄に、編集部のお好意で掲載させて頂きましたことを心より厚く御礼申し上げます。以来ここに一月も経たぬ間に、全国の諸兄弟から沢山の御書簡を賜り日夜その返信に嬉しい悲鳴をあげておりますが、諸兄弟の御希望等について、二・三、僕の御願いやら御詫びを、本欄誌上をお借りして述べさせて頂きます。

①、僕の特写(ヌード写真)を御希望の方が多いのですが、今迄御送りしたところ、他の人に販売している事実が判明し、驚いております。どうか誠実を以て、特にこの点御留意下さいますように。尙一々御送りすることにはしていませんが、これでは写真代にて破産?する気配も考えられますので、恐縮ですが、実費として一枚に付参拾円程御送り下さいますれば幸甚です。②、僕をモデルとして写真・絵画・彫刻等をさせて頂きたいと

云う御希望も相当数ありますが、何しろ安サラーのことでですから遠隔地に出掛けることは不可能に近い現状です。モデル料は不要ですが、経費を御負担下さる方でしたら、事情の許す限り、御希望に添いたいと思いますので、どうか御了承下さいますように。③、諸兄弟の御希望もありますが、僕はソドミアです。御理解と御了承を願います。④、諸兄弟で僕を奴隷として酷使したいと云う方も多数ございますが、前記②の如く、遠隔地には参ることが経済的にゆるされませんので、当地迄御来駕下さると、御要望に応じさせて頂き戴きますことを御約束致します。尙、この際は予じめ御連絡下さいますように。以上、随分自分勝手なことを申し上げましたが、御賢察の上、今後共諸兄弟よりの温き御交誼をひたすら御待ちしておりますので、よろしく可愛がってやって下さい。

尙、最近迄当地で買求めておりました本屋が店じまいをしてしまったので購入出来なくなりました。諸兄弟の方で購入出来る場所がありましたら、御教え下さい。段々と寒くなつて参りますから、編集部の皆様並に諸兄弟の御健康を御祈り申し上げます。(南 裕二)

十一月号拝見。最近、次々と新人モデルが現われて、しかも皆美しく可憐な人達ばかりで誠に喜ばしい次第です。田中さん、大塚さん、益田さん、そして今度の絹川さん、女学生を思わせる清純な髪、容貌、若々しいすんなりした姿体と、これから繩に賣められて

◎写真特写引受◎  
特別に変つた着衣、ポーズ、アイデア等によつて写真の特写を御希望の方は写真部に於てお引受致します。詳細なる趣向を御連絡下さいれば費用其の他についてお返事いたします。  
(返信料同封下さい)

どんな苦悶の様を見せてくれるか楽しみにしております。田中さんと共に可憐な感じの人には、女学生スタイルの責めを是非お願いしたいものです。先ず目次の、木馬

に乗せられた女が気に入りました。鼻吊りは無惨すぎるし、実際こんな事をする、後でどうにもならぬ事になってしまう。美人を余り醜い姿にするのは感心しませんね。擦り責、稽古台、いづれもベテランのものだけに、文句のつけようありません。映画の「人喰い海女」の縛りは、一寸縄がゆるそうなのが残念ですが服装といい表情といい、縄のゴツゴツした感じがいいですね。後は不鮮明で一口味わい難いですね。喰い込むコードは素晴らしいですね。豊満な乳房へ容赦なくキリキリと喰込むコード、苦しげな表情も中々よい。コードでゆがむ乳房、飛び出す乳首など乳房マニヤの小生、実に喜びの極みです。休刊前にも荒縄で乳房の真上を縛ったのがありました、あれ以来の大ヒットです。これからは時々ねがいたいものです。絹川さん、田中さんの可愛い乳房なら、もっと可憐で哀れでしょうね。又、新人の絹川さんの縛られ姿はすんなりした両脚をキチンと揃えて、縄目に苦しげにかがんでいる可憐な姿、バーマもない素直な女学生らしい髪、清潔な顔など素晴らしいですね。本文の「漂流の乙女」の文



も面も嬉しいのです。ユリコと猛の会話など、あどけなくて女学生の頃の縛られた事をしゃべらせるあたり心憎い限りです。面も実によいですね。久振りの浦田氏の責小説、残虐な拷問場面と服装の刻明な描写は、誠にこの人の独壇場ですね。このため挿画がついてゆけなかつたのが残念、これなど着色の挿画がほしい処、三、四行毎に面がほしいような素晴らしい拷問場面の連続で息もつかせません。が、とうとう殺されてしまふのは余りにも可哀そう（などと云つてはサディストの風上におけぬと叱られそうです）映画スナッフは映画を見るように有難いですが、文章がさっぱり遊離していて困ります写真について大体説明がほしいものです。竹夫人の女学生と中学生の縛りごっここの文も面も可愛い。私もこんな経験があるのでいい。私もこんな経験があるのでいい。私もこんな経験があるのでいい。奇術師の三吉が美しい女を縛る時の震えるような感激を味わったものです。（名古屋M・M生）

杉俊夫様、貴氏が脱腸帯に非常に興味をお持ちの由、同好の士を得て私は嬉しく思っています。野原美喜夫様からのお便りの内容な

ど知る由もありませんが、貴氏のイメージは素晴らしいものです。貴氏の脱腸帯をかけた少年のスケッチや野原氏の脱腸帯の少年の話は是非拝見させて頂き度く思います。私は、いつか奇巧誌に告白記を寄せましたが、脱腸帯をかけた経験の持主です。物心ついた時分から中学二年頃迄かけていたのです。しかしこの間、ゴム製品の為皮膚がただれたり、成長するにつれて銭湯でこれを見られるのが恥かしく、脱してしまいましたが、小学校六年の時、身体検査で脱腸の者だけ触診され、私は校医から脱腸帯をいつもつけるように注意された事がありました。中学生になつて面倒臭くなり全くしませんでした。たが、新聞や雑誌などで脱腸帯の広告には異常な関心を覚え、私には、自分がもっと勇氣があつて銭湯であろうが、海水浴であろうが、又、学校の身体検査であろうが、脱腸帯のまま、人の前にその体をさらしたらと残念でなりません。脱腸帯をかける事が、特殊な体に生まれた少年の特権であつて他の少年達から羨望の眼で見られる世の中であればと思います。恥ずかしいが、脱腸帯のまま医師の診察を受ける願望は、脱腸少年の

## 代理部案内

### 最新版女体緊縛フオート

絹川文代嬢

全裸緊縛集 略号（きぬ）

三枚一組 二五〇円

絹川文代嬢

股間縛三態 略号（きこ）

三枚一組 二五〇円

本誌十一月号口絵写真にて初登場した美貌の新人モデル嬢。

凌辱 略号（れん）

愛川悦子嬢、辻村隆氏

連続十二枚一組 八〇〇円

浴室股間縛

愛川悦子嬢 略号（よく）

三枚一組 二五〇円

悦虐雨ざらし

愛川悦子嬢 略号（あめ）

五枚一組 四〇〇円

剥れた腰巻

花坂道子嬢 略号（まき）

三枚一組 二五〇円

全裸強烈股間縛

花坂道子嬢 略号（きよう）

五枚一組 四〇〇円

ヌード縛り五態

益田房子嬢 略号（ふさこ）

五枚一組 四〇〇円

寝室の苦悶

益田房子嬢 略号（くもん）

三枚一組 二五〇円

縄のれん

大塚啓子嬢 略号（なわ）

三枚一組 二五〇円

腰元拷問

村井知可子嬢 略号（もん）

五枚一組 四〇〇円

湯上りの折檻

大塚啓子嬢 略号（せつ）

三枚一組 二五〇円

行燈（アンドン）

愛川悦子嬢 略号（あん）

三枚一組 二五〇円

いたぶり

春日ルミ嬢、愛川悦子嬢

略号（いた）

三枚一組 三〇〇円

妖艶闇の縛しめ

田中芳代嬢 略号（おや）



共通の願望ではないでしょうか。  
野原、杉岡貴氏の脱腸帯をかけた  
少年の記を是非奇巧で発表して下  
さい。鶴首してきます。

(大阪森太一)

毎月、待ちわびて入手した本誌  
を開いて何時もがっかりするのは  
「男責」小説が一篇のみと云う事  
です。横村氏の小説が只一つ、小  
生のささやかな慰めとは余りにも  
編集が傾向にしている様子です。た  
しかに男が男を責める楽しさを求  
める傾向の人は少いかもしまし  
ませんが、それでも最近の読者通信を  
見ると、かなりの同好の方の不満  
を見受けます。せめて二カ月に一  
回でよろしいから「男責」小説を  
三、四篇掲載してほしいものです  
小生は大体Mの方ですが、Sも少  
しは興味もあります。名古屋の附  
近に居られる方、是非、同好の会  
を作ろうではありませんか。そし  
て思う存分プレイを行いたいもの  
です。小生は、こんな夢を抱いて  
はるばる北辺の地から当地へ参り  
ました。名古屋のS様、貴君の希  
望に添えるかどうかわかりません  
が、もしもこんな男でよかつたら  
何日でも貴君の責めの材料として  
体を提供します。是非、御一報下

さい。では「男責」小説の多数掲  
載されることを念じつつ、同好の  
志の御健康を祈ってペン置きま  
す。

(名古屋 山本生)

森太一様、十一月号で久振り  
玉稿を拜見して無上の喜びです。  
かつて休刊前の本誌にお寄せにな  
った少年禪美礼讃の連載物は、あ  
いった文献の乏しかった当時と  
して、如何に私を鼓舞激励してく  
れた事かわかりません。どうかお  
暇の時、大阪一円の禪美を廻る風  
俗について、何か誌上に御発表願  
えたらと思います。例えば海水浴  
場、川辺の水泳場、銭湯、祭のみ  
こしを担ぐ時等で、六尺を締めて  
いる者の比率、その他の資料です  
こう云った具体的事実、美文  
調の創作に百倍する興味をもた  
してくれそうです。どうか、お願い  
します。東京ではこの節、水泳場  
も全然と云ってよいほど六尺姿を  
見かけません。割に気前よく見せ  
てくれるのは神田祭、三社祭など  
と云った一連の夏祭に於てでしょ  
う。深川の八幡祭など五年ほど前  
に見た時には少年、青年、壮年  
を通じて六尺姿を締めてない者が珍  
しい位でしたが、さて最近はどう  
でしょうか。深川の地元の人から

五枚一組 四〇〇円

太股縛り三態

大塚啓子嬢 略号(ふと)

三枚一組 二五〇円

腰元全裸折檻

村井知可子嬢略号(せつかん)

三枚一組 二五〇円

振袖哀歌

花坂道子嬢 略号(ふり)

三枚一組 二五〇円

股間縛り三態

大塚啓子嬢 略号(こか)

三枚一組 二五〇円

股間縛り五態

益田房子嬢 略号(ます)

五枚一組 四〇〇円

全裸高手小手

愛川悦子嬢 略号(たか)

三枚一組 二五〇円

女学生凌辱図絵

川辺砂登子嬢 略号(りよ)

五枚一組 四〇〇円

賭 癪(かけにえ)

愛川悦子嬢 略号(かけ)

三枚一組 二五〇円

◎以上、印画紙の大きさは、全部  
大手札型(9×13種)です。

碟(ハリツケ) 三態

大塚啓子嬢 略号(はり)

大判判印画紙焼付

三枚一組 四〇〇円

花坂道子嬢

優美姿態緊縛集

大判判印画紙焼付

ヌード縛り

略号(はな3)

二枚一組 三〇〇円

股間緊縛

略号(はな4)

二枚一組 三〇〇円

御注文の栞

○送料はすべて当方にて負担いた  
します。略号だけ書いて御注文下  
さい。早速厳重荷造の上急送申し  
上げます。

○代理部分譲品目録並に振替用紙  
御入用の方には御申込次第お送り  
します。

○御送金は、振替、為替、現金、  
書留、等御利用下さい。

大阪阿倍野郵便局私書函第十四号

天 星 社

振替口座大阪第五〇〇四二番

お知らせ願えればいいんですが。今年の三社祭、神田祭ともに少数ながら（それだけに稀少価値を高めているのでしようが）拝見し、心強く感じました。神田須田町の電車通りで、みこしを担いでいた連中のことは今もって忘れられませんが、それこそ六尺に腹巻一本という勇ましいいでたちの若い衆が、十人ばかり群をなして目抜きの大通りを雄叫びの声をあげながら行進するのですから、壮観は眼を奪うばかりです。今に伝わる神田ツ子の心意気は千代に八千代に語り継いで行きたい文化財です。品川の建原神社の河童祭も捨てがたいものの一つです。沖で洗ってきたみこしを、三百人は越すと思われる若者が陸へ担ぎ上げ、旧品川の宿の街道を練り歩くのですが、約三分の一は六尺姿、さらしの腹巻の上に更に藁縄を縛りつけた者もいました。その中に、十六、七の少年が水色の六尺一本、腹巻なしの姿でまじっていました。これは正に万緑叢中の紅一点でした。私は毎年、夏を山陽道の県庁所在地の〇市で過ごすことにしています。今なお六尺姿をふんだんに見ることが出来、これが帰省の楽しみの一

つになつています。もともと三、四年前までは小中高校生を平均して、ほぼ半分は六尺姿で泳いでいたが、それが今年は五分の一位に減つてがっかりしました。が、それにしても東京などでは先ず絶対見られない襷姿が、ここにはまだかなり見られるのが何と云つても魅力です。しかし西日本の特色として、東に多い赤襷が殆んど見られないのが色彩論上、いささか物足りませんが、それでも絶無というわけではなく、今年も二人ほど見かけましたが、その度に胸のときめくのを禁じ得ませんでした。以上、まとまりのないことを書き連ねましたが、どういった調子のものを同好の士が投稿しそれを体裁よく編集してもらえれば案外面白い読物になるのではな

○

（東京 K生）

團田春代様、先般、通信欄で武門の女性の死装束について書いて居られました中で「特に切腹の場合云々」とありましたが、実際そう云う例があつたものでしょうか。又は心得としての口伝でしょうか。本誌気付にて御教示頂ければ幸甚です。同封の切抜き一葉、救国維新八月十五日号に隨筆を依頼されて書きましたものです。港の見える山路を三人の娘が登つて来た。何れも十八、九の化粧で基地の女と解る娘たちであつた。先頭に立つた娘が、「此の辺でどうかしら」と二人を振り返つた。街の家並の向うに海が青いのを見てから、彼女が先に立つて林の中へ入つて行つた。まるで松茸狩に來た町娘のような三人であつた。松林の一とところ、落葉が積み笹の繁つたあたりに腰をおろし、三人は顔を見合せた。「さあ、皆いい？」リーダー格の娘が念を押すと「何うやって死ぬの？」一番おさない顔立ちの娘が彼女に尋ねた。彼女は無言で、手提げのバックから日本剃刀とピストルを取り出した。二人は武器と彼女とを交互に見て、ホッと溜息を吐いた。真先に誰が何うして死んで行く

か、重い沈黙が三人を包んだ。リーダー格の娘が、「私、真先に死ぬわ。」ハッキリいい切ると、二人の娘は顔を見合せた。彼女が、死のうというので死にたくなつたという程度の、本当に死ぬだけの決心が出来ていない二人だつた。髪を乱れを指で抑えてから、日本剃刀を手にして彼女が立ち上つたとき友の最期を正視するに忍びず、二人の娘は顔を背向けて、松林の中へ射し込む秋の午後の陽射しを見ていた。彼女たちは、中学を卒えて基地の女になるまでの過去を、その陽射しの中に幻に描いているのだつた。突然、辺りの静けさを破つて「ううむ」抑えた呻き声が二人をハッと現実に戻した。一と目見るなり、「信ちゃん、あんた腹を……」一人が思わず息を弾ませて腰を浮かせた。も一人の娘も。「切腹……」といったきり絶句した信ちゃんと呼ばれた娘は、立ち上から左の腹を抑えている。持ち上げたスカートの下に、右手で何時の間にか日本剃刀を探り入れ、グッと突立てて了つたのだつた。驚く友を苦しい眼で見ながら信

子は、キリキリと右へ真一文字に腹を掻切つて行つた。秋の陽に白く見える脚まで血が滴落し、やがて流れ始めた。

流石に泳え兼ねて信子はドツと膝を突き落葉の中に倒れ伏した。

昭和二十八年、秋の呉市である。古昔、武士の過ちは切腹によつて償われ、名譽を恢復した。

信子は、新制中学を卒えて暫く市内の医院に見習看護婦として住込んでいたが、後に基地の女となつた。然し家庭の事情や生活の苦しきもあつて、常に死を思つていた。たまたま、死にたいという同僚もあり、そうした三人の娘たちの中で、彼女が積極的に自殺を決したのであつた。

彼女の短い人生に苦渋は余りにも多かつたであろう。然し、日本女性らしく切腹した瞬間、その精神的な苦惱は悉く拭い去られていたのではあるまいか。

(筆者は切腹史研究家)

(中康 弘通)

本誌の毎月号を見ると、女性緊縛の映画スチールが沢山のつています。是非マゾ映画のスチールも掲載して下さい。私の見た限りでは女性が革の長靴をはいた男装姿は、洋画で「凡ての旗に背いて」「剣豪ダルトニアン」のモーリン・オハラ、「女海賊アン」のジーン・ビーターズ、「美女の中の美女」のジナ・ロドリギタ、(決斗場面)「大砂塵」のジョン・クロフォード、「平原児」のジーン・アーサー、「維納の別離」のコレット・マルシャン、「底抜け最大のシヨウ」のジョーン・ドルク、「ロマンヌ・ライン」のカスリン・ヘップバーン、この中、モーリン・オハラの二作は共に膝まで深く柔い革の長靴、後者の剣士姿は殊に魅力的でした。

ジーン・ビーターズは長靴姿もありますが、チャンバラの部分は跣足です。ジョン・クロフォードは何分にも姥桜なのでそれほどありません。「美女の中の美女」はエロチシズム満点でした。邦画

写真

三態

(ハリツケ) 略号(はり)

大中判印画紙焼付 三枚一組 四〇〇円

モデル 大塚 啓子嬢

女体 『切腹風景十二態』

モデル 大塚啓子嬢 略号(せふ)

(9×13センチ) 印画紙焼付 十二枚一組 九百円

女体 『浣腸風景十二態』

モデル 大塚 啓子嬢 略号(ちふ)

(9×31Cm) 印画紙焼付 十二枚一組 九百円

の乗馬服長靴姿は「戦雲アジアの女王」の高倉みゆき、「花嫁立候補」の矢島ひろ子、八潮悠子、「花嫁の抵抗」の小山明子、有沢正子、このうち「戦雲アジアの女王」は一番よい題材ながら充分生かされておられません。女性の股旅姿では、「火の車お万」の月丘千秋、「灰神楽三太郎」の中田康子位、劇中劇の女剣戟によるようですがこれは女性がこういう姿をするという状況設定が困難な所かもしれせん。若衆姿は「美女決斗」その他の宮城千賀子、「人肌孔雀」の山本富士子、その他長谷川裕見子、美空ひばり、宇治みさ子など数多くあり、珍しくもなく又それほどエロチックでもありません。他にもあれば誌上にて御教示下さい。日本の女優でこういう長靴姿を見たいのは、浅丘ルリ子、司葉子、有稲稲子などです。尙、七月号の裏表紙のカット、女士官(女

海賊?) すこぶるよし、あのサデイチツクな表情がよい。次のテーマを何らかの型で扱って下さい。「女憲兵将校」(これは女軍医があるから、その向うをはつても、又はソ連、ナチスの娘子軍士官)「婦人騎馬警官」「女子斬込み隊長」「女子匪賊討伐隊長」(これは川島芳子などいささか関係がある)「女子保安官」「女海賊」「女剣士」(日本的なものではなくダルトニアンやモーリン・オハラの扮したような)「女曲馬団長」又は「女調教師」これらの男装乗馬靴姿の女性を挿絵入りで扱って下さい。このごろ藤山秀緒女史が余り書かなくなつたのはどうしてですか。私はモーリン・オハラの「すべての旗に背いて」「剣豪ダルトニアン」に於ける姿を憧憬しています。これらの女性になるべく細身の長剣、サーベル乃至は鞭、皮帯のついた拳銃で武装させて広



いバンドをしめさせて下さい。又日本の股旅ヤクザ姿で、腹にサラシの布を巻いて手甲、脚絆に三度笠、長脇差という女性も、前記の女性と一種の類比があり、マゾヒストには魅力があります。脚絆から太股が少し見えた所などもギリシヤ悲劇のバスキンを思わせます。又、こうした女性を最後に自分でさせるのも一興でしょう。剣、長靴、ウェストをすっきりバンドでしめた服、これが私の理想の女性の三位一体です。股旅姿はこれの変型でしょう。

(東京 田島裕士)

○ 鶴首して待ったフォト「腰元自刃」正に落手いたしました。実に近來にない出来栄えであると思えます。モデル嬢の表情といいその姿態といい申し分ありません。このフォトを企画された部員の方々はもとよりモデルの村井知可子嬢の実感のこもった演出眼には只今感服の外ありません。只之迄に発売された女体切腹フォトは余りにも小生の好みとは程遠いものがありました。遂に今回の様な時代物風のフォトが企画されたとは小生何物にも勝る喜びであります。どうか今後もうこうした時代物風に

扱った女体切腹物を企画されますよう祈つてやみません。今回の腰元自刃のフォトを拝見して感じた点、小生の今後のフォトに対する希望を拙いながらも記してみたいと存じます。些かでも参考になる点あれば幸甚に存じます。腰元自刃は予告通り責折檻の末の切腹です。申分ないのですが腹部に短刀が突き刺さっている感じが出していないこと。それに準じて血紅が使用されていらない点が一寸期待はずれで残念に思っております。いろいろ研究された上のポーズでしょうが欲をいえば、この写真はシリーズに構成されたら効果的ではなかったでしょう。死の座に着いた場面から初めて、肌を剥いて右手に白柄の短刀を握りしめているシーン、短刀逆手に腹部に刺したシーン、更に切腹を腹部に突き立てたシーン、横一文字に（又は十文字に）引き廻したシーンという風に其の一つ一つのポーズを捉らえて連鎖物のものにして頂けたら、もっとフォト全体の効果が上ったのではないかと思います。尙介錯人を配する場合等は側面のシーンも絶対悪くはないと思います。御社におかれては今後どんな構想のもの

甲斐に参案『涙のダイヤモンド』(略号 四馬孝画)

大判判印画紙焼付 三枚一組 四百円

○伸し責 ○苦悶のコルセット ○浣腸責

とに企画されているかは存じませんが、今回の様な時代物風な女体切腹フォトを企画されるならば小生の希望として、かつて「奇ク」に連載された亀岡氏の女腹切八景の中の、彼の有名な吉村れつ女、溝口与之、お吟等の見事な切腹の情景を構想にして今回のような立派なフォトを完成して頂けたらと思ふ夢は小生一人ではないと思ひます。真実に近い本当の「女体切腹」の実感がにじみ出るのではないかと思われます。もし仮にこうした切腹マニアの夢が近き将来叶えて頂けるものなら、どんなにか嬉しいことでしょうか。長くなりませんが小生の希望を吉村れつ女の例にとつて二、三述べてみたいと思ひます。今回の腰元自刃の構想とは事変り、切腹の悲願叶つて喜び勇んで死の座についた勇婦れつ女の表情は最期まで明るくし、その死を恐れぬ態度動作等に於ても潑刺としたポーズとし若々しい女性の美しさを失わない切腹姿態こそ望ましいものです。過般北原女史の面かれた腰元自刃のシーンを拝見しましたが、あの様式で室内を一寸刑場らしく型どおり背面に白屏風を立て前面に白木の三宝を配し白布を敷きつめた座敷とし介錯人を今回のように適宜配して前記の通り一連のシリーズものとして撮影して頂いたら女体切腹の雰囲気十分かも知し出されるものと思われます。尙当人モデル嬢には白無垢を着用して頂きます。白衣と女性の自害、切腹とは切つても切れぬ関係にありますから、白衣真用は此の際必須の条件かと思ひま

◎浣腸連続フォト◎ 略号(ちよ)

(9×13センチ) 印画紙焼付 十二枚一組 九百円

モデル 愛川悦子嬢



す。尙血紅使用も欠くべからざる条件です。白装束で晴の死の座で雪白の肌を露わにして切腹する情景には相当に激しい亢奮を覚えずには居られません。髪形は束髪又は高島田にても可、切腹の苦痛によつて自然ポーズを追つて乱髪として表現して下さい。今回の様にかつらの使用こそ効果百パーセントかと存じます。純白の肌にふりかかる緑の髪、村井知可子嬢の演出実に見事です。どうか小生の好む吉村れつ女に扮してもう一度女体切腹のシーンを再現して頂きたいものです。切に御願ひ致します。尙最後にモードとははつきり区別したものとし衣服をまとうた女性の美しさの中から切腹という凄壮美といえますか、妖艶な美しさを求めて止みません。最期まで女らしさを崩さない為にも膝を乱したり露出したりするシーンは好みません。どうか今後企画されるに当つて、こうした点に留意して頂ければ、一切腹マニアのみならず好みを同じくするマニアの為に望外の喜びかと存じます。

(兵庫 M・M生)

旧号よりの愛読者ですが、初めて便りします。思ひなほして旧号

から復刊号をずらりと並べて、その月々の充実と躍進ぶりに拍手を送る次第です。四馬孝さん、貴方の画風は私には絶対です。ふくよかな夢を想起させる奇抜な着想とアイデア、美しいものへの拘束は思わずぐつと私達の胸に迫ってくるものがあります。口絵には必ず忘れず起用して下さい。尚、美容病院の久田木栄さん、ほんとうに月々楽しみに読ませて頂きました。今後の力作をお待ちして居ります故、是非「続々」を発表して下さい。日本では一番先に太陽を拝む遠地のファンです。

(N・N生)

奇ク七月号の最終頁の茨城、栗野正様、貴方の女性の白い歯に特別な興味をお持ちとの一文を拝見いたしましたので本欄を通じてお呼びかけ致します。私も歯には貴方同様特別の興味を持って居りますが、私のは特に前歯の見える所上下の金歯に対して限りない魅力を感じます。私自身は金歯の他に金の光沢が大好きで腕環、指環、首飾り、耳環、胴環と、すべて金色のアクセサリを蒐めております。又黄金で飾りたてた写真もかなり写しました。貴方様御所持の

### 女体禪美の緊縛

(9×13センチ) 印画紙焼付

五枚一組 四百円

略号(こん1)

### 女体の禪美フオート

(9×13センチ) 印画紙焼付

二枚一組 二百円

略号(こん2)

画をぜひ拝見致したいものです。金歯のクローズアップの写真もありますから是非御文通したいと存じます。連絡場所又は最寄りの局止を誌上にて御知らせ下さい。

(東京 岡本 敬)

貴社益々御発展の御事御喜び申し上げます。一時休刊になりました時は折角唯一ツの心の休息所を失った様で味気なき日々を送っていました。再刊になりましたから書店より購入致し今日まで愛読いたして居ります。扱て小生男性責に對して非常に興味を抱く者ですが、それは心の内の想像のことに、決して実際に男性を責めたりなどほしいたいと思いません。現実には若しそれを実現したと致しまし

ても決して心良いものではないと思います。又こうした夢幻の世界は、とても相手とのなれ合いでは実現できるものでは有りません。やはり想像のうちの世界であります。日常生活は矢張り真面目な一市民として社会に勤めたいと思ひます。この世界を簡単に現実化して見せて呉れるのが映画のシーンです。戦後のフアビオラの伊排優マツシモジロツテイのセバステアンの裸体ハリツケ、二本目の米映ジャングルジムの黒人の男十数人の裸体さかさ吊り、それを喰人はターザンの捕われる際のうつむけ大の字しりばり等々……八月号の梶孫一氏、五月号の菅良太氏の戦前派の方々と、戦後派の私が色

### 甲斐仁参案「涙のダイヤモンド」 略号(なみ)

四馬孝画

大判判印画紙焼付 二枚一組 三百円

○胃の洗滌

○ヒマシ油責

次号(新年号)の本誌は十一月中旬発売です

々欠かさず見て参りました数々の映画について一度語り合いたいと存じます。(文通にて)

小生は二十八才の会社員です。アブノーマルは想像のうちのことで、そして其れに依って慰安を見つけた生活は健全に、この様な趣旨で今後共御誌の編集を御願ひしたいと思います。そうして世の偏視を排して休刊以前の如き華やかな時代の来ます事を祈って止みません。

(島根 高田生)

十月号、名古屋のS様、私も貴方と同じ気持の者です。夏中は六尺禪一本で海で働く漁師です。一度お目にかかりたいのですが、よろしかったらモデルにもなります私の住所氏名は八月号に発表してあります。お便りお待ちしております。

(豊橋 角田)

初めて投稿致します。長靴フェチの記事が余り少ないので、自分の拙い体験を交えた一文を綴りました。同封の長靴の写真は、私が某女性から譲り受けたのですが、何分にも足に合わないで、誰か

長靴の好きな人に譲りたいと思います。大きさは十文位です。四馬先生に是非、こんな長靴を穿いた女性を画いて頂きたいと思ひます。お願い致します。(仁木紀行)

△編集部註▽キャビネ判の長靴の写真が一葉同封されていましたがコントラストがなく製版に不適当なため掲載できませんでした。

○ 奇クの復刊を知らず数年、味気

ない毎日を過しました。中京、関西を転々として現在、当市に在る従前よりの一愛読者です。偶然古本屋にて奇クを発見した折の嬉しさは御想像下さい。小生アクロバットを好むマゾ愛好者です。以前より男子同性のアクロ責めを御誌に期待していましたがその様な絵写真、記事の少いのを不満に思っています。当時、香川県、神奈川県に小生と同様サーカスの軽業師及びアクロバットに興味をお持ちの方が居りましたが、小生も男の軽業師のタイツキヤルマタ姿に非常に魅力を感じ亦憧れています。自分でタイツ・キヤルマタを買求め身につけたりして満足しています。

したが最近では小生自身タイツ・キヤルマタを窄めて軽業師のスタイルで、軽業を仕込まれる様に相手の同好者に責められたいと願うものです。この様な御意見希望をお持ちの方にお目にかかりたいと思ひますが文通して頂けたらと思ひます。尚御紹介下さらば幸いです。

(立川市曙町局止 大森芳夫)

○ 私の拙い原稿「女水兵哀史」を載せて頂きありがとう存じました

女体緊縛フォト E組 9×13cm印画紙焼付

- |            |                |
|------------|----------------|
| ES1 ヌード緊縛集 | ES6 あわや寸前      |
| モデル 佐賀美智子嬢 | モデル 佐賀美智子嬢     |
| 三枚一組 二五〇円  | 二枚一組 二〇〇円      |
| ES2 全裸悦虐集  | ES7 剥れたズロース    |
| モデル 須川 令子嬢 | モデル 佐賀美智子嬢     |
| 四枚一組 三〇〇円  | 五枚一組 三五〇円      |
| ES3 腎 羞    | ES8 乙女のすべて     |
| モデル 佐賀美智子嬢 | モデル 花坂 道子嬢     |
| 三枚一組 二五〇円  | 七枚一組 四五〇円      |
| ES4 酒宴の弄者  | ES9 女学生の縛り     |
| モデル 佐賀美智子嬢 | モデル 須川 令子嬢     |
| 二枚一組 二〇〇円  | 二枚一組 二〇〇円      |
| ES5 脱がされる娘 | ES10 緊縛のベッドシーン |
| モデル 須川 令子嬢 | モデル 佐賀美智子嬢     |
| 五枚一組 三五〇円  | 六枚一組 四〇〇円      |

私の構図で口絵、写真等を次号以下に掲載して下さったら幸いと思ひます。その際、できれば次の点に留意して下さい。①セーラー服は、女学生風のものではなく旧海軍のもの又は出来るだけそれに近いもの。特に袖は短めの方が魅力的です。この点で十月号百二十頁の挿画は、とてもよく出来ています。②縛り方は後手にあっさり縛ること。雁字搦めは興ざめです。後手錠も太いに結構。この点でも百二十頁の挿画は及第です。特に

女水兵の表情に私の好む哀れさと可憐さがよく出ています。③この前も書いたように、士官の若夫人に酷使され罰される女水兵群像の画が写真が欲しいものです。その際、ゴムの雨衣、長靴姿、水兵帽で銃を持つ女番兵もぜひ入れて

下さい。④写真のときはモデルに益田房子嬢を使って下さい。⑤挿画は紙質の関係か、どうも物足りません。口絵が写真でないとい、やはり本格的でないでしょう。⑥十月号百二十七頁の看護婦の画もよく出来ています。⑦百二十三頁の

画は感心しません。女中が如何にも山出しですし、全体が野蠻人の喧嘩のようです。⑧百三十頁の女水兵が描まる図も余りいただけません。女水兵の方は、髪の長い点を除けば男か女かわからず、士官は巡査のようです。女水兵を描く

時は特に女らしい体の線を強調して下さい。 (市田健次郎)

十一月号入手しました。今月号の内容の充実ぶりは素晴らしく、読みごたえのあつた事は今までに例を見ない位でした。中でも「三吉

# 〔新版〕女体緊縛フォトオンパレード

R組 百花撰 大手札判 (印画紙9×13 糎)

各組一組 (全部送料共)

一組一枚	一〇〇〇円
五組五枚	四〇〇〇円
十組十枚	七五〇〇円
二十組二十枚	一四〇〇〇円
三十組三十枚	二〇〇〇〇円
四十組四十枚	二五〇〇〇円
五十組五十枚	三〇〇〇〇円
六十組六十枚	三五〇〇〇円
七十組七十枚	四〇〇〇〇円

R10	鎖しはり晒責 (萩千恵子)
R9	股間しはり (須川令子)
R8	鏡に映つた後手 (伊吹真佐子)
R7	後手足しはり (村田那美子)
R6	後手猿ぐつわ (須川令子)
R5	海老責しはり (萩千恵子)
R4	高小手猿ぐつわ (花坂道子)
R3	床間の飾り物 (佐賀美智子)
R2	海浜に於ける緊縛 (萩千恵子)
R1	柔肌に強烈な荒縄 (須川令子)

R33	股間タテしはり (中富綾子)
R32	首縄股間しはり (坂口利子)
R31	手足逆吊り (伊吹真佐子)
R30	和服の後手しはり (藤田節子)
R29	仰向全裸悦虚責 (川端多奈子)
R28	後手首縄シメ (加賀利江子)
R27	乳房下しはり (村田那美子)
R26	肉体美への折檻 (伊吹真佐子)
R25	お灸セメ (春日)
R24	後手猿ぐつわ (萩千恵子)
R23	松縄縛り晒責 (村田那美子)
R22	コルモン縛り (中塚文子)
R21	股間しはり (同右)
R20	手と足と緊縛 (萩千恵子)
R19	後手しはり (加賀利江子)
R18	御開帳 (萩千恵子)
R17	くさりセメ (川端多奈子)
R16	折檻の魅力 (須川令子)
R15	全裸の股間しはり (愛川悦子)
R14	逆立の折檻 (大塚啓子)
R13	開股椅子セメ正面 (花坂道子)
R12	振袖の緊縛 (村田那美子)
R11	腰元の吊り責 (愛川悦子)
R10	又ドしはり (村田那美子)
R9	本縄しはり (田中芳代)
R8	股間しはり (中富綾子)
R7	落花狼藉の緊縛 (川端多奈子)
R6	樹間のハリツケ (益田房子)
R5	帆船舟のセメ (同右)

R72	逆エビ責め (愛川悦子)
R71	変形全裸股間縛 (花坂道子)
R70	又ド縛り (村田那美子)
R69	全裸横臥緊縛 (萩千恵子)
R68	ビクニツク (須川令子)
R67	ハイヒール (同右)
R66	湖畔の宿にて (大塚啓子)
R65	尻立逆しはり (愛川悦子)
R64	下着の色模様 (花坂道子)
R63	目隠し開股縛り (萩千恵子)
R62	後手高小手 (愛川悦子)
R61	乳房しはり (同右)
R60	開股ベツド縛り (愛川悦子)
R59	全裸床柱縛り (萩千恵子)
R58	亀ノ甲縛り (大塚啓子)
R57	又ド股間縛り (愛川悦子)
R56	全裸乱れ髪 (同右)
R55	ガソジガラメ (川端多奈子)
R54	後手股間しはり (愛川悦子)
R53	腹部丸出し猿書 (伊吹真佐子)
R52	破れたシユミーズ (坂口利子)
R51	女学生しはり (須川令子)
R50	仰向開股しはり (萩千恵子)
R49	乳房くさりセメ (川端多奈子)
R48	野外バンド責め (村田那美子)
R47	トイレ正面排泄縛 (中塚文子)
R46	開股正面いじめ (伊吹真佐子)
R45	乳房搾りセメ (佐賀美智子)



# 懸賞原稿募集

☆ 規 定 ☆ ☆ 賞 金 ☆

## 告白と手記と体験記

優作 一篇に付 一万円 若干篇  
秀作 一篇に付 五千元 若干篇  
佳作 一篇に付 二千元 若干篇

- 一、必ず未発表の自作であること。
- 一、枚数に制限はありません。
- 一、原稿の第一頁に「懸賞告白」と朱記して下さい。原稿の返却は勝手ながら致しかねます。
- 一、締切は別に定めません。入選作は順次最近号誌上に発表いたします。
- 一、賞金は発表と同時に送りいたします。

と女道化師「賭」の二篇は、今まで貴誌に見られなかった傾向のもので、清新の気がみなぎったものです。前者の誰にでも経験のある、なつかしい郷愁に満ちた清潔感、後者の心理的な面白さ、共に捨て難い味を持っています。新たに連載された三糸氏の「竹夫人」も新奇な点で今後の発展が楽しみです。夫のある女と、その昔の恋人とが、あのブレイを通じて、どのような心理の動きを見せるか。外部的な描写に終らず心理的な堀下げを期待しています。久留木栄、泉かよ子両氏の創作もいつもなが

ら面白く読みました。特に後者は従来の研究発表会の形式を通じて長くなじんでいるのですが、いつも変らぬ初々しさに、いつも感心している次第です。挿画の方を見ますと、小生の絵画論のあらわれ——とうぬぼれを起しそうになる程よくパラエティに富んでいるので大いに満足しました。四馬氏の久方ぶりの大きな全身像。滝氏の変化に富んだ挿画。特に「魔教圈」のそれは、僕の要求にはほぼ近く飽かず眺めました。これで責める人が描き出され、腰の布をとってもらったら満点です。顔の方も素

敵です。滝氏の作品ごとに見られる筆致の変化には敬服します。今後とも大いに楽しませて下さい。「魔教圈」は今月号、余り枚数がなくて残念でした。来月号の本格的な調教に期待しています。土路さん、小生、路子をも愛して下さり、どうぞ御遠慮なく虐めてやって下さい。ついでに、タツマも死んだのですから、美加子も連れて来てはどうですか？ とにかく「潰滅の前夜」の如く、中途半端に（少くとも僕には先を急ぎすぎた様に思われるのです）終らぬよう、トコトンまで責めて下さい。小生としては、彼女等が異郷に家畜として処分されて死んで行くのを望むのです。美女——奴隷——苛責——凌辱——悲惨な死。この過程は、小生の最も好む所で「美女の死」それも悲惨な死は、ボーならずとも、この世で最も感動を呼び起す対象ではないでしょうか？ 最後にこれはお願いですが、十一月号に東京都の高橋孝氏が申し出ておられた旧号の分譲の件、小生も旧号で欲しいものがあるので住所お知らせ願えないものでしょうか。本誌の譲り受け以外は御迷惑をかけませんから、ぜひお願い致します。

（千葉忠夫）

○ 十月号を拝見しましたが、早い話が「最低」ですね。第一に挿入面に念が入っていませんよ。もう少し丁寧にリアルに描いて頂けませんか。というのも、この種の本は理論は二の次、三の次で、何より感情に訴えるものです。画によって、その文章を現実化して行くから文章はあくまで仕立てられた責められるヒロインが、何かの理由で責められる、そのストーリーを展開して行く道具に過ぎない。そして、そのクライマックスのヒロインの悲鳴も聞えよとばかりにスクリーン化するのが画である。従って画と写真、特に想像写真の現実とありそうな場面を、グラビアにも本文にも豊富に使う事で想像写真というのは私流の言葉で十月号に例をとれば、汚物漬ですが、もう少し現実味のあるものにして下さい。お姑さんに虐められる嫁——といった関係の現実性を私はここで云いたいのです。宿題を忘れた女学生が、訓戒室で女教師に折檻されるとか……。不貞を疑われた妻が、夫にオムツを着用しなければならぬとか……。女中と奥様の関係……。芸者の世



界のイキな女になるための苦行。冬の夜、雪の上に坐らせたり、お灸を後手のまま強制されたりするのは、増田小夜著「芸者」にもある事ですが、これ等を貴誌流に絵物語にして欲しいものです。その中の責められる人物、責める人物に私自身がなったような錯覚に落し入れてくれる価値を貴誌に求めているのです。とにかく最近の貴誌は、かなり低調です。バイブルに還れとビリーグラハム（大衆米伝道者）は叫んだようですが、復刊以前のものを参考にしてもう少し気の利いた内容のあるものを作

きましたが、実は編集部のアイデアがよく続くものだと内心、感心しています。

（東京都 阿部能磨）

○

十月号拝見致した処、灸責を扱った記事が皆無で、灸責マニアとして聊かがっかり致しました。お灸とマゾ女性—何かの機会にお灸を据え、その恍惚とした熱さの中の桃源境を一度味った女性には、以後必ずといってよい位、お灸マニアとなるものではないでしょうか。又、幼い時お仕置で、度々お灸を据えられ、その堪えがたいお灸の熱さの中に覚えた快感、お灸の本当の味？を体験した女性は、必ずお灸マニアとして成長して行くものだと思います。お灸を据えに来る人達の中、七割は女性といっても過言ではないと云う事です。何と云っても毎号、緊縛、鞭打をテーマにした記事から編集されて居りますが、ぜひ、灸責記事、フォト等も、挿入して頂きとう存じます私は本年二十七才、独身美青年です。勝手なことを云わせて頂

（知人の言）生粋のハマツ見で、マゾ四分、サジ七分、孤独で淋しい日々を送って居ります。以前より美人（グラマー）を造る「お灸」を研究、神経を刺戟しホルモン分泌により効を奏して居ります。痕は判りません。B・BやM・Mスタイルになりたい方、趣味と実益を兼ねたお灸マニアのブレイとして、お灸に関心をお持ちの女性の方々と文通を希望致します。花房孝子様、菅雅子様、久保利子様如何でしょう。お便り頂けますれば幸いです。尚、現在までの処、女性の方々からの、お灸に關したマゾの立場から告白、体験談等々が掲載されてないのが残念です。ぜひ、ぜひ御発表下さらん事をお願い申し上げます。

## ◎女体切腹フォト◎

（略号し）

「腰元自刃」

村井知可子嬢

大判判印画紙焼付  
六枚一組 八百円

## 三条春彦・画

未製本  
画帖

## 時代物責絵巻

八枚一組 百五十八円（送共）

【内容】一、山法師と静御前、二、女スリと岡引き、三、淀君と千姫、四、大公方と侍女、五、八百屋お七の最期、六、新選組と芸妓、七、十郎左エ門と腰元、八、小紫と悪旗本、以上八場面。

○

（横浜 松原美房）

十月号、東条氏。十一月号、M・S氏のアクロバットに関する御意見は、貴誌発展のために必要なことであると思います。最近号は特に目新しいこともなく、こちらで新しいアイデアによるものを望んでいる我々としては、両氏の御意見に全面的に賛成致すものです。M・S氏の御意見通り、参考資料や情報の連絡をすることが一番よいと思いますが、その前に例え一頁か二頁でもよろしいからアクロバットの頁とでも名付けたものを一カ所設けて、読者諸氏の注意を喚起して下さいれば、資料や情報を早く集めることが出来ると思います。内容は旧号や復刊後の本誌に寄せられた数多くの投書の中から、適当なものを選定の上、掲載されれば資料、情報の交換の足掛りとなると思います。私も少し

臨時増刊号

〈限定版〉

『サデイズム特集号』 定価 三五〇円(送共)

マニア垂涎の傑作満載! 残部僅少です。

秘蔵豪華口絵 二十七点  
秘作グラフィヤ写真 八十一葉

お申込は 大阪市

阿倍野郵便局私書函第十四号

天 星 社

振替口座大阪第五〇〇四二番

アクロバットに関するスクラップを致して居りますが、誠に貧弱なもので恥しいと思つて居ります。M・S氏の様に舞踊団体の内情を熟知して居られる方を大変うらやましく思います。同氏の資料発表をお願い致します。

(大阪 一愛読者)

○  
今まで発行された特集号はサドばかりですが、サドやマゾは、ある程度は書店に売られている雑誌にも出ています。しかし切腹物、特に女のものには貴誌だけに掲載される最大の特徵で、他の雑誌には類を見ません。どうか女切腹物の特集号の発行をぜひ御願ひ致します。もつとも、切腹ファンが少いため採算がとれないと心配されるかもしれませんが、切腹ファンは愛読者の中で占める率も案外多い

○  
と思いますし、誌代をもっと上げても、その価値さえ充分あれば売れると思います。旧刊以来に掲載された切腹物を集めたものでも結構です。どうかこの企画を是非実現される様に御願ひ致します。

(T・K生)

○  
私は、女の人が縛られて責められるのなんか一寸も面白くありません。又、浣腸や切腹も同じです。ずっと以前の本誌の読者通信に、少年が裸にされて憲兵に拷問されるのをみて……と云うのがありましたけれど、私が少年の責めに興味を持ったのは、小学生の頃にサーカスで少年の縛られた姿を見た時からです。どうか今後は、このような文章や挿画を多く掲載されるように御願ひ致します。

(中村生)

○  
毎月、貴誌を楽しく拝読させて貰っています。しかし私個人としては、いささか不満があります。その第一として、私の大好きなオムツカバーによる責めが全然ないことです。これは最近号では、サド特集号の「華やかな制裁」にオムツの活字があるだけで、責めになるまでには発展致しておりません。私は、これほど簡単な責めはないと思います。麗わしき女性の肌、何らの傷を与えません。ただ、不快感による汚辱だけです。錠のかけられるオムツカバー。派手な花模様のオムツカバー。このオムツカバーによつて腰が素晴らしい大きくなる。楽しいではありませんか。第二番目に、鼻環責がないことです。これも同じく、特集号の杉原虹児先生の洋髪の部に載っているだけです。近頃、貴誌には鼻苛めは沢山載るようになりましたが、不思議と鼻環責がありません。鼻環からバケツを吊り下げ、柱に縛りつけて立たせ、そのバケツに水を刻々入れてやる鼻環責面は、次号廻しとします。

(大阪 I・S生)

○  
毎号、読者通信を拝見して意外に女性権愛用者の方が男女共にあります。私を喜んで居ります。京都の土俵四股平氏の女相撲又は女斗美は、いつの記事を見ましても良く出来ています。私も妻と権一本で相撲をとりますが、前権を引いて四ツ相撲の時に喰込む権姿などを見ては楽しんでます。女性の方でも岐阜の若柳様、一宮の真砂美様、松原様等はよく研究されて居られますが、一度御便り下さい。

(岐阜 服部生)

代理部分譲品総目録

御入用の方は八円切手封入の上御申込下さい。お送りします。

新人モデル多数  
新しく参加